THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十二月號

第三十五年　第十三號　第三百九十號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

GIFT OF
Sidney M. Ehrman



信用なき店舗及び卑猥なる藥品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

獨逸イエナ大學名譽教授 ヘッケル博士著　文學士 栗原古城譯

十版

宇宙の謎

四六判總布製・定價參圓・郵稅十二錢

「樹木だけ見て森を見ない實驗學者」と「森の繪を見るだけで滿足して其一々の樹木を見ない哲學者」即ち「科學と哲學との間、實驗と思索との間の不自然なる矛盾」を超越して、一元論の立場から宇宙の生成、物質の本體、人類の起源生命の現象、心靈の本質等、永遠の神秘に對して人間理智の祕致を盡せると同時に、著者の徹底せる人生觀、社會觀を述べたものが本書「宇宙のなぞ」である。苟も智識慾ある讀者には其興味は小說以上であらう。著者は近代獨逸に於ける科學界の最大大家專攻の生物學に於ては世界第一の泰斗と仰がるるばかりでなく又有名の大思索家である。而して本書が如何に歐洲の讀書界を震撼したるかは、其發賣後多年を出でざる今日獨逸本國にて數十萬部英譯のみにて十四萬部の賣行を見たりと云ふ事實に見ても其一端が知れよう。譯筆の明快は云ふ迄もない。

新刊

處世神訣

西班牙 グラチアーン原著　獨逸 ショーペンハウエル獨譯　增富平藏譯

四六判總布製・定價壹圓八拾錢・郵稅八錢

英國 ラスキン著　文學士 栗原古城譯

三版出來

胡麻と百合

▼四六判總布製・定價貳圓・郵稅十錢

原著一名「王者の寶庫」(讀書論)と「女王の花園」(婦人論)

ノベル賞金を得たる白耳義文豪 マーテルリンク著　文學士 栗原古城譯

六版

靈智と運命

四六判總布製・定價貳圓貳拾錢・郵稅十錢

人間の運命は果して先天的に豫定せられたるものなりや否や
人間は自からの努力によりて其運命を改造し能ふべきや否や、將た又
人間の理性は奈邊まで信賴せらるべきものなりや

これ實に全人類の頭腦を惱まし來れる千古の疑團なり。マーテルリンクは、其思索の有らん限りを竭して、遠くは不可思議なる神秘境に其の思ひを馳せ、近くは日常生活の一些事をも見逃さずして所謂『運命』の正體なるものを剔抉解剖して餘蘊無からしむ。靈智の明鏡一度輝いて萬妖悉く其影を潛むるの概あり。求道の士は必ずや空しく本書を看過せざるべきを信ず。

東京本鄉西片町　玄黃社　振替東京七九九五番　電話小石川一三九九番

德田秋聲氏著（全部六卷）

秋聲傑作集

羽二重表紙特製 中版五百六十頁 定價貳圓參拾錢 郵送料拾錢

第一卷 「黴」「足迹」

德田秋聲氏の長き文壇生活の所産中、文藝史上重要の位置を要請し得べき不朽の價値ある作品のみを嚴選して『秋聲傑作集』を編む。第一卷收むるところの『黴』は、文壇を震撼せる名作にして、暗欝なる人生の縮圖を展開して深刻を極め精到を極めたるもの。時の論壇の權威島村抱月氏は、藤村の『家』と共に小說壇の第一位を占む可きものにして、人間生活の一面をさながらに描き來り、讀む者をして卷を掩うて長大息せしむと云へりき。作者の名と共に不朽なる可きもの、第一は必ず此の篇ならん。『足迹』は『黴』の姉妹篇にして、また是れ作者の特色を極度に發揮せるの傑作。併せ收めて、茲に一卷成れり。

田山花袋氏著

長篇小說 時は過ぎゆく

大版三百八十頁 定價壹圓五拾錢 郵送料拾錢

＝增版出來＝

何人も過ぎゆく一生を或る一個人の一生の中に現はさんとせるもの。即ち無窮の人生の『一時』を描いて無窮の人生を暗示せんとせるものにして作者が最も自信ありとなす長編也。偶々花袋秋聲兩氏誕辰祝賀會の擧あるに際し即ち此の書を增版印刷して、世に公にすることとせり。

東京牛込矢來三番地 振替東京一七四二番 新潮社 電話番町 長八〇九番 八九九番

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

田山花袋氏
徳田秋聲氏
誕生五十年祝賀記念出版

嶋崎藤村氏　長谷川天溪氏
有島武郎氏　片上伸氏　共編

■大阪布表紙最上製■八百二十頁
■定價金參圓八拾錢■送料拾八錢

現代小説選集

現代小説壇三十三名家の傑作を網羅せる空前の大選集也

文壇殆んど全部の協賛の下に成れる花袋秋聲兩氏誕生祝賀會は其の重もなる事業の一として小説選集を編みて兩氏に獻ずる事となり、我が社これが出版の榮を擔ふ。三十有三名家各々其の會心の作を提供して一巻となす。宛然八百廿頁の大著。まことに是れ文壇未曾有の盛事にして、亦た出版界空前の偉觀たり。

—寄稿三十三名家—

島崎藤村　谷崎潤一郎　里見弴　中村星湖　藤森成吉　正宗白鳥　有島生馬　上司小劍　相馬泰三　水上瀧太郎　谷崎精二

菊池寛　加能作次郎　廣津和郎　芥川龍之介　吉田絃二郎　豊島與志雄　久保田萬太郎　小川未明　江口渙　宇野浩二　久米正雄

水守龜之助　葛西善藏　室生犀星　中戸川吉二　加藤武雄　細田民樹　田中純　近松秋江　白石實三　佐藤春夫　有島武郎

東京牛込矢來中の丸　振替東京壹七四貳番
新潮社
電話番町　四八〇九番　八九九番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

杉村楚人冠先生立案

大正十年 自由日記

日記界の先驅者萬人快適の新日記

楚人冠先生が三十年の經驗に基きたる新創案にして

舊套を打破せる自由解放時代の新收獲なり

自由日記は在來の窮屈なる指定と分欄とに飽き足らず編者が三十餘年の經驗を基として、百人が百人の好みに隨つて使用し得るよう編製したるものなり。昨年初めて之を發行して望外の大好評を博し、之を以て我國日記界の因習を最も大膽に打破したる最新式となすものあるに至れり。本年は過去一ヶ年の成績と多數讀者の有益なる忠告とに鑑みて、更に諸般の大改良を加へたればその形式の寬濶自由にして而も用意の周到精緻なること到底他の追隨し得る所に非ず。わが思ふまゝに最も自由に使用し得らるる日記を求めんとする人は是非とも此自由日記に依らざる可らず。當今は何事も自由解放の時代也。此時代に順應すべき者は本書のみ。

紙質の精良は本邦隨一

■四六判總クロース特製
■製本頗堅牢用紙極上質
■定價壹圓參拾錢
■郵送料金十錢

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局三六六六 振替東京一七四四

新社會の基礎

忽ち再版

◇故 中澤臨川氏著◇

◇山本鼎氏裝幀◇

四六版新鑄ポイント組
定價二圓卅錢
送料十六錢

情熱の思想家として、科學的天才として常にその絢爛な文章を以て論壇を高歩したる臨川氏は痾を湘南に避け、血を吐きつゝ一句一字を刻むが如く綴りしものが本書である。彼が死に瀕して社會を憂ひ、國家を憂ひて猶科學科的深奥なる研究を捨てず、その電子説よりの世界觀の如き、ソリダリテへの道を説ける等近來の大傑作は收められて本書にあり、氏の晩年の最高藝術を通しての名香を含める社會觀が如何に我國の知識階級に歡迎さるゝかは乞ふ本書の飛ぶが如き賣行に見よ

◇詩人にして科學者眞正至純なる文藝鑑賞◇
◇者にして文明評論家たる氏の至言を聽け◇

東京芝櫻田久保町　改造社　振替東京八四〇二

生田長江・本間久雄共著

最新刊

社會改造の八大思想家

本書は、マルクス、クロポトキン、ラッセル、モオリス、カアペンタア、トルストイ、イブセン、エレンケイの人格と思想とを適確明快に說述せるもの、改造思想の眞髓を知らんとする士の必讀書也。

四六判四百頁
總クロース裝
函入全壹册
定價
二圓八十錢
郵送料十二錢

早稻田大學文科科長 文學博士 金子筑水著

忽三版

歐洲思想大觀

本書は希臘思想、基督教、ルネサンス、唯理思想、ロマンチシズム、最近代思想に章を分ちてあらゆる歐洲思想の變遷推移の跡を系統的簡潔明快に講述せるもの、一讀以て歐洲思想の全般に通ずるを得べし。

四六判四百頁
總クロース裝
函入全一册
定價
二圓八十錢
郵送料十二錢

發行所
東京市神田區表神保町
振替東京二七〇三番
口座
株式會社 東京堂書店

我が國體の淵源を知り國民性の本質を明かにせる正確なる國史を見よ

東京帝國大學文學部助教授 植松安先生著

註釋 假名の日本書紀

（上卷下卷全部完成）

内容—本文を漢字交りに書下し漢字に振假名を附し假名に漢字を當て一段毎に簡明なる註釋を加へ詳細なる目錄を添ふ。

四六判最上製 全貳冊壹千頁 七圓卅錢 送料廿四錢

◆里見岸雄氏新著◆

新刊發賣

人間としての日蓮聖人

著者は其の若き日の限り無き生命の榮光と歡喜との中に豊麗にして鋭利なる觀察力と批判力とを以て此の新著を成す

本書は一種の日蓮聖人性格の研究であつて四百餘篇の遺文を基礎として茲に新しく聖人の人間我を發見せる名著である。今まで餘り人の氣附かなかつた種々な材料を縱横に解剖し批判して泪ぐましい程懷しい人間としての日蓮聖人を描き出したものである。一度本書を繙いた者は何人もあの宗敎的絶大の威嚴を以て天下の執權北條氏をも叱咤した日蓮聖人の半面には斯くも切々たる情愛の漂ひ素朴な人間心が漲つてゐるかと驚き而して其の餘りに美しき人間性に涙ぐまないものは無いであらう。

四六判最上製 全壹冊三百頁 正價金貳圓 送料十二錢

小林一郎氏著

天の聲・人の聲

國民新聞批評 彼のシーザアの有名なる「我來たり我見たり我勝てり」の物語の如き名高き言を東西古今にもとめて凡て三百を集成して叙述しこれを自由に排列して讀者をして趣味と知識と品性との涵養に資せしもので甚だ玩讀に堪ふ。

四六判最上製美本 製壹冊四百五拾頁 正價金貳圓參拾錢 送料十二錢

東京市神田區表神保町七番地 大同館發行 振替貯金口座東京八七二二番

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

東京新橋竹川町　資生堂化粧品部
大阪東區南久寶寺町四丁目　大阪支店

歳末御贈答用
御化粧品陳列

十二月一日より
（本店 支店とも）





純品質主義

鷹印帽子

大阪 株式會社 高橋製帽所

趣味の改造としての鷹印帽子

人の性格とその趣味の最も公正的な徴象(シンボル)に服裝であります。殊に帽子はその主要部分で歐羅巴で　王位を冠にとつたのも故なしと致しません—頭—頭—頭は人間の至聖所でありますなのにその頭が往々にして虐待されてゐる傾向を見ます。五年十年と垢と油に浸された如うな—帽子を、平氣で御使用の方もありますが此れは時代錯誤と云はねばなりません。我が鷹印帽子は此の缺陷を補ふべく出現した斯界の星(スタア)を自任して居ります。その品質と型と、而も色は不褪色の染方に成功したのです—焦茶でも—濃鼠でも—純黑でも—そして眞價のある製品を、極度に廉賣するのが鷹印の使用です。先づ貴下の趣味の改造として此の帽子を…………お勸め申上ます。

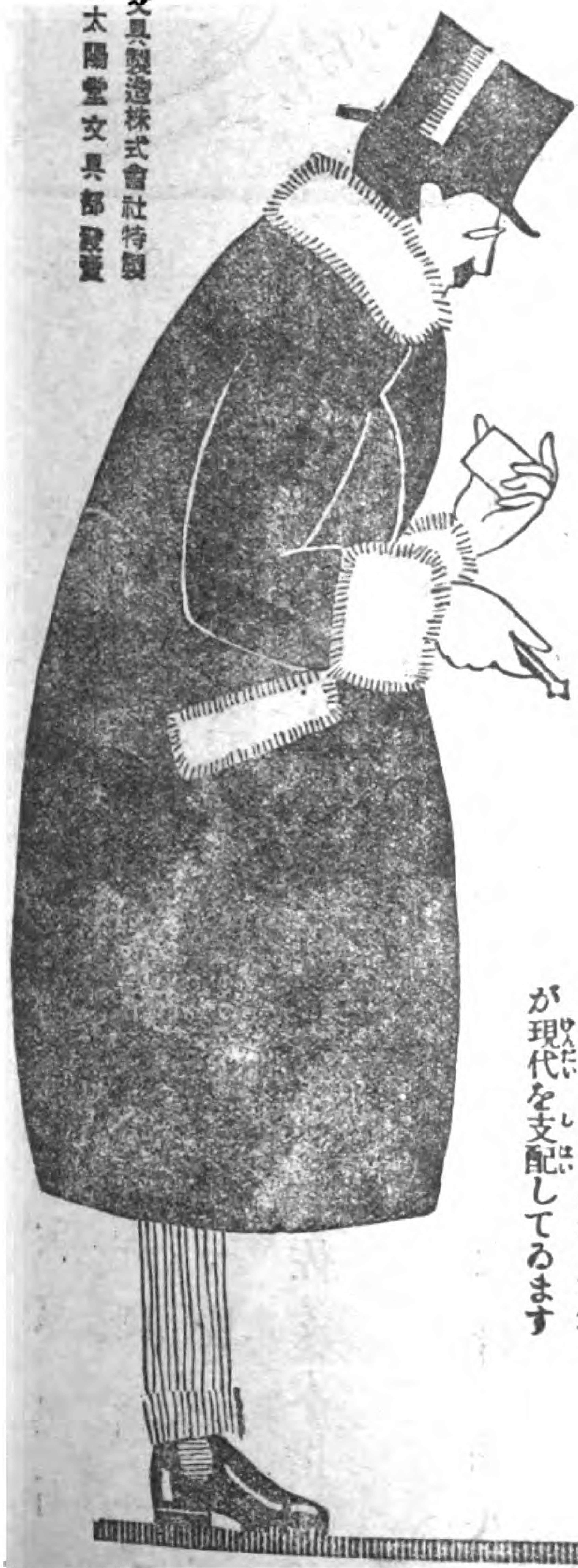


中央公論第卅五年十二月號目次

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



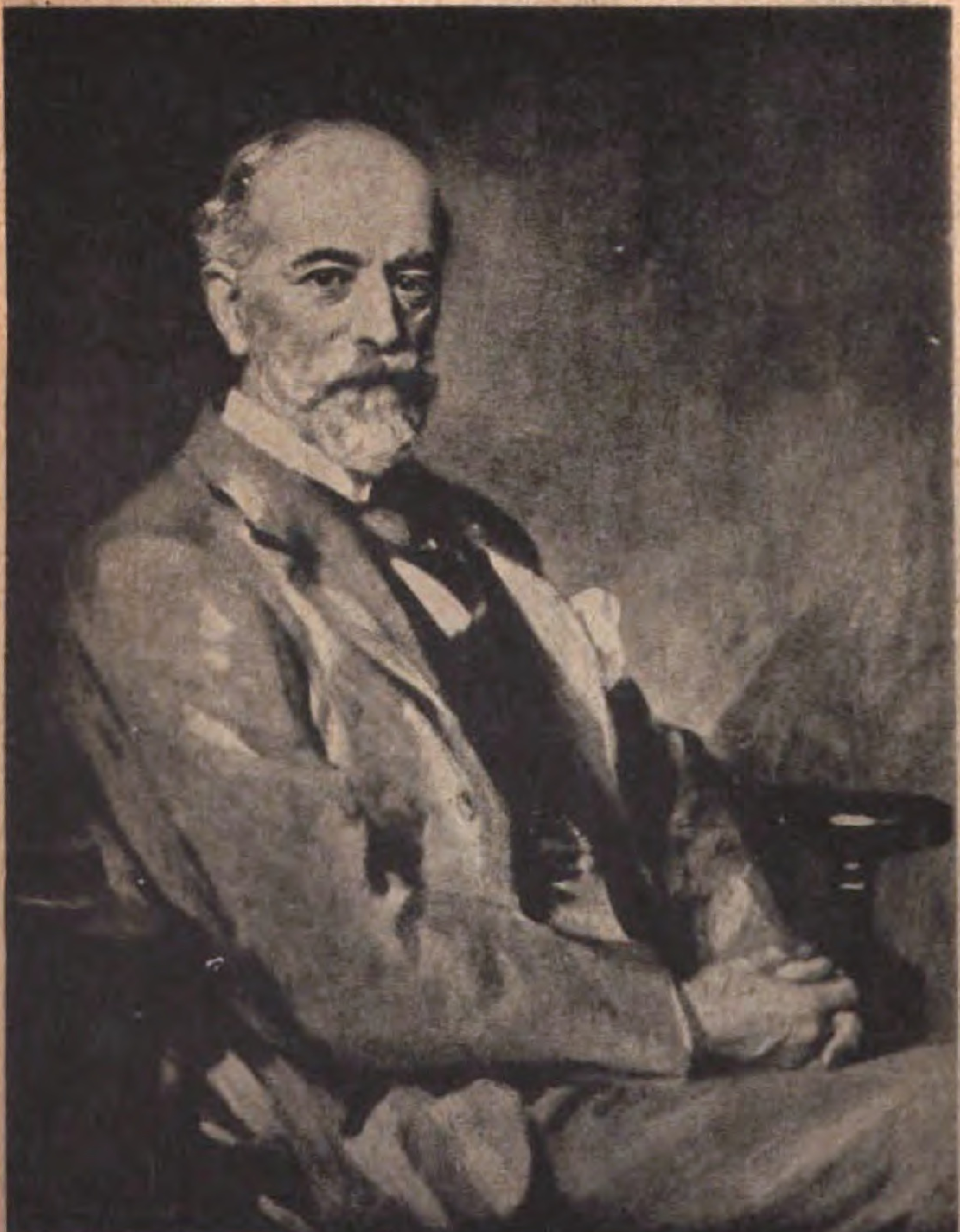
プラトン萬年筆

新文明が産んだ新様式
の萬年筆……スラ〳〵
書けるプラトン萬年筆

プラトン萬年筆の金ペン
のすべりから生れる文章
が現代を支配してゐます

日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣

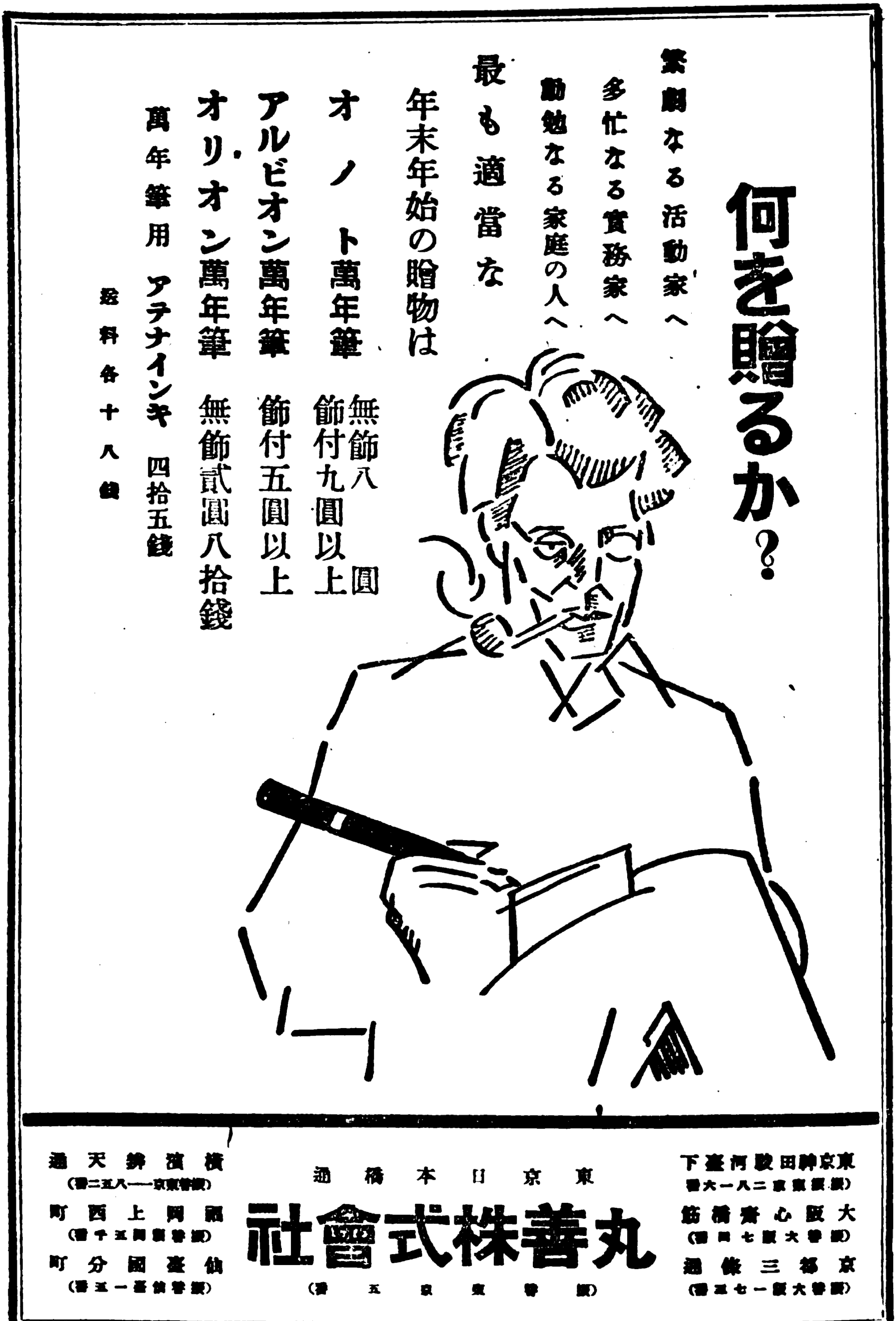
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



"PORTRAIT" SIR JAMES GUTHRIE.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA


何を贈るか？
繁劇なる活動家へ
多忙なる實務家へ
勤勉なる家庭の人へ
最も適當な
年末年始の贈物は
オノト萬年筆　無飾八圓　飾付九圓以上
アルビオン萬年筆　飾付五圓以上
オリオン萬年筆　無飾貳圓八拾錢
萬年筆用　アテナインキ　四拾五錢
送料各十八錢
東京日本橋通
丸善株式會社
(振替東京五番)
東京神田駿河臺下
(振替東京二八一六番)
大阪心齋橋筋
(振替大阪七四番)
京都三條通
(振替大阪一七五番)
横濱辨天通
(振替東京一八五二番)
福岡上西町
(振替福岡五千番)
仙臺國分町
(振替仙臺一五番)



▼流行の舶來帽子▲

諸君の容姿を粧ふべき
帽子は須らく
最良品を選ばらるべし
紳士用として新型且つ
最良品質の帽子は
世界に好評嘖々たる
ステツトソン帽子を
措て又他になし。是非
御注意上眞正輸入の
ステツトソン帽子を
御需めあれ。
一流の洋品雜貨店にて販賣す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●文學博士 坪内逍遙 譯

（沙翁傑作集第十七篇）

The Taming of the Shrew

ぢや〳〵馬馴らし

四六判布製函入
全一冊
木版挿圖數個入
正價金貳圓五拾錢
郵税金拾錢

沙翁立身前後に流行つたファース仕立の思ひ切つて蠻から式な喜劇の代表作である、其れ自ら一喜劇である。開幕劇へ本筋の喜劇を編み込んだ趣向が先づ最も珍らしい。雷聟が雷娘を難なく征服する段取に至つては更にをかしい。不思議に今も尚歡迎される喜劇である。我國でも其幾場かは飜案された。本譯には例の挿繪以外に特に名優の寫眞數葉を挿入した。

（既刊）

ハムレット	ロミオとジユリエット	オセロー
リヤ王	ジユリヤス・シーザー	ヹニスの商人
テムペスト	アントニーとクレオパトラ	眞夏の夜の夢
マクベス	以尺報尺	冬の夜ばなし
リチャード三世	ヘンリー四世（二部）	お氣に召すまゝ

各冊貳圓五拾錢
郵税各拾錢

發行所 東京牛込早稲田 振替一一三三番 早稲田大學出版部

（賣捌）東京堂、至誠堂、北隆館、東海堂 大阪盛文館、名古屋星野書店（其他）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

石丸梧平氏著（最新刊！）

四六版
貳百參拾頁
定價壹圓參拾錢
送料八錢

長篇小説 初戀

■裝幀 戸張孤雁氏 ■口繪 伊原宇三郎氏

詩の都の京都に、
人はうら若き春を
初戀に、
喜びと悲しみとに
ひたすら醉へる
「この長篇
力作を
看よ！」

郷土藝術家としての石丸梧平氏は「船場のぼんち」以來大阪を描く作家として聞えて居るが、然も氏は、其青年時代の最もなつかしき思ひ出の地として、京都の自然を愛し、京都の人間を愛してゐる。「初戀」一編、靜かなる禪院の生活、禁慾と思索の生活の間に、突如として現はれたる若き一女性が、純眞なる主人公の靜かな胸に何を投げたか……作者の情趣に滿ちた柔かい筆が心ゆくばかりそれを語つて居る。然も更に、主人公と一美少年との間のプラトニック、ラブを描き、複雜微妙なる戀愛の心理を解き盡して居るところ、正に不思議なる新記錄である。

京都新町七條上
東京京橋加賀町
内外出版株式會社
振替口座 大阪參貳九五五

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新刊發賣！

▼尾崎喜八譯

ベルリオ　自傳と書翰

四六版五二〇頁　銅版二葉　總布製

（定價參圓貳拾錢　送料拾貳錢）

エクトル・ベルリオは此の一書のうち其の一生を自ら語る。ベトーフエン以後第一人の音樂家、最も典型的なる天才の一人、人間の中の人間が潑溂として紙上に活き、直下に人の魂を摑んで震撼する。ロマン・ロランが此書を激賞してゐるのは寧ろ餘りに當然である。さうして自分は斷言する。尾崎がベルリオを譯する以上に自然な事は尠いであらう。彼の如き性格と胸とを持てる者にとつて洵に此の譯は一の立派な創作である、と。（高橋元吉）

◆久保正夫著　ベートーフェンの一生（三版）（定價壹圓八拾錢　送料拾錢）

◆高村光太郎譯　續ロダンの言葉（四版）（定價貳圓七拾錢　送料拾貳錢）

◆有島生馬譯　回想のセザンヌ（三版）（定價四圓　送料拾貳錢）

◆武者小路實篤著　幸福者（十五版）（定價壹圓貳拾錢　送料八錢）

◆有島武郎著作集　惜みなく愛は奪ふ（卅四版）（定價壹圓參拾錢　送料六錢）

東京牛込神樂町二丁目拾壹番地　**叢文閣**　振替口座東京四二八八九番

泡鳴全集

編輯 ―德田秋聲―中村吉藏―有島武郎―
―田山花袋―野口米次郎―木村鷹太郎―

全十二冊　四六判最上布製九ポイント組　紙數每冊六百餘頁

豫約募集

1 日の出前外十八篇
2 勇の家庭外十一篇
3 毒藥女外十八篇
4 二頭の馬外十七篇
5 冷たい月外十三篇
6 淺間の靈外十二篇
7 母の立場外十五篇
8 おせいの巡禮外十三篇
9 詩及詩論
10 評論
11 感想
12 日記

野口米次郎氏曰く
文壇の快男子、獨創的文學者の一人――如何なる時代を通じ日本に於てばかりでなく世界を通じて稀なる文學者の一人なる岩野泡鳴――僕も英國で日本現代の詩歌を講演したる時彼を詳細に論じた。それも僕の日本の詩歌論中に入れてある。

生田長江氏曰く
所謂文豪以上の岩野君。

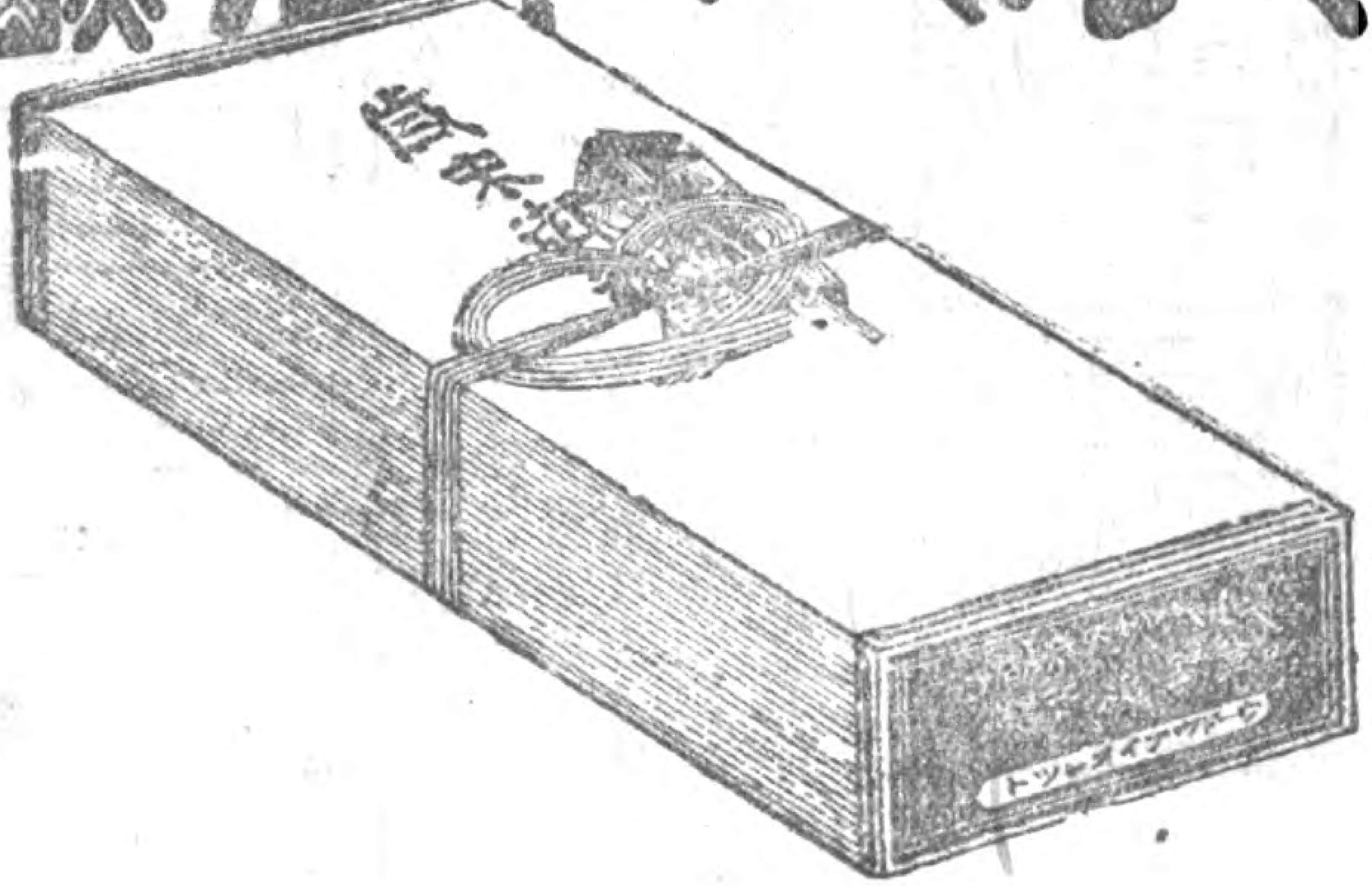
田山花袋氏曰く
其正直と其自信と其勇氣とは、君の一生を通じて其作品の上に現はれてゐる。中でも殊に大きな影響を世にも人にも與へたのは其自信の強い點であらねばならぬ。文藝に於ける事業は總てこゝから出立してゐる――思ふ所に突進して右も左も顧みなかつたやうな形は文壇に於ても特に異としなければならないものであつた。

略規
拂込　毎月拂參圓五拾錢一時拂四拾圓
申込金　參圓五拾錢（最終會費に宛つ）
送本　大正十年一月より向ふ十二ケ月

●豫約申込十二月十五日限
●内容見本御申越次第進呈

發行所　東京市麴町區内幸町一ノ六　電話新橋二一二七番　振替東京五二二九八番　國民圖書株式會社

ベルベット石鹸



▲彼乎、是乎と
貴い時間に御心使ひ
遊ばすは無意味です。

今……即刻……
萬人向のする
ベルベット石鹸を
歳末の御贈答品
として御選び遊ばせ。

世界到る處第一流の
化粧品店にて販賣す

製造元　神戸
日本リーバーブラザース株式會社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

田中王堂先生著

最新刊

最高藝術の大星小星

（四六判、箱入クロース本、定價貳圓七拾錢、送料金拾五錢）

論壇の權威田中王堂氏が古往今來最高藝術界に輝く大星小星を拉し來つて是を深邃の學識に照らし椽大の筆に上せて縱横論評をなしたる新著なり。洋の東西を問はず、偉大なる哲人、詩人、思想家、藝術家より女優の艶なるに及ぶ其のラッセルを論ずる大長篇の如きは苦心慘憺執筆數ヶ月の長きに渉り稿を更ふる事數回未だ何處にも發表せざる最新篇なり、該博の學識は滾々として長河の流るゝが如く雄勁の筆と犀利の眼光とは儼として秋霜の如し。

昇曙夢氏校閲
栗林貞一氏譯

（定價壹圓九拾錢
送料拾五錢）

クープリン傑作集 船暈（外三篇）

異常なる大天才クープリンの傑作は其赤裸々の描寫其筋の許可する所とならざりしが本社は曩きに魔窟（ヤーマ）を出し今又本集を出すを得たるを欣幸とす本集載する所四篇「船暈」の或る暗黒面の出來事を細叙して哀むべき愛を描きたる其他の三編何れも彼の天才と特色を發揮せし代表作なり。

坪内士行氏譯

（定價壹圓八拾錢
送料拾五錢）

バリー脚本集 社會と階級

英國近代劇の大家バリー氏の作の翻譯あるを聽かざりしが劇文學の新權威坪内士行氏此文豪を知らざるは外國劇を研究する者の恥辱なりとし曩きに帝國劇場に於て上演せられ又男性及女性と題して諸所の活動寫眞に映寫せられたるアドミラブルクライトンを始め社會及階級の上異常の特色ある代表作を譯せるものにして我邦のバリー翻譯の嚆矢也

東京市麹町區飯田町壹の貳　株式會社　天佑社　（振替東京一〇一二八番　電話九段長一七三番）

大正九年を送るに際して

大正九年を送るに際して、過去一ヶ年の我が思想界の推移と此間に處する我が中央公論の業績とを顧みて觀る。

問題は依然として社會改造に集つて居る。大正八年の引續きとして勞働問題も可なり盛に論議せられては居たが、主として世間の注目を集めたのは國家思想の問題である。こは必しも正月早々クロポトキン研究が八釜しい問題となつた爲めばかりではあるまい。昨今の人心は斯くして段々社會生活の實質に喰ひ入つて根本的の改造を企てんとして居る。

人類の團體生活の秩序は唯法と力とのみに依て維持さるゝものなら、國家は最高絶對の價値に相違ない。併し法と力とを以て强制せずんばすべての國民を團體的生活に統合し得ずとする觀方は、餘りに人類の本性を蔑にして居るの嫌なきを得るか。國家主上主義に對する極端の反動として他方の極端に無政府主義あるは已むを得ずとするも、而かも中正穩健の見識は、法と力との効用を認めて其濫用を誡めんとする處に置かなければならぬ。法と力との爲に人あるに非ず、人の爲に法と力とが在る。國家に關する紛々たる思想を整理し、國民をして其嚮ふ所を謬らざらしむる點に於て、我が中央公論が如何なる貢獻をなしたるかは讀者の已に知らるゝ所であらう。

中央公論は固より特定の問題について特定の見解を讀者に强ゆることを本務とする者ではない。文化の各方面に亙り、清新醇正の述作を紹介して聊か文運の進歩に貢獻せんことを念とするも、又平和と博愛との根本的人生觀を基調とし、紛々たる世上の俗論を超越して、常に統一的見識を踏み誤らざるは私に誇りとする所でもある。斯くして過去一ヶ年の業績を顧みるに、吾人は十二分の滿足を感ずることは出來ないが、また甚しく悔ゆる所もない。

吾人は率先して新奇の流行を作ることを得意としない。寧ろ時流を追ふの陋態を避けんとする者である。來るべき一年に於て吾人は何處までも質實に所信の一途を辿るであらう。是亦聊か文化の發展に最も正しき且つ最も意義ある貢獻を爲さんとするの微衷に出づる。舊年を送るに方り將來の覺悟を語りて敢て讀者諸君の協讃を求むる所以である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論



第卅五年第十三號

十二月號

第三百九拾號

新時代の理想的原則序説

杉森孝次郎

一、文明とはなに

文明は意思だ。意思と、意思の結果としての事實と、この二たつが合して文明の全部を構成する。日月星辰は天成の燭光だ。彼等は人類を益する。益するどころではない。人類の生存を可能にする。文明は人類の現象だとするならば、日月星辰は文明を可能にする一大要因だ。けれども、日月星辰は文明ではない。文明系統に籍を有する事實ではない。なぜか。彼等は意思の所産でないからだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

これに反して、人爲燈は文明だ。電燈も、瓦斯燈も、石油燈も、行燈も、提燈も、てんぴとりも、火打石も、悉く意思を原因とする存在であるから、文明だ。吾人は火打石を手段として用ひて、寒水を熱沸させる事も出來る。豆をいる事も出來る。喫烟する事も出來る。山を燒く事も出來る。始皇なら書冊を灰にして民を無智に保つ事も出來たらう。ネロなら羅馬の總燃を燭として、彈琴する事も出來たらう。文明は、意思及び意思の所產だ。科學、藝術、教育、政治、經濟、これらは皆な意思の功績だ。即ち文明だ。風は文明ではないが、帆船は文明だ。雨は文明ではないが、溝渠は文明だ。

文明と非文明とは、意思と自然との對立だ。意思が力である事は明らかだ。自然が力である事も、再考する餘地もない明白事だ。文明と非文明とは、意思としての力と、自然としての力との相違だ。力には方向がある。速度がある。自然としての力には、一時には、唯だ一とつの方向と速度とがある。意思としての力には、一時に、二つ乃至二つ以上の方向と速度とがありうる。自然としての力には自覺がなく、意思としての力には自覺があるからだ。意思としての力は選擇するけれども、自然としての力は運命の信者だ。本能狂だ。反省しない。

文明の開祖たるプロメトイスが、人類の熱愛者であり、創造者であり、そして彼れの殊勳が、火を天から竊んで、これを使用する事によつて、生活の一切の術を發明したにあつた事は、永照する神話だ。彼れは、一枝の枝を、太陽の眞近かに持ち支へて、火を獲得したとも、一說には傳へられる。文明は自然に加工する。學と術がその加工だ。新時代の理想的原則といへども、人間が自然を相手どつて、學と術の可能を新鮮活潑にするほかには成り立たない。

二、意思と力の時代相

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

オリムパス山上の諸神の主宰神ツォイスも、その最原始的の性質は、風雨雷電等の自然力の神であつたらしい。宇宙は自然力の孤奏であつたのだ。獨り踊りであつたのだ。反自然神のプロメトイスの出現と共に、人力と自然力との爭鬪も、合奏も始まつた。人力を意思と呼び、自然力を單純に力と呼ぶならば、意思と力の勝敗は、人類の歴史を物語る永生史家の著の緒論の題目にして、且つ結論の題目であらう。歴史の旅の途中に生存する吾人としては、來路を顧みては、意思の敗績をも認めるが、行く手を望む際には、意思と力の連踊か、さもなければ意思の一人劇を主張せざるを得ない。

古代希臘は、意思と力の連踊した時代であつた。基督教的上世及び中世は、意思が力を逃避した時代であつた。近世は、意思と力と相鬪ひ、大體に於いては、意思が凱歌を奏し來たつた時代だ。

一九一四年の夏に、いはゆる世界戰爭が、平和の薄布をつんざいて、あばれだしたのも、帝國主義的嫉妬競爭の泥仕合ひとのみは觀られない。英佛米伊その他の、民本主義系の基督教國が、相組んで獨の軍國主義を打ち亡ぼしにかゝつたのは、意思の發動であつた。そして彼等が勝つたのは、力に對する意思の勝利であつた。注意すべき一事は、中歐の軍國主義も、殊にその頭目の專制君主は、基督教の正統信者たる告白を、人後に落ちず强調したといふ歴史を有する事だ。打たるゝ者も、打つ者も、共にこれ名にし負ふ基督教國民の筆頭に立つ敬虔なる大國民であつた事は、輕々に看過すべからざる現象だ。二千年來、愛の敎へに全魂を捧げ、右頰を打たれたなら、更に敵の拳にむかつて右頰を提供する事を誓ひ、敵を愛する學と術に徹底した筈の基督教國民が、長夜の夢から醒めたかの如くに、進んで敵の兩頰を打ちにかかつたのであつた。金庫に錠を卸すよりは、魂に錠を卸す方が賢明である事を、說教もし、聽從もした國民が經濟政策、軍事政策の限りを盡して、自國の金庫には强い物力の錠を卸し、敵の金庫には、强い物力の開庫機を適用したのであつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

これはすべてわるい事であつたらうか。基督教が眞理の全部であるなら、最近の西洋國民の所行は、わるい事であつたといはねばならん。しかしながら、力を否定した基督教が眞理の全部ではない。力の學と術を發明した近代が、それ故惡だとはいはれない。力の學と術を發明したといふ事實自身は、偉大なる善だ。なぜかといふに、力の學と術を發明し、大成する事は、意思の學と術を發明し、大成するために、必要な準備だからだ。

世界戰爭が濟むか濟まぬ內に、直接行動を旗幟とする階級鬪爭が出發した。一九一七年の初春以來、殊にその晩秋以來の露西亞は、その一大例だ。佛米のサンヂカリズムも、英の國民的ギルドも、前者は産業專制を目的とするのかも知れないが、後者は産業自治を標榜してをるに拘らず、方法は一樣に直接行動だ。國民的ギルドは、總同盟罷行以上に物力的な破壞手段をば採らぬ立ち場らしいが、總同盟罷行そのものが、立派に一種の物力的破壞手段だ。敵の理性や情愛に愬へずして、直ちに敵の恐怖心と欲望に愬へる性質を、總同盟罷行は有するからだ。最近の基督教國民の間に行はれた國民鬪爭と、最々近の基督教國民の間に發展しつゝある階級鬪爭とは、形式をば異にすれども、卽ち一は横に民族的差別を看板とし、他は縱に階級的差別を看板としてをるだけの差はあるけれども、背景としての心理は、いづれも直接行動の肯定だ。力の信者だ。虛僞の傳統的宗教信から自由にされた、本然の人間だ。

カーライルの『英雄論』の首章「ペーガニズム」の末頁は、世にも意義深き、哀絕にして悲壯なる光景を敍し、心境をほのめかす。それは力の神のソアが、この世から姿を隱す最後の一場だ。彼れは、一異人として、基督教の輸入王オーラーフの一行の航旅先きに現はれた。王の左右の侍者らは、その異人に物言ひ寄つて、異人の答への剴切と深刻とに驚かされた。異人は遂に王と談る。美しい海岸に沿うて航進しながらの會話だ。「さなり、オーラーフ王よ、こゝはいかにも美なり。日は輝き、草木は綠に、果穀は實のれり。貴下のためのいみじき鄕國ぞかし。されど、ソアがこのあたり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を斯くなすまでには、彼れはいくその傷ましき日を持てるなり。巖の巨人らを相手どつて、あまた度びの暴らき鬪ひをもしけるなり。然るに今や貴下はソアの滅亡を欲するが如し。オーラーフ王よ、氣を付けたまへ」言ひ終はつて異人の影も形も消え失せたり。カーライルが、落日を弔する者の感懷に滿ちて、力の宗教を引導したのは面白い。落日は返る。カーライルが、新來の魂の宗教を迎ふるに心せかるゝが如くに、輕率に廢用を宣告された原始野蠻の力の宗教、即ちペーガニズムに名殘を惜み、理想の未練を捧げたのは、一讃に値ひする。

三、自治、責任、及び創造

ニーチエに永久再來說がある。意思の信者たる彼れに、この說あるは不思議だといふのが一部の評だ。永久再來は一種の運命論だからだ。ジムメル氏この謎を釋いていふやう、これは責任の鍵で開くべき秘庫だと。意思の信者たるニーチエは、同時に責任の信者であつた。一度粗末な事を行へば、その人は永恆無量劫に亘つて、精確にその恥と慘禍とを繰り返し、且つ繰り返へして經驗せねばならん。一度の操心と決意と行動とは、將來無限度數の同樣の操心と決意と行動との穗を刈る必然的運命の種を蒔くのだ。各瞬間の生活は、永劫に取り返しのつかない苗植えだ。だから人は、自由意思を最善に働かせて、後日悔いなく、却つて悅びと誇りとがあるやうにのみ行はねばいけない。カントは普遍妥當性を行爲の規範として主張した。一人の行爲は、その社會の他の何人にその行爲者を取り代へて考へて見ても、歡迎すべき性質のものでなくてはいけない。盜まんと欲する人は、盜まれる人の立ち場を、盜む前に考へて、歡迎すべき立ち場でないと判斷されよう。隨つて盜んではいけないといふ規範が立つ。即ちカントは、横に萬人を歷訪して公論を探求したのだ。ニーチエは、縱に同一人を永生させて、行爲の普遍妥當性を時間的に主張したのだ。これがジムメル氏の解說だ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

責任を社會的普遍妥當性に基礎づけ、或は歴史的永久妥當性に基礎づける事は、しかしながら、淺見だ。自治は意必の最低必要であるが、責任は自治の半面だ。自治と責任とは、一本の樹の根の張り方と、枝の擴がり方よりも密接に關延だ。自治即ち責任、責任即ち自治ともいへるのだ。

新時代に於いては、各國は國際的社會に對して責任を有する。國際的社會の善を増し、惡を減す責任を有するのだ。これは、各國の自治の內容だ。一國の港に着いた船を見よ。他國の港から出發した船の場合があらう。その船からは、原料や製作品が陸上げされる。その反對に、一國の港からでる船を見よ。他國の港に向かひ、着港して荷おろしされるのがあらう。これは、二國の生産者と消費者とが、一國だけでは半人前である事を意味するのだ。二國揃つて一人前となる事を意味するのだ。一國だけでは半人なのだ。二國揃つて一人となるのだ。なぜかといふに、消費者なき生産者は、照らすあての人も、物もない太陽に等しからう。生産者なき消費者は、暗中に錦衣を着た人よりも悲しからう。

本や雜誌や新聞も、船に積まれて、羽翼を生じたるが如くに異邦間を舞ひ廻はる。一大思想樹が國際に生長して、各國の民は、その寄生蟲たらんとしてゐる。經濟人としての一國民が半人なら、文化人としての一國民は一層部分的な不具者だらう。發明力漸く、創作能細き國民の場合において殊にさうだ。例へばわが國の學界と藝術界から、歐米の文化的努力の結果を總拔きに拔いたなら、損失はどの位に目だつだらうか。米の文化生活から歐の寄與分子を除き、戰前の獨の文化生活から佛英伊の寄與分子を除いた殘りも、その寂しさは想ひやられる。レーニンは最近の露を創作した。けれども、その創作の原動力としてのマルクスは獨人であつた。釋迦の生命の北進し、東進して、半球を狹しとした歴史と、耶蘇の生命の北進し、西進して、全球を浸潤せんとした歴史とは、すでに文化人の國際脚を語る事實であるが、交通の手段の發達した最近代に於て、この事實は、超人の例外ではなく、民衆の常態となつて來たのだ。

今日の諸國民を觀察すれば、各國の男女の或者は特に經濟人であり、或者は特に文化人だ。同じ經濟人の內でも、或者は、或種の富については生産者であつても、他の或種の富については消費者だ。野菜をば生産もし消費もするが、器具をば單に消費する農民もある、といつた概況だ。文化人にも同樣の現象がある。繪はかくが、音樂は聽く一方といふ人がある。專門的、職業的に文化人と經濟人とにわかれてゐる各國の男女は、常識の人としては一人にして皆な文化人と經濟人とを兼ねてゐる。多少科學心なき男女はない。多少藝術心なき男女もない。小學校の教科目の內に、科學的要素も、藝術的要素もすでに萠發してゐる。經濟人についていふならば、出産の當日からして、人はすべて一個の消費者だが、將來、專門を選び、職業を持つといふ事は、生産者になるといふ意味だ。無職の人だけが不生産者だが、不生産者は病態だ。個人の健康態でもなければ、社會の健康態でもない。

然るに當今の諸國民は、經濟生活に於いても、文化生活に於いても、一國自給を現に實行し、また原則としての確信を抱いて實行し得る位置には、いづれもゐない。他國があらゆる意味に於いて他國なのではなく、多大の意味に於て自國なのだ。この事實が孕む人爲法はなんであるか。それは國際的責任だ。一國として、國際的社會に負ふ責任だ。各國互助の世に於いて、即ち諸國協力の世に於いては、その互助が社會だ。その協力が社會だ。國としての社會奉仕の責任がそこに生ずるのだ。一國の一人が、自己を肯定する事は、國際的社會を肯定する事の別稱にほかならんのだ。一國の自治が、列國の協力によつて始めて可能なのだから、一國が列國に負ふ責任は、聰明に判斷すれば、一國が一國自身に負ふ責任だ。國外の善を國際的社會の善として保育し、國內の惡を國際的社會の惡として芟除する。一國としての進退去就を決するにあたつて、國際的社會の一員としての良心の判斷と、利害の打算とを要するのだ。

そも〳〵社會は、その成員の內に存する。そして他のどこにも存しない。成員の內でも、偉大なる成員ほど、社會を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

餘計に有するのだ。「社會はその成員の内にのみ存す、そして社會はその成員中の最偉大者の内に最も多く存す」(Society is nowhere but in its members, and it is most in the greatest of them)、とマツクイーヴー君が述べたのは、適切だ。國際的社會が唯一の社會だ。その他の協力生活は、社會内の社會だ。枝葉だ。幹根は國際的社會だ。國際的社會としての社會は、各國の内に存するのだ。なかんづく、列國中の最偉大國の内に、最も多く存するのだ。偉大なる一國の自治は、國際的社會の强烈なる肯定となるの論理は、こゝに必然的に展開する。よかれ、あしかれ、戰前の二分の半世期間の獨逸は、ヰルヘルム第二世の一身に最も多く存在した一社會であつた。過去數年間の英國は、ロイド、ジョージ氏の一身に最も多く存在する一社會かも知れん。山縣有朋氏の一身に、最近の日本がどの位存在するか知らないが、彼れの一顰一笑を最大の標準として決意し、行動する人々の一人が有するよりは、山縣氏の方が餘計に日本の社會を内有してをる事は明白だ。兩三年來の露西亞の社會が、どの位、中年の一禿顱漢の一身の内に存してをるかは、明答が出來るほど顯著な事實だ。國は國民の各員に存し、殊にその最偉大員の内に最偉大存する。國際的社會は各國に存し、殊にその最偉大國の内に最大存するの事實と意味とを、今日の各國民は、常識の最低必要事に屬する一項として明察し、體認しなくてはいけない。自治は責任の表だ。責任は自治の裏だ。同内容の異稱呼だ。

責任は、自己を主張する人なり、團體なりの、取らざるを得ざる形だ。意思は自己主張だ。意思と責任との間には、意思と自治との間に存する距離以上の距離はないのだ。卽ち、意思と責任との間は、無間隔だ。大なる意思は大なる自治を内的必要とする。換言すれば、大なる責任を内的必要とするのだ。義務といふ言葉は、奴隷道德時代の遺物だ。新人の胸には響かない。義務は吝嗇だ。當然自治の範圍内に横たはる仕事を、愛他奉公の名に於いてでなくては、えしないのだ。忠、孝、敬神、これらは皆な新にして眞なる哲學の曙光に、各國に於いて、すでに照らされつゝあるでないか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

愛自奉己、そしてその自と己とは、社會大でもあれば、宇宙大でもある。これが眞態だ。

デモクラシイの生命は、自治にある。他律に代ふるに自律を以てするにある。權力に代ふるに意思を以てするにあるのだ。權力の別名は外在的權威だ。命令だ。强制だ。意思は內發的原理だ。近代の個性主義が、デモクラシイの泉源だ。宗敎改革は、甚だ不完全ながら、信仰上のデモクラシイの一徵であつた。佛革命は、政治上のデモクラシイの、損傷多き第一步の踏みだしであつた。社會主義と勞働運動とは、經濟上のデモクラシイの代表的位置に立つ。多少の不完全は、識別してこれを掃除すべきだ。婦人解放運動は、腕力上の强者が、その機會を利己的に使用して、經濟上の主權者ともなり、敎育、隨つて智能上の優勝者ともなつてをる現狀に反抗して、機會を男女兩性に開放して、女性の自治の領域を恢復し、また新建せんとする形のデモクラシイだ。小兒解放運動は、年齒別を機會として形成された習慣及び制度上の不合理分子を洗ひ淨めようとする形の、そして小兒相當の自治を可能にせんとする努力のデモクラシイだ。民族自決、產業自治卽ち生產者自治、婦人自治、小兒自治、及び信神生活の自治、觀來たれば現代の諸問題を通じて、およそ社會上、思想上の問題と銘打つた種類の問題は、自治の傾向と努力の一波と他波だ。潮流は總統されて動いてをるのだ。自治、責任、及び創造が合して一となつてその總統力を形成する。長さ、廣さ、及び厚さが、物の三ちめんしよんであるなら、自治、責任、及び創造が、新時代の理想的原則の三ちめんしよんだ。責任と自治は、その最高能率を發揮しても、尙ほ且つ至極價ではない。至極價は創造だ。經濟的にいへば生產だ。文化的にいへば學說の發明だ。新藝術の創作だ。全體的にいへば、新信の樹立だ。新人格の敎育だ。自治は、猥りに他の世話にならない事を意味する。人の厄介にならず、人の干涉を許さない事を意味する。責任は人に迷惑をかけない事を意味する。これは自治及び責任の平俗卑近の一例話だが、生活の事と術は、創造に宗朝し、集中する內的必然性を持つてをるのだ。創造のための自治だ。創造

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のための責任だ。生産能率を高めるための分配、發明能率、創作能率を高めるための自由だ。內容實質は生産だ。創造だ。正は道德の最低必要であり、善が道德の最高可能である。そして、その善は、無限向上の將來を常に殘すといふ主張は、手をかへ、品をかへて繰り返される要が強い。

創造の自覺に發張してゐない自治は、自治ではなくて、大正年代に於ける攘夷主義だらう。その名は、自治ではなく、自殺だ。自亡だ。自卑自損だ。同樣に、創造の自覺に充滿してゐない責任は、責任ではなくて、「動ありしにも拘らず、重患者を移室して死に至らしめた」と傳へらるゝ醫師の行爲の如きものだらう。浩歎せざらんと欲するも得べけんや。

四、誇りの發明

根底に力を用ひないで、末梢に學を施こし、術を加へても、成績はあがらない。これを思ふごとに、人類にむかつて、誇りの福音を宣傳するの要の急切深切を感ずる。勞働者が誇りに目醒むれば、勞働運動は解決する。婦人が誇りに目醒むれば、婦人問題は解決する。幼少靑年者に、人を發見する人々が、人間の誇りに目醒むれば、敎育問題は解決する。個性の誇りに目醒むれば、國際問題も、國民問題も、八月の東京街上に取り落したる雪塊の如くに釋滅する。愛では片付かない。人はそれほど強く愛し得ないからだ。道德の不成績は、愛の信念から起こる。ジムメル氏が、ニーチエの高尚道德（Vornehmheit）に目を着けたのは、新道德の一端に着目したのだ。誇りの低い民族は、皮膚のために身をも、魂をも獻げる。誇りの低い勞働者と、婦人と、小兒と、それから信神家と、誘惑の前の機會主義者だ。溫情主義のとりこともなり、直接行動の發作的信者ともなる人には、誇りが耕されてゐない。他の萬事は機會主義に委してよい。誇りの原則には、終始一貫して忠誠を竭したい。社會的普遍妥當價をも、歷史的普遍妥當價をも、即ち各人同時的普遍妥當價をも、同人異時的普遍妥當價をも、宇宙的深根底あり、宇宙的高希望ある誇りにこそ求むべきだ。誇りに根ざす

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社會生活は、個性を伸暢する方法を採つて協力する。衆個性の相違だ。

威張つたり、卑屈したりする事に、例外なしに恥を感ずる生活が貴い。上官に卑屈する人に限つて下官に威張る。弱者の前に驕傲する人は、强者の前に低頭屏息する人にきまつてゐる。家庭を見ても、生產界を見ても、政界を見ても、敎育界を見てさへも、學問藝術の世界を見てさへも、誇りなき人々の群居と團結とが今日の社會でないか。不快な光景といふべきだらう。世に最謙遜な人は、最も誇りの高い人だらう。新信仰が興らなくてはいけない。造物主の前に卑屈し、祖師の前に卑屈し、權威を常にそとに求むる癖が、人類には久しくついてをる。生殺與奪の力を有する者が、われに對して殺奪を選ばない時、若しくは生與を選ぶ時には尙ほ更らの事、われはその權力者を盲信敬仰して措くところを知らぬやうになる。世界の古來の忠僕と忠臣と孝子と貞女と虔神者とには、この質の人がどれほどあつた事だらう。隣人に降つた災禍がわが身の上に降らなかつたといつて、われらの信念と謝念とは神にむかつて增大する。生活の光りも熱も、外來主義に委する人のする事だ。內から動く生活を始めなくてはならん。われも、他も、皆な內から動く生活を生活する社會、これが明日の社會であるべきだ。自治が普ねく支配する社會が、われらの目的とすべき社會だ。それには、誇りの哲學の普及を要する。自由戰爭の名に於いて、生存戰爭の名に於いて、個人主義、國民主義、階級主義の名に於いて、人類は、すでに、誇りの哲學を學び過ぎたでないかと反駁する人は、誇りの徽候を見て、實現を見ないのだ。光榮、權力、富、これらは、一とたび誇りの哲學が常識化した時には、デモクラシイの結論として主張される。

耳を大地に着けて新來の生活を聽けば、新人類と新社會とは、自治、責任、及び創造の三幕劇を稽古してをるやうだ。

責任は人に迷惑をかけない事だといふたが、あれは責任の極めて消極的な一面に過ぎない。責任の正態は、自他の志を伸ばすにある。そして、これは同時に誇りの內容であるべきだ。他の志を屈することによつておのが志を伸ばし、お

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のが志を屈することによつて他の志を伸ばす感情と、思想と、意思と、行爲とは、誇りの原則にそむく。宇宙の自己主張が誇りだ。個性の自己主張が、宇宙の自己主張の最高形式だ。人は、自己が有するものを隠し、自己が有しないものを示したがる。誇りは人の所有だ。愛はしばしば虚榮だ。人は、その所有を信じ、これに十分の機會を與ふる事によつてのみ、看板通り、看板に優る愛をひさぎ得るのだ。責任とは、自覺ある社會生活の名だ。他人を自己に見出だし、自己を他人に見出だす。その程度に應じて、われらは、責任を負はねば、無自覺といふ事になるのだ。イエナの敗績から、普佛戰に至るまでの、ドイツの民は自治の信者であつた。創造は物の性だ。人の本能だ。陽明は、無善無惡が心の本體だと言うたが、創造は心の本能だ。しかし、責任なき創造は、他の自治を侵すことによつて失敗する。取り引き相手の正直を信じ、これを利用して自己の不正直を働く人は、誇りのある人とはいへない。自己に對する統一的認識と評價とがないからだ。けれども、大國と、資本家と、男と、成人とは、恐く現代に於いて多少誇りの不信者ではないか。小國と、勞働者と、女と、小兒とにむかつては、命令者を良心以外に持つてはいけないと簡說する。命令が自己の良心以外から來る間は、われらは、誇りの缺乏の意識を、明らかに且つ強く持つべきだ。眞空を充たす雰圍氣の本能力を、われらは誇りの缺乏に對して持つべきだ。自治、責任、及び創造の一實在としての人が、社會の各成員に健在する狀態こそ、新時代の第一步であるべきだ。生活の三ちめんしよんが自治、責任、及び創造である事は、誇りの三ちめんしよんがそれである事の條件だ。われらの誇りをして、先づ自治に集中せしめよ、それから責任に集中せしめよ。最後に、しかしながら、最中心的要件として、創造に集中せしめよ。個人としてだ。隨つて國民としてもだ。

誇りの半面は恥だ。自治不能者である事を恥ぢ、責任不能者である事をその上に恥ぢ、創造不能者である事を更にその上に恥ぢる心が、新時代の心だ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

兩頭の思想政策

今村力三郎

殺風景な電線の下に、行儀よく植えられた街路樹も、春が來れば勢よく芽を發く、權力で桎梏せられた、人類も時に連れて思想の華を開く、電線下の街路樹は、年に一二度大きな鋏で、折角展びた新芽は刈られ、人間の思想は、斷えず權力に壓搾せられる、斯くて、年々、歲々、展びては刈られ、刈られては伸び、同じことを繰返すうち、鬱々亭々として、天をも覆ふべき、公孫樹も、「プラタナス」も、佶屈として傴僂の如く、融然として和合すべき人の心も、上下相剋すること、水火の如くなることはあるまいか。

近來思想の動搖、思想の惡化、或は危險思想などと、思想に關する憂慮の言葉を耳にすることと屢なるが、私は思想は動搖するのが本來の面目であると思ふ。淼茫たる海水は、瞬時も動搖を止めない、思想の浪は人類の生命のあらん限り新しきを求めて進む。世界大戰の齎らした教訓は、一時に思想の浪を高からしめたるも、是迄靜止せるものが遽に動き出したのでは無い。動けるものが歩を速めたのだ、思想の動搖に驚いて、只管其安定を得んとアセるものは、太洋の高浪を見て、其固定を欲するのと同じではあるまいか。

危險思想とか、思想の惡化とか云ふ言葉も、其意味が甚だ諒解し惡い。何をか危險思想と言ふ、社會主義か、無政府主義か、共産主義か、將た民本主義か。私は是等の主義の研究者でないから、各主義、各主張に就て、是非の批評を爲すことは出來ぬが、是等の主義主張が、何れも人類の幸福の爲にする相當の理據を有し、多數人類の讃仰するところと爲つて居る事は事實である。我國に於ても、國際聯盟に加入し、勞働會議に參列するほどであるから、世界思想の大勢に、耳目を覆ふことは出來まい。徒らに自己の信仰するところを是なりとし、他の主義主張を排せんとするは、却て禍端を開く基である。國家と言ひ、社會と言ふ、人類の組織せる有機體の最複雜なるものである。單純に一主義、一主張を以て、之を率ゐんとするは如何なる力を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

以てしても到底不可能である。刺身は甘ひ、山葵が副へば更に甘ひ、と言つて山葵ばかり食ふ事は出來まい。軍國主義が國家の維持に必要なり、國家主義が國家の力を養ふに最適なりとて、軍國主義、國家主義を以て、押通さんとするは、山葵を滿喫して刺身を味はんとするに等しきものではあるまいか。軈て辛き目に逢ふて、山葵を食ひ過ぎたと、驚いても後の祭りだ。

　外來思想と云ふ言葉も、昨今の流行語となつた。此言葉は、思想の鎖國主義を意味する。なる程、日本には日本の歴史もあり、建國の由來もある、併し日本の藝術、日本の思想に、所謂外來の刺擊を受けないものがあるであらうか。日本國民は、外來思想の恩惠なくして、今日の文化を何れより得來りしか。日本歴史を信敬する我等は、同時に外來思想の恩惠を感謝すべきである、思想が外來なりとの一事を以て、之を排斥せんとする人は、日本の歴史を云々しながら、自說に妨げとなる、史的事實の前に、自已の眼を閉づるのである。寧ろ率直に、今日までの文化は、外來思想の恩惠である、けれども既に得たる我等の特權を侵害する外來思想のみは、我等の利益を奪ふが故に之を拒否するのであると言へば、頗徹底して判りが好い。思想の危險を高唱する人がある、一體誰から見て危險であるのか、思想の懷抱者が自ら、我こそ危險思想家なりと名乘りを揚げて居るものは無い。畢竟、反對の思想家が命名せる形容詞に過ぎない。若思想の危險を論ずるならば、權力階級の思想ほど危險なるものはあるまい、何故なれば、權力階級の思想には、刑罰が伴ふからである。無權力者の思想は、唯聲と活字のみである、―反對者に對する强制力を有たない。其處で、一方が刑罰で抑へようとする、一方が反抗する、暴力や、直接行動の、由て來る源泉は實に玆に在る。先覺の士が、憂て止まざるは、此邊の消息に存するのである。床次內務大臣が、地方官に與へた訓示中に、思想に對するは思想を以てするが原則であると聲明したのは流石に偉い。

　矯激な言論を以て、低級なる讀者に媚びんとする、煽動思想家も無いとは言へぬ。けれど良心に背いて、齒の浮くような諛辭を、權勢の前に捧呈する、僞學者もある。畢竟、上に諂ふのも、下に阿ねるのも、其罪は同一である。濱の眞砂は盡くるとも此類の小人の種は盡きない、斯る小人の言動は、大局より見て、左程氣にして神經を尖らすに及ばない。昔しから何千萬の流行唄があつたであらうが、其今日に傳はるものは、多少なりとも音樂的價値ある極少數のものに過ぎない。民衆は、自然淘汰の明鑑を持つて居る、矯激の言論も、阿諛の曲學も、一の流行唄と大差はない、須らく達觀すべしである。當局者自ら神經

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

衰弱に罹つて、些細の事まで過敏になつて、ソレ警察、ヤレ裁判と事端を繁くするのは、徒らに民衆を威嚇するのみで、却て人心を不安に導くのである。時に矯激の說を唱ふるものありとも、人心の機微に觸れないものは、自然に消滅する、之に反し、其說が人類の實生活に、深く、强き慰安と、希望を齎らすものであつたならば、幾ら權力を以てするも、到底撲滅の出來るものでない、歷史が昭々として、敎を垂れて居るでは無いか。

言論に關する犯罪は、多く進化的犯罪に屬し、社會思想に一步先だつがために處罰せらるゝのである。少くとも官僚思想より進んだものが刑罰の制裁を蒙るのであるから、時代が進步して、先驅者の曾て首唱せし思想に達したとき、初めて先の刑罰が甚馬鹿々々しく見えるのであるが、先驅者は、何時も時代の先頭に居るから、後れた思想の爲め、迫害を被ることは限りなく繰返されるのである。殊に社會が轉期に臨むときは、新舊思想の距離が遠くなるから、此問題が頻繁に起るのである。

中央公論の、大正八年五月號は、過激思想對應策の爲め、罰金に處せられた、播磨君の論文中に西伯利亞出兵の攻擊があつて、夫れが判決文中に摘載せられ、不法なる言論の一節として擧げられて居る。大正九年の今日になつて、既往を回顧すると、西伯利亞出兵の攻擊、中央公論の處罰、大正九年に於ける西伯利の現狀と、對照し來れば、其處に興味ある讀者の判斷が浮ぶであらう。

宙返り飛行家「スミス」君の來たとき、軍人には宙返りを學ぶ必要がないと、力んだ軍人の巨頭があつた、今日此頃、此軍人が、どんな顏をして居るか見たいものだ。世間に、此軍人と酷似せる、權力家や、憂國者が頗多い。

司法官の會同に際し、司法大臣や、檢事總長が、訓示を與ふることは、年々の例であつて、社會は、又かとばかり餘り注意を拂はないが、司法部內では、此訓示演說が、多少の波紋を起すのである。事務の簡捷とか、常識の修養とか、國民の希望する方面には、訓示演說の效果を認むることは出來ないが、被告人を嚴罰せよとの意味でもあると、其影響は、直に個々の裁判に現はれるから、我々在野法曹は、一般世人よりも、此訓示演說に多くの注意を拂ふのである。曾て改正刑法實施の際、極端なる嚴刑酷罰主義が行はれて、世人を戰慄せしめたのも、訓示の演說の威嚴の顯れであつた。

今年の司法官會議に於て大木法相は、

> 近時思想界の狀態は、勞働經濟等社會上の諸問題と錯綜して、急激の變化を來し、言論に文章に奇矯の說を爲す者甚多からんとす、就中、我國體の精華たる、家國の[illegible]

忠孝の大義を非議するものあり、而も此の知き危激の思想を抱懐し、又は此の如き思想の發達を以て、時勢の進運に適合するものと爲すもの、智識階級に於て少なからざる傾向あるに至りては、轉た慄然たらざるを得ず、思想上の發現に關する取締に付ては、從來屢訓示する所ありたりと雖も、社會の風潮は、異を好み、奇を衒ひ、益々矯激の言辭を増長せしむるの傾向あり、當局は斷々乎として此種の言論を爲すものを糺彈し、其弊害の瀰漫を防止せんとす、是を以て其の大勢に逆行するものと爲すが如きは、徒に海外新異の説に眩惑して、我國本を忘却するものと云はざるべからず」とあり。

隨分思ひ切つた露骨の訓示であるが、平沼檢事總長の、警察部長會議に於ける訓示も、是れと大同小異であつて、一層其用語を極端に走らしたものである、訓示の趣旨は、危激思想を嚴重に糺彈せよと云ふにあるから、別段何の不思議もないやうなものだが、所謂危激思想とか、奇矯の言論とかの、實際問題になると、其見解は十人十色で、各自の立場の相違より、毫厘千里の差を來すのである。此頃、思想問題で刑辟に觸れた人々は甚多いが、其人々は、自ら刑罰を覺悟して言論したのでは無い、自分では法律上發表の自由範圍に屬するものとして、何の氣もなく、不用意に爲した事が、意外にも刑事裁判所の問題と爲つたのである。だから思想自由の限界、言ひ換ゆれば、思想問題の罪の有無は、當局者の見解如何に依るのであつて、從て危激思想も、奇矯の言論も、司法當局者が見て以て、危激思想とし、奇矯の言論とするものを意味することになるので、一般社會や、識者ある學者が、見て以て、然らずとするも、司法當局が、然りとすれば、罪は玆に定まるのであるから、時には、思想の裁判が、却て識者の不安を招くことが無いとも限らぬ、權力者から異端と目せられた思想が、終に眞理と認められた實例は、枚擧しきれぬほどある。

最近平沼檢事總長は、新聞研究會席上に於て、超國家の思想を排撃し、其防止の爲め、新聞紙の助力を求めて居るが是も程度の問題で、國家を對象とする眞理の研究に、抑壓を加へることは出來まい。

元來人間には、程度や、種類の相違はあるにしても、多少超國家の思想を持つて居るべきであつて、此思想が、宗教、文學、藝術の、各方面に顯現してゐることは、或意味から謂へば、人類の誇りである。從て此思想が、政治組織の上に現はれ來ることあるは、免れ難きことである。

併し平沼君の此席上演説は、語て詳かならざるものがあるの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、私が玆に批評するやうな意味では無いかも知れない。思想の侵入を防止せんとするには、平沼君の說かれた通り、國民の健全なる思想に依るの外なく、國民の健全なる思想は、國民として不平なからしむるに如くなければ、幾ら刑罰を以て臨むとも、根本に於て、國民に不平があれば、其不平の程度に比例して、改造の聲が揚ることは自然の數である。

權勢の地位に在る人が、自己の主義思想を信ずる厚きの餘り、之れを他人に及ぼさんとして、却て反抗心を煽ることがある。私が權力を握る當局に望むところは、諸君が、自己の思想を尊信すると同一の敬意を、他人の思想に拂ふことにある。

明治天皇の御製に

あさみどり澄みわたりたる大空の
廣きをおのか心ともかな

と仰せられたのがある、私は當局者が、此御製のありがたさを拳拳にも忘れざらんことを切に祈るのである。

床次內務大臣の、地方長官會議に於ける訓示に、

抑々思想は權力を以て之を阻止し得べきものにあらず、或は一時急激なる秩序の紊亂を防ぐ爲、相當の手段を執るを要する場合ありと雖も、是已むを得ざるの變則にして、素と思想に對しては思想を以て對せしめ、切瑳琢磨、之をして克く我國體の精華に醇化せしむるを常道とすべし。

とあるは至言である。司法當局と、內務當局と、其首腦の思想に大なる逕庭の存することが覗はれる。近時思想問題に關し、司法當局が內務當局よりも、嚴にして且狹なるは、豈し故なきにあらずと思ふ、內務が英國式で、司法が露國式とでも評すべきであらふ。

頃日、政府者の嫌忌の標的となれる「クロポトキン」に就て、彼の經歷と、彼の思想の影響とを見るに、彼は露國に在りて、官權より極度の迫害を受け、彼の著者は悉く沒收せられ、屢監獄に繫がれ、終には獄を破りて外國に逃走したのである。彼は最後に英國に到りて、二十有餘年間安樂の餘生を送つて居た。英國政府は、毫も彼に壓迫を加へず、彼は雜誌十九世紀を通して、其無政府共產主義を宣傳した。若權力を以て思想を撲滅し得るものならば、露國に彼の無政府共產主義の瀰漫すべき筈なく、英國より、最多く彼の思想の感化を受くべき筈であるのに、世界大戰後に於ける、露英兩國の社會狀態が、全然反對に出で露國に暴力革命の遂行あり、英國が却て安寧を保つのは、如何なる理由であるか、今更之を說明する必要はあるまい。

「スチュワードミル」が、思想の絶對自由を高調したのは、今より六十二年前、日本の安政五年に當り、米、露、英、佛、蘭

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の五ヶ國と、通商條約を結びたる年で、吉田松陰が死刑に處せられたのは其翌年である。日本人が鎖國攘夷の長夢、未だ覺めやらぬ時代に、思想の絕對自由を高調せる大哲人を有せし、英國に及ばざるは已むを得ぬとしても、前車の覆轍を履まぬようにしたい、殷鑑實に遠からずではないか。何時までも街路樹の刈込みをするよりも、早く電線を取除くはうが、性に適合するのである。

東京市政の腐敗廓清

文學博士　三宅雪嶺

東京市政の思はしくなく、紊亂し易いのは、大體に於て全國に自治制を施かれ、年數を經る事の少いのに由る。普通人間の仕業として、三十年間の經驗で思はしく行くまい。然し何事も進步の迅速、三十年來國發の十數倍する程で、帝都の自治も今一層整ふべきであつて整はぬのは、市役所や市會や、名よりも得取れ主義になつて居るのが頗る與かる。名譽は何うでもよいと云ふものの、眞に名譽ある位置に金錢上の弊害が伴はぬ。儲かりさへせばよいと云ふ連中も、大臣になれば儲けを憚り、大臣で秘かに儲けても、首相と成つて儲けようとせぬ。首相で儲ける國柄は、二三等以下に墮ちて居る。國によつて首相に醜聞があり、紛擾が起つたりするけれど、英國首相の如き、身を潔白に保たねばならぬ。昔はいろ〱の事あつても、近年首相職に居つて儲けるのが無い。世界晴れての首相として、名譽を維持するの必要がある。倫敦市長は他國で重んぜぬけれど、國內で相應に重んじ、富豪中或は之を最上の名譽とし、金が出來た後一度び市長と成らうとする。質の良くない者が就職する事あるが、在職中如何はしい風聞ないやうに心掛ける。名譽も事に依りけりで、賣藥的空名を得たとて何と云ふ事なく、寧ろ卑しむべきを覺ゆるが、眞に人が敬意を拂ふ位置に立つて、勝手な事を仕ようとする者が無い。名よりも得取れと云ふのは、疎な

名譽を得られぬと諦めての事である。

東京市は全國の首都であり、最近國勢調査で人口二百十五萬とし、人口が稍々減じたやうでも、小さな市の約九十倍に上り、自治關係事業の大きい事推して知られる。然し市會で議する所は、帝國議會に比して全く云ふを値せぬ。帝國議會でも多くの陣笠は居るか居らぬか、解らぬにせよ、兎も角も晴れの場所であり、議員に於て若干か注意する所がある。得取れ主義が盛にしても、稍々位置を高め、世評に上ると共に憚からうとする。依然善からぬ事をする者は、黨の内部に力あつても表面に立つ事が出來ぬ。以前は立つたが、漸次立てぬやうに成り來つた。市會は何を議するか。電車値上げの如き特別問題にこそ新聞に賑はさるれ、平時殆ど全く報道を缺き、誰が何を仕て居るか判らぬ。それでも市會議員の選擧に激烈な爭があり、運動費も少くないのは、何等か求める所なくてならぬ。若干か名譽の念もあれど、今の市會議員の名譽など、稍々眼の肥えた者の何とも思はぬ所のものである。相應の腕あつて、好んで市會議員に出ようとするのは、利害問題に興味を覺ゆるのでないか。小さな團體でも金錢問題に弊を伴ひ、大きな團體で大きな利益あつては、尚更らの事になる。何の爲めて市會議員に成るか。全く市の爲めを思はぬでないとし、懐の利益關係が無いと斷言し難からう。

名も要らず、利も要らぬ者は始末に終へぬが、此始末に終へぬ者でなくては大事に當るに堪へぬと老西郷が話したと云ふが、名は要らぬ利は要ると云ふ手合ひは、同じく始末に終へぬ中で、害を及ぼすに了る。市會では名よりも得取れ主義を極端に實行する者が最も幅を利かす。慾じい名を氣遣ふ者よりも、さつくばらんに出かける者の方、愉快に感じる事がないではなく、事も捗つたりするけれど、竊盜よりも强盜と云ふ所であつて、甚だ有難くない。其手合が絶えず東京市を横行して居る。嘗て星亨が市會議長とし横暴を働き、それで議事堂に殺される事になつたが、星は相應の位置を占め、晴れの場所に出ようとて餘り無理な事を仕ようとせぬ。其の無理な事をするのは、表はれた星でなく、隱れた者が星の名に於て爲るやうな事になる。森久保が何でも星の事を爲ると云はれたが、一人の森久保が何でも爲るのでなく、森久保類似の者が寄り集まつて居る。自分は名譽なんか構はぬ、さういふ事に拘泥し、何事が出來るかと云ふが、左らば毀譽褒貶を顧ず、進んで何を爲すかと云へば、懐を肥やすやうな事である。唯で肥やす事が出來ず、何事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かを企て、時々大きな事業をも初め、仕事師を以て任ずるのは其處にあらうが、肝心な仕事だけならば誰でもする。市に必要な事は、反對あるべきでなく、反對あつても、實行する事が出來る。反對よりも賛成の方が多いに極つて居る。各自の懐合ひに關係あるので事が面倒になる。單に東京市の爲めに働くと云ふだけで骨折らず、面倒な事は成るべく後廻しにし、懐を肥やし得ると見れば大いに勇み、萬難を排して成し遂げようと唱へ出す。何でも利益は幾人かの頭割りにする事になる。市長に慰勞金を呈する時、眞に呈するのみか、幾人かの頭に戻つて來るのでないか。戻らぬやうならばお流れになるでないか。帝國議會で政友會とか憲政會とか、相爭ふを普通とする。好いころの政黨にせよ、随分熱心に相爭ふが、市會にも其系統があり、相爭ふべきであつて、利益問題で一致する事が多い。如何に議員が我利々々と云ふて、東京市會の或る部分の如く、甚だしいのが何處にあるか。其利益になるやうな事をすれば、市長は評判が好い。瓦斯でも、電燈でも、何でも、大きな事業はそれ〱市會に系統を引き、會社の利益を計る場合、系統を通じて耳打ちする事になつて居り、それには政府の頭株も關係がある。會社の利益、株主の利益になるやうな事があれば、手を分けて奔走し、成るべく速かに纏める所に市長の伎倆が表はれる。此の間に甘く處置する事が出來ねば、無能だとか凡暗だとか云はれる。今までの市長は名よりも得取れ主義の手合ひの傀儡となるか、辭職するかの外はない。斯かる事を承知せずに市長となり、自分の名望及び手腕で物の美事にやつて除けると思ふ者は、何れかと云へば結構人に屬するであらう。他の事に利口でも、此方面に愚劣を示して居る。今の所市長は利口な人の成るべきものでなく、利巧な人がなれば眞に利巧でなく、幾分か缺けて居るのである。市長の位置が何れ位のものかと云へば、帝都を預かつて居る點で重要な地位であり、上に東京府知事が居り、更らに内務大臣が居るとなつては、餘り立派なものでない。位置は何方でも、人によつて好くなると云ふが、それ程踏み込んで市の爲めに働く者が何處に居るか。今の所醜類の傀儡となるか、之と喧嘩するの外なく、傀儡とも見えず、喧嘩もせぬやうなのが、せい〱である。露骨に傀儡とならぬだけで、分類する場合、同じ狸の穴に置く事になる。

更らに多くの年數を經、東京市民が地方からの寄り集りでなく、愛市心を養ひ、首都の爲め故郷の爲めに働くといふ事になれば、自づと市政に注意し、議員の擧動を監視し、醜類を選擧せぬやうにならうが、それまで堪へて居られず、早く首都の態

面を全くせねばならぬとあつては、市制からして革めねばならぬ。市長は府知事に叱かられる者でなく、市會議員は暗闇みに得取り相談でなく、市長は國内に於て首相にも劣らぬ名譽の位置、市會議員は日本の首都をして東洋文化の中樞たらしむる職分あるものと心得しめるやうにせねばならぬ。初めて府會の出來た時、今の帝國議會よりも重きを置き、第一流の人物が出ようとした。當時府會は實にそれだけの注意を惹いた。帝國議會が出來てから、府會議員に誰がなるか、市會議員に誰がなるか、何うでも好い事になり、人の見ぬ所で儲けようとする所になつて了つた。小さな市は人の眼が屆き、改めるにも易いが、九十倍も大きくなつては、伏魔殿も並一通りのものでない。之れを革新するには光明を當て、バチルスの蔓らぬやうにすべきである。年數を經るのを待つか、早く市制を改めるか、二者の一を擇ぶを要し、現在の狀態は如何に刷新しても、臭い物より蠅を追ふに異ならぬ。何程追ふても集まつて來る。氣の長い者は傍見して居らう。

不自然なる日本銀行利下説を排して恐慌再襲の危險を說く

法學博士 堀江歸一

恐慌後の經濟狀態

今年春我國の經濟社會に襲來した恐慌は、或る人々に取つては、寢耳に水の感があつたかも知れなかつたが、健全な常識を以て、經濟社會の表裏に於ける事相を批判して居る人々には當然の出來事と認められたのである。即ち彼の如き經濟社會に投機熱が勃興して、商工業に空景氣が盛に躍り、而して政府に於て此勢に對して、相當の警戒を加へず、寧ろ喚發す可き政略上

の考から、景氣を煽揚することばかりに力を致して居つたならば、早晩其反動として、恐慌の來ると云ふことは、勢の免かれ難き所であつた。私の如き別段先見の明を持つて居るのでもなければ、卓識の誇る可きものがある譯でもないが、二十年內外經濟上の狀況や、諸問題に觀察を下し、評論を試みて居る經驗から推して、我國經濟社會に危機の殺到することの遠きに非ざることを信じ、大正八年夏世間に率先して、日本銀行金利引上の必要を提唱したのである。詰り私の意見は日本銀行さへ金利を引上げたならば、市中諸銀行は手元準備金を豐富にして、各自の安全を謀らなければならぬ關係上、自ら信用の膨脹を制限する爲めに、金利を引上げることゝ爲るであらう、而して此利上げは市場に横行して居る投機熱を冷却させて、反動機の打擊を緩和する效果があると考へたからであつた。

然し斯う云ふ議論は當時是が非でも好景氣を煽揚して、政友會の權勢を四方に張らうと云ふことばかり、考へて居つた原內閣の關係に取つては、所謂馬の耳に念佛に外ならなかつた。彼等は依然たる景氣煽揚に沒頭して、他を知らなかつた間に、今春の恐慌と爲つたのである。斯く觀察したならば、今度の恐慌は畢竟政府の煽揚に依つて、助長された投機熱の行き詰つた結果であつて、煽揚策を序幕とし、投機熱勃興を中幕とすれば、恐慌は大詰として、誠に已むを得ざる出來事としなければならぬ。而して恐慌後今日に至る數個月間我國の經濟社會に起つて居る種々の事相に就て、考へると、恐慌は正しく其踏む可き道を踏んで發展し、經濟社會は恐慌を一轉機として、好景氣の絕頂から、今や不景氣のドン底に陷つたのであつて、其間に何等の奇とし、又異とするものゝあるを知らない。物價は相當に低落した。政府が經濟社會救濟と云ふやうな漠たる名稱の下に、一種の惡戯に類する處置さへしなければ、今後も續いて物價に下落を見るであらう。斯く物價の下落する勢が明瞭と爲れば、好景氣と恐慌との過渡時代に於て、生產過剩品として、諸所に堆積して居る物資は次第に突崩されて、益々物價の下落を惹起し、物價の下落と共に、當業者中に事業の經營に堪へられなく爲る者も亦續出せざるを得ない。而して是れ等の事實は總て商工業に關係して居る人々の消費力を弱くすると云ふ點から、影響を廣く社會全體に及ぼすに至るであらう。現に之を國家と云ふ大なる消費者に就て考へても、明年度は不景氣の影響として租稅や官業の收入が削減する爲めに、一切の新事業費に餘程の節約を行はなければならぬさうであるが、斯の如きは好景氣時代に、政府が經費を濫費して、物價を騰貴させて居つた事實に對して、正に反動の來たことを說明する材料と爲るので

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある。

經濟的循環期說

好景氣時代と不景氣時代と孰れが宜しいかと云へば、何人も其前者であると答へるに躊躇しないであらう。俸給衣食者の「ストーヴ」會議などで、不景氣にでも爲つて、諸物價や、家賃が安くならなければ、生活が立ち行かぬ、早く不景氣が來ないかと云ふやうな冗談話が流行ることもあるさうであるが、實際不景氣に爲れば、生活が安易に爲る程、物價の低落しない内に、俸給衣食者の階級には、馘首問題が起つて、彼等の生活の根據が危く爲る次第であるから、彼等と雖も、決して不景氣を迎へて、喜ぶ可き道理ではない。好景氣の下に、經濟上諸方面の利害關係が政府の力で、調節されつゝある時代が一國の經濟生活に於て、最も有力の時代であり、又國民の經濟的能力の最も著しく伸張する時期であるとしなければならぬ。好景氣の時代に、何等其惠に浴せず、却つて害を蒙る階級の社會に存在するが如きは、要するに經濟政策の立て方の宜しきを得ない結果に外ならない。

社會全體の生活から見て、好景氣が喜ぶ可きものであり、一方に不景氣が悲む可きものであるとすれば、吾人は今日の如き不景氣時代に處して、早く不景氣から逸出する謀を講じなければならぬ。何時に爲つたら、吾人は今日の不景氣に依つて蒙りつゝある影響を免かれて、好景氣の曙光に接するを得るであらうか。此點に就ては、世間に種々の說があり、又爲めにする所あつて、特に恐慌の恢復、好景氣の到來亦近きに在るが如くに、論じる者もあるけれども、私は此點に就ては、經濟學界に於て、幾多の先覺者に依つて主張され、祖述された經濟的循環期の學說を信ぜざるを得ない。即ち恐慌の後には必ず經濟社會の沈衰期があり、沈衰期の後に恢復期を迎へ、之に次いで好景氣時代を生じ、好景氣の絕頂に投機熱が爆發して、遂に恐慌に接すると云ふ具合に、經濟上の諸季節が規則正しく往來すると云ふのが所謂循環期說の說明する所である。此各季節の去來する時が約三年餘を要する爲めに、恐慌が約十年を期して、發生すると云ふ恐慌の定期發生說には、實際の事實から疑を挾まなければならぬやうに爲つたが、循環期說には頗る强い根柢があり、一の季節から、次の季節を飛び越して、他の季節に移ると云ふやうなことは、到底事情の許さゞることと思はれる。さうすれば今年の春恐慌が起つて、經濟上の諸關係が攪亂され、從來投機熱の橫行するに任せて、膨脹した諸事業が盡く其根據とする所を失つた以上は、今日は即ち經濟社會が一般に不景氣に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

現はれて、諸方面に整理收縮を施さなければならぬ時と爲つて居ることは、爭う可からざる事實である。

經濟的循環期說の下に、一の季節から、他の季節に向つて、經濟的現象の推移するに就ては、幾何の時日を要するであらうか、是れは一個の問題であるが、其長短孰れに在るとした所で、我國は今日恐慌と云ふ一大混亂期を經過して、正に不景氣時代に居るのである。此何年か打續く不景氣時代に於て、商工業の經營者は產業の規模を縮少すると共に、其基礎を堅實にし、一般國民は物價の下落に依つて、生計に餘裕の出來たのに乘じて、勤儉貯蓄に勉め、斯くて蓄積された資金を生產上に活用するので、事業の振興を實現するに至るのである。我國の經濟社會は今此時機に際會して居るのであつて、何時までも愚圖々々に不景氣の災厄を蒙るか、其れとも早く此災厄を脫し得るかと云ふ分水嶺に立つたものとも見られる。如何にしたならば此分水嶺を出ることが出來るかと云へば、國民が不景氣時代に處する覺悟を持つて、整理緊縮に力を致すのが急務であり、政府も亦國民の此決心を鈍らせないやうにするだけの注意を施さなければならないのである。

再度の恐慌に遭遇するか

恐慌は近き將來に於て、再び我國の經濟社會に襲來することがあるであらうか。上節に說明した經濟的循環期說が規則正しく働くならば、恐慌後の今日は、即ち經濟社會の沈衰期であつて、不景氣の狀態が次第に濃厚と爲る處はあるとしても、再度の恐慌來を恐れる道理はない、恐慌は必ず好景氣の後に來るものと原則通りに考へることが出來るのであるけれども、是れは賢明なる政府が經濟上の行政を掌つて居る場合の話であつて、原內閣の如く、經濟上に非常識と云はうか、無鐵砲と云はうか、途方もない政策を濫行する政府があつては、恐慌後に第二回の恐慌を惹起すか、第三回の波瀾を呼び出すか、殆ど測り知るを得ないのである。

恐慌後には物價が下落すると云ふのが、當然の趨勢であつて、物價が下落すればこそ、不景氣の影響が廣く世間に浸潤して、再び好景氣を招く端緖と爲るのである。詰り他日の好景氣を迎へる爲めに、今日の不景氣は一時辛抱しなければならぬ事柄であつて、唯爲政者としては、此不景氣の結果として、社會の諸方面に生ずる影響を緩和することに、意を致すことを必要とするのである。然るに原內閣は不景氣が何年か續いて、商工業者が事業を經營する上に於て、一般人民が生活を送る上に於て、相共に苦しんだならば、政治上に反政府の氣勢の强くなつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て來ることを恐れるの餘り、如何なる方法を以つてしても、恐慌の影響若しくは不景氣の勢の波及する所を或る點に遮斷することに努めて居る。斯くて生絲の市價も、綿絲の市價も思ひ切つた所まで低落しない、卸賣相場　上で、相當に低落しても、小賣相場の方で、其れだけの低落を示すに至らないと云ふのは、前號の本誌で、論述した通り、一に政府が經濟政策上の根本方針を立てる上に於て、間違つた考を持つて居り、不景氣の勢の來ることを遮斷しつゝある結果としなければならぬ。米價の如き、米作の豐饒である今日の趨勢を以つてしたならば、今後引續いて下落す可き道理であるが、果して政府が之を自然の趨勢に任せて置くであらうか、一個の疑問とせざるを得ない。

恐慌が襲來し、不景氣の現象に經濟社會の支配されて居る今日に於ては、政府としては、不景氣をして其赴く所に任せるのが最も正しい道であつて、又斯うしたならば、不景氣は順調に經過して、好景氣を迎へること、恰も軌道を車が走ると同じであつて、恐慌の再度の襲來を掛念するが如きは、絕無であるとしなければならぬ。然るに原內閣の如く、不景氣の勢の徹底することに對して、出來るだけの妨害を加へ、經濟社會をして不景氣であるのか、不景氣でないのか、判斷に苦しむやうな狀態に居らせる當業者の內に此判斷に迷つて、景氣の恢復の期せられない今日に於て、一時の調子に乘つて、放漫な經營を仕事の上に、始める者があつたならば、忽にして再度の恐慌來に遭遇せざるを得ないことゝ爲るのである。普通の道理から云へば、恐慌に再び襲はれると云ふやうなことは、毫も掛念を要しない、唯原內閣のやうな、理外の理を求めやうとして、如何なる橫略をも經濟政策上に施さうとする爲政者がある爲めに、世人をして將來の判斷に苦しましめざるを得ないのである。

世間を誤まる利下說

近頃世間の一角に日本銀行の金利引下を必要なりとする說が唱へられる。成る程一時の狀勢に比較すれば、金融は小康を得たと云はれやう、金利も餘程下向きに爲つたと見られやう。然し今日日本銀行が金利を引下げたとして、如何なる結果を生じるであらうか。數月來の金融梗塞の爲めに、世間では隨分皆資金の供給に窮して居る者がある。一旦日銀の金利が引下げられ、市中諸銀行亦之に依賴して金利を引下げ、金融上の方便を取引先に向つて、自由にしたならば、商工業者は恰も堤の決せられた時と同じ勢を以て、諸銀行に殺到して、資金の融通を求めるのに、相違ないのである。此場合に諸銀行が一年なり、二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

年なりの永きに亘つて、同様の金利歩合で、資金に對する需要に應ずることが出來たならば、自ら産業を振興し、景氣を挽回する一助と爲るかも知れないが、今日諸銀行の實力を以つてしたならば、斯る事を期するのは、甚だ困難であつて、彼等は少しばかりの資金需要に接したならば、忽にして之に應じ切れず、金利引上の已むを得ざることゝ爲るのである。

斯の如く考へたならば、今日日本銀行が金利歩合を引下げること位ひ、我國の經濟社會を攪亂するものは、他に比類なしとせざるを得ない。即ち一時の利下げで、當業者が安心して、商品の投資を止める、利子の低廉に爲つた資金を融通して、事業を擴張する、利下の爲めに、有價證券の市價が騰貴したならば、擔保に提供して、資金を借出すことにも便利と爲るであらう。此處までは諸事好都合に運ぶやうであるが、前述の如く銀行の方で、何時までも資金を融通する實力を備へない爲めに、或る點まで行つた場合に遽に金利を引上げて、融通を制限することは已むを得ない所であつて、斯う爲つたならば、一時資金の融通の容易な勢に乘じて、新事業を計畫したり、既設事業を擴張したりした者は事業其のものを破壞されざるを得ない。即ち金利を引下げ可き機運の熟しない時に態に金利を引下げることは、大怪我の因であつて、若しも近き將來に於て、我國に再度の恐慌が襲來するものとすれば、其れは日本銀行が輕卒に金利を引下げて、當業者に警戒謹愼の念を緩くさせ、投機熱を沸騰させることに端を發するものと認めなければならぬ。

私は今日尙ほ日本銀行に多少の信頼を繫いで居るものである。日銀當局者にして一片の常識を備へて居る以上は、現時の經濟社會に臨んで、金利を引下げるやうな暴擧を妄斷することはあるまいと思ふけれども、何分にも非常識の財政當局者が日本銀行を統轄して居つて、大藏省と日本銀行との關係から云つて、後者は前者の命令であれば、多少の無理には從はなければならないものとしたならば、如何なる機會から金利が引下げられるかも知れない。今後不景氣の雲行が益々濃密と爲り、政府に對する民心が愈々離反する、然も原内閣の執拗なる、斯う爲つても尙ほ政權を棄てやうとせず、寧ろ一時でも世間の人氣を改めやうと考へた場合には、或は日本銀行に命じて、金利を引下げさせ、政府自ら再度の恐慌を勃發させる所の原因を作り出すかも測られないのである。誠に原内閣のやうな政權を掌握することの外に、何ものをも知らないやうなものに、政治を託して置くのは、狂人に刄物を持たせると同じで、危險千萬の話であつて、今日商工業を經營する人々は何時恐慌の再來に接

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

するかも分らないと云ふ點に於て恐怖の念なきを得ないであらう。

金融の緩和される時期

眞實金融が緩和して、事業が新に計畫され、物資や勤勞に對する需要が増加して、好景氣を迎へることの出來るには、今日の經濟社會――既往數年間の好景氣や投機熱で、種々の方面に於て、攪亂された經濟社會が整理の實を收めた後でなければならぬ。經濟社會の整理と云ふのは、如何なる事を意味するであらうか。恐慌後金融が梗塞して、生產過剩の時代から澤山の物資を持越して居つた者が持切れなく爲つて、物資の投賣りをするので、物價に低落を來すことの如き、物價が低落した爲めに、其騰貴時代に、算盤を持つて、仕事に着手した事業家は何れも收支の均衡を失つて、事業を廢棄しなければならないことゝ爲るが如き、斯くて堅實な事業だけが殘つて、下落した物價を基礎として事業を立て直すことの如き、一方に物價が低落し、他の一方に不健全な事業の倒れた結果として、資金に對する需要が減少して、金融緩和の曙光を生じることの如き、卽ち經濟社會の整理されたる所以であつて、斯く整理が順當に行はれるので、此處に始めて好景氣の再來を期すことが出來る。要するに金融の緩和――或る期間繼續して逾らない緩和が好景氣恢復の必要條件であつて、而して金融の永續性を有する緩和を得やうとするには、物價が其ドン底まで下落した時を待たなければならない。

斯う論じ來つたならば、原內閣の經濟政策殊に恐慌なり、不景氣なりに對する政策が如何に間違ひだらけのものであり、又根據のないものであるかと云ふことが明瞭と爲るであらう。卽ち原內閣は既に恐慌の後を承けて、不景氣時代と爲つた今日に於て、物價の低落することを妨げて已まない、然らば物價を低落させないで、如何にして事業界を整理し、又金融の緩和を實現して、好景氣時代を誘導する成算があるかと云へば、何等見る可きものを存しない。此處で原內閣は窮餘の窮策として、日本銀行に金利を引下げさせ、一時株式市場でも賑はして、景氣恢復の外觀でも裝はせやうとするのであるか。物價を徹底的に低落させず、經濟社會に眞實の安定を求めず、是が非でも好景氣時代を出現させやうとするには、斯る無理算段も亦已むを得ないであらうが、其結果として生ずるものは、決して眞の景氣ではなくて、假裝的好景氣であり、而して之に次ぐものは恐慌の再發に相違ないのである。原內閣の經濟政策が間違に間違を重ねて、斯る危道を踏みつゝあることは、吾人の認めて以て、國

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家に大なる禍害を生ずる所とする次第である。

恐慌再發の影響如何

原内閣は今や政權慾に眩惑して、經濟政策に最も重んず可き理性を失つて居るのである。此内閣が近き將に來倒壞して、經濟政策が一新されゝば兎に角、今後存續して從前通りの政策を續行し、改める所がなかつたならば、恐慌の再來は已むを得ざる數であらう。而して此場合に我國の經濟社會は如何なる影響を蒙るであらうか。前回の恐慌が社會の諸方面に及ぼした打擊も相當に强かつた。然し個人にしろ、會社にしろ、當業者が之に堪へることが出來、七十四銀行、茂木合名會社、增田ビルブローカー銀行、安部商店、增田株式會社などが破綻を暴露した重なるものに止つて、他に大なる失態を波及するに至らなかつたのは、何故であるか。換言すれば彼の位ひ投機熱の勃興した後に起つた恐慌である以上は、今少し有力な銀行が支拂を停止するとか、大規模の會社が破產するとか、斯界に覇を稱する個人商店が破綻を暴露するとか云ふやうな變動が起つて、然る可き譯であるのに、實際に恐慌の影響が內面的には兎に角、外面的に於て著しくなかつたのは、要するに恐慌に先だつ數年間を通じて、商業と云はず、工業と云はず、農業と云はず、總ての產業が好景氣であり、營業上に收められた利益金が莫大の高に上つた。固より此利益金の一部は個人の奢侈的消費に費されたとしても、全體に對照すれば一小部分に過ぎない、殘る所は一部分は事業の計畫又は擴張に投ぜられて、固定もしたらうし、消耗したらうが、同時に他の一部分は個人の資產と爲り、會社の積立金と爲り、恐慌前の數年間に於て、當業者が資產の狀態を堅實にしたことは、掩ふ可からざる事實である。此堅實なる資產があつたればこそ、今春の恐慌に遭遇しても、必ずしも大なる影響を蒙らず、寧ろ恐慌に臨んで、各自の地步を守り、恐慌其ものゝ禍害を縮小するを得たのである。然らば今日は如何であらうか。恐慌以來諸株式の價格が低落し、今日に至るまで、恢復の緒に就かない。諸物資の價格も低落した、然し諸掛り費は必ずしも減少しない、諸會社は好景氣時代に比較して、著しく配當率を減じるのが辛いので、積立金を割いたり、又は固定資本の銷却を少なくしたり、財產の評價を寛大にしたりして、配當率の劇減を防いで居る有樣であり、殊に過般臨時議會で成立した改正所得稅法は其懸案の當時から、諸會社をして將來の負擔を免かれる爲めに、無謀の增資を決行せしめた傾のあることを否定し得られないであらう。

斯う考へたならば、今日の我國經濟社會は今春頃の其れと比

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

較して、餘程基礎の薄弱に爲つたことを爭うを得ない。個人の生活に就て之を見ても、亦事情は同樣である。數年來少數の成金とか、又は成金者流に隷屬して居る人を除けば、世間一般に物價騰貴に基き生活難に苦んだのである。然し其れにしても、商工業は勿論農業まで好景氣であつた結果として、尙も何か事業を經營して居るとか、又は間接にでも事業に關係を持つて居る人々は好景氣の惠に浴して、各自の所得を豐にしたのである。隨つて恐慌が勃發して、續いて不景氣と爲り、或る者は失業したとか、又或る者は所得に減損を來したとか云ふやうな變動に接し、一方に物價が充分に下落しない爲めに、生活に安易を感じるに至らないとしても、好景氣の時代の未だ滅せざる餘燼に依つて、恐慌の當時なり、或は其以後の不景氣なりに當ることを得た次第であつたが、既に數個月の久しきに亙つて、不景氣に襲はれた今日、再び恐慌に遭遇するやうなことが起つたならば、經濟社會は到底之に對して晏如たるを得ない、前回の恐慌當時に比較して、影響の大なる可きは勿論であつて、如何なる慘害を社會に及ぼすか、殆ど之を測り知るに苦しまざるを得ない。銀行支拂の停止、會社の破綻、俸給衣食者併に勞働者の失業、金融の梗塞、新事業の沈衰等其重なるものであつて、經濟社會は一時再起の實力を失うものと考へられるのである。

恐慌再襲に對する覺悟

私をして自由に所信を述べさせるならば、今春の恐慌は其發生を回避するを得たと考へる。唯、政府の經濟政策が宜しきを得なかつた爲めに、彼の如き恐慌を誘致したことは、私の今日に至るまで遺憾とする所であるが、更に恐慌後の經濟社會に處する政府の政策に間違があつて、恐慌をして再度襲來せしめるやうなことがあるに至つたならば、殆ど我國の經濟社會を擧げて、混亂の狀態に陷らしめざるを得ない。若しも政府の爲す所が國民の利害に一致して居り、前者は後者を指導すれば、後者は前者に指導され、相倚り相並んで進んだならば、此位ひ結構の事は他に類を見ない次第であるが、近來の如く政府の經濟政策が亂暴を極めて、目前の利益の爲めには、何をするか、測り知れないとしたならば、當業者は第一に政府の政策に依賴するを得ない、第二に政府の政策の爲めに、當業者の豫期して居る所を攪亂されるかも知れない。私は當業者が輿論の力を藉りて、政府をして無益の處置を敢てせしめないやうにすることを必要と考へる。固より今春の恐慌は政府の經濟政策の然らしめた所であるとは云ひながら、商工業者が政府の爲す所に釣り込まれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、投機に耽り、虚業を事とした點に於て、亦責任の逃れ難きものがある。當業者が自立の覺悟を極めて、政府の爲す所に左右されなければ、甚だ結構であるが、是れは彼等に向つて、難きを望むものである。例へば政府が日本銀行をして無理に金利を引下げさせたとする、此場合に當業者の方で、其引下げの甚だ無理であることを知り、斯る引下げに意を動かして、物資を買ひ進むとか、仕事を擴張するとかしたならば、他日の金融に於ける反動的緊縮に陥ることを覺悟して、自ら警戒を加へたならば、如何に政府が日銀の利下げて、市場を左右しやうとしても、其目的を達し得ないことゝなるのである。

然し斯る自制は今日の一般營業者殊に各自劇烈な競爭心に刺戟されて居る營業者に望んだ所で、求め得られないであらう。其處で私は當業者に向つては、今日の不景氣時代に臨んでは、飽くまでも此大勢に順應する覺悟を持つことを望んで已まない。不景氣の大勢に順應すると云ふのは、如何なる事であるかと云へば、要するに緊縮節約に勉めるものに外ならない。即ち好景氣時代に行はれた浮華輕佻の考を去り、冗費を省き、生産費を低廉にし、貯蔵に屬する物資は早く之を處分し、新しき基礎に立つて、生産に從ふことは、今日の不景氣時代に爲す可き所であつて、之を爲すに就ては、或は商品の價格を賣崩するとか、使用人を解雇して、失業者を増すとか云ふやうな非難を生じるかも知れない。然し是れは不景氣時代に於ける已むを得ざる犧牲であつて、此程度の犧牲を拂へばこそ、他日の好景氣を迎へることも出來るし、又恐慌の再襲を回避することも出來るのである。

經濟上の現象は或る程度まで國家の力で、之を左右し得らるゝ場合もある。然し現象其ものゝ去來を律する法則には、人の力よりも、更に強い自然の力の存することを認めなければならぬ。經濟的循環期の法則の如き、要するに自然の力の如何に強いものであるかを示す適例であると云はれやう。好景氣の後に、恐慌が來て、更に不景氣が相次ぐと云ふやうなことは、恰も春夏秋冬の往來すると、規律を同じくするものであつて、政府が小刀細工を用ひて、此般の關係を攪亂しやうとした所で、目的を果し得られるかどうか。恐慌の後に來りつゝある不景氣を一日も早く推し除けて好景氣時代を復活しやうとした所で、其れは秋の次ぎに冬を省いて、直ぐ春を迎へやうとすると同樣で、望み得べからざる所であり、却つて好景氣は愚か、恐慌の再發を演ずるに至るかも知れないのである。

原内閣は天下の人心漸く離散し去つたに拘はらず、厚顏にも、尙ほ政局に居つて、此經濟上の危局に當らんとして居る。政府

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

としては不景氣の狀態を脱して、好景氣の現象に浮れ出したいのは山々であらうが、其爲めに例の小刀細工を用ひて、却つて再度の恐慌を招致し、政府自ら窮地に陷るやうなことはないであらうか。原内閣が自滅しやうが、野倒れ死にをしやうが、私としては少しも意に介しない。唯我國の經濟社會の原內閣の玩弄する所と爲つて、恐慌の再度の襲來を招き容易に起つ能はざる傷痍を負うに至るやうなことがあつては、私は何としても之を忍ぶを得ない。此點から私は原內閣が一日も早く倒壞して、經濟政策の一新される時機の來ることを以て、國家の爲めに、最も緊切の事であると考へるのである。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「地方講演」について感ずる事

講演に對する私の希望

有島武郎

講演といつても　それは第一私の本業ではないし、澤山もせず、廣く旅行して行つた譯でもないから、いふべき多くのものはありません。

私は第一自分のその時々の氣分でひどく講演の調子を變へるやうですから、それが聽衆に働きかける有様を申した所が、必ずしもその聽衆の本質な特色を云ひ現はすことにならないかも知れません。欠伸をしたり居睡りをしたものが多かつたからといつて、強ちその聽衆の質が惡いとは斷言出來ません。然し大阪からいつて、東京の聽衆は聽き巧者のあるやうです。それは講演を聞き慣れてゐる故もあるでせうが、概して頭が高低なく揃つてゐるといふことが原因のやうです。講演を終つてから、下らない解り切つたことを云つて時間を潰さして濟まなかつたと思ふことは、よく東京の聽衆に對した後に起る感じです。殊に婦人を相手とした時、東京と關西の都會との間には格段な相違があるやうです。關西の都會の婦人會といふやうなものには、單なる智識慾から、もつとひどいのになると、社交的興味の一種の轉換として講演者に臨んでゐるなと感じさせられるやうな場合がないではありません。さういふ場合にはいつでも不愉快な後味が殘ります。東京の婦人の間には講演者の云つたことを自分の生活にあてはめて考へて見ようといふ意氣込みのある人があることを少なからず感じます。講演者が畏れを以て向はねばならぬといふ感銘を受取ることがあります。この傾向は然し大體に於て男子にもあてはめて云ふことが出來るやうです。

私は京都の同志社でする定期講演を非常に愉快に思つてゐます。これは關西のことですけれども講演の性質が違つてゐる故か、聽講者が熱意を示してくれるので、ひとりでに私も緊張します。二時間づゝ八回に亙るやうな長講義を一度もかゝさず聞きに來てくれる人々があるかと思ふと私は寧ろ濟まないやうな氣持ちにさせられます。そこに來る人は學生ばかりではありません。隨分忙しい職業に從事してゐるだらうと思はれるやうな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中年の人も來てくれます。

何しろ講演をするなら一人でするに限ると思ひます。自分が聽衆に與へ得たと思ふ印象がすぐ後から出て來た人によつて他の方向にねぢ向けられるのを感ずるのもいやなものですし、他の講演者が折角創り上げた感じを、私が後から出かけていつて打こはすのもつらいことです。殊に演壇に立つた時、この聽衆の中には自分のいふことなどは一言も聞きたくはないのだが、他の人の講演を聞きたいばかりに我慢してゐる人がゐるに違ひないと思ふと、その人の不愉快さや辛棒やが推察されて意氣込みが先づ打壞されます。殊にこの頃の講演會の常例のやうに、三人も四人も講演者が出代つて、時間でいふと三時間も四時間も立て續けに聞いてゐなければならぬやうでは、聽講者がたまらないだらうと思ひます。あれはいゝ加減なお座なりを云つて、頭數でこなしつける政談演說か何かを講演會へ延長した仕業だと思ひますが、講演會の本質から考へて見ると決して合理的なやり方とはどうしても考へません。多人數を集めて利益を占めるためにはあゝしなければ成立たないのかも知れないけれども、つまりあれはコムマーシャリズムで、講演者に取つても聽衆に取つても難有いとではないやうです。段々講演會なるものが頻繁になるにつけ、この一事は當事者に徹底的に考へていたゞき度いことです。講演の價値を高めるか低めるかに、大抵この一事によつて定まるとも云へます。

前にも云つたやうに講演といふことは私の本業ではありません。然し私は物が云ひたくなつたら、聞きたい人々の前にそれを披瀝したいとは思ひます。そんな事に出しやばるのは藝術家の品位に關するといふやうな高踏的な氣取りから、それを忌むべき理由は更らに發見しません。けれども私のやうな口下手なものに取つては、講演には時々いやな思ひをさせられます。云ふべきことを云ひ殘した場合、いふべからざることを調子にまかせて云ひまくつた場合。

地方講演に出て

室伏高信

一

地方講演に出て私の一番に感ずるとは、私たちの講演が何の役にも立たないのであらうといふことである。演說の場合ならば、その時代またはその時期に、ある特定の問題があつて、新聞なり、その他の方法によつて甲論乙駁がやられた後である

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

合に、その同一問題を話すとが多いのであるから、聽衆にも相當豫備知識があり、またそれは一時的に聽衆を征服しさへすればそれで演說の目的は達つしてゐるのかも知れないのであるが、講演の場合だと、講演を聽きにくる、特に地方の人々は、講演を理解するだけの能力をもたない人が多い。就中、專門的、またはそれに近い問題を取扱ふ時にその感が强い。普通選擧問題なぞは講演の題材としては最も一般的なものであるが、その問題でさへ多少それを學問的に話そうとすると、どうも聽衆の受けがよくないようである。從つて効果がなさそうである。だから私は今日のまゝで私達が時々どこそこの青年會なぞへ出てゆくといふことは、自分の個人的の都合の上からは兎も角として、聽衆の側からいふとたゞ一場の感興――講演が上手なんだと――かそれでなければたゞ一場の閑潰しとして終るに過ぎないのである。といつて私たちは地方民、就中、地方青年の教育問題を輕視してゐるのではなく、また地方民教育の方法としての講演そのものの效果を疑つてゐるのでもない。

二

地方講演の效果はやりようによつて充分にある。現に效果を擧げつゝあるものがある。地方に出て見て私たちが一番に感ずることは私たちの側にあるものゝ講演の效果を悲觀するとゝもに、私たちと反對の側にあるものの講演の效果が相當に重大であると考へられることである。それは講演者の能力の問題ではない。勿論概していふと反動的思想をもつてゐる側の人達の方が辯舌そのものとしては優れてゐるように思はれる。黎明會だとか、日本社會主義同盟だとかいふ側にはどうも雄辯家と名のつけられるような人が見當らない。尾崎、犬養程度の辯論家でさへもこの方面には見當らない。そこへ行くと政黨の側には兎も角も演說使が少くはない。また官僚や軍閥や御用學者なぞの間にも相當話しのできる人達がゐる。それには少くとも二つの理由がある。即ちこの側の人は第一には言論が自由である。といふと變なようであるが、言論の自由といふことは、反動主義者の間なり、現狀維持論者の間ではその國が言論不自由な國でもつても問題になる餘地がない。それは現狀に慊らずして何等か根本的に改革なりまたは革命なりを起そうとする人々の側からいつての不自由であるに過ぎない。だから反動的傾向の人々、現狀維持に利益を感ずる人々は今日の日本のような言論上の野蠻國、卑劣な動機からくる野蠻國においてさへ、否、野蠻國であればあるほど、その人達は言論の自由を感ずる。彼等のいはんとすることは一切自由である。彼等は卑劣なこと、虛僞の事實、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

心にもたなきこと、權力者に對する阿諛を、何人にも憚ることなく、ある場合には警察官と壯士とに擁護されて、自由に演壇のうへから叫ぶことができる。この自由が彼等をして少くとも演說上手にと導く一つの有力な原因であることは勿論である。その次には、そういふ側にある人達は、講演に出る機會が多いといふことである。こういふ理由から反動家連中、反革命連中の方が改革家または革命家に比べると演說の技術などは上手になつてゐるようである。がしかし技術は兎も角として演說家または講演家としての彼等には、これ等の長所をもつてゐるにしても尙ほ償ひがたい缺陷をもつ。彼等の語るところは虛僞である。若しくは權力者に阿諛せんとするの卑劣な精神からの產物である。若しくは權力者に阿諛せんとするの卑劣な精神からの辯舌である。だからどんな巧妙な技術があるにしても彼等の心には感激がない。シムセリティがない。現代人の知識欲を滿たすべき知識、現代人心の不安を指導すべき人格と理想とに缺けてゐる。從つてそれ等の人達の講演の效果といふものは、決して人心の奧底に徹してゐるのではない。人心の奧底は、それ等の人達に對する反逆に滿ちてゐる。そして何ものかが彼等の心奧に觸れ、彼等の心の門を叩くことを待つてゐるのである。がそれにもかゝはらず、反動主義者一味の地方講演は相當に效果を示してゐる。私の見るところでは、何年か前までは、大學は日本における反動思想の淵源であつたが、今日では少し違つてきた。無論小學校一年から始めての虛僞の敎育が日本の反動思想を常識化した最大の理由ではあるにしても、尙ほそのうへに地方講演なるもののあるあり、稍もすれば現狀の桎梏から脫せんとする心を鎖し、そして虛僞の敎育を常識化せしむるために、少からず效果をあげてゐることを、私たちは地方に出て痛感するのである。

三

何故にそうであらうか。何故に彼等の講演に少しでも效果がありうるであらうか。否、彼等の講演の效果について考へる前に、私たちは何故にこうした人達が地方に出る機會があるのであらうかといふ問題を考へることが順序である。私たちが地方に出て見る個人の名前を指す上はどうかと思ふのであるが、例へば佐藤鋼次郎君、上泉中將、堀內中將、或は內務省の某々、中央報德會の某々、或は懸賞の某々、或は御用辯士の某々、更に或は御用講釋師の某々といふような人達、若しくは何々佛敎會の某々といつたような人達が、各方面の講演會で盛んに飛躍してゐるのを見る。私たちが地方に出た時に、こうした人達のうちの何人かの名前を聽かずに歸つたことは殆んどないといつてい

位ひに、地方講演の弊害は、不思議にも變つた顔觸れの人達で滿たされてゐるのを見る。一體こうした人達の講話を、如何に地方だからといつて、わざ〳〵金を使つて聽こうといふものがあるであらうか。こうまでもに澤山あるであらうか。若しそうだとすればこの人達のために、並にこの人達をあやつつてゐたり、命令してゐたりする背後の權力者なり陰謀家なりは誠に安心なわけであり、またそれだけ安心なものならば、こうまでして講演なぞに骨を折る必要がないこととなるわけであるのだが、地方へ出て見るとこの疑問に直ぐに解決される。實は地方の文運は遲れたりとは雖も、軍人の古手や、御用學者なぞの出鱈目講演を聽くためには聊か進み過ぎてゐるのであつて、何れの地方でも、多少雜誌なり讀んでゐる人達には、こうした反動家連中の誤魔化し演說なぞは何等の尊敬をもつても聽かれてはゐないのである。その人達が何故に地方に於いて活躍するのであるか。そはこの方面において社會的征服の組織ができ上つてゐるからである。日本の官僚政治または軍閥の覇權なるものが單なる中央地方の直接の權力を通じ、内閣なり、警察力なり、貴衆兩院なり、樞密院なり、元老なり、軍隊なりを通じてのみ維持されてゐるように思ふのは實は甚だ謬見である。政黨の側の空疎な演說家や選擧係、または選擧干渉係、または選擧買收係りなぞが政黨員の數だとか投票の數だとかいふものにばかり目をつけてゐた間に官僚や軍閥の側の人達はもう少し進んだ考をもつてゐた。彼等は一方に政權略取のためには勿論あらゆる陰謀なり、惡辣、無慈悲、慘忍、暴虐なる振舞を辭するものではないのであるが、更に一步を進めて、この惡辣なる陰謀をソーシヤル、ドミネーションの域のうへに施してゐることがこれである。この軍閥または官僚のソーシヤル、ドミネーションの方法として中央報德會があり、愛國何々會があり、赤十字何々會があり、青年會があり、在鄉軍人會があり、近くは大迫大將一派の何々會があり、これ等の社會戰の諸制度は日本の社會生活のうへでは最も有力な且つ基礎的な社會制度であるのであつて、これ等の諸制度は必ずしも一樣の方法をとるのではないが、就中、中央報德會なり、彰有會なり、在鄉軍人會なり、青年會なり、大迫大將の何々會なり、若しくは桐花學會なりといふものの採るところの方策は主として地方講演であるのであつて、それらの諸機關は官僚または軍閥が政權を掌握してゐる時は勿論、そうでない時、例へば今の政友會内閣といふような場合であつても、同樣に、中央または地方の官憲と連絡があるのであるから、その官憲を通じて官僚軍閥またはその一變形に過ぎない今日の政黨のためのソーシヤル、ドミネーションのために幾

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何かの方法で全國の純朴な人々、特に純朴な青年を精神的に征服するために働いてゐるのである。地方によつては、例へば信州のような兎も角も他の地方に比べて多少進んでゐると見られてゐる地方ではそうでないにしても、その他の地方では、青年會のごときでさへ、その會長は多くは小學校長で、そのうへの聯合青年會が郡長、そのうへの聯合會長が知事といつたように、もう水晶の判で押したように定まつてゐるのであるから、それ等の團體で演説會または講演會を開くこととなると、小學校長、郡長、縣知事。そしても一つ進むと内務省なり、中央報德會本部なりが講演者の顔觸れまで決定し、若しくは縣費、國費をもつて講演者を出張せしめるのである。このほかに夏期になると講習會が各所で開かれるが、これとて略ゝ同樣な仕組みで同樣な目的のために開かれることが多いから、講演者の顔觸れもほゞ同樣な人達である。こういふ仕組のもとに、今日各地で盛んに行はれてゐる地方講演なるものは軍閥、官僚または資本主義者のソーシャル、ドミネーションのための一組織であるのであり、從つて地方民が頻繁に聽かされてゐるところの聲なるものは、みなこうした、爲めにするところある、そして最も卑劣な動機——支配慾からくるところのプロパガンダであるのである。各地に必ず存在するところの青年會なるものは今日においては殆んど凡て支配階級——滅亡しつゝある支配階級を支持せしめられるところの憐れむべきダイゼルの機關であるのであつて、この點においては、それは在郷軍人會とも同一であり、郡役所とも縣廳とも同一であるといはなければならない。實に情けないほど愚鈍なものは今の青年會である。彼等は名を青年會と稱しながら腐敗しきつた政黨の走卒や、老朽しきつた役人、軍人の古手や、節操なく學識なき御用講演者、甚だしきに至つては講釋師などの辯舌に欺かれたり、小役人を會長と仰いでその命令に盲從したり、何といふ意氣地のない、何といふ自覺のない、何といふ恥を知らない人達の集合だらう！そのほかにも、特に關西では佛教徒の一派が、時の權力を謳歌するがために、彼等の人格を賣り、彼等の宗教を賣つて、矢張り今日の支配階級のソーシャル、ドミネーションのための立派な機關となり、手先きとなつて、各地で講演に狂奔しつゝある。彼等の口にするところは、社會主義の攻擊、民主主義の攻擊、そして資本主義の辯護、階級制度の辯護、侵略主義の代辯と、これも今日では水晶の判で押したように決まりきつてゐるのであつて、佛教の墮落は今に始めぬことながら、近頃になつての墮落と腐敗は、實に言語に絶してゐるのである。一寸鶴見の總持寺に行つて見ただけでも分ることであるが、あの無暗に大規模な建築の資

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

内の一番高いところに何人の銅像が立つてゐるか。そこには雨宮敬次郎といふ人――金持といふ以外に何の取柄もない人の銅像が厳然として山上からあの廣大な境内一面を見廻してゐるではないか。何といふ不愉快な寺であらう！何といふ銅臭に満ちた世界であらう！　地獄の沙汰も金次第といふ俗諺は決して誇張ではなく、それは實に今日の佛教界の卑しむべき腐敗墮落無見識無節操を赤裸々にいひあらはした金言であらねばならぬ。そしてこの腐敗墮落と無見識無節操の限りを盡した今の佛教徒の力は、特に關西においては侮るべからざる勢力があるのであつて、それは疑もなく滅亡しつゝある支配階級のためのソーシャル、ドミネーションの有力なる一機關であるのである。

四

こういふわけで、日本の支配階級のためのソーシャル、ドミネーションは各方面に於て完備した制度、就中地方においてこの制度をもつてゐるのであつて、從つて地方講演なぞも個人的なまたは一時的のものでなくして統一ある一組織をなしてゐるものであつてこれ等の講演者なるものは支配階級の宣傳師であるのであるから、地方民は、一つは彼等の無學無自覺のためから、またそうでない人であつても、進まぬながらも講演會に出席したり、何々博士とか何々大臣とか何々中将大将とかいふような『肩書拜迫』のために、縦令豆腐屋大臣であつても大臣のいふことでさへあれば有難がり、何々博士の講演といへば、あるためにするプロパガンダであつても、有ること無いこと、みな尤もらしく拜聽するし、虚僞や誤魔化しとは感づきながらも度々聴かされるのでその方に捲きこまれてゆくといふやうな次第で、知らず〱支配階級によつてのソーシャル、ドミネーションの精神的の戰ひが少くともある程度まで效を奏するといふことになるのである。危險はこゝにある。日本國民の將來にとつての最大の危險の一つはこゝにある。何となれば彼等はその二つの目と耳とを蔽されながら、細くして長い橋を渡らなければならない運命のもとに置かれてゐる不幸な人達であるからである。といふことを地方に出で感じないではゐられないのである。

五

こういふわけで今日の地方講演なるものは、恩給軍人連――英國でも今年になつて恩給軍人連中が『自由同盟』といふ實際の不自由同盟を組織して宣傳をやるとゝなつてゐる――によつてされるもの、御用學者によつてされるものも、俗僧連によつてされるものも、または内務省御雇の講釋師、浪花節語りによつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てされるものも、みな等しくお上の御用であるのであつて、これ等の人達によつての虚偽、阿諛、諂着、そして時勢後れの講演なるもの、否、プロパガンダのために、地方民の文明が如何に妨害をうけてゐるかといふことを思ふと、私たちはだまつてこれを傍観してゐることはできない。私たちは、虚偽と諂着とそして権力階級への阿諛を聴かせられるのは小學校教育によつてだけ充分である。そのうへにも、人民を欺き、人民の聰明を奪ひ、就中、新時代に眼を開こうとする青年の聰明を奪ひ、そして今日支配階級の支配慾と利己心との満足のために、権力と黄金との後援のもとに、大規模の半官的な諂着的の制度が全國的に普及して、宗教、教育、恩給軍人、官権、『肩書脅迫』といふやうな、あらゆる機關の力をもつて、諂着的プロパガンダが全國の津々浦々にまで行はれてゐるのを見ては、私たちは實に支配階級の陰險悪辣と、そしてその機關となりつゝある宗教（特に佛教）教育、御用學者等の態度に對して憤りを感じないではゐられないのである。私たちが地方へ出て痛感することは、わが純粋なる地方民をして、これ等の諂着的プロパガンダから救ふことでなければならぬ。そしてこれを救ふためには、民主主義の側にも、組織的な教育制度がなければならないといふことでもある。これには今日では先づ帝大の新人會なり、明治大學のオウロラ會なり、早大の建設者同盟または暁民會なり、或は慶大の目下新に起りつゝある新人の團體なりが中心となつて、地方の青年會と連絡を保つて、全國的に大宣傳をやることが一つの方法であると思ふが、更に何組織的の宣傳方法を用ゐて先づ地方の青年會を解放し、次に小學校教員の教育會を解放し、即ちこれ等の現在の官僚的または半官的組織を解放して、自治的な制度―文化的のオウトノミーに組織し、從つて民主主義の一制度に組織し、これ等の團體を基礎として地方文化の開發を實行するといふことが、新日本を創造せんとするものの面前に横たはる重大な事業の一つでなくてはならぬ。私たちは中央で花火を揚げてゐるだけでは駄目だ。今日、地方に於てさへも、民主主義的精神の異常なる勃興を示してゐることは分りきつた事實であるが、これに統一と組織とを與へることが缺乏してゐる以上は、それはたゞ聲だけであつて力とはなることはできない。改造運動の根底は、この勃興しつゝある民主主義の精神に、統一と組織とを與へることである。統一と組織とが與へられた時に、民主主義は聲であるとともに力である。私たちは民主主義を力たらしめるために私たちの眼を地方に向けなければならぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

地方文化に對する要求一二

本間久雄

私は地方へはいくらも出かけたことがないから、與へられた題目にふさはしい答へは出來ないが、地方人の文化といふことについて、ほんの思ひついたまゝを述べて見よう。

昔しから、その人の人格なり趣味なり、性格なりを知るためには、その人の働いてゐるときよりも、その人の遊んでゐるときを觀察した方がよいといふことが云はれてゐるが、地方の文化といふことを觀察する上にも、このことは或る程度まで確かであるやうに思はれる。そしてこの點から見れば、地方人の遊んでゐるとき、少くも遊びの氣持ちでゐるとき、即ち其地方の年中行事である祭祀とか、その他、其の地方人がどういふ遊び方をしてゐるかといふことが興味ある問題となるわけである。

さて、この立場から見て、地方人の文化程度は果してどうであらうか。無論地方々々によつてそれは非常に違つてゐるから一概に云ふことは出來ないが、ある地方――少くも私の生れ故郷である米澤などを例に取つて考へて見ると、――では文化の程度は極めて低級であるらしく思はれる。

私の地方などには、これといふ遊びはない。年中行事の祭祀はあるが、それとても極めて沒趣味なやり方で行はれ、而も年々すたれてゆきつゝある。しかし遊びのない生活は切迫された生活であるから、人々はいつまでもその生活に堪へることは出來ない。どういふ方法かでその「遊び」の氣分を充たさうとする。從つて、地方人の選ぶ「遊び」には人格の精錬に役立つやうな遊びではなく、却つて人格を墮落させると同時に低劣な文化をその中に反映させるやうな遊戯を選ぶ場合が多い。一々例を擧げることは出來ないが、概括的にはさう云ひ得るであらうと思ふ。

世間には、地方人は都會人に比して質朴であると云つて推賞してゐる人がある。たしかに質朴であり、純眞であるところはあらう。しかし同時に都會人に比して無知でありバルガーであるところのあることも否まれない。無知であることを救ふためには教育の振興その他の方策に依らなければならないのは云ふまでもないが、バルガーであり、粗野であるところを救ふためには、たしかに遊戯又は娛樂其他の慰藉機關に依らなければな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らない。この點は地方の文化といふことを考へる人には見落すべからざる重要な點である。

しかしこの點が社會敎化を考へる人々の間に案外冷淡視されてゐる。

今日では、道徳標準、價値標準が大抵昔とは轉倒してゐる。都會人又は都會居住者は比較的時勢に對して敏感であるから、意識的乃至無意識的にこれに氣づいてゐる。地方人はこの點に於て、比較的舊型を墨守してゐる。從つて彼等の思想なり感情なりは案外に舊式であり、硬化されてゐる。殊に一番わるいことは彼等の排他的なことである。就中その地方が昔しからある特殊の氣風を持つてゐるところでは一層それが甚だしいらしい。つまり彼等の思想なり感情なりが硬化されてゐるから、他の異つた思想感情と同化しがたいのである。そしていつまでもその所謂「お國自慢」の自惚れの氣分を脫し切らないのである。彼等の思想感情が常に狹隘であり、固陋であるのもこのためである。地方の敎育界などで、よく土着の敎師と他の地方から這入つた敎師との間に、醜くい暗鬪が演ぜられることなども、偶々地方人の排他的精神の發露と見ることも出來るであらう。少くも私の生れ故郷などでは、さういふ事實はいくらもある。

地方の靑年團といふものも隨分いゝ加減なものであるらしい。靑年團の設立は半は官僚的な動機から出てゐるだけ、その組織なども極めて完備してゐるらしい。しかし、いつかも二三の都下新聞紙が指摘したやうに、それには餘程軍國主義的な色彩が加へられてゐるやうである。少し餘談に亘るが、都會では軍人崇拜の氣風は最近恐ろしく減退したが、地方の方はまだまだこの氣風が旺んである。少くも私の地方などでは、軍人といふと特殊階級のやうに思つて、尊敬してゐる。これなども地方文化の低級を示す一例である。そこへ持つて來て、地方靑年團と在鄕軍人會とは密接な關係に結ばれてゐるらしいから、この軍國主義崇拜の氣風はいつまでも旺んであり得るわけである。地方人の文化といふことを考へる人にも、地方靑年團問題も亦重大な研究問題となるべきである。

昨年の四五月頃であつたと思ふが、床次内相が、時勢に鑑み、國民に健全な思想を鼓吹して危險思想過激思想を驅逐するために五ケ條の宣傳綱領を定め、各府縣廳に講演の專任を措き、更に内務省から宣傳者を派することゝしたといふことが新聞紙に傳へられた。その五ケ條の宣傳綱領といふのは、健全な國家觀

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

念の養成であるとか、立憲思想の普及であるとか、勤倹力行の美風作興であるとか、世界の大勢に順應すべき修養であるとか、綱領としては、申し分のないいゝものであつたがさて、どういふ人がそれを宣傳するかといふ段になると、少くも内務省で選んだ人々では（人の名前は見忘れたが）さういふ宣傳も餘り功果がなさゝうにその當時私は思つたことがあつた。今もかういふ宣傳があるかないかを私　詳かにしないが、しかし内務省あたりが、地方の青年を世界の大勢に順じて指導しようと思ふならば、世界の大勢をよく理解してゐるやう新進思想家を派遣講師とするのが當然である。

地方の文化を高め、深め、地方文化をして世界的思潮に棹したものたらしめるためにはさまざまの機關が必要である。第一はジャーナリズムの普及である。都會における大抵の家庭におけるやうに新聞雑誌があらゆる家庭において讀まれなければならない。（他の地方は知らず、私の故郷あたりではまだジャーナリズムが普及してゐない）次には巡回講演である。そしてこれには眞に新興文化に寄與しつゝある新進氣鋭の人々に講演を依頼するのがよい

更に別な方面からその促進策を講ずれば、この稿の始めに一言したやうに、遊戯娯樂等を基調とした藝術的教化策である。例へば地方でよく演ぜられる芝居、活動寫眞等を利用した教化策である。（尤もこれは必ずしも地方人に對してのみいふことではない）又、各地方で行はれる祭祀その他の年中行事を基として一種の新しいページャントリーを創造することである。この點は特に地方人の人格を精錬する上に、地方人の生活を藝術化する上に有效であることは前にも一言した。尚地方文化と藝術的教化との關係は、稿を別にして述べらるべき重大問題であることはいふまでもない。

さて以上は極めて漠とした物言ひであつて云ひ足りないところのあるのはもとよりであるが私は、差當り地方青年團の當事者などが、以上意のあるところを多少でも留意することを衷心望みたい。かういふことは結局は内務省文部省などの官僚的仕事ではない。（尤も内務文部二省が積極的にさういふ運動を起すのは推賞すべきことではあるが、）地方々々の知識階級に屬する有志者が各自の文化事業として企つべき且つ企つ事に於て價値ある大きな問題であり、運動であるのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

地方民の文化的現狀

法學博士 堀江歸一

私は從來講演又は視察の目的で、地方に出遊する機會を多く持つて居るが、本年は殊に多くの地方に出掛けた。卽ち秋田市、土崎町、金澤市、桐生町、足利町、伊勢崎町、前橋市、京都府の園部町、出羽の鶴岡市、八王子市、長岡市等は本年の春頃から最近に至るまで、私が一二泊、乃至三四泊の期間に於て旅行を試みた場所である。固より限られた時間に於て、講演をし、其餘暇に視察したり、地方當業者に就て、事情を聽取したり、時には汽車の窓から、人力車や、自動車の上から、市街を瞥見して、觀察の材料を求めることとすらある次第であるから、地方の狀況に對して、徹底した批判を下すことは出來ないかも知れないが、摘要の如くに、私の頭腦に映じ來つたイムプレッションを述べやう。

第一、日本の如何なる處を巡歴しても、最も明瞭に認められるのは、純然たる農業だけで、經濟を營んで居るとか、農業を主として生活をして居るとか云ふやうな所は如何に農產物が豐富であつても、充分の繁昌を收めることが出來ない、而して一方に農業は或る程度まで廢れて、他の地方から米穀其他農產物を移入するやうな狀態に在つても、其地方を背負つて立つだけの產業が農業以外にあるならば、其町は必ず繁昌して居ると云ふ事實である。早い話が米作を主とする所よりも養蠶業を盛にする地方の方が經濟上に繁昌する。近年米價も隨分騰貴したが、生絲の價格は更に騰貴した。田畑を潰して、桑畑にし、農業に使つて居つた人手を引上げて、養蠶業に用ひ、副業として營んで居つた養蠶業が段々專門の仕事に爲るやうな傾向は所謂養蠶地を以て目された地方に於て見る所であつて、斯る地方に限つて、必ず殷富の狀を示すのである。

第二、地方民の文化の程度は何としても其地方に於ける富の程度に支配されざるを得ない。富を離れて、文化なしと云つたならば、餘りに極端に失するかも知れないが、現に農業の主として營まれて居る地方であれば、富も少なければ、又廣い面積で少數の人だけしか養はれない、是れで何として文化の發達を求められるであらうか。東京から有力な雜誌が幾部も這入つて來る、東京の新刊書が書店の店頭に早く現はれる、東京から知名の人を迎へて、講演さして貰ふ。斯う云ふ所は決して純然たる農業地ではなく、必ず工業都市か、然らずんば少なくとも養蠶業地であつて、私は富の集まる所には知識も、才能も、美人も

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

吸收されると云ふ古人の言を懐はざるを得ないのである。

殊に一ツの地方で、工業が發達して來れば、必ず其仕事の經營は郷土出身の人だけに之を託さず、寧ろ他郷から人才を招いて、之に當らせる。斯くて從來土着の人士ばかりに限られて居つた社交の圏内は擴張されて、他郷の出身者を網羅し、結婚緣組等の關係も其間に起つて、思想も感情も自ら洗練されると共に、融和されるに至るであらう。工業地であれば、東京其他大都會で、高等專門教育を受けた人士が多數住居して、生業の道を求めることが出來、是等の人々が土着の財産家と相交つて、一ツの社會を成すことは、地方の文化を進める上に、與つて力あるのである。

第三農業は天候に左右される仕事であつて、隨分危險の伴ふものであるが、之に從事する農民は從來朴直素純の性を持つ人と稱されて居つた。然し今日彼等は米の賣買で隨分危うい投機をすることを覺へた、養蠶で投機をすることも覺へた。斯くて地方の商工業者と相混じて、農民も近頃は京阪の株式市場に手を出すさうであつて、然も此數年間の投機熱は彼等に大なる刺戟を與へ、地方民で新設會社の株式を引受けたり、既設會社の株式を買入れたりするだけでは滿足せず、盛に東株の新を定期で賣買する者もあつたやうに聞く。現に本年四月の恐慌で地方の生産業者で損失を蒙つた者も少なくないと云ふが、其損失は仕事の上から來たものであるか、其れとも株式の上から來たものであるか、判然しないと云ふ說もある位ひである。

地方民に株式投機をするなと云ふのは、無理な註文であらう。然し金融や株式市場の商勢に明かでない地方人が生き馬の眼を拔くやうな市人を相手にして、電信や、電話で株式の賣買をして、如何なる結果を生ずるであらうか。彼等が眞面目な勤勞で、儲け出した金は一部の人の餌食に供されて仕舞ふ恐れはないであらうか。私は地方民が斯う云ふ犧牲を蒙つて居ることを知つて、何とか之を塞止める工風はなからうかと苦心して已まない次第である。

第四、産業の地方的分布と云ふことは、經濟上自然の趨勢であつて、長野縣は養蠶業、生絲業に於て、兩毛地方は織物業に於て、全國に稱せられるが如き、要するに各地方が其特長とする所の極を盡すのであつて、斯の如くして地方的分業が行はれるのであるが、其代りに其地方の發達——有形的發達ばかりでなく、精神的發達までが主として經營される産業の興廢如何に繫がると云ふ事を生ずる。本年春生絲價格が暴落して以來、養蠶業地や、織物業地に於ては、地方の教育費を支辨するに困難を生じたとか、東京に子弟を遊學させることが出來なくなつた

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とか、色々其地方の文化に影響を及ぼす事情を生じたやうである。然るに最近長岡市に行つて、私の感じたことは、恐慌の爲めに、織物業の行はれて居る同市も相當の影響を受けたやうなものゝ、日本寶田兩會社の石油事業が繁昌し、兩社株式の多くが同市資産家に依つて所有されて居る爲めに、恐慌の影響を或る點まで緩和するを得たと云ふことである。産業の地方的分布も已むを得ないが、同時に一の地方に於て、或る程度まで、産業の種類を多くすることに對しても、力を用ひなければ、經濟生活の安全を謀るを得ないことゝ感じられる。

第五、産業と地方の文化とは、離る可からざる關係を持つて居り、産業の存せざる所には文化なしと云つて、差支なからう。封建時代の城下　今日縣廳市役所其の他官公衙の所在地であり、學校も設立されて居れば、師團旅團若しくは聯隊も置かれてある。斯う云ふ特殊の官公署の仕事があるので、其都市は經濟上に繁昌し、政治上の中心地であると共に、經濟上の中樞點とも爲つたやうな次第であつたが、今日では、事情の然るを許さない、縣廳の所在地、兵營學校の所在地として、相當の人を集めて、又政治上教育上の關係で、他の方面から一時的に往來する人の數は多からう、而して其等の人々は多くは購買力があり、又多少の知識を備へて居るので、外觀から云へば、斯る地方は文化の程度が高いやうにも思はれるが、其れは極く一小部分の階級に限られたことであつて、斯う云ふ政治上とか、教育とかの中心地よりも、産業の中心地に於て、文化の發達の著しさを認めざるを得ない、少なくとも産業殊に工業の盛な地方に於ては、人々の間に活氣が横溢して居り、又新知識に對する欲求が熾烈であると感じられるのである。

第六、地方に出遊する度毎に、私の注意を怠らない一事は地方民が如何に知識の點に於て、開發されて居るかと云ふことである。新聞雜誌の普及しつゝある今日、都鄙の間に、知識分配上の懸隔を減ずるに至つたことは、爭ふ可からざる事實であるが、尙ほ私の遺憾とする所は地方には大都會ほど篤學者に研究の資料を與へるだけの便宜が備はつて居らない。或る教育會で或る年、專門家を招聘して、一ツの活問題に就て、講演をして貰うとする、專門家も亦自分の最善を盡したとした所で、其以後に起つた色々の變動は地方に居つたのでは、研究を續けることが出來ず、可惜新知識も中途で切斷されざるを得ない。私は地方が相當に富んで來た今日、何故圖書館の設備を盛にすることに力を致さないのであらうか。此點は地方の文化を進める上に於て、地方の先覺者が力を致さなければならぬ所であると思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

地方の講演に出かけて

長谷川如是閑

日本の中央集權主義は、文化の進歩が甚だ不自然であるといふことを示してゐる。總てが中心の高い所から投げられてゐて、人民はまるで明治神宮の御札でも戴くやうなつもりで、何んでもその高い所から下賜されるのを望んでゐるといふ工合だ。意氣地のない國民には得てそんな風な卑屈な根性がある。獨逸人などは、あんな高慢なことを云つてゐながら、矢張御下賜主義なので、何處かにその卑屈なところが現はれる。例へば商品でも他國の品物が評判が好いと直ぐに其商標を眞似たり、外國製のやうに見せかけたりする。そこへ行くと英國人は頑固だといふが、自國製といふ事が優良品の第一條件になつてゐる。それもロンドン製などゝは云はない。マンチエスターでもグラスゴーでも何處でも好い。日本人になると舶來品といふことが優良品の符牒で、自國製なら東京製といふことになつてゐる。大阪人などはアレ程商品を作つてゐるが、自身は決して大阪品を認めない。それは粗製濫造品と自分で定めて、何でも東京製と稱して賣つてゐる。生れ落ちると「日本」といへば世界一といふ風に教へられてゐながら、日本人ほど自己を認めない國民はない。それはすべての日本人は自己を持つてゐないで、皆授かり物で生きてゐるといふことを感じてゐるからだ。品物ばかりではない、一切の文化が他所の高い所からの授り物で、其の御下賜所は東京だといふことになつてゐるのだ。その東京も粗製濫造の點では御多分に洩れまいが、とに角それでも東京でなくては拂下所がないといふ有様である。

然るに此頃になつて、地方人が段々覺醒して來て、かういふ文明の分配の不公正に不服を感ずるやうになつて來たことは私達が地方へ講演に出かける度に能く感ずることだ。土地によつては可なり早くからさういふ風になつてゐるところもあるが、多くの方面では、極近頃から一層そんな風になつて、いろ／＼の文化的機關に乏しいことを、各地の人が痛切に感じてゐるやうだ。地方の都會風のところばかりでなく、飛んでもない邊鄙な小都會などにも、さういふ要求が中々猛烈に起つてゐる。私達は平常多忙なので、講演に行つても殆んど飛脚的で、ゆつくり土地の人達に接する時間もないので、一概にはいへないが、地方の左程大きくもない町村としては可なりの出費を厭はずに東京から講師を呼ぶといふことは、私の今云つた中央集權とい

ふ意味からではなく、中央が持つてゐるやうな文化の機關が地方には全く乏しいことに憤慨した結果なのである。「好いものは何もかも東京へ持つて行く、地方などは何うでも好いと思つてゐる」、さういつた感じを、少し目の覺めた地方人は持つてゐるらしい。

尤も私共の觀るところでは、痛切にそれを感じてゐる人は、その地方〳〵でも少數人で、さういふ人々は、地方人が暢氣に構へてゐるのを焦ら立たしく思つて躍起となつて、自分の地方の開發に努力してゐるといふ塩梅である。ところが、今までの我國の中央崇拜主義、文化御下賜主義が禍を爲して、少數人がさういふ努力をしやうとすると、役人や先輩等が往々不機嫌になつて、それを壓迫するか、壓迫しないまでも、少しも贊助しないといふ風がある。從つて若い人達は、金も出來ず、思ふやうな計畫も實行されないで、役人先輩の思惑に合つたやうな仕事をするといふ風である。講師を呼ぶにしてもさういふ人々の意向に從ふといふことになる。其の上文部省などから、誰々のやうな人を講師として呼ぶことは成るべく抑へろといふやうな内訓を地方官廳に發すといふやうなことで、折角の地方人の奮起もやゝもすれば頭を抑へられる。場合によつては、御用筋が反對講演會を開かさせるといふやうなこともする。私共が吉野博士と一緒に仙臺に行つた時に、その會が非常に盛會だつたので、スグ後に御用筋が皇國何とか會を東京から招いて講演會をやらせたが、大不評判で滑稽だつたといふ仙臺の新聞記事を態々私達に有志の人が送つて來てくれたことがあつた。かうなると私共がやらうとしてゐる眞面目な學術的な講演に對して、彼等はまるで政黨の遊說にでも對するやうな策戰を試みる譯である。

こんな窮屈なことの比較的少ないのは、長野縣下で、これは知事や何かの關係といふのではなく、寧ろ同地方の傳來的自由主義の結果らしい。主に小學教員だが、此の人達の熱心さは、誰れでも一度同地方へ出向いたものに忘るゝことの出來ない印象を與へる。始めは文學的、藝術的乃至宗教的に覺醒したので、多年の間さういふ傾向を辿つて來たが、最近には大に社會的傾向に進んで來て、教育會なども、さういふ問題の研究に非常に熱心になつて來たやうである。

北の方では福島縣は、此傳來的の自由を持つた地方で、流石に昔の自由黨の領内だけある。然し此地方は長野縣と違つて教育家よりは地方青年が中々進歩的である。矢張長野縣の學問的空氣に對し此處は政治的空氣とでも云ふべきであらう。が昔の政治的といふ意味よりはズツト進んだ社會的傾向に入つてゐる

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ことは認められる。靑年の間にさういふ傾向の盛になるといふことは最も喜ばしいことだ、靑年團長といへば、大抵軍人や校長だが、福島縣では、貳個の靑年を團長にしてゐるところがある。現に校長がなつてゐる所では、靑年間に大にそれに對して不平であるといふ風で、餘程若いものが自信を持つて來た。地方を歩いて、かういふ靑年等に接すると、日本もまだ壽命があるやうに思はれる。

そこへ行くと關西地方は、好く云へば穩健、惡くいへば無自覺で、講演會なんぞも、內容よりは前觸れを尊ぶといふ風で、それも頗る世間的の相場を標準として、埒もない御祭騷ぎに流れるのが多い。九州などは流石に成金地で、一向さういふ方面は振はなかつたが、此頃は何んなものか知らぬ。先達文士の一行を千圓の招聘料で招いて入場料一人前五圓を徴したなどゝ聽いたが、そんなことは如何に關西でも類例は少いが、然し何方かといふとアノ邊は惡くするとそんな風に流れる傾向はある。それもあちらの人々は「ナニ藝者を呼んでも直きに千圓位はかゝるのだから」といふやうなことを云つて奮發するのだから、面白いことは面白い。一般に流行らして貰つても惡いことではない。

問はぬが花

杉森孝次郎

講演後に、質問や議論を講演者に試みる人がある。これは、通則としては、奬勵すべき事でないと思ふ。信ずるために聽くにあらず。不審があればとて、講演者を相手に研究するには及ぶまい。況んや相當の準備なき場合に於いてをや。自由に述べ、自由に聽き、あとは閑談に移るべきだらう。淡懷が貴い。實をいふと、無資格の質問があまりに多いのだ。研究は騷々しい筈のものでない。講演後の質問と議論とは、然るに、騷々しいだけの事が多い。英國などでは、講壇に立つたまゝで、聽衆からの公開質問を、司會者の監督の下に許し受ける事がよくある。膝つき合せての質問よりはましかと思はれる點もあるが、大體は、なくもがなの仕事のやうだ。わかつても、わからんでも、贊成でも、反對でも、その場は無事に濟ます方が、奇麗だ。わからない人が、存外訊きたがり、眞の質問を有し、また共鳴した人は、却つて平靜淵默を守る事が多からう。共鳴しないまでも、理解した人はただ。講者と聽者とは、優者と劣者との關係

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でもなく、学者と俗者との關係でもない。愚な説と思ふても、聴者は講者を、その場で教育するには及ばない。主張は時として必要だが、議論はさほどでない。主張は成長だ。自己表現だ。議論は、やゝともすると強制の要素を著しく着ける。講者をしてやかましく主張せしめよ。聴者をして靜かに採否せしめよ。自他相侵さずに、自他相伸びる形が、講、聴の場合にも善美だ。

地方講演の感想

法學博士　吉野作造

地方の教育會や青年會などから頼まれて講演に行つた數はかなり多い。政談演説のやうなものは故小山東助君の爲めに兩三度、今井嘉幸君の爲めに五六度、中桐確太郎君の爲めに一度の選擧應援演説をやつた外、やつた事はない。從つて地方の講演の感想と云つても、相手が學校教師や青年會員であり、從つて講演も教育的な、極めて質實なものである事を豫め斷つて置く。一體自分は盛んに書いたり、盛んに喋舌つたりするやうに人から思はれて居るけれども、書く方は姑く別として、喋舌る方は決して好きでない。學生時代は沈默家を以て通り、卒業後は教員商買をやつたので餘儀なく人の前に出て喋舌り得るやうになつた。それでももと〲喋舌る事は不得手でもあり、且つ實際甚だ好きでないから、今日でも大抵の場合なら御免蒙らうといふ態度を取つて居る。されば講演に出掛ける數は自分に取つてはかなりに多いが、然し他の同僚などに比べると寧ろ遙かに少い方だらうと思ふ。且つ講演に出掛けるやうになつたのも極く最近の事である。只今の記憶に據れば大正二年の秋、高崎市の教育會の招聘に應じたのが始まりであるが、然し其後一年餘りは殆ど講演に出掛けなかつた。歐洲戰爭が突發するに及んで、所謂戰爭講演の爲めに盛んに諸所方々から招ばれた。自分も亦專門とする所を通俗に説明するまでの事だから別に面倒とも思はず、喜んで之を引請けたのであつた。大正四五六年頃は夏休み全部地方講演に捧げ、普段の時と雖も月に一度や二度は何處かへ出掛けたやうに記憶する。が其後は自分でも餘り出掛けないやうにして居るし、又實際地方に招ばるゝ毎に出掛けるには餘りに忙しい境遇にあるので、餘程足が遠くなつた。幸に又此兩三年は前よりも招聘さるゝ度數は著るしく減つた。何時の間にやら附せられた危險思想家の名は教育會や青年會の講師としては極めて不適當なからであらう。自分では判らないが、地方の人から能く聞く。私達を招聘するといふ事に就て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、昨今青年會や教育會の内部に於てよりも、外部からの干渉がかなり激しいとの事である。

自分の一番餘計講演に行つたのは長野縣である。關西の方にもかなり頻繁に行つた。九州と北海道とは招聘に應けたが餘り度々は行かない。私自身が東北の出身であるのに、東北方面から招かれた事は案外に少い。四國へは未だに一度も行つた事がない。無論招ばれた事がないからである。斯くしていろ／＼歩いて見た結果、青年會としても教育會としても、又は一般の識者としても、矢張信州が一番開發して居るやうに思ふ。就中學校の先生などは、其態度に於てなか／＼活氣があるばかりでなく、かなり鋭い質問をされる事もある。澤山はないが、數多い聽衆の内には、時々講演者の著書を澤山買込み、十分之を精讀して、かなり立入つた質問をするものがあるといふやうな事は、他の縣に於ては到底見られない事であらう。然し信州以外に於ても、昨今の聽衆は非常に開けて來た。講演しても常に相當手應へあるの感を與へられる。此方の説明の仕方さへ好ければ、今日の聽衆は大抵の事は理解が出來るだけに發達して居るやうだ。

只時々地方の有志家などから妙な議論を聞かされる事がある。例へば私が或る問題について、或る特殊の意見を述べたとする、それを聽衆の中の半可通が極めて淺薄に之を誤解して、直に之を他の問題に變な適用をする。間違つて居るのにそれが[illegible]るで先方では如何にも得意氣に、私がこれ／＼の問題で斯ういふ說を立てたから、他のこれ／＼の問題に就いても同じく斯の說を執るだらうと云はれて冷汗を流す事もある。要するに彼等の正邪善惡の判斷は今猶ほ甚だ皮相的で且つ斷片的たるを免かれない。もつと深い根本思想に立つて、凡ゆる問題について常に同一の立場を崩さず、統一的見識を立てるといふ程にはなつて居ない。此點は學問の民衆化の今一層發達する事を必要とする點で、其の爲めにます／＼地方講演の盛んに行はるゝ事を希望せねばならない。只彼等が流行現代に生くる人としていろ／＼の問題に目の當り接する時、之に就いて大體の態度を過まらないやうになつた事だけは疑を容れない。之れは我々が講演をやつて居る最中、彼等が何ういふ方面に興味を有つか、何ういふ議論に心を躍らすか、又何ういふ考の傾きに共鳴を感ずるか等を考へて見るとよく解る。從つて私は講演をする毎に、何時でも此處にもこれだけの大勢の味方があると感ぜざるを得ない。我々の講演を聽きに來た程の人で、我々の立場を理解しないで居るといふやうな人は極めて少い。

であるから若し我々が講演をして居る時に、之れに反對の考

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を起すやうなものありとすれば、それは多くの場合、最も多く教育を受けた青年である。彼等には已に先入の偏見がある。彼等の頭は一般民衆のやうに白紙ではない。さういふ先方の考があるから、何うしても虚心平氣で我々の立場を諒解せんとしない。私の經驗から云つても、今日まで講演をした後で手紙などで反對されたり罵倒されたりするのは、大學程度の學生の前でやつた講演に多い。斯ういふ場合の講演に限つて、彼處は妙なの、此處は面白いのといろ〳〵批評される事がある。それを外にしては、殊に一般地方講演に於ては贊成を得た事はあるけれども、妨害を受けた事はない。

私の講演演說の内で妨害を受けた唯一の例は、去年の秋徳島に於てである。然し之は講演の内容其物に對する反對の表はれではなくして、私が講演するといふ其事に反對するといふのであつた。初めから反對するつもりで大勢の彌次が交り入れられ居たのであつた。であるから講演の始まる前から提燈の綠を切つたり、普通平凡な世上の出來事を喋舌つて居る中に發演が飛出して來たまでの事であつた。幸に聽衆の大多數は私の講演を傾聽せんとして居つたから、發演も其目的を達しなかつたのである。演說の文句に異議があるとて反對された唯一の例は、一昨年の秋、大阪の公會堂に於ける演說である。此時は大阪朝日に關聯する浪人會との立會演說のあつたあとの事とて、或る一部の團體が極力私の演說を妨害せんとするの企であつたと云ふ事を聞いて居る。けれども會場に於ては多數の聽衆が私の立場の共鳴者であつたと見えて自ら彌次の妨害を許さなかつた。演說は兎も角も無事に濟んだのである。所が最後に私が「右長く述べたやうな今日の時代に於て、偏狹な固陋の心を以て思想界を指導せんとするのは、丁度電氣の盛んな今日の時代に、行の中から煤だらけの行燈を持ち出して暗夜の明燈たらしめんとするの類に過ぎない」と結んだのに對して、今の言葉は少くとも今日の聽衆に對しては不穩に響くと絶叫する者があつた。今日は最早此種の誤解をする者も無論無くなつたであらう。あつても斯の程度のものに過ぎまい。今日の聽衆は兎も角も我々の誠意を以てする講說を相應に諒解して與れる丈けの雅量はある。

尤も講演會場に於いて極めて靜肅にして居つたが、後からかなり激しい陰口を利くものがあるといふ話は屢々之を耳にした。然し之は殆ど役人連の會合の場合に限る。私は平素選擧犯罪に就いて、選擧に關する犯罪、殊に收賄犯は概して普通の犯罪と違ふ、普通の犯罪は犯す罪であつて、選擧犯は犯させられる罪である、能働自働の差があると思ふ。卽ち前者は犯すな——と、

云つても犯す、被害者が損害を受けまい受けまいと用心しても僅かの隙に付け入られてやられる。何んなに戸締りを嚴重にしたからとて泥棒の種子は絶えない、之に反して後者は初めそんな者が少々も無いのに金を與れる。取つては悪くないかと云へば、人に知られないやうにするから取れと無理強いにする所から起る。無理に與れる者があるから取るのである、斯くして犯罪防止の手段も亦自ら異ならざるを得ない。卽ち選擧犯に於ては與れる方を嚴重に處分しさへすれば、貰つた方は放任して置いても選擧界廓清の目的は達せられるに違ひない。只口丈では不幸にして與れる者を嚴重に取締るといふ事になると、候補者各自は固より各政黨の領袖幹部から果ては總理大臣内務大臣などまで手を着ける事になる。だから云ふべくして行ふべからざる話ではあるが、然し選擧の度毎に原敬だの床次竹二郎なんといふやうな人々を縛り上げるといふ事になつたら、恐らく二度と賄賂を使ふものも無くなるだらう。と云ふやうな事を時々述べるのである。選擧犯罪の發生といふ事實に對して總理大臣や内務大臣が全然潔白かと私の信念を問ふならば、私は明白に怪しいと答へる。けれども證據が無いから何も是等の人々を罪人呼ばはりする必要は無い。只例を以て私の云はんと欲する所を鮮明にする爲めに、總理大臣とか内務大臣とかを引合に出す。斯ういふ演説をいろ／＼な處でやつた事があるが、その内或る税務官の命令でやつた場合と、或る警察官の命令でやつた場合と、此二つに就いては飛んでもない誤解の蔭口が確かに私の耳に這いて居る。私の講演を聞いた或る縣の警察部長は、東京での命だから默つて居るが、俺の縣へ來てあゝいふ事を喋舌るなら直ぐに引上げると云つたさうだ。又同じ事を聞いた或る税務署長は、私を昔なら國君に弓を引く謀反人の類だと云つたと聞いて居る。自分は知らずに居るが、斯ういふ類の誤解は外にも無いではなからうが、然し役人としては有りさうな誤解だけれども、普通の市民殊に今日の青年には、斯ういふ風の誤解は殆ど有るまいと考へる。

無論我々の立場に對しては誤解や反感が今日尚ほかなり強いに相違ない。けれども私共が地方に講演して何時でも氣持好き旅をし、自分の云ふ所が歡び迎へられて、多大の共鳴を博したといふ滿足を以て語る事の出來るのは、全地方一般に我々と同じ傾向に立つ者が非常に多いといふ事を證明するに足ると考へる。餘り澤山の實例を知つて居る譯ではないが、我々と正反對の立場に居る人々が講演に行くと、官憲の周旋でいろ／＼人を集めやうとしてもなか／＼思ふ通りに聽衆が集まつて來ないと聞いて居る。多勢の人が集まつたからとて容易く承知をする譯ではな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い。只之れによつて今日多數の若い者が何んな方向に舳を向けて居るかを知つて密かに之を喜びとするものである。

地方から講演の依賴などを受けて交渉を重ねる内に、それとなき官憲の壓迫があつて中止になつたなどといふことは餘り氣持の好いものではない。然し私などには斯ういふ事が決して珍しい事ではないから、昨今は一向平氣になつた。そして熟々之れまでの澤山の例を綜合して考へて見ると、何時でも内閣の壽命の終る頃になると干渉壓迫が露骨に且つ頻繁になつて來るやうだ。之れは何の内閣に就いても云へる。大體の上から觀ると政黨内閣だから寛大だの、官僚内閣だから嚴格だのといふ差別は少くとも私共に對してはない。政黨内閣たると官僚内閣たるとを問はず、今日の役人の頭はおしなべてかなり古い。地方の役人になると之れが一層甚だしいのだから、是等の人が各々其の與へられたる權限内に於て取締りを行ふといふ段になると、何の内閣の下でも先づ一樣と見てよい。上の方から命令される場合になると、内閣の態度によつて多少の相違が起る譯だが、然し少くとも官立大學の教授に對しては比較的餘計の自由を認めて居るやうにも感ぜられる。然し内閣の壽命が段々縮み、いろ／＼の方面に綻びが出て、いよ／＼此上の維持が難しいといふ事になると、少しでも政敵から揚げ足を採られまい、少しでも糺彈を受ける種子となるやうな出來事を作るまい、又少しでも政府の失政を論ずる言論を少くしたいといふ處から來るのであらう。言論の取締りが遽かに矢釜しくなる。大隈内閣の時でも寺内内閣の時でもさうであつたが、原内閣でも此頃此方面が馬鹿に矢釜しくなりつゝあるので、私は密かに政府の壽命も段々詰まつて居るのではないかと推察して居る。

尤も私は政黨からは特に嫌はれる理由を有つて居る。殊に今日の政友會からは最も嫌はるゝだけの資格はある。何故なれば私は平素最も熱心に政黨の地盤政策を攻撃して居るからである。此事に就いては昨年の十一號の本誌時評欄にも之を述べたから茲には述べない。要するに今日政友會の政界に大をなして居る所以、彼の政權の根據は其地盤政策に在る。而して私は地盤政策は即ち贈賄政策であり、從て政治道德の破壞であると考へるから、之を以て政界に大をなすは、惡錢を以て豪奢を誇るに等しいと考へて居る。そこで私は地方に行つて政談講演をする度毎に、此點で今日の諸政黨、殊に政友會を攻撃し、聽衆に向つて斷じて入黨すべからざる所以、否入黨せるものは速に脫黨せざるべからざる所以を說いて居る。だから政友會側からはかなり強い反對を受け、政友會系の縣知事の居る所では時々本

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なり強い妨害を受くる事はある。

之と似寄つた理由で軍隊の方からもかなり強い反對を受ける事がある。陸軍の學校、各種軍人の會合等から講演を頼まれた事は屢々ある。中には再三再四の懇請默し難く非常な無理をして時間の差繰りをした事もある。にも拘らずいよ／＼といふ間際になると必ず體よく斷はられる。今日まで話のあつた數は十數回あるが實現した事は未だ一回もない。偶然か偶然でないか自分ながら鳥渡首を傾げて居る。憲兵の方などでは餘程危險な人物と考へて居るものと見えて、此段或る田舎で社會問題に關する講演をした時、後でこんな出來事があつた。此講演は突嗟の催でやつたので、隣の町の憲兵隊で氣が着かなかつた。翌日それと知つて、斯ういふ會合があるのに何故俺の方に知らせて呉れなかつたと警察署に怒鳴り込んだ後、主催者の宅を訪ねて、何の故の會合かを根堀り葉堀り問ふた。此間にこんな問答が取換はされたさうだ、憲兵曰く「あゝいふ大家ですから定めし西洋の珍しい事もお話しになつたでせうね。」主人曰く「それはいろいろありました。」憲「露西亞の過激派の話もあつたでせう」主「それはありませんでした」憲「過激派の事を明らさまにお仰しやらずとも、共産主義がいゝとか、レーニンは偉いとか云つたやうな話はあつたでせう」主「それも無かつたやうです」憲「レーニンのやり方にも悪い所ばかりではない、好い所は少しはあるといふ位のお話はあつたでせう。」主「それも無かつたやうです」憲「社會問題を説くにレーニンの話が出ない筈はありません。お隠しになるなら承はらなくつても宜う御座います。」話はまだあるが之れ位にして置かう。何の某は何處其處に於て斯くの如き不穏の演説をしたといふやうな報告が、斯くして作らるるのかと思ふと甚だ以て危い世の中だと云はざるを得ない。

然し誤解するものは誤解するに任せよ。故意に人を陥れんとするものも亦、その爲すに任せていゝ。今日若い我々の同胞の間には、我々に共鳴し我々の云ふ所に耳を傾けんとするものが日に日に多くなりつゝある事を喜ぶものである。獨りそればかりではない。一般に昨今の民衆には智識慾の著しき昂進を見つゝある。何處に行つても聽衆堂に溢るゝの景況だと、我々の友人なども云ふ。只殘念な事は地方の實際の中心勢力たる先輩は是等の新しい要求に甚だ理解が乏しい事である。之れ程盛んな要求あるに對して公會堂の設け無きに見ても其事が明かであらう。劇場やお寺や學校は、斯ういふ目的に使ふには甚だ適當して居ない。早晩此民衆の熱烈な要求は、之れに適當な建物を提供する事に由つて滿足せしめられなければならない。此事は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何處へ行つても我々の痛切に感ずる所である

我々講演するものゝ心得として又痛切に感ずる事は、地方の人だからとて教養が低くかららうと豫想し、一段調子を下げて講演をすると必ず失敗するといふ事である。今日の民衆は固より未だいろ〳〵の問題について統一した見識を持つて居ない。けれども知らず識らずの内にかなりの程度に開發せられて居る事は我々の見遁してけならない點である。彼等は案外に聽く耳を有つて居る。我々は十分之を尊敬して、調子を下げずに自分の思ふ所を熱心に語るの誠實を缺いてはいけない。斯くして我々は我々の有つて居るものを多くの人々と共に眞に樂しむ事が出來る。我々の信ずる所を多くの共鳴によつて、之を一個の社會的の力とする事も出來る。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



俺の穢多時代

大泉黒石

一

喧嘩も考へものだ。

儲ける積りで喧嘩する譯ではないけれども、喧嘩する度に損をするからいやになる。高等學校に居る頃月謝が滯つて會計係が三日に一度位催促をするのだ。はじめのうちは頭を掻いて詫まつたけれども、あんまり冗いから了ひには癇癪を起して、除名をするなら勝手にするがいゝ。俺見たいな貧乏人の月謝位はどうでも胡麻化せるんだ。それが出來ないやうな貴樣だから會計係で一生終るんだらうと怒鳴りつけてやつたら翌日退校されたから心外だが、考へて見ると俺の方が無理だ。それから東京へ來て石川島造船所に十四圓で傭れた時もやつぱり喧嘩で馬鹿を見た。喧嘩の相手は性の惡い技師だ。原因は獨逸語とキャラメルだ。監督の技師が俺に向つてこう言つた。「獨逸語を噛つた職工は生意氣で家風に合はない上にお前は就業中にキャラメルを食ひ通し食つてゐるから仕事がちつとも捗どらない。元來鑄物工の分際でキャラメルとは僭越だ。」そこで俺もむつとした。「獨逸語はお前達が知らないからそんな嫉妬を言ふんだ。職工がキャラメルを食へば何處が僭越だ。お前達は識るまいが、こうやつて博奕打ちの職工を相手に鉄の煮湯を浴び乍らやる仕事に、キャラメルでも食はなけれや、やり切れるものか」と怒鳴りつけた。ところがこれが氣に食はないと見えて「そのお前達

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とは一體[illegible]に向つて言ふ言葉だ」と技師も怒り出した。行きがゝりだから仕方がない。「お前のやうな痩せギシのことだ」と出放題の啖呵を切つてやつた。すると日頃から技師共に虐待されてゐる職工共が嬉しがつて「毛唐!やれやれ、やつつけつちまへ」と應援に來た。「喧嘩なら器用にやれ」と云ひ出したかと思ふと、「構はねえから野郎を捕へて釜ん中へぶち込んぢまへ」と俺に味方を始めたものだから、鑄物工場を監督してゐる技師が悸づいて、どん／＼逃げ出しのは痛快だつたが、翌日首きられて大いに悲觀した。學校を追ひ出されても食ふに困るやうなことはなかつたけれど、女房を貰つて赤ん坊が生れたばかりの今度と云ふ今度は息のつまる程困り果てた。女房が勝氣で意地つ張りと來てゐるから頭ごなしにがみ／＼やりこめる、「あなたは何故そう喧嘩っ早いのでせう」と了ひにはおろ／＼泣き出した。俺もたまらないから、部屋の中を半日行つたり來たりしてゐた。いつも恨めしい喧嘩なんだが、明日から私達はどうして食べて行くんでせうと女房の三輪子が、重ね重ね愚痴っぽくなると、いよ／＼口惜しくなつて來る。方法がないから女房の前に兩手をついて、俺も喧嘩は懲り懲りだ。今日つきり廢めて口を探すから安心せろと言ふた。そしたら三輪子が「後生ですから、何卒そうして下さい。子供が可哀さうですからね」

と口説くのだ。この位陰氣な喧嘩があるものか。この晩から三日ばかり詩いでゐると、三輪子が心配して東京でたつた一人の親類へ就職の相談に行つたものと見えて、木挽町から稲艇がやつて來た。稲艇と云ふのは稲松艇之助の符號で、石灰の問屋をしてゐる女房の義理の伯父だ。しみつたれな親爺で俺とは[illegible]り反りが合はぬから碌々物を言つたことがない。その稲艇が浅草に工場を建てゝ豚の皮を草履の裏に仕立てゝゐるから手傳ひがてら、留守番に來ないかと云ふのだ。石灰は本職だから家でやるし豚の皮は内職だから外でやるんだと云ふ話だが、世間とはあべこべだ。「そんな仕事が私にやれるかしら」「やれるもやれないも現に素人の私でさへ樂々やつてゐる位だし、これに馬鹿い儲けがあるんだから面白いぜ」と云ふ。成る程儲かる商人は面白いかも知れないが、こんな猾い親爺にこき使はれて居れば、また腹の立つ位な關の山だらうと思つたので、折角三輪子が引つ張つて來たんだけど、尻ごみしてゐると、「仕事は豚の皮で草履の裏を拵へるのだが、綺麗なもんだ。儲かる月は一割位の分合も出せるが、どうだい」と言ふのだ。すると三輪子まで一緒になつて「いゝ鹽梅に出來た口ですから是非浅草の方へ行かうぢやありませんか。でないと、なかなか急に仕事は見つかりませんよ。」と勸める。いやな筈はないけれども、相手が古[illegible]

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のやうな稲猫だから躊躇してゐた。然し此の際だから結局は承知しなければ仕様がない。現金過ぎると思ふかも知れないが、念のためだから「一體いくら月給を與れるんですか」とあたつて見た。すると稲猫が「奮發して十四圓さう」と囁いた。大抵その邊が落ちだ。すると「但し一割の分合は別だよ」とつけ足した。それにしても恐ろしく見倒したものだ。俺ゝ足元を見すかされてゐるのを我慢して、よろしいやりませうと答へた。では、今晩でも引越して了はうぢやないか」と急き立てる。だから俺は淺草へ家族を連れて行つたのだ。

「淺草の工場へ移つて了へば第一家賃が浮いて來るし物價が箆棒に安いぜ」と稲猫が三輪子に吹き來んだ。それも引越す動機の一つだ。この通り浮いて來ることばかり考へてゐる親爺だから俺と商が合はないのだ。そんなことはどうでもいゝとして、事が餘りに早急だから。皮の工場が淺草の何の邊にあるんだか碌に聞きもしなかつたが、愈引越してから腹の立つほど驚いた。何のことはない穢多町だ。尤もこつちが穢多になりさへしなければ構はぬ譯だが、これから寝起する工場と云ふのが、隅田川に漂着したやうな燒木杭で拵へてあるお粗末な掘立小屋と來た。いくら何でも此んな家に恥かしくて住めるものか。俺が「これはひどい―」と云ふと三輪子までが氣の毒さうに「隨分だわね。今夜から此處に寝るんでせうか」と悄然とした。すると稲猫が洒々と構へて「これでも丹念に掃除をすれや結構住めるよ。何しろ今まで寝泊りに來てくれる者がないから荒れてるんだ。」と落ついた。さうだらう誰がこんな破屋に來るものか。これでは小説にも問題にもならぬ。思ひ切り悄氣て見せると稲猫も人間だから、多少極りも悪いと見えて「今夜は引越祝ひに天丼でも食つて一杯やらうぢやないか」と胡魔化し乍ら荷物を運び込んだ。此小屋の中で丼なんぞ抱へて焚火でもしたら、上州あたりの賊と間違はれるだらう。部屋が一つに殘は土間だ。剥いだばかりの生皮が小山の様に盛り上げてある。片隅に直徑一丈ばかりもある糞溜のやうな大甕が二つほど据えてある。覗いて見ると紫色の明礬臭い水が富士山から見た河口湖のやうに光つて居た。名ばかりでも東京市内にこんな馬鹿々々しい處があるかと思ふと不思議だ。親子三人が珍な顔を列べ乍ら尻ごみしてゐると、「この際お互に辛棒が肝腎だ。細く長くじりじりやつて行くうちには屹度運が向いて來るから暫く此處で稼ぐさ」と稲猫が慰めた。この際だらうがあの際だらうが、肝腎だらうが朝鮮人だらうが、人の弱味につけ込んで置いてどんな見つともない處でも威張つて連れ込むから癪に障ると言ふのだ。萬ケ一間違つて運が向いて來たら直ぐ恩に着せる考へだらう。第一お互にと

言ふことは、こつちばかりで厭な目を見ることとではないだらう。欺されて來たんだと思ふと此儘跳び出したくなる。けれども毎度のことに懲りてゐるし、無鐵砲な眞似も出來ないから、今に仇をとつてやるから覺えて居ろと諦めた。三輪子が濟みません。濟みませんと言ふた。しかし妙なものだ。この鹽梅では迚も三日と辛棒がつゞかねつゞかねとこぼし乍ら、ずる／＼べつたり一ケ月くらして了つた。毎日口を探すつもりで起きぬける。すると忽ち仕事が待つてゐる。そのうちに木挽町から稲龜がやつて來る。製革屋の穢多が車力で運んで來る豚の皮の毛を擦り除つて藥で染めたやつを板に釘張りする。張つて干し上げた皮を機械(プレス)にかけて草履の型(かた)に斷つのだ。花川戸あたりの履物問屋が風呂敷を擔いで買ひに來る。穢多ではないぞと威張り乍ら、毎日毎日穢多の仕事をやつた。

俺の話は雙六の骰子(さい)見たやうに先へ行くかと思へば逆戻りする流義だ。世智辛い世の中に、眞つ直ぐばつかり行つても居られぬ。そこで取敢へず穢多小屋の描寫に移る。描寫と云ふほど仰山なものではない。道案内だ。面倒でも雷門から南千住行の電車に乘つて山谷堀吉野町で下りたつもりだ。左が吉原大門で右が助六寺になる。此處で左へ行くのが粹な筋で右へ出るのが俺の野暮臭い話の手順だ。寺へ衝き當るまで右の方へ行つたつもりだ。寺の門前へ着いたつもりだ。そこから右へ曲がつて行く一帶の窪地が獸と親類の穢多町で、龜岡町と云ふ。俺の小屋は助六寺の裏に滯つてゐる溝のふちにあつた。小屋の左隣が中山小納言から三代の孫が住居だ。名前が笠原で屠牛場の部屋頭だ。右隣が印傳屋三左衛門の寓居で庭一面に下駄の爪皮が干してある。その裏に靴工の大久保藤八が巣喰つてゐる。それから小屋の前が草原で、小塚つ原から持つて來た供養塔が土に埋れてゐる。物さへ見れば直ぐ賣りたがる頃だから、塔の下に鼠小僧や賴三樹の首が埋めてあるといふ話を聞いた時に、そいつを掘り出して綺麗に洗つて賣り物にすれば、東京には馬鹿の金持が多いから直ぐ買手がつくだらうと思つたこともある。

これは後のことであるが、もう一生喧嘩はやるまいと決心してから一ケ月目に今度は稲龜と衝突して工場を跳び出した時、行き場に困つて印傳屋三左衛門に一時置いて貰つたことがある。そこへ中山小納言の笠原がやつて來て、食ふに困るなら俺の仕事先へ稼ぎに行かないかと勸めるから、牛殺しは眞つ平だとも云へなくて何分宜敷お願しますと、成る可く逃げやうとした。すると小納言が本氣になつて「よろしい俺(わつち)が引受けやした」と即座に引受けて了つたから驚いてゐると、自分の小屋から破だらけの半紙を持つて來て「こいつにお前の履歴を一つ淡然と

やつつけてくんな。早い方がいゝ。」と云ひ乍ら、迷惑してゐる俺に判別不應なし響かせて置いて、手に取つて眺めたかと思ふと、俺の肩をとんと突いた。俺は不意を食つて仰向けに引つくり返つた。何が氣に障つたのかと思ふ、「どうだえ！見ごとなもんぢやねえか！　お前の手筋は通つてゐる。」と叫んだ。荒つぽい質の方があるもんだ。「お前は玉店見たいだが、一體どこで手習ひを覚えたんだい」と云ふから俺も恐れ入つて了つた。すると印傳屋三左衛門が感心して「話を聞いて見りや、この人はオロシヤ大臣の坊つちやんだとよ。手習え位は仕込んでらあね。」と説明する。オロシヤ大臣が面白い。中山小納言の孫が穢多の隊長をする場所だから、オロシヤ大臣の坊つちやんが三左衛門の居候になり澄したところで釣合はとれるだらうと思つて、有難うと禮を言ふて置いた。この調子だと、大久保藤八も彦左衛門から五代目位の旗下に當りさうだから可笑しくもあつた。この小納言だ。この三左衛門だ。三左衛門の砥屋へ置いて貰ふ前の日のことだ。木挽町から通つて來る稲組が、風邪を引いたので今日一日休むけれども、仕事は遊ばずにやつてくれと稲組の手代が態々言ひに來た。その日が晦日で、俺の月給日なんだ。俺は甕の中で、手足が千切れさうに冷めたいのを耐へ乍ら、液の中に膝まで浸つてゐた。豚の皮が厚いから足で踏まなければ充分染まない。板屋根の上を朝の木枯が助六寺の方から飛んで來る。恐ろしく凍てつく日だ。三輪子は子供を背中にくゝりつけて甕の水を棒の先で掻き廻してゐた。こうしないと媒染劑が鑛物質の酪酸クロームだから、寒さに會つて結晶して困るからだ。稲組の手代が呆れて見てゐるから「どうしたと云ふんだらう！自分が出て來なけれや俺が手足をのべて遊ぶんだと考へて使ひを寄越したんだな。畜生。」と怒鳴つた。すると三輪子が「随分人を馬鹿にしてゐるわね。誰が今時十圓位の端足金で買つ暗がりから水の中へつかるものか。身内だと思へばこそ出來るんですよ。だから心配になるやうだつたら廢めてくれと言へば明日からでも廢めて乞食になつた方がましだとお前さんが言つたら左樣云つて頂戴」と怒り出した。手代が「承知しました」といやな笑ひ方をする。「それはどうでもいゝが、お前さん月給は持つて來たかい」「いゝえ。」「稲組は何ともことづけしなかつたかい。」「いゝえ」「仕樣がないぢやないか」すると手代が御尤もですと言ふ。此奴まで人を食つてやがる。忌々しいから「店へ戻つたら直ぐ金を寄越せと稲組に云つてくれ」とまた怒鳴つてやつた。主人を捕へて稲組々々と呼び棄にする樣子に怖がつて手代が這ふ這ふの體で逃げ出したから小氣味がいゝ。「人の使ひやうも心得ない癖に且那面をしやがつて、左團次め月給はどう

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

する積りだらう。風邪が癒るまで放つとくのかしら」稲姐がほろ醉い機嫌だと「私の顔は左團次に似てゐるってさうだ。さうかね」と嬉しがる癖があつて困る。左團次は見たことがないけれども稲姐の人相は、仲見世の隅に胡座掻いてゐる粂平内そつくりだ。「一體今日をいつだと思つてるんでせう。稲姐が寢てゐるなら今の男に持たせてくれるのが常前なのに、解らない人だわね。こんなことなら始めから來るのではなかつた」それから俺に向つて、また濟みません。濟みませんと詫つたり、妾が進んで來ましたから、妾が責任を引受けて、これから京橋へ一走り行つて金を貰つて來ますと力んだりする。三輪子が心配するのは可哀さうでも、金のことは仕方がない。外は寒いけれど、俺が留守をしなければ客が來ると形がつかぬから出掛けて貰つた。此處で白狀するのも變だが、實の處稲姐は三輪子のお袋の姉の事主だから、早い話が伯父だらう。その伯父がこの有樣だからやり切れないではないか。世間の伯父はどんな風だか知らない。どうせ出來合ひの伯父だ。誂へて拵へたのではないから氣に召さぬことは解つてゐるけれども、稲姐に至つては言語道斷だ。木挽町へ出掛けた三輪子は二時間ばかりたつと、鼻の頭を蕪見たいに赤くして歸つて來た。三輪子は俺の顔を見ると、唇をふる〳〵顫はせた。そして今にも時雨さうに見えた。彼女の話によると、風邪を引いて寢てゐる筈の稲姐が汽車に乘つて、たつた今何處かへ行つて了つたと言ふのだ。何處へ行つたか細君の伯母さんも知らない。けれども遠からず歸つて來るだらうから待つて呉れと言ふのだ。亂暴な奴だ。伯母さんにそう云つて月給を借りて來れやよかつたんだと云ふと、えゝそれも賴んで見ましたけど、晦日の拂ひをして了つたので家には現金が一文もないと云ふんですと情けない顔をした。晦日の支拂ひを知つてる位なら俺の分だつて取つて置きさうなもんだ。不人情な伯母ではないか。すると三輪子が袖の中から餅を五つばかり出して「伯母さんが子供にやつてくれつて、くれました」と云ひ乍ら、土間に突つ立つたまゝ、到頭泣き出した。俺も何だか悲しくなつて來たから、構はない、心配するな、何とかこつちで工夫をしやうと云ふと、それは妾がしませうと三輪子が申し譯ながつた。それにしても三輪子は餅に緣のある女だ。話は例によつてずつと後に飛んで行くが、幾多の足を洗つて本郷へ引移つた頃、右の親指をナイフで傷めて紙でくゝつてうつちやつて置いたら腫れ上つたことがある。何しろ痛くて敵はないから、夜中に目を醒して痛い痛いと怒鳴つてゐた。すると表を通りかゝつた天理教が、痛いと仰けるのは此方かと云ひ乍ら入つて來て、親指の怪我は命にかゝはるから、

明日から私の家へ日參しなさい。そうすれば助かると脅かしたものだ。天理教が神樣のやうな手つきをして惡しきを拂つてくれる。三日ばかり通ふと、今度は親分が現はれて、近いうちに世の中の立替をする。その前に改心しないと天誅を食ふぞと解らぬことを云ふ。一日缺席すると直ぐ呼び出しに來るのだ。そのうちに指の傷は膏藥の效目で癒つた。天理教が御覧なさい教理の功力はそれほど驗かです。そこで神樣に何でもいゝからお上げなさいと怪妙な手つきをするので忌々しいから持ち合せの煙草を上げた。すると天理教がよろしい神樣がお受取りになるでせうと挨拶したが、天理教の神樣も不良少年見たいに秘然煙草をのむと見えて感心した。傷が癒らぬうちは仕事が出來なくて月末に行詰つたから、筋は違ふけれども、どうせ人助けには違ひないと苦しまぎれに天理教へ金を借りに行つた。俺ではない三輪子だ。すると神樣へ金借りに來るのがあんたが始めだと呆れ上つて、可哀さうだからこれでもお持ちなさるがいゝと餅を三つ與れた。借りに行く方も間違つて居るだらうが、世の中の立替をする位の神樣だから、たまには小使錢の立替もしてくれたつてよからう、それつきり神樣の方でも來ないが俺も行かない。兩方で愛相をつかしたんだ。俺はその時分かけだしの原稿屋だつた。

三輪子と俺は間もなく相談をはじめた。貧乏人に泥坊はつきものだと見えて相談の方角は自然にそつちへ向いて行つたから爭はれないもんだ。俺が稻龜の豚の皮を二束三文で草履屋へ賣り飛ばして金を拵へるより他に方法がないと言つた。それが稻龜に知れたらどうしますか。早晩わかることだからと三輪子が心配する。それは大丈夫だ。履物屋から買ひに來たので賣つちまつて代金は月給に鑄込したと云へば文句はあるまいと云ふと、それもさうですがと煮え切らずにゐるから、お前は稻龜の手前體裁つくることばかり考へてゐるんだ。どうでも勝手にするがいゝと云ひ棄てゝ左隣りの三左衛門の小屋へ飛び込んで行つた。三左衛門は一間に閉ぢ籠つて頻りに印傳を拵へてゐた。印傳と云ふのは爪皮にする豚の內皮で、彼はその皮に漆を塗つてゐたが、俺の顏を見ると、稻龜が月給を持つて來たか。あいつは惡漢だから油斷が出來ないぜ。隣りの工場を買ふ時も金を出し澁つて持ち主が困つたつてえからねと言ふ。三左衛門は俺のことも稻龜のこともよく呑み込んでゐる。だから俺が現在の事情を訴へてやると、それ見ろ、彼奴のことだから、やり兼ねるものか、お前さんもあんな惡漢に使はれてゐるより、屠牛場へ行つた方が儲かつて呑氣だよ。惡い智慧は貸かさねえから、そうなせえよと勸める。俺は稻龜を解らず屋だと言ふが三左衛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

門は悪漢だと考へてゐる。若し稲瀬と喧嘩して飛び出すやうな事件か持ち上つたら宜敷お願みしますと返事をした。俺は此男に仕事の口を頼みに來たのではない。三輪子が意氣地ないのと、工場に居れば毎日の掛取りが押し寄せて來るから避難に來たのだ。すると三左衛門が「そうかい。それは結構だ。していつ頃喧嘩をするかね」と喧嘩を待つ樣子だから氣が早い。「月給日に逃げ出す位だから、いづれ喧嘩になるでせう」「そうしたらお神さんや子供を連れて俺の家へ來るんだよ。俺は此通り獨り者で始終外へ出てるから窮屈なことはねえ。解つたかね。なあに心配はないよ。」と俺に同情して親切氣を見せてくれる。「有難うございます。いづれその時は」と云ふと「早くやつちまいねえ」と催促するから弱つた。まさか此處へ世話にならうとは考へぬからいゝ加減な挨拶をして置いた。知らず識らず穢多に近づいて來た故かも知れないが、士族や平民より穢多の方がよつぽど親切で開けてゐる。緣も由緒もない俺をいろ／＼蔽つてくれる。兄弟分のやうな氣がして、心から嬉しかつた。頼もしい三左衛門だと思ふ。やがて三輪子が俺を呼びに來たから行つて見ると、工場の土間に客が立つてゐる。二三週豚の皮を買ひに來たことのある花川戸の千疋屋だつたから、おや／＼三輪子の奴、仕様がなくて客を呼んで來たんだなと思つてゐると、三輪子が俺の耳つ端へ來て「思ひ切つて千疋屋さんを連れて來ましたから三百足ばかり買つて下さい。その代り安くしないと買ひませんよ。」と蒼褪めた時には、俺も流石にどきんとした。愈々泥坊になるのだから、金の方は助かるけれども、あまりいゝ心地はしなかつた。安くしなければ、こつちで頼んだ取引だから買はない理屈も解つてゐる。一足二十錢の皮裏を六錢であげませうと云つた。千疋屋が「ご冗談でせう」と俺の顔を見てげら／＼笑つた刹那には、俺は背中も腹も汗だらけになつた。「いえ。構ひません。何卒お持ちなさい」と一生懸命だ。そうしたら千疋屋が喜こんで「もう百足下さい。なか／＼安い」と云つた。こうなると、もう買つて貰ひたくない。お蔭で二十圓餘り出來たから、ほつとした。泥坊も骨が折れる。苦勞も並大抵ぢやない。それで掛取りの始末はついた。人間と云ふものは横着なもので、首でもくゝつたら、いくらか樂になりさうだと悄氣げてゐた俺も三輪子も、金を見るとがつかりして、「家に居ると稲瀬が來さうで怖いから、一層のこと久しぶりで淺草公園へ行つて見たいわ。花屋敷に臺灣坊主が生け捕られて來てるんですつて」と云つたので卽座に、「よからう」と贊成して出掛けた。溺れるやうな格好をして花屋敷へ行くと、花屋敷の中で人足のやうな說明者が、池の中をステツキの先で指し乍ら、「これだ。これだ。臺灣坊

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はこれだ」と水面を叩くと、大きな泡が、水の底からぶくぶく浮き上つた。その泡の中から小さい赤ん坊見たいな黒い頭が、ぽこんと現はれた。見物人が目を皿のやうにして眺めてゐるところで「さあ、皆さんに海坊主の正體を御覧に入れまあす。えゝ。正體だ。正體とステッキの先で坊主のあたまを持ち上げたら、底に脊のついたゴム細工だから驚いた。すると説明者が「世の中の物　皆こんなものでありやす。うつかりしてゐると騙されやす」は不埒なことをする奴だ。このまただと今にナポレオンの幽靈が出やした出やしたと人をだまして木戸錢を取つて見せるかも知れない。淺草公園も恐ろしいところだと思つた。皆憤慨して出て了つた。俺も行き處がないから氣味の惡い工場へすご／＼引返して了つた。横着なことは俺よりずつと上手だ。

翌日稻組が夕方頃やつて來た。そして「疑つたことはないかね」と云ひ乍ら、小屋の中を疑り深い目つきで、ぐる／＼見廻したから、俺はひや／＼してゐ　。豚の皮を買つた話はこつちから言ひ出したものか、尋ねられてから、實はそうだと白狀したものか思案に暮れてゐる處へ「昨日は有難うございました。仲間に見せると大變安い　でまた少しばかり分けて貰ひに來やしたが、あれぢやあんたの方も御損だらうから、一足についてもう二錢奮發しませう。」と云つて千疋屋がづか／＼這入つて來た時、俺も三輪子も到頭最後のどんづまりへ衝き當つて了つたやうに、返事も出ないで稻組の顏ばかり見詰めてゐた。運の惡い時はこんなものかも知れない。默つてゐる譯にも行かないから、事情を簡單に饒舌つた。體内が火のやうに熱くなつた。そうしたら俺に負けないやうに稻組が熱した顏に、みゝずのやうな筋を立てゝ怒鳴り出した。事が露顯しないうちは、始終はら／＼したが、こうなると人間は案外膽が座つて落ちつくものと見える。「風邪を引いても家に引つ込んで居られないほど忙しい用があつて、ちよつと濱へ行つたんだ　俺が戻るまで待つて居ればいゝぢやないか。お前達の食ひぶち位なら一日や二日待つたつて構はないだらう。」「構はないことがあるものですか。この邊は京橋あたりとは違つて何でも現金なのを、やつと頼んで月末拂ひにして貰つて、その月末に一文もないと云へるか云へぬか考へて御覧なさい。それにあなたが何處へ行つたのか、いつ歸るのか解らないやうな話だから無理はないでせう」と我ながら珍らしいと思ふ位まくし立てた。すると稻組が一層怒り出した。「そんな馬鹿なことがあるものか。」「あるもないもあるものか」すると三左衛門が飛び出して來て、「それや稻松さん、あなたの方が無茶だ。」と云ひ乍ら、やれ／＼とけしかける樣子をした。三輪子は怖いと見えて外へ出て行つた。「お前さんは一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

體此處へ何しに來なすつた」と稲貂が凹まされて口惜しさうに今度は三左衞門に喰つてかゝつた。三左衞門もこれには參つたと見えて「あんまり八ケ間敷いから來たんだ。ちつと靜かにして貰はぬと家には病人があるんだから迷惑する」と云つたから、餘つ程苦しいと見えた。それから、のこ〳〵出て行つた後で、「そんなに一日や二日位の勘定があるのか」と稲貂が訊くから、見せたくはないけれども、米屋と酒屋の勘定を出して見せると「十七圓六十錢と云ふのは酒か」と目を見張つた。「酒と醬油　酢と鹽です」「それにしても多過ぎるぢやないか、好きなものを廢せとは云はないけれどもこれぢや多過ぎる。月給よりも酒代の方が多いぢやないか」稲貂は悧巧な奴だ。酒代を楯に取つて俺をやり込めやうとするのだ。卑怯な男だ。俺は談判が下手な上に氣が短かいから、同じことを何時までも冗々と繰り返して居られないから、「豚の皮を無斷で安く賣つたのは重々悪いと思つて詫ります。そしていづれ損害は賠償する積りで居りますが、酒でも飲まなければ、こんな埃溜に一時間だつて生きてゐられやしません。飲んで悪ければ、今日限り暇を貰ひます。」ときつぱり云つてやつた。「暇を貰ふのはお前の勝手だが、此處を出て了へば行き場もないし、食ふに困るだらう。そんな強情なことを云ふもんだからどこでも失敗るんだ。」と飽くまで癪に障る奴だ。「大きにお世話樣です。行き場がないか食ふに困るか、見てお出なさい」と云ひ乍ら、荷物を掻き集めて三左衞門の小屋へ駈け込んだ時は、無我夢中だつた。追つかけるやうにして「お前は眞個に出て行くのか！　それは約束が違つてる。あんまり無責任だ！」と土俵際で齒喰つてゐた稲貂が叫んだのも、ぼんやり覺えてゐる。三輪子はもう一足先に三左衞門の小屋に落ちついて子供に乳をのませてゐたから手まわしのいゝ女だと思つた。三左衞門は昔の軍人だから「萬歳！」と叫んだ。手足がわくわく顫へるのを我慢して三左衞門に禮を云つたり、改めて世話を頼んだりしてゐると、壁越しに稲貂が、ぶつ〳〵ぶつ〳〵何だか口走る聲が聞えて夜になつた。すると三左衞門の小屋の入口までやつて來た稲貂が恨めしさうに俺を見て、「出るなら出るで構はぬから、今夜一晩だけでも留守をして貰はないと困る」と云ふのだ。「大丈夫です。豚の皮なんか誰が盗みに來るものか」と云つたら、もう駄目だと諦めたらしかつた。「いづれ、この處置をつけるから」と云ひ殘して行つて了つた。京橋へ戻つたのだらう。いゝ氣味だとは思つたが、あとから、何となく稲貂が可哀さうにもなつたし、俺達の立ち場を考へて見るとまた心細くもある。これも因緣だから仕方がない。俺は物ごとに深い考へを持てない質だ。その代りどんなことでも直ぐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

諦める。「お前の着物も子供の着物もこの分ぢや急に買へないぜ」と云ふと、三輪子が「えゝ着物なんかどうでもいゝんです。古いので間に合はせますけど、これから仕事がきまるまで、あなたも大變だし、こちらも厄介なことでせう」と涙ぐんで居た。そしたら三左衛門が「心配がいるものかい。お前さんは明日から屠場へ行けや其日から金になるし、お神さんは橋場へ鼻緒のツボヌイに出りや小使ひ錢にとれるさ」と呑氣に構へてくれた。こんな事情で、俺は未だ曾つて俺の先祖が試みたこともなければ豫定した話も聞かぬ半殺しになるべく餘儀なくされた。俺は宿命論の信者だから、何でも因緣だとあきらめる。水素と酸素と化合して水になるのも因緣だ。酒代が十七圓になるのも前世の因緣だ。俺の思想は斯の如くに簡單であり明瞭である。元來貧乏人にさう大して込み入つた考へがあると思ふのが間違つてゐる。朝から晩までどうしたら腹一杯になるやうに食へるかと云ふことばかり考へてゐる。どんな金持ちがその邪魔をするか。どうしたらその金持ちを叩きのめすことが出來るか、只そんなことばかり考へてゐる。思想と云へば、後にも先にもこれだけだ。然し乍ら、それは俺自身の思想で、他人の哲學ではない。本なんか讀んで居る奴を見ると、彼奴は何だつて、あゝ馬鹿だらうと可哀さうになる位だ。俺は三左衛門の小屋で穢多になる覺悟をした。三輪子が、今度もまた濟みません濟みませんと云ふた。穢多の得度式は中山小納言がやつてくれることになつた。けれども惡漢の稻垣との關係はなか〳〵切れないのだ。こつちにも稻垣にもまだ未練があつた。この妙な未練は彼が豚の皮でひどく損をして、二三萬圓の借金が、どうしても返へせないと決つた晩に工場の中で、咽喉を突いて死ぬまでつゞいたのである。それは、まだ大分先のことになる。

二

印傳屋三左衛門は妙な男だ。厄介になる晩に振舞ふものがないから三河屋から酒を五合買つて、お上んなさいと言つてやつた。すると三左衛門が喜んだ。俺と二人で冷たいやつを茶碗で呷つてゐるうちに三左衛門が酔つ拂つて、「道は六百八十里。離れて遠き滿州に。」と軍歌を叫び出した。彼は上等兵である。歌がすむと日露戰爭の手柄話を始めて、盛んに露西亞の兵隊をやつつけてゐる。露助が露助がと。まるで子供見たやうな扱ひ方をする。それからこれは私の秘密だと云つて古い行李を押入から引き摺り出して見せた。何が入つてゐるのかと思ふと、李鴻章の掛卷と二尺ばかりの大きなピストルだから少々意外だつた。これが戰利品ださうだ。日露戰爭に出掛けて李鴻章の掛卷を土産

に待つて來るほど彼は時代を超越してゐるのである。ピストルに至つては鬼ケ島と寸分違はない。それでも手柄になつたと見えて白色の桐葉章と百圓の恩給證書を見せてくれた。察するに殺したり殺されたりする方の係りではなくて、奉天や旅順あたりの後始末を擔當してゐたのかも知れない。その時どこかで見附けたものだらうが、李鴻章の寢卷にしては小さい上に、地が眞つ赤で腹の上にシユーマイ見たいな太鼓判が捺してあるから、多分李鴻章が小學校時代に着たものだらう。それが濟むと今度はお前さんも景氣よく何か唄ひなせえ。稻鄕が膽を潰すやうなデカいものを一つ聞きてえなと所望をする。俺は元來が藝なし猿で、人がやるのを聞くのは好きだが、自分ではやれない質だから一寸困つた。尤も追分やステンカラージン位なら、曲りなりにやれないこともないけれど、相手が在郷軍人で道が六百八十里しかないのだから、なまじつか能つぽい處を聞かせて、お前らしくもないと笑はれては面目に係る。だから俺が思案した。稻鄕の言ひ草ではないけれども、此際俺の立ち場として三左衛門をよろこばせるに限ると考へた。俺は向見ずで喧嘩つ早い弱點こそ持つてゐるが、時にはこうした殊勝な心掛もある。然しどんな時に喧嘩して、どんな時が馬鹿に溫順しくなるのか自分でも見分けがつかぬ。多分虫の居處によるのだらう。そこで

俺は三橋子が赤い顏をしてくす〳〵笑つてゐる前で、大聲を張り上げて「黄金銷鑠素絲變。一貴一賤交情見」と唱つた。すると三左衛門が「勇敢だねー」と拍手したかと思ふと、その文句はどう云ふ意味かと質問する。だから俺は「人間は貧乏して居なければ他人の友情なんてものは解るもんぢやないと云ふことです」と說明してやると、「さうだとも。お前さんはなかなか苦勞人だ。だが、その文句はお前さんの發明かね。」と妙なことを云ひ出したから、俺の句ぢやない駱賓王だと答へたら、「左樣だらう駱賓王だらう」と友達のやうな氣安い挨拶をした。「要するに人物だね、なか〳〵隅に置けない。」と駱賓王を無暗に賞める。そうかと思ふと、お前さんの仲間かねと云ふから持てあました。冗談にでも左樣だと返事をすれば、この流義で、それぢや俺にも紹介してくれと云ふかも知れぬ。駱賓王がよろこんで唐詩選の中から禮を述べるだらう。この三左衛門の家に來た翌日から中山小納言に引つ張られて眞個の穢多になつて了つた。屠牛場といふところもはじめて見たが、一口に云ふとフランスのバスチョンを手輕に行つたものである。森羅萬象すべて己れに異ふものは是を疑ふと禪の本に書いてあつたが、成る程禪坊主もたまには眞個のことを言ふと思つて感心した。詩人が歌よみを捕へて貴樣は文人でないぞと云ふやうに、小說家が詩人を捕

へて貴様は文學者でないぞと云ふやうな鹽梅に、牛殺しの穢多共が俺を見ると、手前見たやうな生つ白い奴の來る場所ぢやねえ、と云ふ風に構へて、碌々物も云はなかつた。それが二日ばかり通つてゐるうちに、段々獸臭くなつてきた。だから俺も穢多になり澄してやつたのだ。

い丶道づれが出來たと思つて、小納言が毎朝印傳屋に俺を誘ひに來る。屠牛場へ行くには吉原土手を拔けて、箕輪の終點へ出て、そこから田圃づたひに五六丁ばかり北海道の方を向いて行くと、右側に黒塗りの門があるから直ぐ解る。穢多町から凡そ一里もある道中を小納言が頻りに饒舌つたり小便をしたりするが、何のことだかさつぱり解らぬ。俺の言ふことも小納言には耳遠いらしく思はれた。屠牛場の近くまでやつて來ると四方八面から牛の洞聲がモウ〳〵と聞える。田圃の中をぞろぞろ曳かれて殺されに行く畜生が俺達を恨めしさうに睨むから怖かつた。牛の鳴聲は長閑なものだと俳句の本に書いてあるが、あてにならぬと思つた。右からも左からも牛飼に引つぱたかれて集つて來る牛が、屠牛場の入口で一暴れ暴れる。それからすつかり觀念したやうにすご〳〵と入つて行く。すると人夫共が片つ端から尻に燒印を捺すのだ、俺と小納言はバラツク式の控場で、血糊と脊でどろ〳〵に汚れた襯衣と、黒光りのする股引を佩いて、鋭い尖の鐵の棒を一本さげて、セメント塗の池へ行く。池と云つたところで、水も何にもない四角四面な窪みだ。その周圍に燒印のついた牛が引出されて列ぶやうに出來てゐる。屠られた牛の首と手足とが池の中へ落ちて直ぐ一杯になるけれども、翌朝行つて見ると、この通り綺麗に磨き立て丶ある。小納言は部屋頭だから何にもしないで煙草ばかりふかして居る。然し乍ら有り難いことには、小納言のお蔭で俺は一番たやすい仕事をしてゐるのださうだ。俺の仕事は牛の命を絶つことだ。「お前さんの役が一等樂だぜ」と小納言は口癖のやうに言ふから、もつと怖ろしい役割があるのかと思つて驚いたことがある。俺は何が怖いつたつて人間でも牛もで、殺すことより怖いものはないと信じて居つたが、此處へ來ると、これが一番樂なのださうだ。池の前に立つてゐると、古參の仲間が牛を引き摺つて來る。いやな臭ひがするものだから、牛でも感づくと見えて一生懸命に逃げやうとする。十人ばかりの穢多共がとびかゝつて行つて無理往生に押へつけたかと思ふと、瞬く間に棒杭へ縛りつけて了ふのだ。その手際の鮮やかさにも感心したが、自分の前に廻されて來る牛が、よぼ〳〵の老寄だと、何だか國に置いてある祖母のやうな氣がして、張り詰めて居る力が拔けて了ふ。屠牛人が揃ふて牛が列ぶと、小納言が旅團長いやうな顏

つきで號令をかけるのだ。その號令で鐵の棒の一齊射撃がはじまる。頭の上に振りかざしてゐる二貫目ばかりの鐵の棒に五臓六腑が引つくり返へるほど力をこめて置いて、畜生の眉間に打ち込む。牛の方では死んだ氣になつてゐるだらうが、やつつける俺の方でも生きた心地がない。牛の眉間に鐵砲の丸のやうな穴があいて二分間ばかり血だか何だか見分けのつかぬ眞つ黑い溫湯が毛の根をわけて俺の體に飛びかゝつて來る。眼をつぶつてゐると、額から首へかけて、べと／＼流れて來るが、世の中に此位氣味の惡い商賣があるものか、迚も凝乎としてゐるわけには行かないのだけれど、逃げ出すこともならぬから、わく／＼してゐると、大抵の牛は目がくらんだ拍子にセメンの上に堂と倒れる。倒れる時妙な目つきで俺を見て行くのが一日忘れられぬ。あつちでもこつちでも倒れる音が聞える。その度に屠牛場の屋臺骨が地震のやうに搖れるから凄いものだ。そこへ大隊長格の仲間が鉞を持つて來て、牛の首と手足をごり／＼斬り放して池の中へ蹴込む。次に腹を突き破つて、じりじりじりじりと乳房から肛へ引き裂くのだ。

「さあ仕事はすんだ。一つ手際よく皮を剝いでくれ。少し位肉をつけとかないと上前が出ないぜ。」と云ふのだ。首と手足のない胴體ばかりの牛の前に、がつくり膝ついて、腕まくりし乍ら、首元から背中へかけて、厚さ一寸もある肉つきの毛皮を剝ぐのであるが、了ひには手の指が利かなくなつて、死んだ牛の前で、何だつてこうまで厄介をかけるんだらうと泣きたくなるのだ。人間は食へなくなると色んな發明をするものだ。小納言の說によると、皮を剝ぐのが樂みださうである。毛皮に赤い肉がくつついて來る。それを削つて秘々家へ土産に持つて歸ると女房や子供が喜ぶし、餘つた奴を土手のめし屋に賣れば吉原へ一晩通つて來られるさうだが、妙な役德もあるものだと思つた。

「だが、こいつも馴れねえと矢つ張り旨く行かねえもんだ。」と笑つたがそんなことに馴れてたまるものか。人間も此の邊まで悟つて了へば大したものだ。世の中に汚ないものや怖ろしいものもなくなつて了ふだらう。俺はこんな修業を三日ばかり無理にやつたら、手の指がまるで利かなくなつて、茶碗も箸も持てなくなつた。その三日目に、七兵衛が控所で、俺の體を洗つて戻るのを待つて居た。七兵衛と云ふのは、三河島の靴工場の親方で、内職に屠牛場の取締もやるから、毎日此處へ通つて來る。穢多の仲間内でも顏役らしい五十年配の慾の深さうな男だ。その七兵衛が俺を捕へて「濟まねえが丸の中の帝國ホテルまで行つて呉んねえか。困つたことが出來たんだ。」と數珠を一本くれた。大手丸の内の帝國ホテルと云ふ所ではないのだ。「お前は隨

西亞人だつたつけな。さうだつたつけ。そこで一つ頼みてえんだ。」と出し抜けに獨りで饒舌つた。何のことだが、落ちついて譯を聞くと、何でも帝國ホテルに泊つてゐる露西亞の將校があつて、露西亞政府が日本の政府へ軍用の長靴を註文するための出張人ださうだ。その長靴製造の下請を七兵衛が命ぜられたに就いて、一度註文主の將校に會つて先方の希望を充分聞いて置かないと、拵へ上げてから兎や角ケチでもつけられちや往生だと云ふのだ。「何しろ俺の工場で引受けた數だけでも二千足あるんだからね」と云ふのだ。そこで俺を引つ張り出して通辯させる魂膽らしい。「一つ俺と同道して貰へめえか。禮はするよ。」とまた敷島を一本くれた。狂犬ではないけれども何か來たら食ひつかうと構へてゐる矢先だから、行かないこともないと勿體つけた。すると七兵衛が、にこ/\し乍ら、「有難え。それで助かつた。禮はするよ」と念を入れた。そこから七兵衛と一緒に出掛けるからと小納言に斷つて帝國ホテルへ行つた。髯武者の將校に會ふたら「お前が靴屋か」と俺に言ふのだ。面倒だから「左樣です。この人が主人で私が職工です。今度は有難う」と云ふた。將校と俺と七兵衛が玄關から衝き當りの箱庭見たいな飾りつけの前に長椅子を引寄せて俺を眞ん中に三人は座つた。目の前に日光で見た陽明門のやうた奇妙な社が造つてあつた。將校が何か云ふ度に、此奴は一體どこの人間だらうと云ふ風に俺の顔を不思議がつて眺めた。靴の話を一一書いて居れば日が暮れるから止める。尤も鼻から尻まで他愛もない話ばかりで、この將校も露西亞政府の代表者の癖に、靴の智識は俺の半分もないらしいから可笑しかつた。お了ひになつてから「お前の工場には職工が幾人居るか」と云ふ。七兵衛に取り次いでやると、「さうだね。百人位だと言つてくんな」と言ふから、百人でございますと答へると、「それは珍らしい。露西亞には職工を百人使ふ工場は一つもない」と感心したから、その旨を通ずると、七兵衛が「あゝ左樣か、見かけに寄らねえ國だな」と呟くから、あんたの工場には眞個に百人居るのかと聞くと、さうさな、二十人位は居るだらうと平氣な顔をした。大きな法螺吹だ。「俺シチの靴は五二共進會で一等賞を取つたから、出來は確かなもんだぜ」と七兵衛が自慢をする。古い共進會だ。將校はそれは結構だと喜んだ。「兎に角出來上つたら一應檢分に行くから、その時は試驗のため靴を切つて見るが、一足位なら構はないか」と言ふ。「一足位なら仕方がねえ」と七兵衛が浮かぬ顔をした。物云ふ度に、この毛唐がと云ふから、癪に障る。禮儀のない親爺だ。さうかと思ふと、今度は將校が俺に向つて「靴なんぞ拵へないで、俺の處へ通辯に通つて來ないか。その方が餘つ程割がよ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くて綺麗だよ。」と言つた。「私はこんな汚ない風采こそしてゐるが、まだ通辯やタイコモチにしません。七兵衛とは知り合ひだから親切に來てやるのです。」と言ひ乍らホテルの玄關に立ん坊然と構へ込んで、西洋人が引つかゝるのを待つてゐる商賣人の通辯共を、顎の先で、しやくつて見せたら、妙な顔をしたが、揃ひも揃つて失禮な奴ばかりだ。俺は嘗て一度京都で困つた時にも、お前さんは神戸で通辯になるがいゝと勸められたことがある。よく／＼通辯面に出來てゐると見えるから悲觀する。歸りがけに七兵衛が須田町の交叉點まで來ると、みよしのゝ汁粉を奢つた。俺は甘いものが嫌だ。遠慮をしてゐると、「お前にも似合はねえ。どん／＼やりねえよ。」と意地の惡い氣前を見せる。それでも、あとで勘定したら六杯食つてゐたから損はないと思ふと大違ひだ。今に呉れる呉れると云ふ禮をくれるだらうと、實は心待ちにしてゐたのだ。いくら呉れるか知らないが、三輪子と子供の袷位はそれで出來るだらうと、そればつかり考へてゐたら、どうしたのか機多町へ戻るまで、うんともすんとも云はない。俺はひどく氣を揉んだ。愈々七兵衛は三河島へ、俺は飯岡町へ別れる吉野町の停留場まで來ると、「いやどうもご苦勞だつた。あつちへ遊びに來たら、俺ンちに寄つてくんな」と云ひ出して、さつさと行かうとするから、もう默つて居られなくなつて、

「渡邊さんすみませんが、こまかいものを十圓ばかり貸して下さい。今困つてますから」と一生懸命で云つた。お禮の催促をするのは、これが生れてはじめてだから、自分でも淺ましくてならなかつたが、仕方がない。まるで乞食だ。ところが、七兵衛は、ちよつと立ち止つて、これは意外だ、と云ふ風だつたが、「あ。さうかい。お安い御用だ。」と氣安く五圓札を一枚出してくれたから、救はれたやうに喜んでゐると、「ぢや、いつでもいゝから證文を書いてくんな」と云ふのだ。貸せと云ふたから、本氣に貸すつもりだらうかと思つた。「受取つたと書けばいゝんでせう」「いや借用仕候と書いて判をつくんだよ」と云ふ。「だつて返せる見込みがないんですぜ。」「それは構はないよ。居小場の方から給金で差引いとくから。」愈々悲運な貸は握り潰して了ふ氣だから俺は五圓札をいきなり地面へ叩きつけて、「馬鹿。お前は嘘つきだ。」と怒鳴つた。通行人が、喧嘩だと間違へてぞろ／＼集つて來る。七兵衛はシヤムから渡つて來た象のやうな目をぐる／＼動かして呆れてゐる。恐ろしく察しの惡い奴だ。こんな意地汚ない喧嘩は俺の方で御免蒙りたいが、相手が相手で、人を欺して知らぬ顔をするから止むを得ないのだ。「どうしたえ？」「どうするもんか。腹が痛いて三河島から歸つたら寢やうと思つてゐる所を、只ではないと云ふから辛棒して一緒に行つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てやつたんだ。でなければ面白くもない。誰が行くものか。もう金はいらぬ。その代り、これから先どんなことがあつたつて、お前の用なんぞ足してやるものか。顏を見ろ」と俺は人を分けて、さつさと穢多町へ駈け出した。體は痛いし、腹は立つし、涙がぼろ〳〵こぼれて、一日腹が立つて仕様がなかつた。惡い奴に引つかゝつたものだ。七兵衞のやうな亂暴な男がゐるから穢多は人に嫌はれるのだ。然し乍ら、あれほど手酷く言ひ込めてやつたから、いくらか殊勝氣を出して、小納言に金でもことづけてくれるかしらと云ふ氣もしたが、到頭小納言は五圓持つて來なかつた。あんまり馬鹿々々しいから見つともなくて三輪子にも話が出來ない。云つて聞かすれば、それごらんなさい、あなたは人間が輕々しいから、そんな奴にまで舐められんですと、あべこべに冷かすだらう。

金を借りに行つて斷られたことは何遍もあるから左程痛切に感じないが、こんな風に一杯喰はされると何事によらず腹が立つ。俺の記憶もあんまり當にならぬけれど、だまされたのは七兵衞で加へて合計三度になるやうだ。一一擧げて説明するのも業腹だが、先づこうである。俺が尋常一年生の時分に、鎭守祭があつて緣日が始まつた。緣日の露店に玩具屋があつて十五錢の鐵砲を賣つてゐた。それが欲しいから今國元に殘してゐる祖母にねだつて買つてくれと云つた。俺の家は代々貧乏なのだ。それに拘はらず祖母は俺の願ひを聞き屆けてくれて、緣日の露店まで來てくれた。玩具屋の亭主がぺこ〳〵頭を下げたから得意になつて見せると、祖母は「これか、これか。よし〳〵」と云ひ乍ら袂から金を出す風をしたかと思ふと、その鐵砲を逆さまに持ち替へて、俺の尻をまくるや否や、つゞけざまにピシ〳〵引つぱたいたから、見物人も亭主も俺も呆れて物が言へなかつた。も一つは、京都にゐる頃死んだ母親の命日に一人の西國巡禮と出會つた。それは五十歲位の男だつた。母親は俺を生んだゝめに死んだのだから氣の毒のあまり命日だけは謹んで禁酒する位だ。俺は巡禮に「お前さんはこれから四國へ廻んなさるのか」と尋ねた。「さうだんね」と巡禮が答へた。「眞個かい」とも一度念を押した。「ほんまだんね」「それぢや、すまないけれども、お前さんにお賽錢をことづけるから道中のお寺に上げてくれないか。寶登明蹊信女南無大師遍照金剛と云つて拜んで貰いたいんだよ。その代りお前さんに草鞋錢を上げる」と云つて一圓札を一枚に五十錢を一つことづけたら、「ようおます。引き受けま。安心しなはれ」と云つたから安心したが、三日ばかりしてから京極の近邊を電車で通つたら、この男が橋の上を荷車曳いて歩いてゐたから驚いたことがある。馬鹿を見たものだ。巡

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

禮すると金が溜るといふ話を聞いたが、成る程これぢや儲る筈だと思つた。

　三輪子は三左衞門のきもいりで、橋場へ鼎緒のツボヌイに通つて、夕方になると頭から足の爪先までヱナメル臭くなつて戻つて來る。それで女だてらに五十錢の稼ぎになるから偉いと云ふと、「子供がなければ、一圓五十錢位は樂なものですがね」と慨歎する。

「それぢや俺もそつちへ行かうか」と云ふと「男の手ぢや迚も駄目ですよ。針で鼎緒を縫ふ仕事ですからね」と笑つて受付けない。この晩、[illegible]は來ないと見えて、隣りの工場はひつそりしてゐた。俺は「アンマ膏」を體一面にぺた〳〵貼りつけてゐた。三輪子は六疊の部屋に赤ん坊を寢かしつけてゐた。次の部屋は三左衞門が外へ出たつきりでまだ戻らぬから、寒氣が漲つてゐた。俺も三輪子も口を利くのが大儀で默つてゐた。そのうちに三輪子が、「あなたちよいと赤ん坊の襟を見て頂戴。白い水玉のやうな粒々が、綺麗に列をつくつてゐますよ。」と目を見張つて見せる。成る程、粟粒ほどの玉が珠數つなぎに赤ん坊の襟から着物の胸まで列んでゐると思つたら蝨の卵だから驚いた。蝨の親は見たことがあるけれども、卵は始めて拝見する。「これや蝨だよ。大變々々」と云ふと三輪子が鐵砲の丸のやうに丸くなつて跳び上つた。話がごた〳〵して解り難いと思ふから乞食の達磨爺のことを[illegible]と略いて置いたが、どうでも此爺さんにこの邊で出て貰はないと筋が通らぬやうになつて了つた。だから突然でも乞食の老爺を引つ張り出すことにした。この乞食は大久保藤八の表口の草原に茣蓙敷の世帶を持つてゐる七十あまりの達磨見たいな蝨だらけの老爺だ。朝から晩まで仕事がないから蝨ばかり取つてゐる。風が吹くとその蝨が振り落されて空に舞ひ上るのだ。この老人が蝨の卵を爪の先で、ぷつ〳〵と潰してゐるのを毎度見受けてゐたから、俺はそうだと氣がついたのだつた。卵に取りつかれたのは全く以てこれが皮切りである。

「一體どうしたらいゝでせう」と三輪子が泣聲になるから「一つ一つ潰して了へ」と云つた。一匹のこらず殺して了ふまでに三十分かゝつたから馬鹿にならぬもんだ。然し乍ら、考へて見ると、いくら血を分けた蝨でも姿を見ると憎らしいが、卵は流石に可愛いゝものだ。詩人に見せたいものだ。詩人が見たら乾度詩をつくつて蝨に捧げるだらう。崖の上から悩ましげな首を垂れた妖女の瞳が碧い淵の水底に映つてゐる。投槍の如き瞬間の閃めきよ。銀蛇の如き顫へる光よ。おゝ我憧れの優曇華の蕾か蝨の玉子よ。などゝ言ふかも知れない。願はくは我頸に來り縋りつけと了ひには蝨の卵と心中するかも知れないほど麗はしい光

澤のある楕圓形の滑らかな玉だ。三輪子が赤ん坊の方を退治してゐる。俺は自分の着物を調べたが幸にして一匹も居なかつた。「どこからついて來たのでせう。」「さあ。ひよつとしたら家の大將かも知れないぜ。」「困つたもんですね。」「仕樣がないよ。穢多になつた證據だらう。牛殺しになつて蝨がついて、今に赤ん坊が大きくなつて穢多の家から嫁を貰へは、三拍子揃つて目出度いぜ」すると三輪子が「冗談ぢやありませんよ。いつまでこんな處にゐるものですか。」とむきになつた。いつになつたら泥足が洗へるか今の處まるで見當がつかぬと思つてゐた。ところが、妙なきつかけから、その晩原稿をかきたくなつた。「豚の皮で草履をつくる金儲けの方」と云ふ原稿なんだ。何處かの雜誌屋へ持ち込んで買つて貰はうと思つた。あとで考へると、この原稿を七圓で買つてくれた「實業之世界」の背の短い口髭のちよんぼりした男が野依秀一だつたから可笑しなもんだ。その晩、三左衛門が醉つ拂つて戻つて來た。俺の顏を見るや否や「景氣はどうだい」と肩を怒らせて見せた。「どこで飲んだんです。」「三河屋さ。あすこの親爺は物が解つてるよ。何しろ軍人だからね。俺が今朝勳章を質入れに行つたら、質屋の野郎話せねえ奴で、今までこんな物はお預りしたことがござえませんからお斷り申しますと吐しやがるぢやねえかよ。癪に障つたから、手前達やこの勳章を何だと思つてやがるんでえ。命と引替へにお上から貰つたんだ。流すやうなことはねえから取つて呉んねえ。でないと資本が切れて仕事が出來ねえと云つたが、やつぱり預つてくれねえから、畜生覺えて居れと云つてやつた。一日ぶら〱遊んで、さつき表の酒屋の前を通つたら飲みたくなつたが、文なしだから勳章を質に一杯貰ひてえと云ふと、お前埒もねえ。勳章は何だと、あべこべに向ふから劍突食はせやがつた。三河屋も一つ持つてやがるんだ。それで酒が飲みたけれやいくらでも飲んで行け。お互に戰爭ぢや生きて歸られねえつもりだつたぢやねえか。命があつて見れや拾ひ物だ。お前の命も俺の命も拾ひ物だとよ。遠慮はねえ。兄弟分だと吐しやがつてね。この通りあすこの親爺は偉えだらう。」と云つて了つたかと思ふと、伽藍堂の部屋に引つくり返つて、勳章は土間へ放り出したまゝ、寢て了つた。「酒呑みつてこんな氣樂なものでせうか」と三輪子が感心して眺めてゐた。「大將仕事の金を飲んぢまつてやりくりがつかないものだから、勳章迄持ち出したんだね。」「妾達に金があると何とかして上げるんだけど、この有樣ではあべこべだからね」此處で發奮して、この恩人の三左衛門を助ける考へでも起せば、形だけでも立派な芝居になりさうだが、生憎さう面白く行かないから困つた。今に三左衛門が寒さに顫ひ上つて目を醒ま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

したら、思ひ切つて七兵衛の一件をぶちまけて、五圓でも二圓でも七兵衛から引つ察れと勸める積りで、火のない火鉢に獅咬みついてゐるうちに、ふつと、原稿を拵へて賣る氣になつた。そして三輪子には内證で、到頭夜あかしで半紙に十枚ばかり繪入りで書いた。「金を儲ける法」と云ふのは後で實業の世界がつけ加へたのだ。俺の原稿は只「豚の皮の新考案」と云ふのである。今に目をさますだらうと思つた三左衛門は呑氣さうに風邪も引かずに夜明けまで鼾を掻き通しに掻いてゐた。屠牛場の方は體が痛いのを口實に一日休むことにした。そして、三輪子にも三左衛門にも斷らずに、原稿を懐ろに入れて有樂町まで歩いた。

稻垣は工場に來ないやうだ。

穢多の原稿だから「實業之世界」なら買つて呉れるだらうと思つたが、元來こんな商賣に經驗がない。博奕打ちには博奕打ちの禮儀作法がある。猿廻しには猿廻しの禮儀作法がある。原稿を書けば文士になるが、文士の禮儀作法を辨へぬから「實業之世界」へ行つてからさて何と言つて談じ込んだものか途々考へた。考へないと智慧が出るが、考へ込むと碌な智慧が出て來ない。原稿を賣るのに智慧も才覺もいらぬではないかと言ふ人もあるだらうが、なか／＼さうではないのだ。俺のやうな無名の男が、正々堂々とした文章を見ず知らずの人間に押しつけて賣るためには、何とか然るべき挨拶をつけて罷り出なければ、鼻から受付けないことが解つてゐるのだ。食へば多少でも腹の足しになる飴を賣るのでさへ朝鮮人は馴れぬ日本語で碌ぶしの一節も唄つて聞かせるではないか。況んや、世の中に何が不用だと言つたところで文士の作文ほど不用な代物はないと考へてゐるものを、誰が、おいそれと引受けて呉れるものか。そこで向ふへ行つたら、せい／＼お世辭を並べて置いて、俺の原稿が金になるやうな饒舌り方をするに限ると考へたが、俺はお饒舌りが生憎へたである。饒舌ることがへただと自慢をする譯ではないけれども、兎に角へたであることは大正八年になつてやつと世間が認めて呉れた。ある時早稻田大學の學生がやつて來て、學校で講演をしてくれと云ふから、よろしいと一言の下に承知した。ところがその出掛る前の日に少々飲み過ぎたゝめに、演壇に立つて諸君と云ふたら口が辨つて、いきなり吐いて了つた。すると五百人ばかりの聽衆が餘程氣に入つたと見えて一齊に拍手した。講演はそれでお了ひである。吐くのは苦しいが、お蔭で拙い話をせずに事件が落着したかと思ふと嬉し涙が零れたことがある。俺はその位お饒舌りが不得意である。だから心配するのも無理はなからう。止むを得ないから有樂町の郵便局で電報の紙を買つて裏に要件を書くことにした。「拜啓此

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

原稿は先人未發見頗る奇拔なるものにして興趣湧くが如き中に行讀自ら世益を增進することと夢疑ひなきのみならず、坊間にありふれたる類と選を異に致候」として、だから是非買ふ必要があるやうな文句をつけ加へた手紙を「實業之世界」社の受付に頼んで編輯者へ渡して貰つた。女給仕が「一寸お待ち下さい」と云ふ。俺は戰々兢々として待つてゐた。すると學問のなさゝうな洋服の男が出て來て「やあ。あなたが大泉さんですか。僕は小田吞舟です。何卒二階へお上り下さい。御要件は承知しました。」と言ふ。背が低い上に氣も尻も輕さうな男だが、小田吞舟とは人を脅かした名前だ。然し十中八九が體よく斷られて三里の道を淺草へ逆戻りの憂目を見ねばなるまいと覺悟してゐた處だから、二階へ上れと言はれたときは流石に嬉しかつたり面喰つたりした。原稿が物になりさうだ。ところで話はいさゝか贅澤のやうであるが、この寒空に足袋も穿かずに羽織も着ずに、つんつるてんの給一貫で、編輯者へお取次もないものだと言ふ風に給仕共が顏を見合せて、よろしければ何時でも噴き出しさうた目つきをし乍ら俺を眺めてゐる。その給仕共が年頃の娘と來たから工合が惡いのだ。何が役に立つか解らぬと云ふ言葉があるだらう。よく出來たもんだと思つた。七つ八つの頃、祖母に連れられて乳母の家へ遊びに行くために汽車に乘つたことがある。何しろ人並外れて脚が長い方だから、汽車賃も大人並に取られると思つた祖母が、出札口で「もちつと蹲め」と言ふた。その邊は俺のことだから百も二百も心得てゐる。その通り蹲んでゐたら後ろに立つてゐた巡査におこられたことがあつた。けれども、こんな時は脚の長いのも調法だ。梯子段を一度に五段ばかり跨いだら、二足目には二階へ上つてゐた。二階は二間ある。一つが編輯室で一つが應接室になつてゐる。應接室の中央に三千年以來の寶物と云つたやうな卓子が一つ据えてある。卓子の下には食ひ荒された辨當箱が賽の河原見たやうに轉つてゐる。「さあこちへお掛けなさい。社長にも話をしましたら結構だらうと云ふことです」と俺に椅子をくれる。其拍子に裏の河原から一匹の黑猫が跳び出した。「あ！ また來てやがる」と吞舟は猫が嫌ひと見えて蹴飛ばさうとすると、黑猫は吞舟よりも悧巧に、隣りの屋根へ窓から逃げて了つた。その時氣がついた。吞舟の靴下に穴があいて芋のやうな指がはみ出てゐた。愛嬌のある靴下だ。「大變有益なものだと思ひますから是非頂戴したいですか今原稿をお持ちですか」と云ひ乍ら、俺が慌てゝ懐から摑み出した有益極る原稿を尤もらしく讀んだ。「なか〳〵作文が旨い。」と感心し乍らポケットから卷煙を一本出して咬へた手際はなか〳〵鮮がいゝ。吞舟面にもよく似合つてゐる。俺の

作文が旨いことは今始まつたことではない。頻りに旨い〳〵と言ふ。了ひには「一體これはあなたがお書きになつたんですか」と怪しからぬ質問をするのだ。その時はかしこまつて自分の作文であることを冗々說明したものだが、後になつて考へて見ると、この男は洋服を着て葉卷を喫つてる癖に、土臺文字も碌すつぽ知らない男だと解つたから可笑しい。「お希望は？」と聞くのだ。原稿料のことだらう。もうメたと思つたが、もと〳〵穢多並なり下る底の俺だから、皆目相場が解らないし、一文でも餘計に貰ひたいので行き詰つてゐると、「どうでせう、五圓では？」と切り出した。五圓と云ふ聲が大砲のやうに響いた。「結構です。手を打ちませう」と云ふと、香州が變な顏をした。變な顏をして笑つても、實費は一錢二厘位だから、踏み倒された方ではないと考へて、毎度有り難うございますと云ふと、「實は會計がまだ出勤しないのですが、明日でも僕の家へ取りに來てくれませぬか。」「明日で澤山です」「ではさうして下さい。僕の家は此處ですから」と云ひ乍ら安つぽい衛札のやうな名刺を與れた。名刺に從へば香州は谷中の功德林寺に居るらしい。「功德林寺と書いてクドクリン寺と讀むのですから其積りで訪ねて來て下さい」と俺の方で教へてやりたいやうなことを仰々しく說明する。話がないから默つてゐると、編輯室から「おい〳〵君一寸」と脊の低い聲がした。香州がヘツヘツと蛙見たいに跳んで行つたかと思ふと、先刻の聲が「君いくらと云つたか？」と聞えるやうだ。「五圓と云ひました」と答へるやうだ。「それは高い！」と聞えるやうだ。「でも有益な記事だと認めたものですから」と答へたやうだ。「それにしても高いね」と聞えるやうだ。そのうちに段々このケチ臭い問答が俺に關係があるやうに思はれて來た。かうなると、例の痩せ我慢が頭を擡げて來る。ええ、糞とか、馬鹿にするなとか、兎もすれば俺の損になるやうな[illegible]々つ氣が起つて來て、そんな水臭い話ならこつちで御免を蒙るばかりだ。こゝで貰ひさうなものなら「寂寞の日本」だつてどこだつて歡迎してくれるのだと腹でひやひやし乍ら力んでゐたら、「おや、まあそれで貰ひ玉へ」と聞えたやうだ。それが當然のことだ。俺の原稿には餘命が入つてゐる。少し位高いのは當れたことだとまた力んだ。然し内心ではよく貰つたもんだと、感心した。そのうちに先刻の猫がまた窓口へやつて來て、擔當を捉まへ乍ら一方では俺の動靜を窺つてゐる。どん〳〵やつて來い。俺はこう見えても、惡人ではないのだ。猫でも貧乏すると氣がいぢけると見えて容易に近づかないからいぢらしい。擔當の箱を一つ窓外へ出してやつたら、夢中になつて逃げ出した。その時考へただ、俺を世間並の人間だと思つてくれて、嘉

敷を挪つて逃げるのはこの猫位なものだらう。「空業之世界社」を得意になつて出た俺は、今度は何を書からうかと考へ乍ら、龜岡町へ戻つて來た。穢多町が馬鹿に汚なく見えた。殆んど腹の皮がたるむほど飢じいのも忘れてゐたのだ。「俺の穢多時代」を書かうと思ひ立つたときは、原稿賣りの場面をこう長々と物語るつもりではなかつたのであるが、何しろ、こゝで知り合つた小田吞舟とは此れが腐れ縁で、これから先もお互に行つたり來たりするやうになつて、話の先でまた出て來るのだから、態とこうだら〳〵書いた。中山小納言が見たら、面倒だ。一つあつさりとやつつけてくれと苦情を言ふかも知れない。三左衛門は妙な男だと前にも言つたが、妙な男だ。俺が有樂町から戻つて來ると、「おゝ。どうした？ 何處を迂路つき廻つてたんだい」と云つた。「お前さんを待つてたんだ。そこに立つてないで上んなよ。」と云つた。「話があるんだ。俺の部屋へ來ねえ」と云つた。俺を待つてゝくれる人間もあつたんだ。「家内は仕事に行きましたか？」「あゝ。お前さんが出てから間もなく行つちやつたつたよ。嬶も仕様はないで、お前さん腹が減つたらう。」俺に左様だと答へた。全く腹が減つてゐたのだ。すると三左衛門は今日も親切だ。「だからお前さんの歸りを待つてたんだ。一文なしで出て行つたと云ふ話だつたが、おい稲荷ずしがあるぜ。」と戸袋の中から竹の皮包みを出してくれた。「誰の散財ですか」「稲龜だよ。」「稲龜々」稲龜がどうして仇みたやうな三左衛門に稲荷ずしを與れたのか解らぬ。けれども三左衛門の手錢で買つたのでないと云ふから遠慮なしにがつ〳〵頬張つたら「お前も女房が可愛けれやお神さんに殘しときな」と云ふた。俺は腹が減ると時々女房や子供のあることを忘れて困る。「何う云ふ間違ひで稲龜が稲荷ずしを持つて來たんです。」三左衛門が親分面をして註釋をする迄は、全くどう云ふ譯だか解らなかつたのだ。「實はな。稲龜の野郎が先刻此處へ來やがつて、お前さんに今一度工場へ戻つてくれと云ふんだよ。はじめのうちは俺も相手にしなかつたが、段々樣子を聞いて見ると、俺の口から無下に拒ねつける譯にも行かねえ。お前さんが跳び出してから誰も工場へ行き手がなくて仕事は出來ないわ、註文の催促は食ふわ、まご〳〵してゐると、儲けはさて置いて、デケエ損をすると云ふのだ、俺から頼んで戻るやうに勸めて與れと云ふたね。そこで俺は承知だが、お前さんがどうだか、聞かねえうちは確かな返事も出來兼ねるぢやねえか。すると稲龜が、ぺこ〳〵お辭儀をしやがつて、そこの處をあなたが一つ無理に何とかしてと云ふから、了ひには氣の毒になつて、ようがす。引受けやした。門口から工場へやりませうと言つたが、どうだらう。一つ我

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

慢をして工場へ逆戻してくれめえかなあ」と云ふ話だから、稲荷ずしは文句つきだつた。「弱るな。断つてくれゝばよかつたんですがね。あなたの方で此處にこうして居るのが邪魔だと云ふことだつたら行先の的はなくつても出て行きますがね。大體あいつは得手勝手な男だ。尤も出ることはこつちから進んで出たんだがね。そんなことなら稲荷ずしも食はずにゐればよかつた」すると三左衛門が困つたものだから「厭だと云ふなら無理に勸めやしねえ。俺が邪魔になるから言つた譯ぢやねえよ。稲荷ずしなんざ買つて返さあね。然し彼奴も可哀さうだから此際月給を上げて行くことにしたらどうだらう」「行かないこともないが、何となく氣まづいなあ」「そこは俺が間に立つて萬事旨くやつつけるさ。」ともう一人で呑み込んで了つた。喧嘩の仲裁をするかと思ふと仲直りの取持をする。恐ろしく捌けたがる男だ。俺も癇癪持で怒つたり笑つたりするが、三左衛門は夕立見たやうだ。そこで三輪子が夕方戻つてから、稲總の工場へ今一度行かないかと出し抜けに言ふたら、「さうですね。行つてもいゝわ。」と氣のありさうな返事をした。「さう先方から折れて頼みに來ることなら、もと〳〵それで此方へやつて來たんですから、月給の五圓も上げて貰つて行かうぢやありませんか」と段々乗り氣になつて來る。裏で聞いてゐた三左衛門が「さうなせえ。

さうなせえ。そうして置いて鱈腹と食つてやるさ」と意地汚ないことを怒鳴つた。人間は素直でも根が穢多だから、そこへ行くと何となく穢ましい。すると三輪子が低聲で「だから云ふわけではないのですけど、實はおすよさんも妾も今の仕事場を今日つきりで廢めて他へ行かうかと相談をしたんですの。仕事場の親方が、妾達を捕へて、いやらしいことばつかり言ふんです。先刻も妾の後を附くつけて來ましたから駈け出して戻つたんですが、こんなことを此家の親方に聞かせると、あそこへ怒鳴り込んで行くから、黙つてゝ下さい。賃錢を上げてやるから長く居てくれと云ふんですけど、いやですからね。」と厭な顔をした。おすよと云ふのは助六寺の境内にゐる可愛らしい娘だ。「それにおすよさんは近いうちに愈々吉原へ勤めに出るんでせう。だから妾一人であんな仕事場へ行くのは怖いんですもの」と訴へる。「そんな處だともつと早く廢めて了へばよかつたんだ。三左衛門さへなくつたつて怒鳴り込まあ。不都合な奴だ。」だからいゝ鹽梅に廢めて稲總の方へ行く事になつたらしい。「今日は何處へ行つたの?」「金儲けだ。」「へえ」と云ふかと思ふと、物にたらぬ顔をした。この人を嘲笑ふやうな顔があとで五圓といふ金を臨時に持つて來た時「あなたにこんな腕があるやうでしたら、稲總の工場も廢しなせう」と云ふ顔に變つたのだから現金な女

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だ。五圓取れるんだぜ。それでお前の着物と子供の着替へを一枚づゝ買ふのだと言ふと、妾はいらないから、赤ん坊には是非拵へて下さいと答へた。考へて見ると、女房も子供も月島海岸の自働電話で百二十圓あまり拾つた時に、落し主から貰つた三圓の端足金で都合した古着を縫ひ直して着てゐるのだ。どちらも垢だらけの豚臭いメリンスである。大體百二十圓の謝禮に三圓は桁が違ふから嘘だと云ふ人があるかも知れない。穢多町へ引越す一月ばかり前に造船所に居る俺に用があつて三輪子が自働電話をかけやうとしたのだ。その時、汚ない草履袋が落ちてゐたから拾つて中をあけたら現金が一杯詰つて居たので、三輪子はぶるぶる顫ひ乍ら、電話も用事も忘れて、金袋を摑んだまゝ、十町あまりの處を俺の仕事場へ夢中になつて駈け込んだのだ。彼女は俺の顏を見ると、碌に口もきけないで、只早く歸つて來いと、俺の袖を引つ張るから、職工共がくすくす笑つてゐた。歸る途中で話がやうやく解ると、今度は俺も一緒になつてそわつき出した。「どうしたらいゝでせう。このまゝ隱してゐられないでせうか」とそればつかり相談するのだ。交番へ屆けるのも殘念だから、紙に字を書いて自働電話へ貼りつけることにした。落し物は拙者が預つて居るから安心してお出なさいと言ふ意味の札なのだ。その札を三輪子が貼り出して戸口を出るのと、

落し主が巡査をつれて俺の家へ入つて來ると殆んど同時だつたから、俺は跳び上るほど仰天した。自働電話の直ぐ後ろに交番があつて、そこの巡査も三輪子は知つてゐたから、よかつた。兎に角落し主が落した場所を覺えて居て交番へ尋ねると、この邊でよく電話をかける家は俺とも一軒あるから、念のために訊ねて見やうと云ふことで、先づ一軒の家へ行くと戸締りがしてあるから俺の方へお鉢が廻つて來て、この有樣だから、落し主は喜んで憤慨した。拾ふのは差支へないが、隣の交番へ何故渡さないのだ。そんなビラが何の言ひ譯になるものかと眞つ蒼になつて罵るから手も足も出なかつた。この人達は貧乏こそして居るが他人の大金を盜むやうな性質でないからと巡査が落し主をなだめるのだ。まるつきり盜みたくない譯でもなかつたが、正面から而も顏見知りの巡査の前で、目から火の出るやうな露骨なことを、がみがみ吐き散らされると、一層のこと金袋を海の中へ放り込んで、警察へ駈け込まうかとまで思つた。落し主は熱海町の鐵器商で、細川侯爵の邸へ殿樣の御機嫌伺ひに來た歸りに月島へ寄つたのださうだ。伊豆から來やうが、熱海から來やうが、細川の家來だらうが太川の家來だらうが、失くして惜しい金なら始めから落さぬがいゝだらう。太い奴だと鐵器商の方では呆れたかも知れないが、俺はまた俺で冗い爺だと舌を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

慾いた。巡査が間に立つて兎や角云ふから、この位で切り上げたのだらうが、さもなければ、掴み合つたかも知れない。あつさりしない奴だ。俺の目の前で、金を出して勘定をしないうちは安心しないで、袋の中には金よりも命よりも大切な書状が入つてゐるのだ。そいつでも失くされちや、先祖に對して腹でも切らなければ申し譯が立たぬと、いきり立つてこそ〳〵探した。何だらうと思ふと、細川侯爵から貰つた石版摺りの感狀書だから一寸意外だつた。して見ると、此奴の命も安いものだと思つてゐると、俺の前で「どうだい俺の身分を見たか」と云はぬばかりに擴げて見せる。負け惜しみを云ふのではないけれども、俺は餘り華族などとは交際しない。だからちつとも驚かない。貧乏してゐると、華族共や華族の家來共は一向怖いとも思はぬ。女房の方が餘つ程恐ろしい。その時いらないと云つて何遍も突つ返した三圓を、巡査が俺に同情して押しつけたから、着物をこしらへてやつた。後で考へると數、醫者も剛情だが、俺も少し間迂々しかつた。着物の由來が先づ右の通りである。話が漸く眞つ素ぐに行つたかと思ふと、飛んでもない方角へ迷ひ子になつた。一相撲をぬが、何しろこんな清貧で拵へた着物であるから、一日でも一時間でも早く脱がせて、俺の稼いだ金で買つた物を着せたいから、始終色々工夫をしてゐたが、助りなりにも今度は思わく通りに行きさうだ、三輪子も頻りによろこんで、了ひには、要らぬと頑張つた辯にどんなのがいゝでせうと云ひ出した。女と云ふものは、こんな調子のものかしら。處が、一日會はなかつた中山小納言がその晩「どうしたえ。どうしたえ?」と來さうな格好をしてやつて來た。

「お前にちよいと七兵衛の工場へ來て貰えてえと云ふんだが、どうだらう。この間の骨折賃はくれてやるさうだが」と小納言は七兵衛に賴まれて來たのだ。先達手の話は俺の口から小納言に言ふてゐたから知つてゐる。俺はきつぱり斷つてやつた。「あなたには隨分世話になつてゐるんですが七兵衛には懲りてますから勘辨して下さい。」「露助が靴の檢査に來るんだと云ふから行つてやつたらいゝぢやないか」「えゝ。その露助も小面憎い奴ですよ。兎に角今度だけは御免を蒙りたいのですから惡しからず」金なんか要らないやうな顏をして剛情に構へてゐたら、小納言も駄目だと考へたらしい。「さうかい。そんな譯だと仕方がないやね。だが、お前は明日から稲毛の工場へ舞ひ戻るつて事ぢやないか。」俺が「えゝまた行きます」と云ふと「行くのに俺も賛成だが、用心しねえと、また倒されるぜ」と云つた。「今度は俺がついてゐるから大丈夫だよ。」と三左衛門が小納言と三輪子を顧みて得意になる。小納言は間もなく歸つた。無暗に冷えるで

醜だ。翌朝俺の家族は穢鍛の工場へ引越した。五分間で人間も荷物も片づいて了つたから早く—便利な世帯だ。壹切穢鍛が京橋からやつて來て、にこ〳〵し乍ら牛肉と酒を三輪子に買はせた。それから仲直りの祝ひに隣りの三左衛門と、屠牛場を早退けに戻つて來た中山小納言と、時々物を買ひに來る大久保藤八を呼んで振舞つた。俺ではない穢鍛の財布だ。三左衛門が紋付を着て來る。人がいゝから威張つて居ればいゝのに、不目識にも左團次に向つて「偉え御散財をかけましたね」とぺこ〳〵頭を下げる。これだから馬鹿にされるのだ。小納言も年に何遍手を通すのだか解らない羽織を引つ掛けて改まつてゐると、朝鮮人の飴賣りが「ララヘア。ララハア」と亡國の唄を歌つて來た。三左衛門が膝を揃えて「道は六百八十里」をまた始めた。小納言が茶碗を二つ列べて箸で叩き乍ら「一つ積んでは父のため。二つ積んでは母のため」とやつた。穢鍛が笑つた。ネロだつてヘラクレスだつて笑ふだらう。小納言が調子に乘つて「この世の盤とも思はれず」とつゞけたが、この世の酒盛りとも思はれぬ。

ストライキが餘程利いたと見えて穢鍛が以前よりも丁寧にする。薄つぺらな左團次だ。つく〴〵愛憎がつきる。最初「お前さん」とか「君」とか、酷いときには「お前」と呼び來てにした奴が、「あんた」に變つた。機嫌のいゝ拍子には、どうかすると「あなた」と吐すから操つたい。今一例を擧げると「花川戸の履物商組合から雑物の裏皮を二萬足ばかり註文に來たから直ぐ引受けて手附金も取つて了ひましたよ。その代り暮までに出來なければ、こつちで五百圓の罰金を出すんだから、一生懸命で働いて下さい。暮の小使ひに百圓位はあなたにも上げることが出來るんだからね」と云ふ時の「あなた」である。「だつて、どう贔負目に見ても此工場では一日百足が一杯なのに、暮までに殘三週間もないぢやありませんか。今のうちに約束を取り消して小規模にぼつ〳〵商ひをやつてた方が安全ではないでせうか」と云へば、氣に喰はぬものだから「いや大丈夫請負つて見せる。それに少し位成績が惡くても、此の際だから結構通るよ。だから、あんたもその氣で一つ掛つてくれ玉へ」と云ふ時の「あんた」である。恐ろしく感情の機微に觸れた言葉の使ひ分けだと思つた。穢鍛は狡い人間だから、直ぐ血迷ふのだ。俺と隣同志の穢多と飲んでゐる間でも、餓鬼のやうな目つきで工場の中をうろうろしてゐた。考へて見るまでもなく、彼穢鍛は、皮裏二萬足の註文を引受けて手が足らぬから稲荷ずしを拵へて俺を釣つたわけである。人間も慾にかゝると、これほど無謀になるものかしらと思つた。穢鍛の左團次は背水の陣を敷い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て穢多共と汚い戰爭を始めてゐるわけだ。俺は左團次の手下になつたやうではあるが、それは只手と足だけで、心は上野の谷中に飛んでゐた。谷中には頼もしい芥舟がゐる。俺は芥舟に申込んで、文士にならうと思ひ立つた。何となく、ときめいて來る。停電中に蠟燭を一本買つたやうな心强さを覺えた。蠟燭の灯が消えないうちに、電燈が點くだらうと思ふと心强い限りである。稻荷とお客さんが引揚げると直ぐ夕方になつた。俺は谷中へ金を貰ひに出掛けた。功徳林寺は谷中天王寺の墓地を背負ふて、川上音次郎の銅像の脇から入ると、行き當りの寺だ。その寺の境内に一軒ぽつと小さい家が建つてゐた。建つてゐたと云ふよりも、二百十日の大風で品川あたりから飛んで來た家が此處に落ちたばかりだと云ふ風に覺束なく歪んでゐる。そこに芥舟が居つた。彼は獨り者だ。

五

芥舟が俺の顔を見ると、「やあ。よく歸りましたね」と云ひ乍ら、自分の座布團を引つぱづして俺に敷かせた。蒲團とは形ばかりで、雜巾のやうに薄いから芥舟の尻の凹みが裏まで通つてゐた。財布の中から五圓の札を出して惜しさうに呉れたあとで、「今あなたは何をして食つてゐますか」と云ふから、豚の皮で草履の裏を造つてゐると答へると、「やつぱり左樣ですか。それは珍らしい商賣だ」と云つた。ところが、芥舟の商賣は更に珍らしい。「失禮ですが先生はお著述ですか」芥舟の机の上には、女文字の手紙が束にくゝつて積んであつた。その側に書き消しの原稿用紙が擴げてあつた。「えへゝ。まあ著述です」「文學でせうね。」「えへゝ。まあ文學でせうな。」はつきりしない人だと思つたら、お了ひ際になつてから「實はね、現代婦人の艶書を編纂してゐるんです。神田の天弦書房から出すことになつてゐますが、なか〳〵骨が折れますよ。現代婦人と一口に云ふけれども、下は淺草の淫賣から貧民窟の娘などがあるし、上は華族の令嬢から富豪の妾が役者や運轉手に送つた奴を質物について研究するのだから困難でしてね。ことに貴婦人のラブレターと來ると、なか〳〵手に入りませんよ。然し僕の社では「娘之世界」と云ふ高級婦人雜誌を發行して僕も多少關係してゐるから、どうかこうかやつつけて行けますが、いやなか〳〵以て」と頭を掻き乍らのべつに饒舌り立てる。「實業之世界」で逢つた芥舟とは丸で人が違ふやうだ。それから艶書の講義を聞かせてくれたが、聞いて行く〳〵一方から面白くて忘れて行くと突然「あなたは材料をお持になりませんか」と途方もないことを云ひ出す。殘念ながら艶書と來ると、屁の札なら年中切らしたことはない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一枚もない。國に居る時分近所の子守から貰つたことがたつた一度ある。文字が汚ないから今一遍淸書をしてくれないと讀めないと言つて返したら子守が腹を立てゝ、もう上げませぬと云つた。それつきり今日に到るまで艶書には緣がない。然し何が役に立つか解らぬものだと思つたから「それでも大切に取つて置けばよかつたんですがねえ」と生憎さうな顏をして見せると「どうも子守の艶書ではねえ」と孖舟が俺の顏を見てげら〳〵笑つた。子守の艶書は値打ちが少ないと見える。三輪子は俺の女房となる筈だから艶書の一つも呉れさうなものだが、考へて見れば、結婚する時分忙しかつたから、うつかり忘れたのだ。「だが、もしそんな物が手に入りましたなら是非一つ提供して下さい。御迷惑になるやうな氣づかひはありませんから」と賴まれた。承知しました。せい〳〵注意しませうと返事はして置いたが、注意の仕様がない。「かう云ふ研究はお好きですか」「はあ。まだやつたことはないけれども文學は好きです。」「さう〳〵あなたは作文が旨いから文士になつちやどうです。僕も盡力しますぜ」頭の疵でも賞められれば嬉しい。作文の方も惡くはない。「何分宜敷お引立下さい」「雨川亮造と云ふ東京每晩の記者が今此處へやつて來ることになつてゐますが。そいつは又飛び切り作文が旨い。是非紹介をするから遊んで行き玉へ」と云ふ。それは有難いが言葉が段々ぞんざいになつて來る。「遊びに來るんですか」「えゝ、僕の知己で、すぐそこの鬼林館といふ下宿に居るんだ。」俺は穢多町へ歸つて早く三輪子を喜ばせたいが、雨川といふ男に逢へば直ぐ文士に取り立てゝ呉れさうな様子だから、氣がもめるけれども待つてゐると、件の宗雨川が大きな圖體を抱へて「弱つた。弱つた。」と心細いことを云ひ乍ら入つて來た。面白さうな男だ。顏が作文見たやうだ。何が弱つたのかと思ふと、「大變な失敗をやつちやつたよ。」と俺を見てぺこんとお辭儀をした。俺は此處だと考へて頭を疊に擦りつけてやつた。「部長に賴まれて飯能といふ埼玉縣の町の情況を一段抜きで書いたんだよ。一體土地へ行つて見れやよかつたんだが其暇もないので想像に任せて、眞盛りの紅葉山を繞つて淸流迸り松井は都人士の來遊を待つこと久しく、攫み放題取り放題。都の風流人よ行け行け。行つて遊べと書いたら、牛込の小學校が團體で出掛けたさうだ。」「遠足ですね」「えゝ。さうです。ところが飯能といふ町には紅葉山も淸流もないんだつてね。校長が社へ談判に來て僕と部長が大弱り弱つたぜ。」すると孖舟が「それぢやもう散つて了つたんでせうと云つて追ひ拂へばよかつたんだ。」と云つた。「ところが其校長がかう云ふんだよ。あなたの新聞では、この間の天長節觀兵式が例の如く靑山原頭では

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大に行はれて、黒山の如き人垣を築いたと大見出しで書いてありましたが、觀兵式は今年から代々木練兵場でやることになつたんですが、奇妙ですね。兎に角あなたの新聞ばかり青山原頭で行つてゐるのだから。ハツヘ。と云つて歸つたが、一時は途方に暮れたよ。」と背の汗を拭き直してゐる。「そんな新聞だから君、飯能町に紅葉山があつても松茸があつても構ひませんと、やり込めてやれやいゝちやないか。大體毎晩新聞を買つて讀む奴が不心得だ。」「君は呑氣なことを云ふが、僕は首が危ないんだ。」と情ない話になつて來た。「君なんか幸福だぜ。有樂町へ滿足に出勤もしないで內職が出來るからね」と羨しさうだから、始めて出會つた人でも氣の毒になつた。從つて俺が文士になることも六ケ敷さうだと思つて間もなく俺は淺草へ引揚げた。歸りがけに、「これを御緣に僕の下宿にも遊びに來て下さい。また面白いこともあるでせうから、お宅は淺草のどの邊ですか」と尋ねるのだ。これには閉口した。うつかり眞個の處を教へて了へば、やつて來るかも知れない。だから「いづれ近いうちに、私の方から出向くことにしますから」と胡魔化して置いた。雨川も呑舟も、話をしてゐる最中に俺が袂から卷煙草の吸ひかけを出して喫つてゐるのを不思議さうに眺めてゐた。喫ふ奴喫ふ奴が、どれもこれも敷島やバットの吸ひかけだ。俺が道

端に落ちてゐたのを拾つたんだと思つて內心笑つてゐたかも知れない。ところが、五圓札の効力は覿面に現はれて工場へ歸ると、三輪子が喜んで吉原土手へ古着を素見に、いそ〳〵出て行つたが、吸ひかけの煙草は、俺に祟り出した。大久保藤八の小屋の横手で、藤八と三左衛門とが、乞食の達磨爺を抑へて緊めてゐたから俺は行つて見た。達磨爺は草原に七輪を据えて馬の腸を煮つめてゐる。藤八がそこに衝つ立つて「俺は乞食の煙草を盗坊するやうに落ちぶれちやいねえんだ」と怒鳴つてゐる。俺は跳び上るほど驚いた。「手前がいつもこの邊をぶらつくから手前の仕業に違えねえと云ふんだ。」「俺は手前が拾つて來た吸ひかけの煙草を吸ひたけれや、買つてのまあ。馬鹿にすると承知しねえぞ」「承知しなけりや、どうするてんだよ。二口目には乞食の達磨のと吐しやがる癖に手前の家を見ろ。疊を一枚づゝ賣り飛ばしやがつて、床の上に寢てやがるぢやねえか。自體手前達は穢多の分際で生意氣だ。穢らはしいぞよ。穢らはしいぞよ。」と云ひ乍ら達磨爺が飲みかけの燒酎を猪の口からぐい〳〵呷つた。すると今度は三左衛門が火のやうに怒り出した。「何だと？穢多だと？おゝ俺は穢多だ。こゝは穢多の町だ。手前は穢多町の厄介になつてゝよくそんなことが云へたな？この縊り損ない奴！」と七輪をいきなり蹴飛ばした。[illegible]

ばかり先へ飛んで行く。達磨爺は呆氣に取られて、體をぶる〳〵顫はせた。「手前の娘が東京市長の妾だの、奥田博士の開ひものだのと大きな法螺を吹きやがつて、俺達が知らねえと思つてやがるが、千束町の花菱屋の格子から首を出しやがつて、旦那ちよいと、旦那上つてらつしやいと俺の袖を引つ張りやがつた化物は、あれや手前の何だい。」と云ひ出した。集まつた群衆が、どつと笑つた。達磨爺は、氣を抜かれて了つた。「手前が毎朝巻煙草の吸ひ殻を貰ひに行く花菱屋の姐さんが、「お父さんたんとお持ちよ」つてなことで與れるだらう。その姐さんはお前の娘ぢやねえか。娘に地獄を稼がせるのと、穢多とどつちの位が上たんだ。」群衆が今度は手を叩いて笑ひ出した。達磨爺はまだ默つてゐた。すると「手前のやうな奴は此の邊に置けねえから、さつさと行つちまへ」と藤八が莫座の端を掴んで乞食を引倒した。老爺はころ〳〵と轉げ乍ら、起き上がつたが、迚もこの手合にか〻つちや敵はぬと觀念したやうに、正直さうな手つきで、覆された七輪と鍋を起して、また泥まみれの馬の臓を煮き始めた。そして殘つてゐた燒酎を一息に飲み干したかと思ふと、莫座の上に引つ繰り返つて、「さあ。どうでもせろ。殺すなら殺せ。手前達や知るめえが、若い者は老寄をいたわるもんだ。俺を苦めて、どんな功徳になるけえ。」三左衛門も藤八もこれで腹癒が出來たと考へたのか、「手前が此の處にゐるうちや、毎日邪魔しに來るから左樣思つてろい」と云ひ棄て、表通りへ行つて了つた。はじめ彼等の側で喧嘩を見物してゐた、そのうちに、乞食にも穢多二人にも誠に相濟まないことをしたと思ふと、怖くなつて工場へ秘然引込んだが、矢つ張り氣にか〻るから、窓口で眺めてゐるうちに、俺は新らしい敷島を買つて乞食に戻さねば、默つてゐられなくなつた。その夜俺は煙草を一箱買つて、老人の隙を見て、莫座の上に、こつそり置いて來たら、罪ほろぼしが出來たやうな氣がした。十時頃目を醒ますと、「お江戸日本橋七ツ立ち」と乞食の唄が枕に通ふて來た。起きて見ると、草原には誰も居なかつた。老人が莫座の上に坐つて俺の與れた煙草を喫かしてゐる姿が見えた。老人と背中合せに盛り上つて居る塚を帶びた無花果の葉に青白い星の光が美しく輝いてゐた。俺は安心して寢た。すると夢を見た。一文なしの男が乞食の煙草を盗んでゐる夢である。その疑ひを受けた二人の穢多の夢である。夢だから三輪子は何にも知らない。翌日、乞食は一日草原に戻つて來なかつた。莫座もなかつた。七輪と鍋と馬の臓が、雨に濡れたり埃を浴びたりして、主人の歸るのを待つてゐるが、達磨爺は、それつきり姿を見せなくなつて了つた。そこで俺は又心配した。或日藤八が「達磨爺が淺草觀音堂の床下から出て來るのを見たが、或日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あそこへ住み換えやがつたんですぜ」と云ふから、行つて見た。觀音堂床の下を覗いたら、若い男と若い女の乞食が幾群も香氣さうに寢てゐた。澁勝爺はゐない。それからまた暫くして小納言のお神さんが、澁勝爺と小塚つ原の刑場跡で出逢つたから、此頃何處に居るのかと尋ねたが、ひどく弱つて返事もしなかつたと云ふ話を聞いた。だから俺はまた小塚つ原へ行つて、その邊の堤にゐる乞食に聞いたら、「この頃はちつとも來ないよ」と云つた。乞食の老爺は、俺が卷煙草の吸殼を盜んだばつかりに、住み心地のいゝ供養塔の草原にもゐられなくなつたのだと思つた。そして轉々として寢場所を探し廻つて、まだ見つからぬのだと思つたら可哀相になつて來た。冗談半分に盜んだわけでないけれども、こんな結果にならうとは思はぬから、ひどく後悔したのだ。ずつと後のことになるが、稲葉が死んだとき拵へた金の幾分を裂いて、實弥婦のおてつを訪ねて行つて、乞食にやつて貰はうと考へた。たゞ考へたゞけで到頭俺達は本郷へ引越して了つたから、もうそれつきり忘れた。時々思ひ出して、罪なことをしたものだと良心に責められることがある。●

俺の穢多時代も段々詰つて來た。従つて「俺の穢多時代」も終りに近づいて來る。澁勝爺が愈々此の邊にゐなくなつたことが解つた頃、工場の仕事は半分の半分も片づかずに、十二月がとり〳〵と大正七年に向つて進んだ。稲葉の工場には職人が新らしく三人も傭はれた。皆通ひの穢多だ。一人は「納言堂」の中で生れた「綱公」といふにきびだらけの男である。一人は嘗て平民の自轉車を乘り逃げして監獄を見て來た女房持である。今一人は工場へ來て、自分の被つてゐる帽子と下駄とを買つてくれと泣きついた浮浪人である。そして彼等と一番よく話の合ふ俺達夫婦である。十二月三十日は忙がしい日だ。稲葉の工場へ、ぞろ〳〵ぞろ〳〵借金取　來る。豚の皮の催促が來る。「綱公」が吉原から馬を引つ張つて來る。そして出來上つた草履裏の表面と裏面が上出來で稲葉が雀躍りした。草履裏の芯が、生皮のまゝで、ちつとも藥が浸んでゐないことを發見すると、稲葉は二萬足に近い皮の山に凭りかゝつて、皺だらけの咽喉を、鋭い皮切庖丁で縱橫に斬つて死んだ。俺達夫婦が正月の買ひ物に吉野町へ出たあとである。人間はもろいものだが稲葉の左團次は、あんまり脆過ぎる。左團次の死骸の前に立つてゐた小納言が、俺を捕へて「お前に言ひてえ言ひてえと思つて、つい忘れてばかり居つたが、七兵衛の工場も潰れかゝつてゐるんだ。」と蒼褪めてゐた。俺に通辯をせろと云ふた將校が、靴を斬りに來たと云ふのだ。斬りに來たと云ふのは可笑い。その靴も芯が生皮のまゝで染織を代納して調をかふつたんだらうと云ふと　小納言はにや〳〵

してゐた。出來損ひや粗末な品を片つ端から摘み出されて損をしたのだと云ふのだ。冗談のやうで、いゝ氣味だと云ふのも馬鹿々々しい。見かけによらぬ、ケチな工場だらけだ。稻龜は氣が小さいから自殺したんだらう。七兵衞は横着だから、酒でも飲んでゐるだらう。勸善懲惡の小說家今時分生きてゐたら、最後に「慾の深い金持ちはこの通りだ。目出度し目出度し」と結ぶだらう。稻龜が往生してから二日目の元日に俺は穢多町を出て本鄕に引越した。それは俺が先達手まで、家主にいぢめられてゐた本鄕座の横手の家である。引越しの晚に雪が降つた。皮工場の窓から眺めてゐると、降く川に乞食の七輪と土鍋が埋もれて了つた。食ふことばかり考へてゐるものだから、天の川から無暗に落ちて來る雪が大きくて太鼓餅みたいだ。「恐ろしう降りやがるぢやねえか」と小納言が吉野町の停留場まで俺達を見送りに來てくれた。「またいつ會はれるか解らねえから、俺は本鄕まで行かう」と三左衞門がついて來た。汚なくて臭い穢多町でも住み馴れると懷かしくて、出る時は三輪子が涙を溜してゐた。俺もつらかつた。引越すことは出來たが、依然として職業がない。原稿を書いて持ち廻るが、どこでも買つてくれないから困つた。俺は拵へたばかりの羽織を雪の中で泥だらけにして步き廻つた。そして一度訪ねたいと思つてゐる雨川の下宿へ或日出掛けやうと考へて湯島天神の切り通しへかゝると、ばつたり出會したのだ「何處へ？」と云ふから、本鄕へ引越して口がなくて、いゝ話はないかと思ふからお宅へ行かうとする處ですと云つた。「それや丁度よかつた。僕は昨晚宿直で今社から戾る處です。社の方なら今一つ口がありますから、月給が安くてよければお世話しませう」と親切に云ふてくれたから、俺はもう月給を貰つたやうな丁寧な禮を云ふた。「どうですこれから吞舟を引つ張り出して僕の處で一緖に晚飯でもしまはうぢやありませんか。僕ぁ暫く逢はないんですよ。」と誘ふた。だから吞舟の家へ廻り道をし乍ら行つて見ると、戶が締つてゐる。戶袋に一枚の紙が貼りつけてあるから、引つ越したのかしらと思ふと、雨川が「あゝ。太いことをしてやがる」と叫び出した。戶袋の貼紙には禍助が兩手をついてお辭儀してゐる繪が書いてあるのだ。その禍助の頭の上に「今度は都合により北海道石狩國ピバイロ山へ轉居致しました。日頃厄介に厄介をかけました家主殿を始め米屋酒屋の各位に何とも申譯がありませんけれども、世の諺にも百兩の質に菅笠一個と申すこともあれば右の各位は置いてけぼりの品物を御遠慮なく各自にお持ち歸り下さいますやうに、禍助相代り一重にお願ひ申し上げます」と、一字一字六朝式に書いてあるから驚いた。そして日附が今朝になつてゐ

る。「亂暴な奴だね」と雨川が呆れた。全く呆れ甲斐がある。その足で鬼林舘に行つたら、雨川の夜具を引つ被つて呑舟が寢てゐた。呑舟の話によると、艶書の研究が完成するまで當分雨川の部屋に落ちつくのださうである。「北海道へいらつしやるやうに書き殘してありましたが、よくそんな場所を御存じですね」と云ふと「僕は石狩川の下流で生れたんだよ」と熊見たいな顔をした。艶書の研究に凝り過ぎて社へ出なかつたら、向ふからもう出なくともいゝと云つて來たさうだ。家賃も米代も拂はずにゐたらしい。尤も、家賃は一度拂ふと癖になつて翌月また取りに來るから、一層のこと最初から拂はずにゐたのかも知れない。「さあこれから浪人だ。」と物騒な顔をした。俺見たいな人間もゐるかと思ふと呑舟のやうな男もゐるから心強い。「君は夜逃げの天才だが、一體今度で何回目だい」と雨川が窘めてゐた。呑舟は澄してゐる。雨川の下宿が、こんな無職業者の集會所になつたのがその時からである。「倶樂部を拵へやうぢやないか。」と雨川が發起したら「何のための倶樂部だい」と呑舟が解らない樣子をした。「無名文士の交遊機關さ。たまには原稿の世話もするんだ。」「ふゝん。御當人の原稿が碌に賣れないで、世話するも凄じい。」だから立ち消えになるかと思ふと、「コスモス倶樂部」と云ふ名刺が鬼林舘の戸口に張り出された。「コスモス倶樂部」はそれから引つ越しばかりしてゐる。だから「コシマス倶樂部」の方が適當だらうと云ふことになるし、その頃雨川の保護を受けてゐた美術學校を出たばかりの龍造寺道雄と云ふ未來派の畫かきが房州を食ひ詰めて雨川の處へやつて來る。龍造寺美梅軒と云へば知つてゐる人があるかも知れない。名前を聞いただけでは伊賀の上野で荒木又右衛門に討ち洩らされた鎖鎌の名人と間違さうである。雨川は面白い男だから、こんな雅號をつけてやつた。「龍造寺之綸未背實」だから君、未實だ。未實は無風流だから美梅だ。即ち美梅軒だと妙なところからこじつけたものだと思つたが、本人これでも喜こんでゐた。「どうです僕の名前は何となく畫家らしいですね」と云ふから「全く馬鹿らしいですね」と眞似をしてやつた。そこへ宮地嘉六が鶯色の帶を締めてやつて來るところも一寸見ものだ。俺は新聞社に勤めたわけはない。相變らず貧乏して、いつも飯食つたやうな顔をしてゐたのだ。俺はこんな風で穢多になつて、また穢多をやめた。困つたらいつでもやる。

附記

讀者諸君のうちで、近頃一向書かねが文學者はやめたかと言つて寄越す人が大分あつたが、今更やめられるか。[illegible]

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ちが太鼓だ。やめない證據にまた書いた。第三自叙傳である。

闇黒の偉力

寺田精一

一、錢湯と闇黒

「熟々鑑るに錢湯ほど捷徑の教諭なるはなし。其故如何となれば、賢愚邪正貧福貴賤、湯を浴んとて裸形となるは、天地自然の道理、釋迦も孔子もお三も權助も、産れたままの容にて、惜い欲いも西の海、さらりと無欲の形なり。欲垢に梵惱を洗清めて浄湯を浴れば、旦那さまも折助も孰が孰れやら一般裸體。是乃ち生れた時の産湯から死だ時の葬潅にて。暮に紅顏の醉客も朝湯に醒的となるが如く、生死一重が嗚呼ままならぬ哉。されば佛嫌の老人も風呂へ入れば吾しらず念佛をまうし、色好の壯夫も裸になれば前をおさえて己から耻を知り、猛き武士の頸から湯をかけられても、人込じやと堪忍をまもり、目に見えぬ鬼神を隻腕に雕たる侠客も、お免なさいと石榴口に屈むは錢湯の徳ならずや。心ある人に私あれども心なき湯に私なし。譬へば人密に湯の中にて撒屁をすれば、湯はぶくぶくと鳴て忽ち泡を浮み出す。」云々。

これは式亭三馬が其の著「浮世風呂」に自ら題したところの書き出しである。如何にも錢湯は興あるものである。赤裸々に人を剝き出したところに、人の欺かざる自然も現はれれば、又裸體になつて錢湯へ入つた以上、暫くの間は世俗的な欲望から遠ざかつて居なければならぬところに、人の悠暢な心持も現はれるのである。私は、この錢湯の中にある人々の心を、闇黒の中にある人々の至り易い心に比較して見て、頗る興味ある多くの事實の存在を思ふのである。只闇黒の場合は錢湯の場合とは異り、赤裸々に剝き出すのでなくて、寧ろ樣々に示されたものが包み隱されてしまふ場合である。從つて錢湯が人々の差別を脱

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

き捨てしめて、明るみへ自然のまゝの行り振を示すことから、人を特殊な心持に導くのと異り、闇黒は人々の差別を暗みで隠して、自然の傾き方を自由ならしめることから、人を特殊な心持に導くものである。尤も私のここでいふ差別は、帽子とか着物とかいつた具體的な外皮をも含めて居るのはいふまでもないが、決してそればかりでなく、人々の教育や位地や職業や財産などに於ける差別をもいふのである。

教育・地位・職業・財産、これ等は如何にも今日の吾々の社會に一つ明かな差別點を與へて居る。人々は時々にそれ等の差別といふことに、思はずも引き摺られて滑稽じみた、誇示となつたり、痛々しい虚榮となつたり、冷飯に堪へないやうな得意となつたり、苦惱を忍んでの一時的の假面者ともなつたりする。或は其の反對に、不自然な程度の謙讓となつたり、不必要な羞恥となつたり、猜忌から出た反抗となつたり、自暴自棄に基いた屈倒となつたりする。けれども是等は何れも其の教育とか地位とか職業とか財産とかいふ外皮的な差別が、餘りに明瞭に自らにも又他にも映ずるからのことであつて、若しこの外皮的の差別が不明瞭になると、上のやうな事實は多く起らなくなる。但し吾々の心は、從來の種々な傳統に自然と支配されて居るから、外皮的差別の撤廢された浴場で、八字髭の美事なことからお役人と見て恐れをなした人が床屋さんであつたり、優しげた容貌であるところから生花のご師匠さんと見た人が、區役所の受付に坐つて居る人であつたりする錯誤は、已むを得ないことである。

兎に角、今日の吾々の社會は、色々な外皮を纏つて居なければならない狀態となつて居る。けれども假令其の外皮を誇張するとの好きな人であつても、時折にはそれを撤廢して寛ろぎたくなるものである。況して一般の多くの人々は機會があつたならば、其の外皮を逃れた境遇へ入つて、悠暢な氣分に、若しくは自由勝手な振舞に出でて見たい慾求を持つて居る。この慾求が時には錢湯で滿たされ、又時には闇黒で滿たされるのである。この意味で、私は闇黒の影響の侮るべからざることを述べ一見たいのである。

二、不安の減少

闇黒が吾々に恐怖を懐かしめる場合も少くないが、その反對に吾々をして不安を減少せしめる場合も亦少くない。暗夜の田舎道を、一人提灯を點じて通るよりも、眞暗な中を靜に通る方が恐ろしくないといはれることのあるのは、何故であらうか。これはいふまでもなく闇黒の中を、自分一人明るくして居ることは、他の總べての方面から自分に注意せしめることになり、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そこに何となく不安が感ぜられるのである。勿論かかる場合に、如何なるものが襲撃して來るかも知れない、それだから不安だといふやうな論理的根據に基いた不安が働く場合のみとは限らない、寧ろ本能的に不安を感ずるのである。かの猫が明るい廣い庭を横切る時には、周章しく疾走するのに、小暗い木の影や椽の下へ這入るや否や、直ちに悠々たる歩みに變へると相選ばぬものである。

「やあ、この着物も大分惡くなつたなあ、まあ夜だからよからう」とか、「夜ならですけれども、何だかをかしいわ、こんな髪ですもの」とかいふやうな語は、時々吾々の耳に入る語である。而してこれ等の語を發せしめる上の標準となつて居るものは、晝か夜か換言すれば明るいか暗いかといふことである。かかる語を發する人々が、必ずしも常に新調の着物を見せびらかしに友人を訪問したり、又常に美しい髪の出來榮えに、行き交ふ人々を見返へらしめんとして外出するものではない。然るにこれ等の人々が明るい時には外見に氣をつけるが、暗い時には外見に頓着しなくなる。そこに明るさと暗さとから受ける影響に、大きな差違がある。それはいふまでもなく明るき場合に出でては羞恥を感ずることも、暗き場合に出でると羞恥の感がなくなることを示すのである。

今迄薄暗かつたのに、急に室の燈が眩しいやうに明るくなると、若い婦人などは顏を袂で掩つて「おお、恥しいやうだ」と叫ぶことがある。この事實は、明かに上の事實の一面を證するものである。或は又薄暗い街路では、可成り傍若無人的な聲で謠などを怒鳴つて居つた人が、明るいところに來ると、急に且極めて不自然に調子を下げて、口の中でむぐむぐ唸るやうなことは、吾々のよく出會す面白い例である。これなども強ち薄暗いところには人が聽いて居なくて、明るところには人が聽いて居ると自覺して、聲を調整するものではない、只明るいところでは何となく自己の未熟さが面恥しいのに過ぎない。

これ等の實際の場合から推すと、闇黒といふことは少くも時には吾々に、警戒の念を薄らがしめ、それと共に羞恥の感を減ぜしめるやうになつて居る。これを概括していふならば、吾々は闇黒で不安を少からず減退せしめられて居る場合を持つて居る。從つて警戒を要し又は恥羞を持つて居るやうな心持と、白晝の明るさとは相調和し難い者となり易い。失敗に失敗を重ねたり、借金に苦しんだりして居る人々の中には、白晝出歩き出來ない人がある。これ等の人は特別に惡いことをして居るとは限つて居ない、又何人に見られては面目ないといつたやうな事情があるとは限つて居ない、只自己の失敗や借金に對して恥しい

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

といふ暗々裡に働く不安が、漸く暮を待つての出歩きを選ばしめるのである。而して積極的に警戒をして身を衛らねばならないやうな人や、何人も恥づるやうな行爲をした人が、闇黑に自らの境界を見出さうとするのは、無理からぬことである。

三、謹嚴の喪失

錢湯で太平樂な氣分になれるのは、暖かな濕つぽい中に自己の一時を任せて居ることが、大に關係して居るのはいふまでもない、けれども前にも述べたやうに外見上の差別の主なるものである着物から剝出された人々の中に居るといふことも、明かに主な一つの條件といふことが出來る。從つて錢湯では、着物を着て居る時にはろくに挨拶も出來ないやうな氣兼ねな人を側に置いて、大聲で友と話が出來るのである。この關係は軍隊でも特殊な形式で現はれて居る。即ち私服を着けて居る時には、富豪の令息と野良育ちの若衆とは、應對も出來ないやうに窮屈な間柄であるが、何れも軍服を着けてしまふと、同じ兵隊さんで君だ僕だと氣樂に話が交はされるやうになる。外見上の相違などは、此代の吾々にとつて左程注意すべきものではなからうけれども、然かも事實に於て注意すべきものとなつて居る。禮服や勳章が無上に喜ばれたり、それ等を着けて居る人自らよりも禮服や勳章の敬はれたりするのは、決して笑ふべきことではない、差別のあるところで自分の態度を變へて行く吾々には、寧ろ當然なことである。而して闇黑の中に入ることは、かかる意味のある個人個人の差別を見えなくすることである。

差別のあるところに他を見又自己を見出して居る吾々は、闇黑でその差別が不明瞭にされると、日常の自己といふものを失つて、縛はれない自己が現はれて來る。この縛はれない自己、それは何時も吾々の内部に抑えつけられて居て、何等かの隙があつたならば、首を出さうとして居る自己である。從つて自由な我儘な放縱な奔逸な形式に動き易い自己である。暗い一室に一人居て、何等の妄念の起らないものは、貴い人格の所有者だといはれるのは、その自由な我儘な放縱な奔逸な形式の自己に、何等混迷したもののないのを賞した言であると共に、闇黑の中に於ては如何にこの特殊な自己が、力強く現はれて來るかをも示唆した言葉である。換言するならば、闇黑は吾々をしてその責任の感を衰微せしめ易いものである。

或宗教では、次のやうな形式で特殊な儀式が行はれることがある。それは夜間幾つもの燈火や焚火の下に、祈禱や讀經や神に對する讚仰が、特殊な音樂と共に行はれ、時の經るに連れて燈火や焚火は次第に其の數を減ぜられて行き、集りの信徒等の精神

に混惑的氣分になつた頃、燈火や焚火は遂に消滅して、そこに興奮して居る信徒等は愈々混惑の中に引き入れられるのである。かかる際に、それ等の宗教の卑俗的説明から與へられた機會は、集りの男や女に特殊な滿足を與へることになつて居る。勿論、多少に拘らず宗教的意味の働いて居るは爭はれないことであらうが、然かも闇黒に誘はれたといふ上に、平常の謹しましげな自己を沒しての態度に至り易いのである。そこに卑俗な共鳴者追隨者を生じ易く、或意味から、そこが流布者宣傳者の狙ひどころともなつて居るのである。

明と暗、眞面目と不眞面目、表と裏、公然と秘密、それ等は何れも相對したものであるが、明に對して眞面目や表や公然が、又暗に對して不眞面目や裏や秘密が、何れも吾々には相類した心持を以て接せられるものである。何故となれば、闇黒は謹嚴の喪失された剝き出しの自己を、のみならず時には普通の自己が驚くやうな俗惡な自己をも、暴露せしめる媒介となり易いからである。外行きの自己といつたやうな、謹嚴を裝はれた自己は闇黒といふことで極めて容易に其の本地に立ち歸るものである。それ丈け闇黒は對他的の警戒や羞恥を失はせ易いのである。

四、敢行心昂進

この謹嚴の喪失であつたり、對他的の警戒や恥羞の除かれ易いことを、他面から見るならば敢行心の昂進といふことが出來る。殊に普通の場合では敢てしなかつたやうなことを、易々と行はしめる力となるのである。

酒宴の開かれたやうな場合に、他人から餘興として謠など「やれやれ」とか「所望所望」とかいはれて、何時も自慢をして居る癖に、又自ら幾分の自信を持つて居るのに拘らず、尻込みして居た人が、偶然に電燈でも消えたり消えかかつたりすると、それまでの臆病であつたに似氣もなく、大聲張り上げて得意げに謠ひ出すやうなことは、吾々の經驗に乏しくないことである。或は又酒席の電燈が急に消えたやうな際に、そこに侍つて居つた異性が、あちらでもこちらでも奇聲を發して逃げ迷ふやうな騷ぎを演出することも珍しいことではない。固よりかゝる場合の異性の常習として、多少其の奇聲や騷ぎの誇大化されることはあらうけれども、少くも其の席に列つて居つた人々の行ふ惡戯が、其の原因であることはいふまでもない。何れも謹嚴ぶつた容貌をして居ても、又よい年齢をして居ても、闇黒の誘ふ力は強いものである、未だ隱耐を以て鎭靜することの出來ない

やうな時にすら、上のやうたことは容易に起る。そこへ偶に電燈が點ぜられると、幾分か微笑を洩して居るものはあつても、何れもが一寸平然と威儀を繕つて、今の奇聲や騷ぎが、どうして起つたのかと訝しげな顏付をしてすますことになる。然かもこの極めて不調和な前後の光景は、明るいのと暗いのとから起つた相違に過ぎないのである。

結婚の樂しいことの一つは、二人が相連れ立つて縺れながら散歩することであらう。殊更に自己の配偶者の優秀な點を誇示せんとする心や、樂しさが對他的の羞恥を打ち消すやうに強い場合には白晝と成りに多くの青年男女を勵ましての散歩ともなるのであらうが、普通の場合には尚ほ躊躇を餘儀なしとして決行される。この決行するの勇氣は、即ち暗いといふことによつて與へられた力である。

密婚の逢瀬の遂ぐるところは、大體に於て暗いところと定まつて居る。それが特殊な家であらうと、特殊な街路や公園であらうと、薄暗い個室の選まれるのは、公然と行はれない事情のある外に、彼等の待ち受けて居る異性に敢行心を與へる上に效があるからである。其の異性の少からぬ部分は、假令自ら求めて彼等に近寄るものであつても、おづおづと闇を縫つての近寄りである。從つて白晝若しくは煌々たる燈火の下には、彼等の存在を認めても單純な接近すらもなし得ない臆病な心の所有者すら少くない。この臆病な心を引き立てて、近寄りを敢てせしめるところに、闇の力が認められるのである。

群衆の活動は、樣々なことから各々の精神を異常な方向に至らしめ易いが、それが若し夜間に行はれるやうなことになると一層甚だしい。曾て米騷動のあつた時、或村では各地に行はれた騷擾に鑑みて、一夜村の寺院に村の人々を寄せ集めて、對應策の協議會を開いた。然かるに何人か其の村へ引き入れられて居る電燈の線を切斷したので、一村悉く闇黑となつてしまつた。するとそれ迄極めて溫和な見解を持つて居た村民等は、誰いふとなく米屋と米を高く賣り拂つた一村民への襲撃となり、夢想だもしなかつた騷擾が、然かも殺伐な氣を以て演出された。この場合などは若し電燈に故障が起らなかつたならば、適當な對應策が靜穩裡に講ぜられたことであらうが、村民を忽に闇黑裡に投じたことが、思ひも寄らぬ暴行を敢てせしめるに至つたのである。兎に角、群衆運動が夜間に起り又は夜間にまで繼續する場合には、闇黑が個人個人の敢行心を昂進せしめる爲めに、豫想外の騷擾や狼藉や殘忍に至らしめ易いのである。

五、罪惡と闇黑

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

腹の黑い人とか黑い手が延びるとかいふ場合の黑は、罪とか惡とか恐ろしいとかいふ意味を聯想せしめるものである。闇黑と罪惡、それは如何にも似合つた取合せであり、それ程吾々に密接な關係の存在を思はしめるものである、のみならず闇黑そのものが、如何に吾々を罪惡に導き易いかをも考へしめるものである。

歐洲大戰爭の影響として、獨逸や佛蘭西や英吉利あたりに、不良少年の數が急劇に增加したことは、當時識者を驚かした程であつた。處によつては、戰爭の終る頃には戰爭前の八倍近くにも增加したといはれて居る。かくの如き不良少年の增加には、固より種々な原因があつて、決して一樣に論ぜらるべきものではないが、其の主なものとして此の數種が擧げられて居る。先づ父兄が戰爭其の他それに附帶した仕事に勤務する結果、多くは家庭を離れ、爲めに兒童に對しての監督が不充分になつたこと、國內擧つて戰爭に全力を傾注した結果、感化救濟事業が休止又は衰微したこと、警察力が國內の治安や風紀に關して充分な取締をする餘裕のなかつたこと、成人の大多數が直接軍事に從つた爲めと、軍事に關する特殊な工業其の他の勞働興した爲めとで、兒童勞働の必要が起り、其の結果兒童に不相應と見られるやうな收得があつたことが擧げられた。それと共に興味ある原因が一つ示されて居る。當時航空機に對する村落又は都市の防衞上から、航空機の至り易い處のある地方では、極めて嚴重な處罰命令を以て、夜間の街路を闇黑にすることに努めた。その街路を闇黑にしたことが、一般の犯罪殊に少年者の不良行爲を逞しうせしめる上に、頗る效果があつたといはれて居る。かかる事實は、航空機の活躍を想像しなかつた時代の人々の思ひも寄らぬ現象であつて、近代的な注意すべき一つの現象といふことが出來る。卽ち宴席に於ての君子然たる態度が、突然な消燈と共に、其の態度と頗る不似合な惡戲を敢てせしめる心持を認めるならば、街路の闇黑が罪惡を多からしめることも、敢て怪しむべきことではないのである。

これに類した事實で、從來輕微な夜間竊盜殊に夜の闇黑狙ひが頻々行はれた地方で、電燈が普く點ぜられるやうになつてから、この種の犯罪が減少し又は根絕した場合もある。固より明るい中の不良行爲は、被害者其の他から發見される虞のあるはいふまでもないが、そのやうな反省や憂慮が特に働かなくとも闇黑であることと自らが對他的の不安を減ぜしめ、大膽ならしめることも亦大に關係して居る。かの闇黑な都市の小路や薄暗い活動寫眞館の內部で、惡戲の行はれることは周知の事實であるが、かかる惡戲者の何れもが、豫め惡戲をしやうと企てて其の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

機會の至るのを待ちつつあるものだとはいはれない。けれども時くあることが、偶然に與へられた機會や刺激に因つて喚び起された衝動を、極めて容易に開發せしめるのである。

尤も幾分か文化的教養を受けたものであるならば、道德的の樣々な精神の常に働いて居ることは爭はれないことである。そこで一般に罪惡と目せられることと對にしては、何人も多少に拘らず躊躇と不安とを感ずるのが常である。然かもかかる躊躇や不安は、道德が社會的のものである丈けに、對他的の背景を持つて現はれることが頗る多い。そこで對他的關係を、具體的に不明瞭に抹殺するものは闇黑である。かくて責任の感も減ずれば、罪惡決行に對する大膽ともなるのである。かくて人類の罪惡が、如何にこの闇黑の力を借りて行はれて居るか、いふまでもないことである。そこに闇を追ふ憐れな人々を見出さねばならないのである。

六、お祭と夜間

吾々がお祭と呼んで居るものには、固より種々なものがあつて、其の起因も目的も決して一樣に論ずることは出來ない。即ちそれが時には信仰の對象に對する讃仰であつたり感謝であつたり、時には同一部落に屬するものの親和の感の發露であつたり、又時には自己の部落や國家に對する奉仕や熱愛の感を高潮せしめん爲めのものであつたりする。或はそれが歸依崇拜を旨とするものであつたり、或は喧噪亂舞を旨とするものであつたり、或は又單純な形式のみに止まるものであつたりする。從つて其の現はされ方も、必ずしも同樣ではない。けれどもお祭といはれるものの少からぬ部分は、それを媒介として又機會として吾々が平常抑えて居つたり忍ばせて居つたりした心持ちを、自由に開放せしめ、それによつて特殊な感興を豊かならしめんとする欲求の頗る深く關係して居ることは爭はれない事實である。實際上吾々は、複雜な又少からず自己を屈した便宜的生活をして居るから、何等かの機會を見つけては、その窮屈な生活を離れて、暫時たりとも開放的な然かも多數のものと共に味はれるやうな境地に、自己を投じたいのである。かかる要求に社會的の樣々な意味が附け加はつて、一定の形式と内容とを備へたお祭となつて居る場合が少くない。

お祭に附帶した欲求に、上のやうな要素が含まれて居るから、お祭の多くの場合が、民衆的であり又特殊な娯樂を伴つたものであり、且又平常の外行きな謹嚴な心持ちと離れた寛ろいだ心持ちを味ふやうになつて居る。殊に喧燥た無體調めいたお祭は、其の最も顯著なものである。このやうなお祭に附帶した

求は恰かもそれが夜間に行はれることに於て、最も好都合なものがある。即ち白晝であつたならば、變裝や假面を以てしなければ出來ないやうなことが、暗い夜の催しとなると、特別な隱蔽もなくて行はれ得る。かくて夜のお祭の多くは、最もよくお祭騷ぎの特徴を發揮し易いのみならずお祭の群れに投じて居るものに、最も開放的な最も自由な感興が得られるのである。尤も喧噪を以てされるお祭の場合には、多數のものが相集まつて行ふが故に、群衆の特殊な心理から、個人の場合では出來ないやうな調子外れや興奮や騷ぎを以て行はれ易い。從つて強ちに夜陰をのみ必要條件とはしないけれども、輝く燈や搖らぐ焚火などに、ほの暗く照らされた中での雜閙や喧噪は最もよくお祭氣分を漂はしめるものである。

我が邦の田園に於て行はれる盆踊りの如き、如何に夏の夜の短さを歎つやうに、感興を以て迎へられ又樂しい行事として見られて居ることであらう。未開の住民などが、涼しい木々に圍まれた中で、一つの焚火を打ち圍みながら、夜を徹して亂舞するのを、この上もない娛樂とするが如き、それが夜間を選ぶところに興味がある。この種のものとして、古代希臘に行はれた夜の祭で、酒神なるディオニソスの祭の如き、其の最も面白いものである。即ちテーベスの女はキテーロン山へ、アッチカやデルフォの女はパルナッス山へ、何れも夜の暮るるを待つて山に登り、髮を亂し、手や首には蛇を卷きつけ、長春籐や葡萄の莖の捲きつけられた棒や炬火を振り立て、笛や太皷を打ち鳴しながら、茂みの中や丘の上や谷の底を、歡喜に滿ちた狂亂の有樣で、踊り歩いたものである。

これ等は僅の例に過ぎないけれども、晝から夜へかけての祭や夜のみに行はれる夜祭の多くが、如何にそれ等の祭を樂しむ人々には、夜であることが外行きの外皮を剝き出しての娛樂さで行はれることであらう。

七、享樂に薄暗

樂隊が演奏して居るのを聽きながら、人込みを前へ前へと押して行つて、樂隊が見えないと不平をいふやうなことは、必ずしも珍しいとではない。聽くべき音樂が、見えないとて不平をいふ人々に、眞の音樂の享樂がなされ得るのかどうかは、遽に判定は出來ない。けれども普通に吾々が、特殊な對象によつて或享樂を味つて居る場合には、他の不必要な刺激をなるべく受け入れないやうに努めるものである。話に夢中になつて知らない間にお腹が脹れたといふやうな場合に、食物に對する深い享樂が、充分得られぬことはいふまでもない。騷々しい雜閙の中に、押

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し合ひへし合ひ汗みどろになつて、展覽會の藝術品が滿足に味へないのは、寧ろ當然なことである。

若し着衣や飾身品に愛好の念の强い婦人が、明るい觀覽席に坐を占めて、美々しく着飾られた絢爛なあたりの光景に注意が支配されるならば、其の婦人の演劇に對する享樂は、頗る乏しいものといはねばならない。尤も劇場内の享樂の中心を、自己の着衣や飾身品や容貌に對する誇示に求めて居る一部の人々は、そこに自己の享樂を見出して居るのであらうが、それは私のここでいはうとする意味の享樂ではない。一生一代の晴れ着が出來たからとて、態々出掛けたことのない音樂會にも行かうといふ心持ちも、亦私のいふ意味からは遠いものである。けれどもかゝる誇示や晴れ着のお出掛けも、觀覽席や傍聽席の薄暗いといふことで、其の感興を大に殺がれることになる。從つて觀覽席や傍聽席の薄暗いことは、單に舞臺や演奏者に注意せしめる上に好都合なばかりではないのである。但し上のやうな特殊な欲望の所持者は、機會を作つては明るい廊下や控室をあちらこちらと歩き回りたがるものである。それは兎に角、氣兼ねのない自由な寛ろいだ自己を以て、或享樂を得んとする場合に、殊にそれが目や耳で以てされるものである時には、自己の周圍の薄暗が大に享樂への力を添へるのである。卽ち眼の疲めたやうだといはれる明るさより、陶醉的氣分を豐かならしめ易い薄暗の方が、好都合な場合が少くないのである。民衆的娛樂物となつて居る活動寫眞館への入り易いには、觀覽料の廉なことも勿論關係して居るが、觀客席の薄暗いことも大に關係して居る。尙又、自己を暗きに置いて、明るさに享樂の對象を求めること自らにも、少からず適切なものがあるのである。

のみならず吾々の享樂には、餘りに形式に捕はれないことと、細かな理知の加はらないことが肝要である。而してかかる形式を不明瞭にし細かな理知を渙然たる中に封じ去る上には、薄暗が頗る適當である。薄暮に婦人の多くが美しく見えたり、ヴールを隔てての顏が艶に見えたりするのはこれであつて、何れも不調和や缺點や、醜が薄暗で覆はれてしまうのである。白晝には何の奇も認められない汚い街路の光景が、夜景としては捨て難いものとなるが如き又それである。

瞑想に耽り思索に耽つて居る人々の中には、薄暗を故らに選ぶ人が少くない。卽ち思索に際して、瞑目するのもそれであるが、光力强き皎々たる燈下にあるよりも、薄暗い光力の燈下を好むが如きも亦それであつて、電燈や瓦斯燈の普及して居る大都市の中央にあつても、特に石油燈を用ひ、そこに却つて落付きある心持ちを得て居る如きそれである。或は暗黑な劇場内に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

閉ぢ籠つて修道する行者の如き、又暗黒の力を借りて居るものといふことが出來る。

八、宗教的氣分

闇黒は、前に述べたやうに不安や羞恥や躊躇を去らしめて、普通ではなし得なかつたことをも敢てする勇氣を與へるものであるが、又反面に於ては特殊な恐怖を得せしめることがある。殊に闇黒に靜寂の氣の加はつたやうな場合に於て、それが顯著に經驗されると共に、神秘の感や孤獨の淋しさ恐ろしさが經驗される。幽邃な深林や高峻な山嶽に、日の傾くのも氣づかないで自然の大觀に醉つて居た旅人が、刻一刻と夕靄に包まれ闇黒の幕に閉されて、大自然の中に自己をのみ明かに見出した時、白晝の詠嘆は去つて孤獨の淋しさ恐ろしさが迫まり來たり、そこに言ひ難き或神秘の感に襲はれることであらう。同じく闇黒からの經驗ではあるが、雜閙の巷に起つた闇黒からの經驗とは、全然其の趣を異にしたものであり、これが卑俗的氣分を退しらせしめるものなれば、それは宗教的氣分を漂らしめるものである。卽ち吾々は對他人的な又對世俗的な境地から遮斷されて、靜寂や孤獨な中に自己を投ずる時、宗教的氣分に至り易い。宗教に入らんと努力する人々が、人界を去つて山間に潜むが如き、皆この氣分を容易に得んが爲めである。而してかかる對他人的な又對世俗的な境地から自己を遠ざけることの一つは闇黒である、何となれば闇黒は總ゆる物象を吾々の眼から奪ふものであるからである。

戒壇廻りといふものがある。これは寺の本堂の下や山の横腹などへ、闇黒な隧道を造つて、特殊な宗教的氣分を味はしめるものである。稱名の聲幽に、危げな足を一歩一歩闇黒裡に導く、そこに假令一時的であるにせよ、靜寂孤獨の中に讃仰的對象を心から念じ得られるであらう。但し今日見られる繁昌せる寺の戒壇廻りの如き、面白半分に多人數がわつしよわつしよと押し合ひながら、笑ひ興じ戯れながら這入る場合には、多くは單なる好奇心に滿足を與へるに過ぎない。けれどもかかるものを造つた古人の動機は、少くも一寸先きも見えない中へ人を導いて、そこに其の人の宗教的氣分を喚起しやうと試みたものに相違ない。事實上、素樸な順禮者は、これを信仰心の薄い厚いの試練場となし、又貴い宗教的經驗と心得て居るのである。

このやうに闇黒と宗教的氣分とは、密接な關係を持つて居るが、其の最もよい例として、私は宗教建築の場合を擧げて見たい。かの古代埃及に建立された大伽藍は林のやうに立ち列んだ丸い柱を持つた暗い殿堂であつた。赤道近い強い太陽の光を遮

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てて、静々と階段を踏み、一歩一歩暗い殿堂の内へ入つたものは、其の薄暗い氣に迫まられ、祭壇に揺らぐ燈火を見て、如何に人界を離れた神聖な神秘な又崇嚴な心持を味つたことであらう。そこに彼等は其の信仰であつた精靈の潜消するのを見るの心地がしたことであらう。又印度の處々に見られる岩窟寺の如き、山腹　岩壁を鑿り柱を刻り拔き佛像を彫り、壁に畫き天井を飾つたアヂャンタの岩窟寺のそれの如き、佛像や佛塔の安置された内部は薄暗く、朝に夕に佛に對する隨喜讃仰の徒が禮拜には、又とない境地であつたであらう。

明内には吾々を究理に導き易いが、闇黑や薄暗は吾々を混迷に陷れ易い。それと共に闇黑や薄暗は、特殊な對象と吾々との間に神秘や不明や迷妄の靄を垂れるものである。この神秘や不明や迷妄の靄は、人間自らの制作した信仰の具體的の對象たる偶像に、宗教的氣分を漂はせ神靈化する上に助となるものである。この點か、偶像崇拜を主とした種々の民族の宗教建築に、故らに薄暗い殿堂や神壇を設けしめたことにもなつたのであらう。そこへ殆んど總べての場合に見られる佛前神前に奉られた燈火が、ほの暗い内に輝いて、一層信仰の對象への誘ひと光明と凝念とを兌ふせしめたのである。

九、幽靈の出現

白晝出現する幽靈もないことはなからうが、幽靈を見たといはれる場合は、殆んど常に夕方か夜間である。外からの光のよく射し込む明るい家よりも、何となく陰氣な家から、鬱々とした陽のないところよりも、鬱々と茂つた森から、幽靈は多く出現することになつて居る。かくて幽靈に關する戯作者なども、日がとつぷりと暮れて雨さへ催しげな闇夜に、幽靈どもがそろりそろりと現はれて、彼等の世界となるやうに述べて居る、それが幽靈の思想に對して適したことになるのである。芝居で幽靈の出るやうな時には、急に舞臺が暗くされる、これも闇黑と幽靈とが聯想上好都合な爲めに外ならない。

元來闇黑や薄暗は、吾々を混惑迷妄に陷れ易い、從つて外界事物に對する認識を極めて不正確ならしめる。そこで吾々が先づ眼に映ずる上の錯覺幻覺を經驗する上に好都合である。白晝ならば注意もされないやうな物干の浴衣や神社の森の鳥居に下がつた注連繩の白紙や野道を通る提灯の火などが、夜に入つては幽靈とか怪物とかに、美事に變化し得るのである。殊に性質の臆病である人には、自ら様々な幽靈を心裡に描きながら、恐る恐る然かも恐ろしい物見たさの好奇心から、充分に見極めもし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ないで、幽靈らしいもの又は幽靈と見立ててよいものを求めて居る有様である。而してかかる幽靈らしいものや幽靈と見立ててよいものは、闇黒や薄暗によつて極めて得られ易い。如何に臆病なものであつても、白晝に幽靈を見ることは極めて稀であつて、矢張りそれの代用的對象の得られ易い夕方や夜間が殆んど常である。

のみならず闇黒や薄暗の中で混惑迷妄に陷つて居るものは、其の耳に聽くるところの事物に對しても、幽靈を見出し易いのである。卽ち何等眼に見える幽靈らしいものはなくても、四圍から響いて來る音に、それらしいものを捕へ易いのである。松籟の音や蘆荻の葉の戰ぐ音や夜鳥の羽音などが、臆病な氣に襲はれ又は幽靈の出現を期待しつつある人々に、如何に屢々幽靈や怪物とされたとであらう。晝間氣にも留めない自分の足音が、暗い夜道の一人歩きの時には、特別に臆病な人でなくても、誰か來る足音ではないかと、振り返へらしめるものである。

要するに闇黒や薄暗といふことで、人の制作した然かも入神の技にもよらない平凡なものが、又は極めて卑俗なものまでが、よく神秘化されて、信仰の對象となるやうに、何等幽靈に關係のない又愚にもつかないやうなものまでが、よく幽靈化され怪物化されるのである。それが私のいふ闇黒の力である。吾々の生活に、夜間といふ暗い時があつて、又吾々自らが見慣れぬ聞き慣れぬ未知な或は不解なものに出逢ふ機會のある以上、假令幽靈といふ思想はなくなるにしても、闇黒を介しての怪物の出現は、何時までも續くことであらう。

物凄い藝術的創作に努力して居る人々の中には、故らに其の制作に適したやうな境地に自己を導き入れて、特殊な興奮と感興とを味はうとして居る人がある。例へば人の寢靜まつた深更に、廣い室で故らに燈火の薄暗いのを選んで、制作に着手するが如きそれである。かかる場合には、固より靜寂といふことが大に關係しては居るけれども、薄暗い一室に自己を置いて居ることが少からぬ力となつて、恐ろしげな凄愴な氣分を與へ、そこで白晝又は皎々たる燈火の下では思ひもつかないやうな作物を、創作し得るのである。

十、白晝の畏怖

以上述べたところのものは、何れも闇黒とか薄暗とかによつて經驗される特殊な事實であつて、暗い力の積極的に働いた場合であるが、次に私は、明るい力を畏怖しそれを避けて、暗い力に隱れる消極的な場合を述べやう。但し犯罪などした人が、白晝を恐れて薄暮に出歩くのは、固より一種の白晝の畏怖には

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

相違ないけれども、それは白晝そのものを畏怖するのではない。即ち彼等は白晝であると對他的の醜惡や不安や羞恥を感じなければならないので、それ等を感じなくてすむ暗い時を選んで身を隱すのである。然し私がここでいふ白晝の畏怖といふのは、白晝によつて得られる特殊な經驗を畏怖するのではなくて、單に白晝其のものを畏怖すの場合をいふのである。換言すれば白晝の刺激に堪えられなくて、故らに暗い時を選ぶものをいふのである。

近代の生活は、吾々をして樣々な偏した方面に向はしめた。殊に近代的生活の特徴を、最も濃厚に發揮して居る大都市の生活は、其の繁瑣な生活狀態から、其の複雜な社會的施設から、又其の近代文明に伴つて現はれた種々な事物から、大多數の民衆をして頗る變態的に傾かしめて居る。固よりかかる變態的傾向には、生活難や劇甚な生存競爭といふことも大に關係して居やうが、兎に角、精神的に又身體的に過勞せしめて居るところに、注意すべきものがある。かくて大都市生活者の少からぬ部分は、神經衰弱的な神經質的な狀態となつて居る。その神經衰弱的な神經質的な狀態は、自ら人をして過敏ならしめ、一方に於ては、強い刺激に對して不快に堪えざるの感とを得せしめ、他方に於ては、何等か變つた好奇的な刺激を追求せしめる

やうになるものである。

靜な自然的な悠暢たる氣分に浸つて居る村落の人々が、大都市の繁華な雜鬧の巷に立つて、茫然口を開いたまゝの驚愕狀態に陷るのは何を示すか。その巷に知らず識らず慣らされて居る大都市の人々は、假令それから特殊な感を經驗しないやうであつても、村落の人々が驚愕自失する丈けの刺激は受けつつあるのである。よしそれを村落の人々と同じ程度な刺激として受け取らないにしても、少くも大都市の人々の官能を過勞せしめ過敏ならしめて居ることはいふまでもないことである。かかる過勞な過敏な官能の所有者は、白晝のぎらぎらした目眩しいやうな強い日の光に、眼を細めながら步かなければならないのである。尤も大都市の人々の多くは、其の日常生活の大部分は陰鬱な屋内生活である、從つてそこにも亦日の光に目を細める傾向を生じ易いのである。

それと共に、文化の進步につれた燈火の發達が著しく、その爲めに文化の最も多く取り入れられて居る大都市の人々は、最も多く燈火の恩惠を受けて居る。かくて燈火の發達は、都會人をして益々其の日常生活を夜の方へ繰り延べしめることになつた。軟かな靜かな細やかなさうして美しい燈火の輝き、これは如何に現代の都會人の誇りであり、又[illegible]であらう。さ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らぎらした日の光に眼を細めたものは、暗い大空を戴いてこの華やかな燈の下に、如何に文明の享樂を味ふことであらう。過勞な過敏な官能の所有者は、蒼穹から照り輝く太陽の光に對して、其の强きに失した刺激を避け、或はそれを畏怖するまでに進み、果ては纎細な刺激としての軟かな光や、小さくて强い光や、靜かな搖ぎの光や、どんよりと潤んだ光や、淡い高雅な色の光などを迎へるやうになる。繁雜と醜穢と砂塵と煤煙とを、まざまざ照りつけて居る白晝の街頭は、夕暮れの薄暗に包み隱されて、美はしい燈火の燦然たる中に美化されてしまふ。そこに都會人の歡樂と憧憬とが出現する。これも白晝を厭ふて夜を愛好する一つの要素には相違ない。

けれども吾々は、薄暗にならなければ街頭へ出られないといふ日光の畏怖者や、白晝の目眩しいやうなぎらぎらした光景に堪えられなくて、故らに薄暗い室に籠り、又は戶を閉ぢて頭から毛布を覆ひ光の弱い洋燈の下でなければ、落ちついて書見も出來ないといふ偏異者などを見る時、假令かかる人々が其の數に於て少いにせよ、過勞な過敏な官能の所有者に富む現代生活の一面を、窺ひ得たやうに思はれるのである。

元來、吾々はその生活に晝と夜を持つて居る。そこで夜の主要素である暗いことに支配されて居ることの顯著であるのは、猶晝の主要素である明いことに於けるやうである。この意味で吾々の生活上に、闇黑其のものから特殊な影響を受けて居ることの多いのも敢て怪しむるに足らぬことである。

文藝的一表現としての夢の占の科學的意義

理學博士　三枝彦雄

一

生理學に依ると、夢は神經末端の刺戟と神經中樞の興奮とから生まれた複雜な作用であると言ふ。之の複雜した作用の起源から心理學者は之れを次の様に二種類に區別して居る。

一、感覺から催起された夢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二、表象又は觀念の聯結から誘發された夢

然も上の二作用は亦常に相聯結して、全然分離する事は殆んど無いが、然し或る場合には全く分離する事が出來ると言つて居る。夢の中で最も多數であるものは、主に神經末端の刺戟から喚起さるるものである。卽ち神經末端の刺戟から、既に蓄積された記憶心象が意識中に現出して、神經末端の刺戟に依る直接の感覺と相結合して一種の知覺を成立する。然し之の知覺は實際の刺戟と必ずしも相應するもので無くて、從ふて其の知覺は錯覺となり夢として現はれるのである。

第二の作用に依る夢は、睡眠中腦髓殊に腦皮質に於ける血液の減少或は不良となる爲めの結果として興奮を起し、皮質の或る特別の部分が著しく興奮して夢を現出する。併も腦皮質に於ける或る局部に偶然に興奮が起ると、夫れが其の近傍の部分を共鳴せしめて、自己誘導を起し、其の局部の興奮は益々大となつて來る。斯くの如き興奮に依つて或る觀念が現はれ、夫れが記憶心象或は過去に於ける體驗を順次に喚起して、夫等の聯結に依つて夢を組立てると言ふのである。

二

夢占として、採用する夢は主として、第二の作用に依る、觀念の聯結から誘發した夢卽ち吾人の過去の體驗から來た夢をとる事に依つて、意味のあるものとするのであるが、第一の神經末端の刺戟から來た夢でも後に述ぶる樣に、神經末端の刺戟の爲めに起る知覺が刺戟を起す感覺と全く別化された眞の錯覺であるならば、夫れから現れる夢も亦夢占として採用す可き價値があるのである。されば私は、夢占として、適當した夢は、夫れが神經末端の刺戟から來た知覺の錯覺からの夢であるとも、亦神經中樞の興奮から觀念の聯結に依つて誘發されたものにしろ、何れも過去に於ける吾人の生活の苦惱の體驗の表現としての夢である事を主張する。亦多くの自然的な夢は多くそれであるとも言へる。

吾々が生活に於て、毎日の如く、種々の苦惱に逢着する事は、常に何人も經驗する所であらう。卽ち各人の個性の自由に從ふて、其の儘の道を通つて生活する事は殆んど不可能であつて、常に何等かの障碍に着して、そこに生の苦惱を感ずるのである。恰も谷川の水が常に岩に突き當つて、激するが如くである。如斯き生の苦惱の體驗は潜在意識として、意識から消へて行く、そして、吾々は更に新しき苦惱を感じつゝ生活し行くのである。上の如き生の苦惱を强烈に意識に現はして、表現したものが所謂文藝である。從ふて其の意味に於て、夢は文藝的一表現であつて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然も一つのドラマである事は明らかである。即ち吾人の生の苦惱の體驗の潜在的意識即ち、吾人の生の傷が夢の根本思想を成すものである。勿論夢の内に現はれる種々の事件の展開は、種々雜多なものであらうとも、夫等の事件の根本となつて居る思想は、吾人の生の苦惱の體驗の表現に外ならない、併も生の苦惱の體驗は夢の内に表現さるる時は、或は喜びとなり亦は悲しみとなる事もあらうが、兎に角に其の源因は生の苦惱の體驗の表現から來ものである事は、廚川白村氏の主張する所である。

三

如斯く夢が吾人の生の苦惱の體驗の表現であると、考ふるならば、其の夢に依りて吉凶を占ふ事は充分に科學的意義を持つて居るのである。

占の總括的形式は、公算論の一應用と見る事が出來る。即ち既に經驗された種々雜多な事件がある。今未知の事件の吉凶を占ふ場合には、易者が筮竹を繰つて、其の内何れかとり夫れによりて陰陽の板を順次に組合せて、出て來た、易を、既に經驗された、若しくは、さうある可き事件の形式に解釋して、未知の事件の内譯を豫言するのである。即ち易の見る形式は如何なる形式を用ひようとも、兎に角に、或る種の方法に依りて、既に經驗されたる事件の内から一つを撰び出して、未知の事件の吉凶を占ふのである。之の意味に於て、易は一種の公算論の應用と見て差支へは無い。占が公算論の一應用である以上、必ず當ると言ふ事も出來ないと同樣に、亦必ず當らずと言ふ事も出來ない。古くから當るも八卦當らぬも八卦と言ふ事は占が公算論の一應用である事を示すものである。何となれば、既に經驗された種々雜多な無數の事件の内から一つを撰擇して、未知の事件の吉凶を占ふものであるが故に、其の占が當る事と當らぬ事とは、全く相等しき確からしさを持つて居るからである。

四

夢が吾人の生の苦惱の體驗の表現である以上、夫れは殆んど無數と考へらるる程度の繁雜さを以て表現し來るであらう。吾人の生活に於ては、毎日殆んど數へ盡せざる程の障碍に遭遇するのである。從ふて其の體驗も亦殆んど無數に、潜在意識の内に畜積されて居る事は明らかである。如斯き殆んど無數に多き吾人の體驗を根本思想として表現する夢は、吾人の豫想さへも出來ない樣な、又全く經驗したとも考られない樣な事件を表現するのである。從ふて斯く豫想し得ざる夢に依りて、未知の事件の吉凶を占ふ事は、公算論の一應用であつて、亦他の易占と

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

全く、同等の價値を持つものである、從ふて、そこに夢占の科學的價値を認むるのである。

近米心理學者の實驗に依れば、夢は本人以外の人工的の刺戟に從ふて、其の刺戟の內容と相等しき內容の夢即ち刺戟に依る知覺が全く錯覺とならない夢を見得るとの事である。即ち睡眠中の人の近傍に於て、盛に樂隊の如きものを成せば、其の人は樂隊の夢を見る相である。之の如き外界の人工的刺戟に依りて故意に表現せしめた夢は、夢占として採用す可き價値の無き事は、明らかである。そう言ふ夢は夢占の方に於ても採用す可きでないし、亦公算論に於ては、勿論採用する事の出來ないものである。亦自然の刺戟であつても知覺が錯覺となつたものでも特に或る事件が發生して、夫れが强烈に作用した場合のものは不可である。例へば雨漏りがして、夫れが睡眠中の人に掛つた爲めに、溺死した夢を見ると言ふ如く、外界の刺戟其のものを根本思想とした夢は、人工的刺戟に依る故意の夢と同様に、占としては、價値は無く、從ふて占の內に採用し得無いものである。されば、夢占として採用さる可き夢は、極めて自然に或る刺戟を受けて、知覺が全く錯覺に變つたものか亦は神經中樞の自然的興奮に依つて生の苦惱の體驗の表現に依るものでなければならない。

五

生の苦惱の體驗の潜在的意識內に蓄積されるものの表現としての夢の占が、他の雜多な形式の占と同等の價値のある事に就て大體述べた。然も亦公算論の一應用として、科學的意義のある事をも述べた。夢占の更に價値のある事は、吾人が未知の事件の吉凶を占ふ爲めに採用する所の自然に見たる夢は、其の占ふ本人の餘き過去の體驗であるからである。亦占ふ可き未知の事件が本人に關係するものである時に、更に價値を持つのである。即ち其の占が當たる割合を增大するのである。

されど玆に注意す可きは、夢占は其の夢を見たる本人に關係するか又は、少くとも本人と近き時代の人に關係した事件である事を必要とする。何となれば、あまりに時代の懸隔の甚しき人は體驗の內容が著しく相違するからである。從ふて靑年に關係した事件は靑年の夢に依り、老人に關係したる事件は老人の夢に依るを必要とする。本人の夢が本人の事件の占に對して、何故に當たる割合を增大するであらうか。人には各個性を持つて居る。從ふて過去の生の苦惱に依る體驗も亦、現に發生せんとする事件も、其の本人の個性に依りて、著しく特有化されてあり亦ある可き事は、明白なる事實として承認し得るから

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

である。即ち將に起らんとする。或は經驗せんとする生の苦惱は其の人の個性に依りて或種の制限を受けて、現出し來たる事を考へ得るからである。例へば右に行く個性を持つ人は、自然に放任すれば、右へ右へと行つて、其の右の方の障碍に遭遇して、極めて個性化されたる生の苦惱を體驗するし亦體驗せんとするからである。されば本人の夢が最もよく、本人に關係した將に來らとんする事件を占ふ事に適當し、從ふて夢占の當たる割合を增大する事を認め得るのである。

六

日月の如き太陽系の遊星の運行及び夫等の變化は、地球に生棲する吾人の運命を支配するものとして、遊星の運行及び夫等の變化を觀測して、吾人の運命を占ふ事は、現今行はれて居る易及び占の起原である。

宇宙の森羅萬象は或る一つ統一された法則に從ふて、變化するものであつて、決して無秩序の集合物ではないと言ふ支那人の宇宙觀に基いて、宇宙間の萬物は皆な悉く一太極から出來るものであるとした、即ち太極が陰陽に分れ併も其の陰陽の各が陰陽を配合して、四象を作る、四象とは、陽の陽である太陽と、陽の陰たる小陰、陰の陽たる小陽及び陰の陰たる太陰である。四象は更に陰陽と配合して所謂八卦を作る。即ち今陽を一で表し陰を--で表はすと次の樣になる。

乾☰、兌☱、離☲、震☳、巽☴、坎☵、艮☶、坤☷

之の八卦を更に配合すると六十四卦を作る。

宇宙の森羅萬象は悉く上の如く陰陽の結合に依りて、生成さるゝものと見れば、上の如くして得た八卦は宇宙の萬有の過去及び將來を考察し得るものであるとした。然も亦八卦に方向を入れ、亦六十四卦を十二支と結合せしめ、更に時をも之等に結付けて、事件を占ふ卦の態形を備へた。

宇宙の萬象の究極は太極にあるも、萬有の生成は陰陽の二要素に基いた。然も其の陽の代表的のものは太陽であつて、陰の代表者は太陰即ち月であるとする事から日月の運行及び其の變化が亦萬有の運命に大なる關係を持つとして來た。

未だ人智の開けざる時、太陽の偉大に驚異を感じ、月の變化を見、秋の夕中天に輝く星、さては、神秘的な明月を見て、之等を恐れ且つ崇拜する事は當然であると考へられる。從ふて夫等が吾人の運命を支配すると考ふるも、未開の原初人としては、さもある事であらう。ましてや、現今の文化の程度に於ても、太陽が吾人の生棲に偉大なる恩惠を與へ、多分に生活を支配する事を考ふる時は、未開の人類が、遊星の運行及び夫等の

Digitized by Google   Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

變化に依りて、人類の運命を占つた事は、必然的に首肯し得るのである。されど現今の易或は占は夫等の起原の時代に於ける天體の觀測を其の儘流用するか又は全く夫等から離れて、其の昔易の起原に於て持つゐた宇宙觀から作製されたる八卦に依りて判斷を下すのであつて、夫等は現今の吾々の生活とは、極めて緣遠きものである。從ふて、夫等の古き易書から判斷されたものは、全く單に雜多な時件の連鎖から取り出した、公算的割合に於て或は夫れ以下に於て豫想し得るものであつて、全く當るも八卦又當らぬも八卦の意味を充分に裏書きする事に成つてしまつたのである。

七

然るに夢占は、所謂當るも八當當らぬも八卦と言ふ公算論的意義を持つのみならず、其の上に吾人の生の苦惱の體驗の表現であると言ふ點に於て、爾來の易占に優さるものであつて、從ふて、占の的中と言ふ目的に對して、かなりに強き意義を持つて居る事は既に述べたる事からして首肯し得る事と思ふ。

尙、夢占は其の本來の根據である所の吾人の體驗の表現と言ふ意味からして、更に又藝術化されて來るのである。何となれば、吾人の個性に從ふ生の苦惱の無數の體驗が潜在意識として蓄積されて居たものが、極めて自然的な中樞の興奮又は神經末端の刺戟の元に表現された根本思想が夢として現はるるが故に、夫は著しく普遍性を持つて居るからである。

覺醒中に於ては、吾人の生活は自然界の法則及び社會的束縛を受けて、著しく個性を制限され、倂も社會の大勢に順應する事を強要されて居る。されど夢に於ては、全く自然界の法則とか、社會的束縛と言ふ樣なものから脫却して、全く自由である。孔子が夢に周公を見ずと言つたのは、夢幻鄕の理想を憧憬したのであらう。倂も亦一般に夢は個性から抽象されたものである。

そう言ふ意味からして夢が如何に吾人の文化に貢獻して居るかは次の樣な事からも言へる。

詩人ゲーテは夢の幻想に助けられて、プロメテウスを立案したと言はれ、ハイネの詩は夢の幻想の連鎖であるとも言へる。伊太利のタルテニーは夢中に於て鬼神の妙曲を聽いて、彼の有名な鬼神の曲ソナタを作つたと言はれて居る。畫聖ラファエルローは夢幻の鄕に於けるモデルに依りて名畫を殘したと言ふ。亦マホメツトは自分の夢を弟子に記錄させて、それから日々の出來事を豫言し、衆人の信仰を得たと言はれて居る。我が忠臣楠公が笠置の夢幻に依つて召し出されし如く、如斯き例は、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歴史を繙くものの常に遭遇する挿話であつて其の數は殆んど數へ盡せない程に多い。

夢は一つの理想である。從ふて夢なき國民は創見なき國民である。偉人は大なる夢幻に依りて、其の偉大さを增して行く、夢は吾人の主觀的批判者であり、亦指導者である。

八

されど私は決して、易占を當るも八卦當らぬも八卦として、全然排斥するものではない。易が其の本來の起原である所の日々の天體の觀測に依つて亦は新しき宇宙觀の結果から占はれるものであるならば、夫は吾人の運命を支配するものとして、意味のある事を認むるのである。唯現今の所謂易占は既に述べたるが如き、科學的にあまりに意義なきものとして、迷信に引き入れらるゝ可きものである。而してそれは最早や兒戲の玩弄物以上にはあまり意味の無いものである。何となれば現今の易占は、小兒が、銅貨を投げて、表が出るか、裏が出るかに依つて、事件の正否を定むるのと同意味のものであるからである。

迷信は迷信として、美化して行けば、宜しいので、夫れで充分なのである。而し之れを我々の生活に關與せしむる所に害毒を流布するのである。世間には、未知から來る迷信が澤山にある。未知の爲めに、亦未開の爲めに、換言すれば、科學的智識に乏しき爲めに、迷信を迷信と思はずに生活の方針を定めて刹那的な安心立命を得つゝ行く人が澤山にある。然るに假令へ迷信であらうとも安心立命さへ得れば宜しいではないかと言ふ人もあらう。然し私は斷乎として夫れを否定するのである。人智未だ開けず、原初的時代の如く、殆んど社會と言ふ有機的な國體を作つて共同の生活をしない時代は、夫れで宜しかつたかも知れない。されど現今の如く、社會が極めて複雜して、人と人との交渉が繁雜なるに從ふて、吾々の社會の人員が安價な迷信に依つて安心立命を求めて行く事は、何としても許されない、何となれば夫れは、社會の人心の惡化と思想の低下とを來たすからである。

されば、迷信は迷信として、一般社會人の前に明瞭に展開する事は、人心の向上を來たし、思想を善導し、生活の方針の歸就を意義あらしむる點に於て、社會改造上の一問題として、看過す可きものではないと思ふ。

（九、十、五稿）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

十五年ぶりに接した日本の情緒

佐々木指月

日本文明の一斷片

私が、ヴイクトリアの港をはなれてから七晝夜　百八十度を越すと、北海道の落石（おちいし）の無線電信が、私たちの船へとどくやうになつた。

船の、無線局の若い技師が、「君、日本の新聞が來ましたぜ、」と云つて、掲示板へはり出したミメオグラフの新聞のまはりへ、私たちは集まつた。

太平洋の、東端に渦を卷いてゐる日本の文明の、これがその遠心力の最もそとのサアクルの上に撒（ま）き出された、エ、フレイクである。

私たちは、肩をあつめてそれを讀んだ。たつた一枚の罫紙へ書いた十行足らずの日本の文字を、繰り返し、讀み返した。

その、掲示板の前を通り過ぎるたびに、私たちは立ち止つて、同じ新聞の同じ文句を飽かず見た。

活動寫眞の辯士を、警視廳で試驗したその試驗の問題が、十五年ぶりで日本へ歸つてゆく私にとつての最初の問題だつた。

私は、掲示板の新聞に書いてあるその問題の前に立つて、船のプロペラアのまはるたびに近づいてゆく日本と云ふものを、窺（うかゞ）はうとした。

「外來寫眞の挿註（インタアライン）を、その儘に翻譯したらば、我が國體にどう云ふ影響を及ぼすか。」と云ふ問題だつた

私の目はぼんやりとして、それらの日本字の四角ばつた作りや偏を眺めてゐるばかり、どうもいい答案が出て來なかつた。

大勢の活辯が、お髭の生えてる試驗官の前で、恐縮してゐる有樣が想像された。これはハアドな問題だ。

なにしろ、私が日本にゐた頃には、まだ活動寫眞と云ふものも一般に廣まつてはゐなかつた。活辯と云ふオレータアが出來やうなぞとは夢にも知らなかつた。渡米後になつて、日本では活動寫眞が下座つきで、どんちやんやると云ふことを、聞いた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くらゐなものだつた。

アメリカの活動寫眞場にも、オアケストラはある。然しオレータアは出て來ない。ところが、日本にはそれがゐて、それがまた、英語が出來て、とにかく斯ふ云ふ問題に向つて試驗をうけやうと云ふのだから、恐ろしい事である。

と、斯ふ思ひながら、私はなほその問題を眺めつゞけた。由つて起る所以の茫漠とした問題もあるものかな。これを透して見てゐると、日本の文明の焦點もなんだか朦朧としてしまつて、海霧のかなたにかくれたものとなつてしまつた。

金華山

この日暮れには、金華山が見えると云ふ、その午後の三時頃から、私たちは上甲板に集つて、小手をかざして、船の向つてゆく方を眺めた。

海にうつる太陽はまぶしかつた。千島の沖へかかつてから、海の風はしめりけを帶びて、これが日本の空氣だなと思はれる重さを含んで來た。船はその空氣を裂いて、眞直ぐに金華山を目がけて進んでゐたのである。

今日はいよいよ日本を目に見ると云ふ悦びは、つまらぬものではなかつた。水平線に山が見えると云ひ出したものがあつた。私たちはその方向をあすこかここかと聞きながら、漸くそれと思はれるあたりに、灰白い雲を見いだした。

あれは雲ぢやないかと云ふものと、いや山だと云ふ人と、二た派に分れて爭つた。私たちの持つてゐたオペラグラスでは、肉眼で見るよりも、ましな見方は出來なかつた。

晩餐ののちに私たちは、また甲板へ出て見た。日は來た方に暮れ沈んで、船に向つて金華山は、その姿をあらはしてゐた。

山の頂は灰色の雲を綿のやうに被つて、山の裾は凪ぎ渡つた浪の上にひろがつてゐた。山に生えた樹も、山の左につらなつた丘も、その上にまばらに並んだ松も、みな一色の灰色にぼかされて、絹地の上の水墨のランドスケープを思はした。

船は左へめぐつて、山は右へまはり、きらきらと燈臺の明りが光つた。

アメリカから病氣で歸る日本人は、金華山が見えると云ふ聲をきくと、船室から身をのばし、窓にすがつて張りつめてゐた氣をゆるめて、そのまゝ眼を落とすといふ話を聞いたことがあつたが、いよいよ日本へ來たのだと、誰しも云はないものはなかつた。

私は、ちいさい時に、父親と、このうしろの鹽釜神社へ參詣した時の事など想ひながら、燈臺の灯の見えなくなるまで立つ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐた。

海のおもてはだんだんと暗くなり、私の着てゐたレインコートは、夜の汐風にあふられて追々と濡れて來た。

太平洋を越えて來て、最初に見る日本の金華山は神ならば、女神ではない、人間ならば若者だ、獣ならば猪が牙を冷してゐるありさまである。

横濱入港

船が、横濱へ入港したのは、午后の七時頃だつた。八月なかばの日本は、思つたよりも暑かつた。港内の空氣は、べたべたと肌へついた。

珍らしい日本の土が、足に踏めると云ふことを面白がつた私たちは、相應に熱狂してゐた。

船が、岸壁へ着いた時は、あたりは眞暗だつた。

宿屋、宿屋の提灯は、立ち樹の幹のあひだから、山焼けの火が見えるやうに細長い赤い明りをいくつもならべて、それが波をうちながら右往左往にゆれてゐた。

宿屋の男たちが、客の名前を呼びあげる聲を聞いてゐると、そこに何んとも云へない家庭的な氣もちがある。

それに應じて答へるものゝ聲をきいてゐると、それがまた、他人に呼ばれた返事とは、思へぬ程の親しさを持つてゐる。

日本は家庭の國だ。個人を本位とした生活よりも、家庭を本位とした生活を、永代して來た日本人の家庭的な性質は、もう、この日本の入口からでも窺ふことが出來るのだ。

外國の埠頭に、ホテルのタキシが並んでゐて、そのタキシのショファーたちが、なるたけ金持ちさうな客を乗せて歸つて、幾分のティプに預からうとして客爭ひをしてゐるのとは、大分ちがふやうだ。

私は、宿屋へはかからなかつた。人力車を二臺やとつて、一臺には荷物をのせ、一臺には自分がのつて、暗いヲオタアフロントの、倉庫のなかを通り過ぎて、横濱の町へとはいつて來た。

横濱の町へ、はひらうとする處に、稅關の出張所があつて、私の手荷物をしらべた。岸壁の方でも、しらべたが、ここでは、しらべ濟みになつてるかどうかをしらべた。手荷物はことにきびしくしらべられた。

官吏は、小さい青いボツトルを、私のポケツトからさがし出して、これは何んだと云ふ。それは、スメリングソルトと云つて、あたまの痛む時にかぐ藥ですと答へた。

官吏は、スタツパアをぬいて、それの臭ひを嗅いだ。彼は暗な

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぴかへつた。強烈なアンモニヤ劑で作つた香髓を、それとは知らずに嗅ぎ込んだ彼は涙をこぼした。

彼は、もうよいと云つて、私の車を通した。私の二臺の人力車は、櫻木町へ向つて走つた。

夜の横濱

人力車の上にのつて夜るの横濱の町を通ると、左右の建物が、あまりひくくつて、星は私のあたまのすぐ上で光つてゐた。

紐育のストリイトの、高い建築の間から仰ぐ星は、ほんの空の一坪か二た坪に、十か十五程しか見えないが、斯う空もひろがつて、ありつたけの星が並んでは、見る方が少々恥かしいやうな感じがする。

私をのせて走つてゐた車夫は、ゴム輪の車を重さうに引つぱつて汗を流してゐた。昔の人力と云ふものは、がらがらつと、音のした處に景氣があつたものだつたが、どうもこの柔かい輪になつては、乘つてゐてさつぱりはづみがない。ただ、車夫に氣の毒な氣がしてならなかつた。

私の車は、星だらけな空の下を、きまりわるげに、ぬき足で走つていつた。

これが十五年ぶりで、はじめて日本の土の上をゆく感じがと、私はくすぐられるやうに小さくなつた。

一人の男がやつて來た。長い着物をぞろりと着て、薄い草履をはいてゐる。扇子を持つた右の手は、からだ全體のポオズとは何の關係もなしに、前の方につき出されて、さうして彼は歩いてゐる。

彼は晝間の撒き水で、濕つた土の上を歩くのに、白足袋をはいてゐた。歩けば足袋がよごれるだらうに、彼はどうも往來と云ふものの意味を知つてゐないらしい。家庭的な日本人は、往來もホームの一部分だと思つてるらしく考へられた。

然しあの扇子は何んのためにつき出してゐるのだらう。暑ければ、ひらいてあふぐはづであるのに、たたんで持つてゐては用をなすまい。

あのポオズは、江戸時代の士族なぞが、左の方へさした刀の、二本の柄に對して、そのつり合ひをとる上から、できたものにちがひない。刀がない今日になつて見れば、ああした形は却ていやな形である。

彼はまだ、江戸時代のスタイルを、何等の理解もなしに、くり返してゐる連中であると私は思つた。

夜の院電

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私は、私の荷物とともに、京濱間の院電の二等室に身を置いた。

電車は、櫻木町のステーションをはなれて、神奈川へ向つて走つた。

車内は、すいてゐた。私の眞向ひには、女と男が乘つてゐた。

女は、荒い紺と白との絞りの單衣を着て、黒繻子らしい帶をしめて、髪は丸髷で、鬢は鸚鵡を入れる籠のやうに、毛筋の間にスペースを澤山取つて、そして閃く目尻のところまで突きだしてあつた。

年は廿八九ぐらゐで、水色縮緬の湯卷の裾を、爪の小さい親指を持つてゐる足の甲に、まつはらしてゐた。低能らしい目の光をして、からだはぼつちやり肥つてゐたが、性殖力は弱さうだつた。それでも顔だけは、少し見られた。先づ日本の女としては普通なところだらうと思はれた。

女は、風にあほられて出てくる湯卷や、また、白い脛を氣にして、單衣の裾でかくしてゐた。

つまり、彼女のアテンションは、この場合、性(セックス)に、傾いてゐると云ふことを、そのしぐさで語つてゐた。

日本の女と云ふものは、消極的にアトラクテーヴであると私は思つた。

彼女の顔の表情は、作り付けになつてゐた。顔をふると、重い髷が、反對の方向に動くので、自然彼女の首はつくり付けになつてしまふのであると云ふことを、その眉毛が語つてゐた。

彼女が、からだを動かす時には、頤が、髷の中心をはかつてゐた。

日本の女性は、顔を動かさずに、腰をうごかす女性である。

彼女がもし馳け出したとしたら、その髷をかばうために、必ず腰をかばはないであらう。日本の女のかける姿のいぢらしさと云ふものは、ここに原因するのであると思つた。

彼女は腰かけてゐた。だから腰は動かさなかつた。その代りに胴を動かしてゐた。

彼女は、帶ぎはから、胴をきくりと、隣りの男の方へ曲げた。

隣りの男は、彼女の胴に對して、耳を傾けた。女は「……、」と何か話した。

日本の女は、公衆のなかで、男にものを云ひかけると云ふことは、一種の性的行爲であると思つてゐるらしい。さもなければ、なにも、ああ羞恥の情をあらはす必要はない。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼女はその羞恥の表情を、男の肩によせかけながら、また男の耳に「………。」とささやいた。

彼女は、廿八九にもなつて、その性的行爲の一部分を、公衆の面前で發表してゐる。

日本の女は、公衆に向つて、性的暗示を與へると云ふことは、女自身の恥辱であると云ふことを知らないらしい。彼女は、むやみに羞恥の安賣りをやつてゐる。そう云ふ表情をしながらものを云ふと云ふことは、婦人の美德の一つであると思つてゐるらしい。

彼女の羞恥の表情は、なかなか人工的に出來てゐる。ことによつたら、彼女は、羞恥の表情は、女の持つべき藝術の一つだと心得てゐるかも知れない。

して見ると日本の女と云ふものは、精神的に、彼女の性能を、公衆に向つて發表することを誇りとしてゐるに違ひない。それは丁度、西洋の女が彼等の肉體を表はして、彼女の性能を公衆に示さうとしてゐるのと同じである。

東西兩洋の女性の、性能を表白する上に就てのコントラストと云ふものは、實に面白いと思つた。

彼女の藝術はなかなか巧みだつた。男はそれに對して無關心を裝ふてゐた。

男は、五十あまりの、がんにん坊主だつた。

帽子をぬいでゐる頭の毛は、アメリカの罪人のやうに五分刈りにしてゐた。脂ぎつた皮膚を持つてゐて、黑ん坊のやうに厚い脣を持つてゐて、豚のやうに太い頸を持つてゐた。目の光は熟しきつた性慾に燃えてゐた。

白つぽいセル地の單物のふところを、船の帆のやうにふくらまして、そのなかへ色々なものを入れてゐた。

日本の男のふところは、ポッケトの代用と云ふよりは、むしろスーツケースの代用である。そのなかには色々な生活上の秘密も入れられてあるに違ひない。それを彼は一と筋の茶色の縮緬のへこ帶でさゝへてゐた。それには時計の金のくさりがまいてあつて、ふところの秘密の下に、幾分の富の程度をぶらさげてゐた。

それから下は、全部、開放的である。

單物は左右にひらけて、腿から膝にかかつた筋肉が、そのまばらな毛の生じてゐるブラウン色の皮膚に包まれて、だるさうにたるんでゐた。彼はそれを時々ぽりぽりと掻いた。音は電車の響のなかから、私の耳へもきこえて來た。

女は、それを見ながらも、一向平氣だつた。他の乘客も、そんなことは氣にしてはゐないらしい。私だけはそれを見守つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。そうして彼等二人を見くらべた。私は、笑はざるを得なかつた。

彼の隣にかけてゐる女が、しきりにその裾を氣にしてゐるのにくらべて、彼は、かれの帶から下を、殆んど閑却してゐる有樣だ。彼は、かれの性(セックス)と云ふものに向つて、何等のアテンションを拂つてゐないと云ふよりは、寧ろ、彼はそれを公然にして憚らない。

いや、日本の男は、彼等自身の性的行爲に就ては公開的態度を取つてゐると云へる。

日本の男と云ふものは、性(セックス)の問題に就ては一味の徹底を持つてゐるらしい。

彼等は、丁度この男が、自分の連れてゐる女に對して、帶から下の責任を感じてゐないやうに、凡の女性に對して、社會的にも個人的にも、自家の解放的性慾から來る責任を、一向無頓着でゐるのではなからうか。そうしてそれを、女性の方でも不思議がつてゐないのではなからうか。

西洋の男が、性慾の事と云へば、かくしたつてわかり切つてる事までも知らぬ顔で通したり、女の前では首より下の事は云はず、手より先の肌(はだ)も見せず、日本の公娼制度なぞを聞くときは、恐ろしい罪惡のやうに思つたり、一夫多妻主義などを畜生道のやうに惡く云つたり、そのくせ、誰もゐないところへ行くと、すぐに女の膝もとへハンカチイフを敷いて、跪(ひざまづ)いて、執(と)拗(ね)てしやうがないのにくらべると、これまた東西男性の、異性に對するならはしがコントラストをなしてゐて、まことに面白いと考へた。

彼等二人は品川で降りて行つた。あとにはお婆さんと若い男が、腰掛けの上へ肘枕でごろりと横になつて、贓物語りをしてゐた。二人の下駄は、電車のフロアにゆられながら光つてゐた。フアミリアな日本人は、電車のなかも自分の家と心得てゐるらしい。

男の下駄は、莫迦に幅が廣かつた。二つ並んでゐるところを見ると、履きものと云ふ感じはしない、乘りものと云ふ感じがした。

家並ひくくつらなかつた東京は、町々を照らすアークランプの光とともに、私の目にはひつて來た。

料理屋の、二階座敷のまんなかへ、團欒した男たちが、一人の女をなかにして、淺酌低唱してゐるのが見えた。

水に低く陰をうつした小料理屋の夏座敷のありさまは、一寸(ちよつと)した夕食をあすこでたべるところとしては、なか〳〵いゝと思つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そのうちに電車は東京驛へ止つて、私は荷物と共に卸りた。そして赤帽を頼んでタキシを呼んで貰つた。東京驛の前は暗かつた。

夜のタキシイ

東京驛と云ふステイションは、東洋第一のステイションと聞いてゐたが、あたりは眞くらで、どこにそんな宏壯な建築があるのか私の目には見えなかつた。多分ここは、その裏手だらうと思つた。然し、紐育でも、シヤトルでも、見る事の出來ない天然の土があつた。そうしてそれが、私の靴のうらへざらざらと觸れた。

横濱の、波止場から車に乘つて、櫻木町の停車場の、ペーヴの上へ卸りた私は、あすこでは土を踏むことはできなかつたが、ここではたしかに自分の産れた日本の、土を踏むことが出來た。

そして、その踏み心地は、あんまりよくはなかつた。何んだか平に靴の底へこなかつた。でこぼこした固いものがその下にあつた。

赤帽は、フオド型の自動車を雇つて來た。私は、また荷物と共に、それへ乘つて走つた。

十五年、見なかつた東京は、どこがどうだかわからなくなつてしまつてた。

堀に沿ふて植えてある細い柳のある町を、私の乘つてるタキシイは走つて行つた。

私が歸朝する時には、前もつて知らしてよこせ、さうすると東京驛まで迎ひにゆく、さもないと、まひごになるからと、云つてよこした從妹の手紙を、私は思ひ出した。

タキシは、暗い水のある通りを眞直ぐに走つてゐたが、やがて小さな見世屋のある通りへ曲つた。白地の浴衣を着た人たちが、町一ぱいに重なり合つて。衣紋竹にかかつたやうな格好をして歩いてゐるのが殊に目に立つた。

タキシは、坂道を上つたり下たりして、今度はその左右の車輪も通りかねるやうな、狭い町へ這入つて來た。町は眞暗で、ところどころの小見世の軒に、十燭ぐらゐな電燈がともつてゐた。

今迄、一度も後をふり向いた事のないタキシマンは、スピードをゆるめながら振り向いて「この邊ですか？」と云つた。

するとここは私の家の近所だなと思つた。

私のうちは、たしかに郊外にあるはづだと思つてゐたが、こんな裏通りのなかにあらうとは知らなかつた。私はタキシのなか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

から、きよろきよろ見まはしたが、どこに私の家があるのか見當もつかなかつた。

なるほど、昔、浦島太郎が三年目に歸つて來て、めんくらつたのも無理はないと思つた。

私は、タキシマンの顏を見た。「さうですね、私は、よく知らないのですけれども。」

タキシマンは車にスタツプをかけて、卸りてその邊を探しに行つた。私は一人ぼんやりとタキシのなかに待たされた。蚊が來て私の手を喰つて行つた。日本の蚊はアメリカの蚊より刺しかたがフイアスだつた。

そのうちに、タキシマンは歸つて來た。

私を見て笑ひながら、「へい、わかりました、この横丁です、」と云つた。

この横丁ならばこの通より幅のせまいことは、きまりきつてゐる。この通りより幅がせまければ自動車は這入れない。そこで私は自動車から卸りて、その横丁に敷いてあつた敷石の上をつたはつて暗いところを目くらのやうに歩いた。タキシマンはうしろから、私の荷物をかついで來た。

家の格子戸は明いてゐた。格子戸のなかは、子供たちのちびた下駄だの、箒だの、芥取なぞがあつた。

紐育からシヤトルを經て、日本までの長の旅行と、そうして東京り入と云ふ出來事のために、多少、大げさになつてゐた私の感情は、この我が家の現在の入口に立たされて萎まざるを得なかつた。

我が家から見た自然

八月十七日の朝の太陽を、私は早稻田の自宅から仰ぎ見る身となつた。

日本を立つてからの十五年も、今となつては夢の間であつたやうな心持ちがする。

私は二階座敷の疊の上にねそべつて、素足になつた足の裏へ、太陽の光線をあてゝゐた。

「日本の家はどこへでも寢ることのできるやうに出來てゐる。日本の疊は寢ることを樂ませるやうに出來てゐる、」と云つた、ミス、ボイルと云ふ紐育の女流彫刻家の言葉を思ひ出した。

靴をとつて靴下をぬいだ素足に、日があたる感じと云ふものは、丁度何年も獄につながれてゐた囚人が、急に天日に浴する機會を得た時の心持に、喩へることも出來やうか。私の心は新しい希望でも見付けたやうによろこんだ。

十五年間、きいた事のなかつた蟬の聲は、庭外の木立の上か

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら、雨のやうに降つてくる。青葉のかさなる間からは、日本の眞夏の空が見えてゐた。

カリホルニヤの夏の空は、ものに譬へて云つて見れば、疲れた人の熟睡に、どこやら夢のひらめいたありさまである。色で云へば紺である。

シヤトル附近の夏の空は、目覺めた人の目の前に、まだ何事の考へも現はれない前である。色で云へば藍にとかした胡粉である。

然るに、日本の夏の空は、これは丁度、哲人が獨り遊山をするやうな、色で云へば群青に摺つて落した雌黄である。

太平洋をなかにして、違つた三つの國々の夏の空のなかで、靜けさと、一脈の瀟洒とを見するものは、何んと云つても、私が今ながめてゐる、この空の色であると思つた。

雲は、陸地の形を模して、東京灣のなぎさの空と思はれるその一線の上に並んで、浮んでゐる。地に濕り氣の多い日本は、水蒸氣も多くは陸から立ちのぼる。それだから、雲のある下には必ず陸があるわけだ。

海と陸とのありかを語る雲の峯は、長の航海のその終りに、私が昨日廻つて來た房總の海岸を再び思はした。

鳶は、とろろとその羽を翻してゐる。小供たちが飼つてゐたきりぎりすは、日本語で鳴いてゐる。目に見るもの、耳にきくもの凡は私が十五年のそのあひだ戀しがつてゐた日本語で、ないものはなかつた。

下谷行き

一日の休息を取つたその翌日、私は舊知の人々を訪ふために出かけた。

江戸川線の電車のあるところ迄は、子供に送られて行つた。曲りくねつた道のある町々へは、一人ではとても足を踏み出すことは出來なかつた。

辨天町や、榎町や、鶴巻町と、その名は昔のまゝであるが、未だ曾て、見た事のないアレイと云ふよりは、むしろデエンのやうな、ところだと思つて通り過ぎた。

私が以前ゐた頃は、この邊は黃色い花の咲く菜畠だつた。赤い崖の下には、蛇が出てゐたところだつた。

それが今ではこの通り、昔のメモリイをつなぐに足るものは、殆んど一つもなくなつた。

私は子供と別れて電車にのつた。電車のなかは袂と下駄で詰つてゐた。私はなかへははひらずに、車掌の脇に立つてゐた。見るものはみな珍らしかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

絹の着物を着た奥樣が、次の停留所で卸りやうとして、もがいてゐた。

あれだけの衣類を着ることの出來る人ならば、なぜ車に乘らないのだらうかと思つた。

いくら絹布を着ても、金八錢の交通機關へ乘つたのでは、奥樣のレピユテエシヨンにかかはるだらうと思つた。

電車は大曲りへ來た。私は昔、ここで泳いだものだ。毎年こゝで子供が一人ぐらゐは溺れたものだ。今ではそれが兩岸は石で築かれて、猫にだつて泳いで渡ることの出來るやうな、狹い流れになつてゐた。

思ひもよらない大通りが出來てゐて、電車はそこを上つて行つた。

小僧が、自轉車へ乘つて、電車のあとからやつて來た。大きな包を背中へ積んで、汗みづくになつて、足をふんばつて、それでもハンドルがふらふらするので、自轉車はよろけてゐた。

何も、あんなに骨を折つて、自轉車へ乘つたまゝで坂道を上らなくても、卸りて歩いて上つたらよささうなものだと思つた。

然し、昔は自轉車と云へば、殆んど遊戯に使はれたもので、或は贅澤品と見なされてゐた。それが十五年目の今日では、實用に供されて、いや實用どころか、荷車の代用までしてゐる。

だが、この順でゆくと、今の自動車が、一般に實用されるにも、もう十五年かからねばなるまい。日本の物質文明の前途も遠いかなと思つた。

傳通院前から乘つた人々のなかに一人の美人があつた。

髪の形を見ると、これは束髪であるが、前を二つに分けて、それをたばねて後の方へ四吋ほど烟突のやうに突き出してゐた。

そして、切り餅のやうな四角なピンで、それをホールドしてゐた。

はて、見たことのある髪だと思つて眺めてゐたが、これは十年ばかり前に、アメリカで流行したグリイキレエデイスタイルと云ふ髷だつた。

ブロンドの半透明な髪の毛で、これを結ふとなか／＼あだつぽいものであるが、日本人の毛のやうに、オーペエクな黒い髪では、重くるしくつて、見てゐても骨がをれる。

顔には、白いお白粉が、ぴつたりとくつついてゐた。そうして電車のベルトを摑つてぶらさがつてゐる手から肘までは、綠色を含んだ黄色だつた。顔を見て腕を見ると、その間には何の色彩の調和もなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

アメリカのオクタアルウンと云ふ、白人八分に黒人二分の混血美人は、うす紫の白粉をその顔につけるけれども、手はいつも、長いグロオヴでかくしてゐる。それとこれとをくらべると、日本の近代美人は、まだまだ自分たちの化粧にさへも、目醒めてゐるとは思へなかつた。

昔、クレオパトラは藍色のお白粉を顔に塗り、ナポレオンの戀人のジヨセフインは灰色のお白粉を用ひたと云ふ。今の紐育の猶太人の娘たちは、黄色や、朱色や、薔薇色の、色々のお白粉を、顔の上へ塗り分けてゐる。

お白粉と云へば、白いものだときめてゐる日本の美人たちは、まだまだ個性の上の生活をしてゐるとは考へられない。

彼女の袂は長かつた。その長い袂は群衆の間に在つて揉まれてゐた。

西洋ならば、このくらゐな美人が電車へでも乗らうものなら、それこそ大持てで、男の五六人は一度に立つて座を譲るのであるが、如何せん日本は君子國で、女子と小人を近よせないのがいいとしてあるのだから、誰もその美人の顔を仰いで見るものさへもなかつた。

電車は、湯島切り通しをだら〳〵と下つて上野廣小路へ出た。私はそこで卸りて公園まで歩いた。

はち卷をして、荷車をひいてゐる若い男がやつて來た。私は日本人だから、あれがはち卷であると云ふことを知つてゐる、あの男が怪我をして、あたまへ繃帶をしてゐるのではないと云ふことを知つてゐる。だが、見てゐてをかしかつた。

はち卷と云ふのは、昔、男が、ちよんまげを結つてた時代に、髪の毛がほつれてうるさいから、それを止めるためにしたものだ。この若者は、髪を五分刈りに刈つてゐて、髪の毛なぞはありはしない。それだのにはち卷をしてゐる。一寸見たところでは頭痛でもするのかと思はれる。何んぼ江戸時代の遺風を保存するのだと云つたところで、ちよん髷を切つてしまつて、はち卷を惜むと云ふ、そんな必要はないぢやないか。

あの、上野が燒けたと云ふその時から、日本のちよん髷思想は切られてしまつた。然しまだ、はち卷思想が殘つてゐるかと思ふと、私は笑はざるを得なかつた。

上野公園

私は淸水堂の下まで來た。不忍の辨天を中央にして、目の下からひらけてゐる景色を見ると、日本の風光は、日本畫に、似てゐるとばかり思つてゐたその感じは、うらぎられた。これは却て濃い油繪のたぐひだつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

靑く重い池の水や、その池の上をなかばとざした蓮の葉のくされた色や、それに浮ぶ水鳥や、四五日前に大雷雨のあつたあとだと云ふ空の模様や、それがみな太平洋の汐風をまじへて、じとじとする空氣のなかに潤んで、暖國の晩夏の趣きをあらはしてゐた。

私は昔、四年のあひだ、殆んど毎日のやうにここを通つたものだが、その頃は何と思つてこの自然に對してゐたらう。今になつて考へると、私はその時、二つの目を明いてゐたとは思はれない程である。

然し、兩側の樹には、心覺えのないこともない。その昔のメモリイを惹く樹の群は、見ちがへる程のびてゐた。

私は、道に敷いてある、小砂利の上を踏で歩いた。

黃色い砂に敷きつめた、玉川砂利は玉川の川床をここへ移したやうである。

竹の臺へと續く杜は、川岸に立つてゐる杜のやうである。

正午に近い太陽は、殘暑の光を森閑と私の上に注いでゐた。

私はをりから、開會中だつた、院展の展覽會へと這入て見た。

院展

十五年間に日本の美術は進んだと云ふ話である。然し美術展覽場は昔のまゝだつた。

西洋の、アウクショニアが、その品物を入れて置くバラックのやうだつた。

私は、先づ彫刻の前へ立つた。その次に油繪の前へ立つた。その次に日本畫の前へ立つた。

流石に、日本は日本畫の本家である。

どうかこの金看板を、いつまでも卸さないやうにして貰ひたいものだと思つた。

だが、日本畫で、西洋畫の眞似をしやうとしてゐる連中のあるのには、悲觀してしまつた。こう云ふ連中には、やつぱり、活辯と同じやうに、警視廳あたりで、試驗を課さずばなるまい。

その問題は斯うである。「外來繪畫の技巧を、そのまゝ邦畫の上に利用したならば、我が國家にどう云ふ影響を及ぼすか。」

先づ、さし當り、日本畫は、外國へは賣れなくなる。もう既に賣れなくなつてゐる。

この數年、紐育の市場では、日本の美術品は、支那の美術品に蹴落されてゐる。

それは、日本の美術品は、近來いやに西洋趣味をとり入れ過

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あつて、それが顔容の目を毒するからである。

然しこれはたゞ貿易の上のこと、まだ外に、祖先傳來の藝術と云ふものが、そろ〳〵亡びてゆきはしないだらうか。

昔、支那では、そのダイナスティーの代るごとに、音樂が先づさきにかはつたと云ふ。尤も日本では、音樂は既にかはつて來たが、こんどは繪がかはる番らしい。藝術の推移といふものは意味の深いものである。

私の乘つて來た船が、百八十度を越えるとともに、感知した日本文明の遠心力を、私はここでは求心力として、ハアトの上に感ずることが出來る。私はそれ等の西洋臭ひ日本畫の前に立つて、丁度亡國の歌でも聞かされるやうな氣がした。

私は、展覽會場を御免蒙つて外へ出た。そうして恩師が住んでゐる谷中天王寺町へと急いだ。

天王寺

茶屋町をぬけて、墓地の通りへはいつて行つた。こゝだけは昔のまゝだつた。

たゞ川上音次郎の銅像が、この純日本式の墓地のなかで、フロツクコオトを着て、シルクハツトを持て、立てゐるだけだつた。彼が、壯士芝居を携へて、突如として日本の舊社會のなかに現はれたやうに、彼はその死後に於ても、銅像となつて、突如として舊スタイルの墓地のなかへ現はれてゐる。そのアイロニツクなところが、まことに面白いと思つた。

五重の塔を見上げれば、これはまた昔ながらの姿をして、松のなかから聳えてゐた。地下に眠つてゐる人々の墓の上では、畫眉の小鳥が囀つてゐた。

私は深くその沈靜な空氣を呼吸しながら、一つの石の杭が道に當つて立つてゐる所まで來た。私はその石の前で立ち止つた。石には兩忘庵と云ふ三字が彫りつけてあつた。

はてな兩忘庵と、面白い庵號もあるものだなあと、私はその字を見守つた。

主と客とを忘れ、心と物とを忘れ、生と死とを忘れる。凡てものゝ相對を忘れると云ふ意味らしい。そうしてそれが道のまんなかに立つてゐる。

どうもこれは深い象徴だ。禪宗の師家か何かが、この庵に住んでゐるにちがひない。庵はきつとこの近所にあるのだらう。

石のうしろには、松の若木が植えてあつた。私は何かの本で讀んだ、「巖谷に松を栽て後人の標榜となす。」と云ふ句を思ひ出した。やはり宗教なぞと云ふものは、この松が自然のうちに大

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

木になるやうに、自然に盛んになるのを待たなければならないものなんだ。この松はまだ小さいが、この師家の腹はなかなか遠大なものだ。またそこに何とも云へない東洋風のいいところがあるのだと、日本へ歸つてからのはじめての感心をして、私は右に曲つた。

私がこの十五年間、刹那にも忘れ得なかつたなつかしい恩師の家は、數歩のうちに近づいた

私の指は、恩師の家の、門のくぐり戸のとびらにかかつた。

淺草行き

その夕方、私は、淺草の藝者屋町に住んでゐる一人の叔母を訪れた。

藝者屋町の下水溜には、殘暑の宵の、格子戸の角燈の灯が、ちらちらと映つてゐた。

私は、叔母と久々のものがたりをしながら、それをながめた。

下水に渡した土橋の上を、音もなく藝者が通つてくる。たかだかと褄をつき出して、足袋のさきを見せて、髪のかたちを水のおもに映して通つてくる。

日はもうとつぷりと暮れてゐたので、藝者の顏ははつきりとわからなかつたが、ただ、衣紋からつき出したその衿くびにぬつたお白粉が、向ふがはの料理屋の板塀からぼんやりとのぞいてゐる電燈に照らされて、くつきりと白く、少し冷たさを帶びたものになつて見えて來た。

格子戸の明く音がして、私には從妹にあたるお花と云ふのがはひつてきた。

十五年逢はない間に、彼女のおもざしは、すつかり變つてしまつてゐた。

お互ひに他人のするやうな時儀をしなければならないほどに、心もちもへだたつてしまつてゐた。

子供の時には、二人で芝居を見に行つたり、また喧嘩相手になつたりして遊んだものだがと、私は昔を思ひかへして、うちとけた心になつて話しかけた。

向ふの胸にもその心がうつつたと見えて、なつかしげな笑みをして、その唇を私に向つてひらいた。

向ふは珍しさうに私をみてゐた。私も珍しいから向ふを見た。さうして私たちは笑ひあつた。さうしてその笑ひは、危くも、作り笑ひになりさうになつて、消えていつた。

その時、私は彼女の齒が、金でうめられてゐるのを見た。その金齒が、臙脂で染つてゐるのを見た。昔は、笑くぼがあつた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と思つたがと、思ふはづみに、彼女は疊の上へその視線を落してしまつた。どうも、目いろも前よりは、よほど濁つてゐるやうに思はれた。

私はしばらく、隣りの座敷にある、いくつかの鏡臺を見ながら、叔母があほいでくれる團扇の風をうけてゐた。

お花は、ビイアをついでくれた。氷で冷やしてあつたと云ふビイアは、なまぬるくなつて、外國ではたべられまいと云つて、取つてくれたまぐろのさしみは、糊のやうになつてゐた。

私は、すゝめられた浴衣にきかへて、らくに座り直した。

叔母はしきりに私の浴衣すがたを見てゐたが、「お前もだんだん父親に似てきた。」と云つて、その目から涙をこぼした。

私の胸は、急に波だつて來たが、私はそれをぐつとおさへて、「さうですか、似て來ましたか。」と答へた。さうして私は、庭の方を向いて、また下水溜にうつる灯を見た。一つの灯はいくつにもちらついて見えた。

また、格子戸のあく音がして、私の前に四五人の娘たちが現れた。

私が日本を立つ時には、この娘たちは、みな乳呑み子だつたと云ふが、私には名を聞くのも初めてで、これが私とどう云ふ肉親の緣をもつてゐるのか、それすら私には、はつきりと、わかつては來なかつた。

それでも、先方では私の名を知つてゐて、膝をすゝめて私の前へあつまつてくる。

私は、ただ茫然として、その水ばんだ島田髷の並んでゐるところを見た。

さうして、かなりたくみに、ものを云ひさうな目と唇とを持つてゐるこれら藝者と云ふものに對して、何か相當な親しい言葉を語らうと思つて、しばらく私は考へた。

ここの叔母に多くの甥はあつても、かうしてこゝを訪ふものは、昔から、私ばかりであつたことも、また新しく思ひうかべて、一層あはれにこの娘たちの顏を私は見まはした。

藝者たちは私の上に眸をあつめて、私が云ひ出さうとする、その言葉を待つてゐた。(完)

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

想華

大連にて

木村莊八

一

大連に着いた。

自分は此の地でいきなり××ホテルと云ふ旅館へはいつた。小さな洋室で据付のベットが右手にあり、テーブルの上には卓上電話など置いてある。室の入口には洋服ダンスの上に大きな鏡があり、それに反對側の書物机の正面にも亦小さな鏡がある。つひものを書いてゐて前の鏡面を見ると自分をはさんで向き合ふ大小二面の鏡がいたづらをして何と澤山に自分に似た奴がずらりとならんでゐることか。銀行の如し。もしその後ろ向きがふり向いたり顔が笑つて舌でも出したら全く自分は氣絶する。——さう云ふ不健康な想像心を誘ふ。それでなくとも心忙しく、寂しいのだ。落付かぬ、イヤナ室である。遙かにのどかなリンの音とうるさい太鼓が聞えて來る。リンは支那馬車の鈴であらう。太鼓は室前のヱランダを隔てゝ筋向ふの活動館で、松之助を映し初めたと思はれる。

女中が廊下をケラケラ笑つて通るが、一體此の地の日本人は荒んだ、あくせくとした寂しい感じがする。笑ひも何か空しく響く。——此所の湯屋番が自分に畫を見せてくれと云つて先夜室へ來た、自分は寫生畫を出して見せたが、彼は「内地の寫生はないのですか」と四五枚見終つてから僕に聞いた。一瞬、寂しい氣の毒な感じがした。——實際遠いのだ。金を目的に持たずに此所へ來てゐる日本人があらうか。彼等は此所へその氣で來て家を持つ。又は家族を呼ぶ。恐ら

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く金は如何にか出來る。此の地は内地よりのんきで、樂である。――それに馴れる。つひ此所の生活に安樂を感じて――さう云ふ多くの人は幸福かも知れない――次第に今見る如く街が出來た。丁度滿韓のハゲ山へ植ゑた日本のナヘ木と同じである。次第に日本くさく土地を化かす。醜化が稍もすると却つて目的になる。

見渡す限り、誰も――日本人で――此の地に個人の歴史を持つてゐると思へる人は一人もない。此の地にあり得た人生は「結婚」からがやつとである。母に抱かれて泣きながら世にも滿足して此の地の風物を見た消へぬ經驗は、現在小學期の子供だけにしか味はゝれてゐない。全き無意識の中だけに。戀愛や死、友情、立志――等青年期の出來ごとはいろ／＼此の地の淺い歴史の中にも、人事の上に起つたであらう。然しそれより成功や破産、貧、富と云ふ樣な地上のことが、より多く歴史の骨組となつてゐる筈だ。

渡世の濁流にもまれぬいた武裝した金界の兵士の如き人間が、寄つてたかつて此の地を之れまでに建て上げたのである。物質の妖氣がゆらゆら至るところ、歩道のタール塗りにも流れ迷ふてゐる。阿片でまうけて出來た道路、モルヒネでまうけて立つた石造建築、カンカンと日が當り、雨は殆んど降らぬ。餘りに自分と遠いので天も忘れて洗はぬのか。で、一歩郊外へ出ると砂塵がセメンのやうに舞ふてゐる。その臭い苦しい赤はだかの大地の中では、支那人達が天幕を張つて、野天バクチをしてゐる。蠅だらけのパンを食つてゐる。又はモヒ中毒で往來にゴロゴロねくたれてゐる。

その空地を去つて小崗子支那町へはいると軒並み遊女屋が並んで灰色にくすぶつてゐる。支那、朝鮮、日本の三國の女がゐる。鍵の手に曲がつた角の灰色煉瓦建ては盲目のやうに戸を閉ぢて森閑としてゐる。何屋かしらん？　窓硝子からそつとのぞいて見ると、此の暑中、閉て切つて、みんな寢上に横たはり阿片をのんでゐる。門口に老人の門番がゐて、ボロボロ涙をこぼしてゐる。

二

此の地(大連)で育つた子供は、溫和な日本の氣候を知らず、やさしい風光を知らず、街では東洋よりも多く戯畫化の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

西洋を見、郊外では坭の如きデカダンの支那生活を見て、思ひ測られぬ不思議な心理の中に、恐らくは變則に生長しつゝある。

生れるとすぐに二つの人種を見、二つの國語を知り、その人種の中一は二を全く壓倒してゐる不自然を露骨に見る。此の地の子供は車夫や苦力の日本人でないことを知つてゐる。同時に故に人間でないと思つてないと誰に云へやう。少くも對象がさう思はせ、大人がその感をあほり、子供心にしみ込む。「あの人間は人間でない」と。

さう云ふ生活で鑄られた子供——故郷なき日本人——は、今年十七歳が最年長だ相である。世の中の大切なことをかゝる邪險な搖籃の中で敎はつて十七歳になる。小學の生徒は富士山を見ぬ想像で描いて、赤く塗る相だ。滿州のヘゲ山の様に。次第に全くどう世の中が見えて行くことか。

三

町に立つて見ると、往來はすつかりタタキのやうにかためて何所も電車道のやうであり、又電車はどの町筋を通るのか特に電柱を注意しないと往來だけ見ては一寸わからない。——それ程「いゝ。」

それに兩側ぎつしりと家が建つてゐる。何所も帝劇のそばのやうに「冷情でリツパ」である。外構への日本家屋は一軒だにない。

そして皆商賣してゐる。實に「商賣」してゐる。町それ自身商法取引の感じがする。人は商法の爲めに生育してゐる感がある。此所で聞くと日本語は商賣取引の爲めに使ひ、支那語は勞働の爲めに使はれる様だ。二つの國語が物質の妖氣に魅入られて喚き、ヤケになり、情なき音となつて、みぞれのやうにバラバラ寒く耳を撃つ。

およそ美術文藝と云ふ種の靈は、此の地の「出來」には關係更にないのである。(骨董は關係がある。自明の如く。)——恐らく話に聞くニユーヨルク市で電燈越しに夜月を見たら、こんな感じか。精神が引込み、物質が出しやばる。又人はそれでいゝと思つてゐる。寧ろ知らずにゐる。電燈があるので月は要らない。誰も月を見ない。稀れに見る者はそれは

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

無いこともないだらう。只彼は渡世に失敗するだらう。

――然し彼等も「月見」はする。夏の夜老虎灘へ行くと海に月見船が一杯出てゐる。支那舢舨（シャンパン）にオレンヂの硝子ランプを吊り、三味線をのせ、酒をのせ、蚊のやうに歌つて、上から見おろすと暗い入江の中をそれがチラチラ行つたり來たりする。溺死の死體をさがすに似てゐる。

月は恐ろしく遠く煙る黄海の水平線の彼方に、美はしく浮ぶ。その靜けさ――

自分はあとで奉天ドロボー市場と云ふ支那人の市場を歩いたが、砂だらけの街路、奉天城内の灰色の城壁下にぎつしと並び、市を張つて、あらゆる「物品」を賣つてゐる。物品が主で人間は從――それに隷屬する生きた重寶な機械である。ぞろぞろとそのせまい横町を人が通る。何かしらうまくゴミの中から世に稀れのものを掘り出さう爲めに、云はゞこつちは「買ふ金」に屬する、よく歩き、見、注意をする、同じく生きた重寶な機具だ。その機具同志が、汗とほこりの中で、「物」を中間の祭壇におき、負けろ、負けないと露骨論をする。終日且年中それでガヤガヤいがみ合つてゐる。慾が。――それを見たが、大連よ。汝も煉瓦造りの一つのドロボー市場に過ぎなくはないか。

四

町には蠅のやうに支那苦力（クーリー）が車を引き、又は客待ちして、右往左往してゐる。歩いてゐる日本人は殆んど自分だけと云つても或る町筋では誇張でない。何所を歩いても何所を歩いても徒歩の人間は支那人ばかりにぶつかる。――或る日道を聞かうと思つて長い通りをその異様な經驗で歩いた。尤も日中であつたが、日本人は恐らく家の中にはいつてそろばんをはぢいてゐるか、夢中で株の話をしてゐるか、又は支那苦力の車又は馬車にのつてその堅い車道を樂にすべるのだ。殆んど歩かないと云つていゝ。

その中をブラブラ歩いてゐる自分――日本人――大將（チャングイ）――を見付けるので、苦力の車屋は支那語で何か云ひ、車を引きつける。町角などではこつちが曲がるといきなり四方から引き付ける。手をふり口をとがらせて「クルマー、クルマ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ー」と云ふ。

自分は來たあくる日滿鐵本社前まで用があつて出かけた。地圖をたよりに步からうと思つて出たがホテルから二十間程行くと道が二つに別れてゐる。一寸わかりにくいので或る門口で立話してゐる背廣の無帽の會社員に道を聞いた。

「それは少し遠くてやゝこしい。車へおのりなさい、十錢もやればいゝ」

彼はすぐわきの並樹下に休んでゐた車夫に支那語で何か云ひ、自分は妙な氣分で兎に角車にのつた。イヤ、のせられた。どうなるのか――

彼(車夫)は自分を乘せてのつそりとイヤに大きく走り出したが、支那苦力は身體が大きく、力も强いのでよく引く。オールのやうにスースーと前へのり出る。少しもガタピシしない。そして早い。

自分はバカの樣にあつちこつち見て不安を感じつゝ引かれたが、稍二三分も乘つたかと思ふと電車停留場があつて立札に「本社前」と書いてある。右手に大きな建ものがある。然し車夫は――まだのそ〳〵引いて不安である。「オイ君、本社前だ、マンテツだ。」おろしてくれと云つた。彼はモチモチふり向いて然し意味を悟り、かぢを下ろした。

「いくら?」

「五十シエン」

「さつき十錢だと聞いた。」

「五十シエン、五十シエン」

彼は無氣になつてゐる。「雨フル」と云つたが成程雨が少しふつた樣だ。道がいゝので感じなかつた。

自分はタメシに二十錢やつた。ところが彼は自分のガマロ持つ左手をいきなりおさへて、何か早口に云つた。自分は驚いた。

「もう十シエン」

何と云ふ熱心なことだ! 大きな眼をして。で、僕は「もう十シエン」出してフト變な氣が起つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「オイ、コスイゾ」
と彼の肩を笑つて叩いてやつた。

彼はすつかりニコ〳〵してやがて車を引き向ふへ行つた。何か快活な輕い元氣な氣分になつた。然し下りは降りたが一體此所は何所だ？

やつと西洋料理の出前持ちに出逢つて、訪ね先きを親切に聞き、用をたして返つた。

返りには危ふく歩いて歸つたが帝大を森川町正門から赤門へ一寸まはつてぬける位ひで、何でもなかつた。

一體此所は小さな、只ゴタゴタしたうるさい町である。

五

町には山縣通りとか大山通りなど、大將の名が矢鱈に付けてある。大廣場と云ふ圓形の妙な小公園の場所がある。（そこを中心に八方へ町筋が走つて「大連」になつてゐる。）四方西洋建築に圍まれて丸く開き、木や草が植はり、うね〳〵道がつけてある。日比谷のやうである。その廣場の一隅に、見ると日本軍人の銅像がうしろ向きで立つてゐる。前へまはつて見ると大島とか云ふ人の像である。汽車で見たが何かの本に、多分此の人と思ふ――ダルニー時代に此の地を見て「露西亞にあゝ作らせて今に日本が頂戴する」と云つた、とあつた。銅像は外套をカンカチになびかせて劍をつき、森然と遠く向ふを見てゐる例の姿である。全くかう云ふ人間がよつてたかつて此の地を「取つた」と云ふ露骨の感がある。

自分は同じ日本人で少しこの白日の前に、氣が引けた。いゝことではない。

六

ホテルへ歸ると晝飯になつてゐたが女中は東京御徒士町の人で、すつかり大連をバカにしてゐる。せまい、せまい、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上野の山を持つて來たらつぶれて了ふ、と云ふ。妙に同感である。——彼女の思つてゐることは少くも自分も思つてゐる。「東京はいゝところだ」と。

實際「東京はいゝところだ」。そこにもいろ／＼イヤなことはあるが、只世に稀な凡てを蔽ふ一つの美がある。精神の渦がある。恐らくそれは世界の何所にも稀れに見るものだ。黄金の出る山が假令外面垢だらけでもいゝやうに、我等の東京はいゝところだ。美が一つあれば千の醜もつぐなへるのだ。

彼女は給仕しながら何所へ何しに行つた、と訊いた。自分は車夫の話をした。彼女は話材を感じて、支那苦力の惡口を散々に云つた。彼等はドン慾で汚なく、臭い。人間ではない。餘り金ばかりほしがるので時には日本人に靴で頭を蹴られたりステツキでぶたれたりする。ぶたれるとやつとへこたれる。

此の地の子供は内地へ行くと同じ日本人が車を曳いてゐるので氣の毒だ／＼と云ふ、と話した。「支那人は車夫に生れ付いてゐるのだ」、車へ乘つたら何所へ行つても十錢やつて、ブツブツ云つたら警察へ行くと云ふのがいゝと云つた。

自分はそれを聞いてゐながら次第に飯がまづくなり、不快に、憤まんになつた。

此の地の日本人に對して腹が立つて來た。

車上から蹴るとは何だ。大方先刻町で自分を車へ乘せた、あの二人の會社員の如きが「彼」であらう。あり得ることである。十錢紙幣の如き痩せたカスカスの賤民！

「日本人はそんなに此所で威張つてゐるのか？」

「エヱ、あなた。支那人は何したつてかまやしません。」

自分はそれを全く通稱露西亞町のジヤンク波止場ではからず見た。場面で。

七

自分は先刻車夫をねぎつて、後悔した。あとで或る町で又彼が誰か日本人をのせて走る姿を見た。その輕快な姿のあ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る燕の如き早い影繪が、女中の話で眼にチラチラと復活し、自分を刺した。
その影はチヨツと横を向き、齒を出して云ふ。
「ねぎつた日本人、どうです、御飯はおいしく上れますか？」
でも蹴られなくてよかつたと若し彼が少くも思ふ、――思ふことがあり得る――と思ふと、たまらない。それが此の地であたりまへでは此の地はたまらない。

八

翌日露西亞町のジヤンク波止場へ行つて見た。――地圖をたよりに。
日本橋と云ふ橋がある。あの「日本橋」から化物像をとつた感じである。橋下を汽車が通り、すぐ近くに大連驛が展く。こつちの汽車は驛へ近づくと低い煙突のわきに吊るした眞鍮のベルを大きくゆらして、カンカーン、カンカーンと不安に事あり氣な合圖をする。霧の場合の用意と云ふが、寂しい異境の感じである。つひ家のことなど思ふ。
その日本橋を渡つて、まつすぐ行くと露西亞町へぶつかる。ロシアの時代に作つた町でその名がある。ジヤンダークの活動のダークの町のやうである。その突き當りが海になり、波止場がある。
何と云ふ美しい海であらう。眞青と云ふ言葉の通りである。又何と云ふ味のある船。――昔蒙古から攻めよせたと云ふ兵船に似てゐる。黑く、反つて、二三本マストが立ち、小さな紅旗が各檣にヒラヒラ舞ふてゐる。おゝ、帆を上げてゐる、帆を。眞黑なガバガバの帆を。ところか上下三段に上げると全く形ちが付いて、美になる。それも支那獨特の古風な大味に。
自分は感嘆してそれを見てゐた。
自分は波止場の水彩寫生にかゝりたく、或る舟の影に位置を据へやうとした。がたまらぬものを見た。一人支那人が尻をまくり糞をしてゐる。糞が尻からたれてゐる。それを、――何と云ふことだ――日本勞働者がガリガリあたりの砂利

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を散り散らして、叱つてゐるのを見た。支那語でガミガミ何か怒鳴つてゐる。支那人は莢をしながら居ざつてそこを逃げる。

勞働者と云ふ日本の人間が支那人と云ふ世の生きた何かを使つてゐるのだ。多分。

自分は實際がつかりした。

九

自分は然し——後に平壤で——更にひどいシーンに出逢つた。そこには「不正」の中に妖火の如くありありと燃へる感情と意志がある。自分は大連に視點を据へて書いてゐるが、一つのものをそこに見ながら、その目標からいつか八方に糸が出てつひ平壤へも京城へも奉天へも安東へも材料のつながる場合がある。此の滿韓の植民地には、その廣大な一帶の地域を蔽ふて、相共通する無形の事がいくらもあるのだ。一つを正視するとみんなつながつて伏せあみが上がつて來る。この字の仕事では——それは小說だか散文だか詩だか敍景だかわからない、結局自分の才能として論ではかけない材料のうちに立つてゐるわけ——そこでは、自分は形ちなき畫架をあつちこつちへ持ち步いて材料の中を多少步きまはる必要が起る。

自分は平壤へ二人連れで下りた。停車場をおりると廣場があつて遠くに灰くすんだ低い町が展き、驛から下車の客が吐き出されるのを待ち受けて改札口前に二列、右と左りに人力車隊がひかへてゐる。その辛い脆い世渡りの黑塗りの砲車をずらりと並べて待つてゐる。生きた勝手な彈丸の發射の命令を。

自分は革鞄と毛布の荷物を持つて立つてゐたが、それと見て左側の列から車が一臺引きつけて來た。自分はそれに乘つた。

連れには同時に右がはの列から車がやつて來て彼はそれに乘つた。

そこで自分は「くどく惡ふざけする」我々の二人の車夫を見た。——連れへ右がはからは車が、自分へ左がはから引き

つけたより遅くれて來たが、おくれて右から來た車夫は、いきなり既でにカヂを上げにかゝつてゐた自分――左がはからの車夫の首に腕を卷いて、彼を少くも此の言葉の感じでねぢ伏せ、そして云つた。

「何故こんな所へ頭を出しやがる」

自分は變だと思つた。

わるくふざける車夫同志だ。何所へどう頭を出したのだらうと思つた。その「頭を出した」車夫の車上で。

そこへ又右がはからガラガラ若い車夫が空車を引いて自分のわきへやつて來た。二人の客に車が三つ來た。

「旦那、こつちへのりかへて下さい。帳場がちがひますから」

と連れを乘せた「ねじ伏せた」車夫が自分に云つた。

「もう乘つてゐるのに如何するんだ。之れで向ふへ行けばいゝぢやないか」

と僕は云つた。チラと感じた。朝鮮人と日本人だな。――然し左がはの車夫はしきりに「帳場がちがふ」ちがふと云つた。あとから來たその仲間の車夫はその間に既にわきから手を伸べて默つて、僕の足の州から切角立てた靴をどけ毛布をどけ、自分の車夫は一たん上げたカヂをおろし、――その時彼の薄毛布が地に融け折れる如く、蹴込みから下ちた――自分はのめり相な工合になり、つひ有耶無耶に、その車をおりて隣りのあとから來た車へ乘つた。

が、迷つた。不快を感じた。おりて了はうと思つた。然しその時は既でにカヂが上がり、二臺走り出してゐた。

この二人の右がはからの車夫は、日本人である。自分を眞先きに乘せて忽ち邪魔がはいり、自分――何と不甲斐なき客であつたらう、氣が引ける――を取られたあの車夫は鮮人だ。停車場前に右と左りに分れてゐるのか。露骨に。

我々はY屋旅館へ行くと云つた。それは一等旅館の名であつた。我々は荷を持ち、東京語を話して、一見内地からの客に見えた。いゝ玉だと思つたのだ、それは朝鮮人に渡さないのだ。――「帳場がちがふ。」

「ヨボ（と朝鮮人のことを云ふ）の車はよくケガをさせたりなどします。そんな時には……」

組合で如何だとか、つまり日本人の車へのれば人間が神にのつたと同じである位ひの何か辨解（？）を走りながら車夫

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がしやべつてゐたが、自分は今の小事件の場所から巨離が遠のけば遠のく程、事件の性質がよくわかつて、後悔を感じ不快を感じ、前の車屋(鮮人)にすまなく、此の足の下の腰をひねる「動物」がにくい。

「えゝ、えゝ」

とかゝとで蹴込みをこぢる氣になつた。憤怒を感じてイヤで弱つた。此の感情をもう一息何かどあほれば自分は車上から車夫を蹴ると思つた。こんなところ――殖民地――に長く住めば、人は感情の正衡を失ふと思つた。

十

果してその我々に同情を强ひ、――と敢て云ふ――屢々不正の悲慘な素因となる「氣の毒な、」滿韓の支那人や鮮人は然しどんなものか。

それは氣の毒なものだ。

豚は汚なく、劣等なイヤなものだが然し氣の毒な哀れなものだ。その意味で氣の毒な哀れなものだ。この哀れなものに偏るな。

偏れば直ぐに不正が起り、不快が生じ、憤怒に映る。さういふ妖氣の立ち迷ふ腐つた泥沼である。滿韓に土着の現在の人種は。小石一つでも落すな。

あゝかくの如き地球上の腐敗の個所は如何したらいゝのか。周圍にさくをめぐらして人はさはらずに、自然の成敗を待つほか無い様な無慘な情けない感じがする。縫へば縫ふだけ破れるボロのやうである。

十一

そのボロの上を、矢庭にギウギウきしむ丈夫な革で頑固にクギを當てたかの樣に、廣軌のすばらしい滿鐵が地響き立てて通る。その一分も隙のない二重硝子窓からは、軌道の沿線にまき散らせる限り開化を蒔く。煉瓦建築を蒔く。砂漠の

紳士を蒔く「新市街」を散布させる。あらゆる物質を蒔く。

病人を療病院へ入れて癒してやるよりも先きに、瀕死の病床からいきなり、彼を引き起して、盛装だけさせたかの感じがある。着ものだけ見ると丈夫で余目でえらい氣がするが、身體は皮膚病でくずれ、眼は嗜眠狀態で流れ、精神はとうに先へ墓へ行つてゐる。

自分は開城で高麗の都の廢趾を見た。滿月臺と云ふ宮殿のあとへ行つて見た。

一面に雜草がのび、灌木が燒けあとの如く立つてゐる。そこに四周山にかこまれた盆地の中央に空地があつて、空地は四角く廣く、次第に奥へ二三段に地形され、正面に幅廣い十段ばかりの石階がある。石階を上ると「宮殿」はずつと見まで草いきれの中に、見透しである。何か虫がチイチイ泣いてゐる。木と草と地形の他には廣々として何にもない。只一地割毎に往古の殿堂の礎石だけ地中に半ば埋沒して殘つて、そこに夢を說明の爲めの近頃の標石が立ち、「何々殿」と字が彫りつけてある。

その廣く何にもない宮殿の幽氣の中を、何かしら想像心が眼に不可思議な高麗建築の幻影を空氣の透明の中に朧ろに又壯大に探らせて、人は沈默に撃たれ、正面石階から上りずつと廢趾の奥まで行つて、又引返し來る。そして嘆息をつく。

變に溫和に日が當つてうつろである。その明か明かとした廣場の草の眞中で、自分は靈氣が八方から來て蔽ひかぶさり、己れも高麗宮殿の如く見えぬ空中へかき消されるかの思ひがした。

⁂

自分は滿洲と朝鮮が、その土着の附性の住民と共に、滿月臺の如く透んだ大氣の中へ消滅する日を寧ろ公情から、望むものだ。慶州や京城や開城、平壤、奉天、遼陽——等の各地に「昔の宮殿」の不滅の礎石だけ淸淨に殘して、——それは迎日灣からの朝日を受けて吐含山の石窟庵にのこり、夜は寂しい街道わきに半月を浴びて瞻星台の靈姿となり、群れ飛ぶ淸楚の飛天の如く高麗燒が散つて祖先の愛を分け、或ひは不動の陵となり、西塔のカーヴとなつて鳥も喜び唱ひ、空中

にかけめぐる天使の如くぐるりに始終引きよせ、又は遼陽白塔の如く一氣に天を突き指すか、暗く清冷なる古墳となつて土中に身をかくし、默る——そして肉體は無くなることを祟む者だ。

十二

滯在の中いつも各地にコレラがひどかつた。然し百人の中日本人は一人しかかゝらず、土着の人々のみそれにかゝつた。朝鮮人はこの病氣には魔がゐると思つた。漢法では溫める。洋法ではそれを冷やす。日本の療法は洋法である。それで人々は病院へ行くと氷づめにして早く殺すと恐れ、いましめ合ふ。隣家の患者をたのまれて戸棚へかくして、却つてその一家傳染して全滅した雜貨店があつた。患者が町で車にのり、あとでは町外れに空車だけあつて、車夫も病人も見えなくなつと話してゐた。大邱(?)では病院を逃げ出して病人が高等女學校のさくを破り、校庭へのめり込んで倒れた。巡査が追つて來たが瀕死の患者は拜んでどうか病院へだけは入れてくれるなと云つた相だ。

又病人を出した家のことを聞いた。家族は病人を送り出して、嘆いて、せめて食事は伺ふでするとも藥はのむなと忠告を與へた。

滿州へ來ると支那人が夜病人をかつぎ出して、空地へ捨てる。朝鮮でもそれを聞いた。交番のわきを異樣な荷を持つて通る者があつた。巡査が誰何するといきなり死骸を投げ出して逃げたとその日の新聞の三面に出てゐた。同じことが、去年大連滿鐵本社の裏にあつて困つたと云ふことを、そこを窓から見ながら、聞いた。然も死體が毀體で空地にころがつてゐる。誰か着衣をはいで着たものがある。その青いボロを——三文で死の手下になつてペイ菌を蒔いて歩く。

彼等は又川へ病人をこつそり投げ込む。その川下で、みんな地びたに座つて皮ごと生瓜をコップの樣に持ち、種ものこさずにはじから食つてゐる。それが代用食なので無下に禁止も出來兼ねる。——みすみす病氣に近づくものを。

自分は慶州で鼻口を蔽ひながら、金覆王陵の歸りに綱を貼り石灰を眼に痛くまき散らした人なき朝鮮家屋の前を、全く半分病氣になつた氣で一思ひに通りぬけた。それが唯一の道なので。そこでもここでも今日十人死んだ、昨日二十人

死んだと云ふ慶州を自働車にのつて大邱へ逃れた時には、全く「逃れた」時には、ロト(?)がソドムの地を逃れる樣な感じがした。刻々走り去る背後には優雅な美術の古都、慶州が、硫黄の雨に燃えて炎々とたゞれ、崩れる思ひがした。そして五日目でホツと大邱へ着いたのに、その五日間に、自働車が町へ着いて見るとあたりには選まれし魔の家の如く、赤紙とシメ繩の交通遮斷が碁石の白の樣に刺戟的に目につく。自分は驛の待合室へかけ込んだが。

――然しそれは惡い方だ。「いゝ方」を見やう。

自分はその慶州からの自働車で日本語の達者な朝鮮人と同乘した。彼はコレラの話をしてゐた。そして自分は注射したから大丈夫だと云つた。途中で車が止まつて、そこに又一人朝鮮服の人がゐた。車內の人は彼に親しげに聲をかけ、車外の人をそこから自働車へのせるあつせんをした。假令如何に流行地にゐたと雖も、「彼も注射をしてゐるからこの車へ乘せて大丈夫だ」と云つた。人間の死なくなる注射も世に信じ相な工合であつた。

又京城で或る夜朝鮮芝居を見に行つた。そこに髮を分けたすごい、野球選手の如き朝鮮青年がゐた。彼は日本語をよく話した。自分は彼に芝居の說明を乞はうと思つた。彼は喜んで、然し適當の耳はないかの如く、自分は質問して却つて困つた。「あれは何の狂言か」と聞いた。彼は答へて、「役者はあゝして演技して觀客を喜ばすのが義務だ」と云つた。

高等普通學校とか云ふ、曖昧の教育がよくないのである。まるで心がないからいけない。教化のやり方に。それで才能ある者は、言語や教科それだけをおぼへ、活字の如き「日本人」になる。――然しよく教へても彼は何になるか。

又そう云ふ「米國人になつた」人を見た、開城行の汽車で出逢つた。丸い大きな眼鏡をかけ、洋裝してゐた。我々と共に開城で彼も下りた。彼には連れがあつた。外人が。それ等は變り種の花卉の如く窓から人工的な顏をそろへて出してゐたが、丸眼鏡の鮮人はその下へ行つて帽をとり、テカテカ頭を振つて、英語で挨拶を交はし、胸を叩き、それから一々握手て驛構內を向ふへ出て行つた。小さな人間が反つて杖を振つて大股に行つたが自分は見てゐて情けない氣がした。

所謂不逞鮮人がしきりに滿州の北部から半島の中樞へ鴨綠江を渡してやつて來る。安東はその監視故か車內の巡視警

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

官が厳重である。自分はねまきに朝鮮服を着てゐて、いけないと云はれた。

「怪しまれると御損です。」

それ等の「不逞鮮人」はピストルを持ち、屢々警官が彼等を誰可して身邊に近より、胸を射ぬかれる。警官を殺すと滿足して又北滿の奥へ引返す。馬賊の一種である。

自分は彼等に思想があるとは思へない。反感と云ふ「思想」の他には。

今の朝鮮人には思想があるとは思へない。滿州の支那人にそれがあると思へない如く。

自分は京城や平壤の本屋で何か月刊の朝鮮人の雜誌でもあるかと思つて見たが、何にもなかつた。

大多數の者は、何か過去の廢所の國の樣に、そこに經つ無氣力な死への「時」の中で、冠を被り、長煙管をくはへて、千三百年前に支那新疆で軍人やその家族の者が土中に埋められ、それが熱砂の中で乾しかたまつて今旅順の博物館へ生々しく堀り出されて來た、その屍體のはいてゐると寸分ちがはぬわらじをはき、背のたゝぬ家の中で、「何か」―してゐる。「生活」だけは盲目一途にしてゐる。夕方になると各戸から煙を立てる。朝は早く起き、夜は灯なしにねる。頭に壺をのせて水を運び、老人は糸車をゴトゴトまはしてゐる。子供は裸體で腹をふくらせ、ひぜん一杯のからだで日中外にさらされてゐる。

チゲと云ふ荷負ひ具を背にして町に出てゐる勞働者がある。少年もゐる。釜山へ着くとその灰色に汚れた白衣の群が蝿のやうに停車場前にちらばつて、荷を運ばせてくれと言ふ。

「エモチュアリマシェンカ――」

それ等の或る者は銀行の壁によつかゝつて白晝ねてゐる。そのそばを小さな驢馬に乘つた精悍の男が、草色の上衣で、シャンシャン鈴を鳴らして通る。

上流の者は清潔な白装をし、まげを切り、パナマを被つて一等列車などに乘つてゐる。その多くが日本語を語り日本に出勤を受け、役人などに媚びることを生活の一つの内容としてゐる。そのコセコセとした眼が寒く光る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

誰も自己一個主義で冷情である。笑ふと云ふことをしない。笑みをエネルギーと同時に祖先の墓へ埋めて了つたかの様に。

郡集も個人も冷たい。そしてそれは強ち日本の殖民地政策の投ずる間違つた影とばかりには思へない。少くもこの影に蔽はれてゐる彼等それ自身も赤情火が無いのだとしか思へない。

自分は朝鮮に同情を有し、朝鮮に厚意を持つて東京を出て來たが、親しくその心で彼等に諸方で接するうちに、彼等から心の火をいつか段々にもみ消された。

假令手まねでも心は双方にあれば通ふ筈だ。情愛は手の方が口より雄辯の筈だ。自分は奉天の支那公園で一杯の支那人の人垣の影からさくの中の餓ゑた熊を見て、心を裂かれた。熊はハアハア息を切らして、いちぢくを裂く様に口をあけ、太い兩手をつき、足を一つ可愛く投げ出してペタンコに座り、お辭儀してゐる。太つてムクムクした背中まで見せてお辭儀してゐる。君の意味はよくわかる。心がむき出してそこにある。

まはりの支那人は誰も何にもやらうとしない。ぐるりとそのまはりの丸太にもたれて並んで、寧ろたかつて、熊を見てゐる。子供が笹つ葉を持つて口をあく度びに熊をつゝつく。熊はウオーといやがつて然し兩眼を小さくぱつちりと開け、ハアハア息を切らしてお辭儀してゐる。

自分はやつと十錢近所で苦しい支那語でパンを買ふことが出來て、それをやつた。支那人は却つてそのパンを食ひた相にあきれて見てゐたが僕はアガつて了つて、無氣になつて熊の口へパンを入れてやつた。全く自分が食ふ様に身に沁みて感じた。お前と俺は心がぴつたり出逢つてゐると思つた。熊の方が人間よりいゝと思つた。下賤な支那人や冷情な朝鮮人より心を通はす天の言葉を知つてゐるだけいゝと思つた。實際。

もしや自分の手が、「日本人の手」なので彼等——植民地の土着の人達——に冷たくしか通はないのか。日本はそれ程彼等を悲慘にしたか。そんなに悲慘に冷情になると云ふことが世の國際の上に有ることか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

十三

自分は悲慘を認める。然し悲慘になつた者のそれ以外には又どう成りやうもない哀れな因縁の淵をも認める。それが痛ましく、人力では如何ともしがたく、滿韓に土着の現在の住民の唯心の上には傷つき開いてゐることを、無ざんに思ひ、弔ふものだ。

そして思ふ。それ以上の同情は過ぎる、と。

故にそれ等を弄玩し又虐げる「不正」は倍にも三倍にも憎む可きだ。彼等は従へられるほか無いのである。それを虐げてはいけない。然し過度にかばつても仕方ない。彼等は情なくつけ上る。十年雇つて育てた支那少年が年頃になると資りだめをぬすんで「獨立」する樣に。それは、彼等には、心の方面が空しいからだ。生れつき。

さう云ふ人間があることを識つた。

＊＊＊

自分は朝鮮について多くをかいた。何故なら滿州の支那人については又それと無形に於ては同じだからだ。

汽車が國境の安東を過ぎると白かつた（着衣の）人間が忽ち青くなり、うね〳〵と曲線で出來て脆かつた植物性の家屋が堅い直線的な泥、石その他鑛物性の建てものと變り、人間は大きく、悠長に、生活は益々際限なき大地の上の一種の生きものゝ狀態になる。自由で露骨で異樣である。人間と云ふものが一番自然から惠まれずに不自由に作られた生きものゝ樣に考へられる。貧によごれ易い。且不用意に脆く殖へ易い。——自分はそれ以上同じことは繰り返してかゝない。

その上流の「教化」ある人は、彼等には祖國と云ふものが全く無く、天地の凡てが自我で、恐らくしきりに金をためてゐる。その門柱に赤紙に黒く字がかいてはつてある。「出門得財」と。その以外には門は開かぬ。心の門は。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

奉天では、結婚に凡て金が要る。嫁を金で買ふのである。のみならず女は若ければ安く、年が多ければそれだけ高い。年が多ければそれだけ親元のメシを餘分に食つてゐると云ふ理窟で。

十四

諸君が此所まで讀む間、恐らく自分は波止場で立ちどまつて水彩寫生をやつてゐた。それは四ツ切が一枚出來たのでどれ、歸ることにしやう。

見ると海岸から道が左手へ鍵なりに曲がつて何所かへ通じてゐる。地圖で見ると停車場へつゞくやうである。自分はそれを歸ることにした。

道に石塀があつた。石塀の上から支那少年が赤兒を抱いて町を見てゐた。自分がその下を通りかゝると、「イマナンジデシカ」

自分に云ふのではないと云つた。

又、「イマナンジデシカ――」

自分はやつと氣がついて全くうれしく、愛を感じた。

「四時十分前」

「ヨデマイデショ――」

と時計を出し、ふり向いて笑つて答へてやつた。

少年は女のやうに、恥しく笑つてうなづいて引込んで了つた。

十五

馬が車を引いて通る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何か變つた感じがするので氣が付いて見ると何れも眼を出してゐる。眼を。あの可愛いゝ溫良な眼を。
どの馬車馬もどの馬も靜かな悲しげな眼をぱつちりと明け、うるみを帶びて、忠實に車を曳いて行く。
頑健な苦力が頭髮を丸くたばね、はだをぬいで、しなふムチを持つてついて歩く。
あゝ、馬をぶつてくれるな。
何故馬の眼が殊更に見えたか自分にはわからぬ。
恐らく自分は旅でかうしていつも寂しいのだ。

＊
＊＊

自分はその日旅愁を帶び、元氣を失なつて歸つて來た。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時論

法學博士 吉野作造

産業上の獨立人格の意義
—勞資協調會の新宣言を讀む—

幹部更迭によつて面目を一新せる勞資協調會は、過般一つの新宣言を發表して、今後の方針を明かにし、兼ねて大いに活躍せんとするの態度を示して居る。今まで無爲無能に終つたといふ非難のあつた同會も、斯くして啻に無用の長物たるの譏りを免かるゝのみならず、更に進んで社會の爲めに有用な働きをするに至るであらう。幹部の中心人物たる添田敬一郎君は多年官界に在つて模範的良吏たるの譽あり、識見人格手腕兼ね備ふの稱高きを以て、それだけ世上は同會の前途に多大の期待を掛けて居るやうだ。何れにしても同君の一味によつて協調會が大いに發展活動せん事は我々の望む所である。

新宣言は第一に協調主義の解釋を定めて同會の本領を明かにし、第二に今後施設經營すべき方針を掲げて居る。從來勞働問題に對する協調會の態度は甚だ不得要領のものであるとせられて居つたが、今度の宣言はかなり明瞭に出來て居る。大體に於て我々も贊同を惜しむものではない。只其内に解釋のしようによつては少し不十分と思はるゝ節も無いではない。是等の點をも明かにする意味を以て、少しく宣言の內容を批評して見やりと思ふ。

先づ初めに協調主義の解釋を明かにして居るが、此點は大體に於て首肯する事が出來る。第一に協調主義は溫情主義ではないといふ事を斷言して居る。「優者が劣者を懷柔するの意が滲染して居るやうに見える」といふのが溫情主義排斥の理由である。前の協調會は之れだけの斷言すら出來なかつたやうだ。第二に協調主義は階級鬪爭を否認し、其調和融合を計るを目的とする旨を述べて居る。「社會に鬪爭の跡を絕たしむる事を空想する者ではない。只鬪爭によるに非ざれば到底勞務者の地位の向上を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

期し得べからずとする觀念、鬪爭の爲めの鬪爭といふ主義、即ち現時の社會には協調の餘地無しとする絕望的思想は本會の明かに否認する所である」。此宣言は第一が資本家の因襲的態度の排斥なると同じく、勞働者側の動もすれば陷る所の鬪爭萬能主義の明白なる排斥である。斯くして勞資兩階級の偏見を抑へた上、更に協調會は如何なる主義に基いて社會の協調融合の實を擧げるかと云へば、即ち彼等は第三に勞資兩者の平等なる人格の尊重を根帶とし、正義と人道とを基本して協調の實を擧ぐると述べて居る。斯う云はれて見ると我々も全然協調會と觀る所を同じうするものであつて、何處にも反對すべき點を見出し得ない。然し乍ら問題は決して之で終はらない。更に進んで平等なる人格の尊重とは何か。產業上の問題として正義人道の意義如何。是等の點に關する細目の議論が定まらなければ、實は容易に賛否の決を表明する事が出來ないのである。尤も從來とても議論の分るゝ所は、人格尊重と云ひ正義人道といふの產業上に於ける意義如何といふ事が問題であつたのだ。此點に關する內容をはつきり定めなければ、單純に人格だの正義だの人道だのと云つただけでは、少しも問題の解決にはなつて居ないのである。そこで我々は此點に就いて協調會が果して何ういふ考を以て居るかを吟味して見たい。

然るに協調會の宣言は此點に就ては明確なる解釋を與へて居ない。強いて之を捜せば協調主義の精神を貫く爲めに「一方に於て資本家の謙抑自省を促す」と共に「他方に於て勞務者の地位の向上、福利の增進を圖り」、同時にまた「勞務者自ら同樣の目的を以て勞働組合其他の團體を組織し、之を健全に發達普及せしむる事を希望す」等の文字を擧げなければならないが、之れだけではまだ餘程資本家的言ひ分の臭ひが高い。斯う考へて見ると協調會の新幹部は、正義人道乃至人格尊重の美辭を列ねて而かも其現代的新意義を識得して居るか否か、多少の疑なきを得ない。

平等なる人格の尊重とか正義人道とかの文字は、昨今殊に盛んに使はるゝけれども、主としてそは倫理的意義に用ひらるゝのである。然し乍ら從來の倫理觀念が人格平等に與ふる觀念では、今日產業界に於ける新要求が滿足させられない。例を昨今矢釜しい問題になつて居る失職問題に取らんか。遽かに仕事を失ふのが氣の毒だからと云つて多額の失職手當を與ふるといふ事は、十分に人格尊重の倫理觀念を滿足するに足る。斯ういふ場合に對する失業保險の如きも、世間普通では之を正義の要求に合する人道的設備と稱して怪まない。產業界の事情に通じな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い、否、勞働問題の根本義に通じない人々の倫理觀念はそれで滿足するかも知れないが、然し之で世の中が治まるものなら、勞働問題などは夙うの昔に解決 る事が出來た筈だ。今日の勞働問題の根本要求は勞働者階級の法律的政治的乃至倫理的獨立のみではない、所謂產業的獨立を要求するのである。產業的獨立とは產業經營に關する勞働者資本家の獨立對等の地位を要求するのである。若し此意義が本當に徹底するならば、產業の盛衰共に勞資兩階級が協同に負擔すべきであつて、如何に巨額の手當をやつたからとて資本家が勞働者を恣まゝに解雇するといふ事は不當である。失職の事實あるは卽ち產業界に於いて資本家獨り主人公で、勞働者をば奴隸の地位に置いて顧ないものと云はなければならぬ。事實の問題は別として理屈は縱令一文の手當をやらないまでも、我は所得を減じても、勞働者の意に反して其職を奪ふといふ事は絕對に出來ないといふ事にならなければならない。協調會の宣言が「何人と雖も他人を自己の手段とする事を許されない。人間は常に最終の目的でなければならぬ。」とあるも、之を單純な倫理的意義に解するならば、何等の新味もない陳腐の言に過ぎない。

協調會が當今の問題たる失業問題に對し如何なる態度を取つて居るか、之れも甚だ明瞭でないが、少くとも是等の點に就いて何事を差し措いても大々的活動を爲すべき筈だのに之を懈つて居る點から見れば、平等人格の意義に於て十分明確な考を以て居ないのではないかと疑はるゝ。然らずんば失業といふ事實の續出は卽ち平等人格の最も露骨な蹂躙であり、卽ち協調主義の根蒂を蹂躪するものであるから、會としては極力此點を爭はねばならぬ。にも拘らず、此點に於ては平然 を拱ねいて居るのを見れば、彼等の協調主義も亦畢竟資本家的協調主義の立場を離れないものであるまいかと疑はるゝ。資本家的協調主義の立場に止まつて居る以上、彼等が如何に美辭麗句を列ね、又彼等の觀る所によつて如何に熱心に活動しても、結局勞働者側の同情と支持とを受くる事は出來ぬ。此點に於て我々は協調會の眞の立場が何處に在るかをもつと詳細に知りたいと思ふ。

新宣言は終りに、近き將來に於ける實行の細目三ケ條を揭げて居る。第一は協調主義の宣傳普及である。「勞働紛議の發生したる場合に於て、必要に應じて自ら調停の勞を取る事を辭するものではない」が、同會の主眼とする所は寧ろ紛議の防止に在るから、先づ以つて主義の宣傳普及に努めると言いてある。其云ふ所に異議は無いが、然し勞働紛議の發生したる場合に、所謂正義人道の基礎に立ち、又所謂人格尊重の根柢の上に勞資兩階

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

級の共に遵奉すべき公平中正の意見をはつきりと世上に示す事が最も有效な宣傳の方法ではあるまいか。主義の宣傳に憂身を窶して實際問題の起つた時に具體的意見の公表を避くるやうな事があつてはならない。殊に協調主義の宣傳普及といふ綱目の下に、勞働者側に向つて輕擧盲動するなといふやうな事を說くだけなら、却つて紛擾を萠らしむるばかりである。主義の宣傳の最も肝要な所は獨立人格の産業的眞意義を、資本家側に敎へるといふ事でなければならない。第二に社會政策の徹底的實行を期し、併せて合法的手段により組織制度の改造を促すといふ事を擧げて居る。所謂社會政策的設備の實行に着手して居るといふ事は、其後新聞紙上の報道に據つてちよい／＼聞いて居るが、組織制度の改造といふ點に就ては、未だ之といふ意見の發表を見ないやうだ。此點に就いても周圍の牽制に頓着なく、最も大膽な研究と施設とを希望して止まない。第三に勞資兩者の意志の疏通を圖るといふ事が擧げてある。此點に就ても着々實行に取掛つて居るやうだが、併し各種の勞働團體が隔意無く彼等の招待に應ずるやうになるには、先づ以て勞働者側の主張するやうな意味で人格尊重の主義を確立しなければならない。

要するにいろ／＼細目の點は姑く之を不問に附して差支へないが、只人格の自由獨立といふ事を、今日の産業界が要求するやうな新しい意味に之を解するか否かが我々の主として問題とする所である。協調會の行動に贊すべきか否や、又其前途を祝福すべきか否やは、一つに繫つて此點の解決如何に在る。

小題小言三則

◉**富豪の庭園開放** 住宅難の要求に應ずる爲め富豪が其廣大なる庭園を開放するといふ事が、近頃の流行の一つだ。寔に結構な事だと云ふよりも、寧ろ當然の話だと云つた方がいゝかも知れない。只此際一つ遺憾な事は、平凡な多數の小住宅を造る爲めに容易に得難い藝術品とも見るべき庭園を壞すといふやうな事がないかといふ點である。聞く所に據れば、某富豪の某庭園を天下の名園として東京に一二を爭ふ立派なものださうだが、住宅地として提供する爲めに山を崩し池を埋め、折角の珍卉名木も臺無しになつて居るといふ噂である。之れではまるで一枚の絹を得んが爲めに名畫を洗ひ落すに骨折つて居るやうなものではないか。住宅問題の要求は富豪に對する社會政策的命令である。けれども今日の社會政策の要求は、天下一品の藝術を淺薄な實利と交換する程沒常識な事ではあるまい。西洋にはガーデン・シティの運動がある。市街其物を立派な庭園

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にしようといふのが時代の新しい要求であるのに、庭園を打壊して殺風景な市街地にするといふのは餘りに心無き業ではないか。住宅難の聲が矢釜しいからとて日比谷公園も要らない、芝公園も要らないといふのではない、富豪の廣大なる庭園の如きは、庭園として其儘に之を維持し、其間に點在する百坪二百坪の餘地を一廓として此處に上品な邸宅を作らしても宜からう。或は公會堂を造るとか圖書館を造るとか、其他合理的利用の方法は幾許でもある。如何に薪が乏しいからとて、山の櫻を皆伐るの必要はない。櫻は櫻として其儘に之を保存したい。此意味に於て富豪の庭園開放には、も少し慎重な研究を遂げられたいと希望する。

◎**島中君譯「社會主義と宗教」に就いて**　スパルゴーの「社會主義と宗教」は我國昨今の社會改造論の健全な發達のために頗る有益な參考と考へて居る。島中雄三君の之を譯されたのは頗る時宜に適して居る。譯文も亦頗る平明で、原文の意をかなり解り易く傳へて居ると思ふ。社會主義が從來唯物論と提携して居つたが、之れは何も必然の關係あるのではない。理想主義の立場とも調和し得るものであり、又之れからは調和して行かなければならないといふ主意は、予輩も屢々本誌に於て說いた。社會主義の立場を其最も純正な形に洗ひ上げ、宗教の教を其最も根本な基礎に立てて此二つを並べると何うなるか。スパルゴーは此點を說明するに、幾多の材料と其透徹したる學理とを以て頗る明白に說いて呉れた。西洋の基督教徒に社會主義の必しずも忌むべきものではない事を明かにするのが本書公刊の目的のやうであるから、我々の現在の問題にはピッタリ合はないやうな點も無いではないが、然し日本今日の社會主義の理論及び運動が自然主義の立場と理想主義の立場との間に彷徨つて、其據るべき所を定めるに迷ふて居る際に方つては、兎に角大いなる啓發を我々に與ふるものではなければならない。此意味に於て敢て同君の譯書を世上に推薦する所以である。我國一部の社會主義者の間には、スパルゴーなどは詰らないといふ說を聞くが、之れは聊か失當であらう。立場が異ふからとて彼の學術的價値を不當に蔑しろにしてはならない。

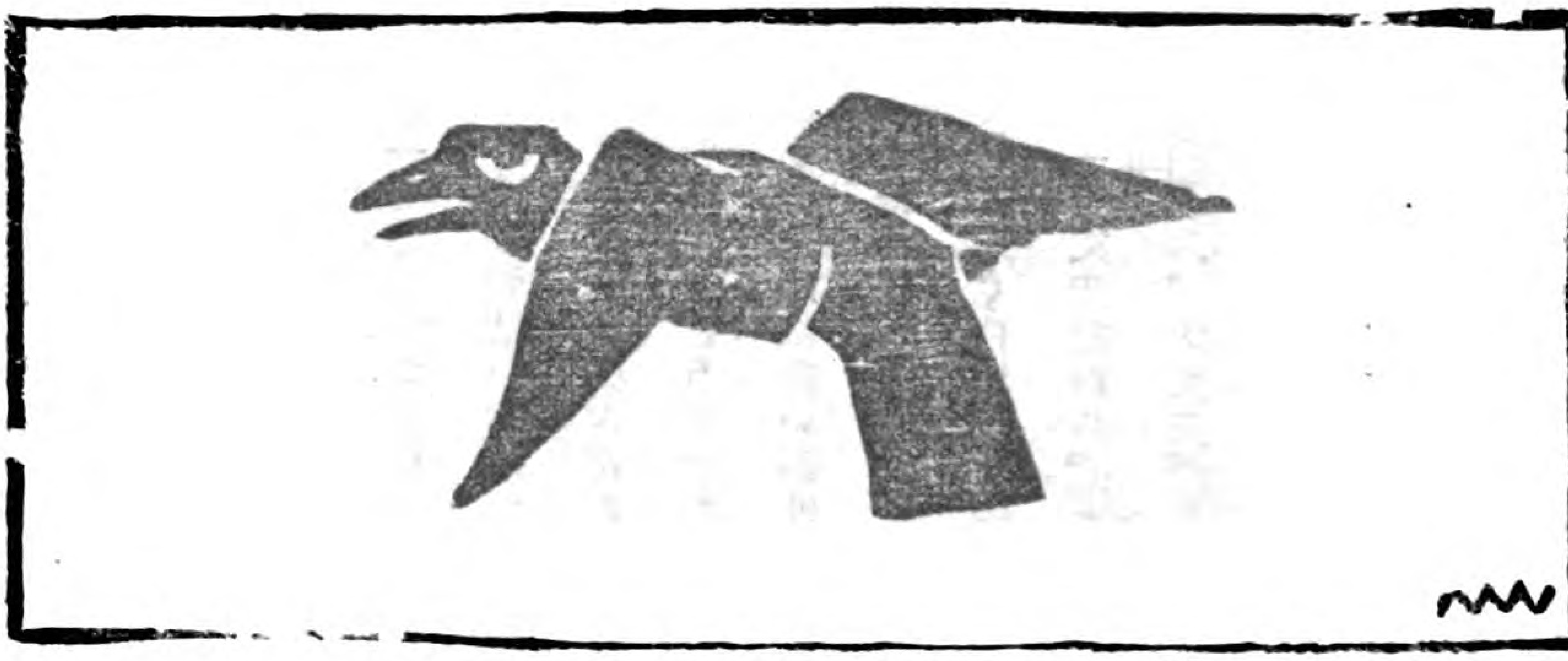
◎**神社崇拜の道德的意義**　氏神の祭日で學校が休みになる事がある。小供から何の爲めに學校を休むのかと問かれて何時でも說明に困る。學校を休んでまで紀念せねばならぬ其氏神といふのは、一體我々に何ういふ道德的關係があるか。所謂敬神の念とは無我夢中に神社といふ建物の中に居るものを禮拜する事ではない。政府の命令で斯ういふ事を定めるなら、も少し道德的意義を明かにして貰ひたいものだ。此意味に於て我々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は招魂社の休日に就いても多少の疑を有つて居る。予輩の友人に斯ういふ問答があつた。何の爲めに靖國神社に参詣するかといふ子供の質問に對し、父親が國家の爲めに生命を棄てた人々が祀られて居るからだと答へると、子供はもと家に居た何某も日露戰役で死んだといふ所から、彼處に祀られて居るのかと問ふので、父親はさうだと答へた。何某といふのは其家の書生をして居つたが、放蕩で嘘言吐きで、金を胡麻化したり物を盜み出したり、手の付けられないやくざ者であつたさうだ。それでも出征して戰死したといふばかりで神樣になり澄して祀られて居るといふ事は、何うしても子供の良心が滿足しなかつたので、父親は大いに説明に困つたといふ事である。國家の爲めに一命を捧げたといふ事は、無論我々の感謝に値する事ではあるが、然し單純な子供の頭腦には、何んなやくざ者でも戰爭で死にさへすれば以前の罪は全部帳消しになつて神樣になれる、戰爭に命を惜しまないといふ覺悟さへあれば、少々惡い事をしても構はないといふやうな考を起させる懸念はないか。少くとも戰爭で死んだといふだけでやくざ者を國家の干城として崇めるといふ事は、少くとも平和時代の良民を薫陶する所以ではない。此點に於て識者はもつと深く考ふるの必要はないか、現に我々は小供の無心の質問によつて、此重大問題に對する暗示を與へられた。

大正十年新年號執筆者の豫告は本號最終頁に詳か也

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



まむし

室生犀星

「兄さん、ちよいと來て――。」

妹のおきんが梯子段のしたに立つて、庭から這入つてきた豐を呼んだ。ゆくすゑ、兄の嫁にめやはせるために、三つくらゐから本當の妹のやうに育てられて、もう十五になつてゐた。目が圓いために、豐はよく、銀杏眼だとからかつたものである。

「どうしたんだ。變な顏をして?。」

さう言つて近づくと、おきんは胸のところをおさへながら、心配さうに少し青いかほをして、もぢもぢ言ひ澁つたが、

「わたしすこしおかしいのよ。」

と、わけも言はないで、立つたまま胸のところをおさへてゐるので

「おかしいつて、何がおかしいんだ。それだけぢや判らないぢやないか。」

豐は胸をおさへた白い指さきを、白いだけなほ氣味惡く眺めながら言ふと

「あのね。あの――お乳房がこりこりになつてゐるの。兄さんはならなくて、そりや

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こりこりなものが觸るわ。」

おきんはすこし紅くなつて言つたとき、いきなり豐は水につかつたやうな寒氣をかんじた。そして殆機械的にふところから手を入れて自分の乳房をさわつてみたが、小さい疣のやうなものが親指と人さし指に挾まれるだけで、その乳房の根の方は軟かくてこりこりなものなどが無かつた。とすると、すぐあやしい氣になつて

「ちよいとおみせ。おかしいな。こりこりができたつて――。」

さう豐はいひながら妹ののを見たが、そとがわからは異常はなかつたが、豐のより少し大きい乳房の根のはうに、すこしばかり弛んだところに、指さきで揉むやうにしてさぐると、こりこりな小豆みたいなものが指さきにあたつた。

「ほら、さうでせう。どうしたんでせう。おかしいわね。」

おきんは青いかほして自分でもふれてみた。

「おかしいにはおかしいな。」と言つてすぐ「何ともないよ。それだけのことは。」と、わざと安心させるやうに言ふと、妹はすぐ白い胸を合して、わざと自分で安心するやうに

「大丈夫だわね。」と言つたから

「うん。大丈夫だとも……。」とこたへた。

けれどもおきんの銀杏のやうにおどおどした目は、疑ひぶかさうに曇つてゐて、ときどき考へるやうな光を滲ませてゐた。が、すぐ梯子段を拭きながら、一段づゝ、二階の掃除をしはじめた。

豐は庭へ出ようとすると、内庭の豆柿の黄ばんだかげに家に預つてゐるお富が、薪を日あたりにならべて乾してゐるのに出會した。濕つた薪から灰色の小さい羽蟲やゲジゲジ蟲などが、飴いろの薪の肌にするどく陰えたり飛んだりして

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐるのを、豊はぼんやりながめてゐた。お富はすぐ見つけると

「さつきから何處にゐらつしつたの。ちつとも見えなかつた——。」

さう言つて薪の上に腰をおろした。あんなぎざぎざな上に腰かけたら痛いだらうと思ひながら言つた。

「あつちの庭にゐたんだ。富さんは又そんなことをすると叱られるよ。手が荒れるつて——。」

「大丈夫よ。これだけくらゐなら何でもないわ。」さう言つて、大きな白い手をひらいて見せた。お富に問つてみようか知らと考へながらゐたが、言ひ出すことができなくて、默つて微笑んで見せた。

「食べてじつとしてゐると毒よ。だから私何でもして見たいの。」

お富はさう言つて、一本の薪を取つて、その伐りくちから、あくどく滲み出た樹脂を嗅いで見て

「まあ、いやな厭な匂ひ? ほら、するでせう。何んて變な匂ひでせう。」

と、どちらかといへば淺ぐろい頬をしがめさせた。淺ぐろいけれど紅みの交つた杏の熟れたやうな色をしてゐて、黑子がたくさん浮てみえた。それにいきなり兩手をかけて、がつちりと舐りつきたいやうな幽痒いむづむづした水々しさをもつてゐるのである。

「へんな匂ひだな。胸がむかむかする匂ひだね。」

と、豊はその薪を地べたへ投げつけた。羽蟲とゲジゲジ蟲がまた幾つも走り出した。

突然に二階から母の聲がした。そして障子をあけてこちらを見てゐたらしかつたが、豊のはうから母のかほが見えなかつた。

「そんなことをしないで下さいよ。お預りしてそんなに女中のすることをして戴くと、お家へ聞えてもいけませんか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら。」

微笑んだままお富は「何んでもないんですわ。でもおばさんだつて食べてじつとしてゐたら、何んでもしたくなるでせう。だからするの。」と戯談のやうに大きな聲で言つた。眩しさうに仰向いてすぼめた目が美しい一すぢの線をすうとひいて見えた。

「それならいいんですけれど、無理にしないで下さい。」

母はかう言つて立つて、よその室へ行つたものらしく、お富は豊のかほを見ると笑ひ出して

「あなたのお母さんだけれど私きらひよ。ぺちやくちや言ふんですもの。」と言つて「こんなことを言つたつて言ひ附けないでせうあなたは……。」と大きな目で微笑つた。お富はおなじ町から離れた肥料問屋の娘であつたが、この春から豊の家にあづかつてゐたのである。ふとしたことからしくじつたのが種で、外出は禁められて家にばかり居ることになつてゐた。ときどき百姓のやうな顔をした父親が見にきたりした。そのたんびにお富は小使ひや頭のものなどを取寄せて、二階の自分の室をきちんと片づけてあつた。

お富はしばらく茫然と何處か白みがかつたよく秋ぐちの日ぐれの空を、何か考へながら眺めてゐたが

「あなた少し手づたつて呉れない——なんだか面倒くさくなつてしまつた——。」

と言つて積げた薪を束ね出した。そして「わたし厭になるとほんとに何も彼も厭になるのよ。こんな汚ない仕事はいやなこつた。」とぶつぶつ言ひながら、ぽんぽん投げ出して、揃えて、きつくりと膝に薪ぐちをそろへて束ねはじめた。

「自分で初めて自分で怒つて居れば譯がない。」

と豊は言つてぼつぼつ薪をあつめ出した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「おいやなら手つだつてくださらなくてもいいわ。わたし一人でやるから。」
さう直怒つたやうな聲を出した。
「厭だつて誰も言ひはしないよ。はじめつから仕なかつた方がいいつてだけのことなんですよ。」
豊はさう言つて薪を束ねると、お富は何を怒つたのかいきなり束ねた薪をちから一杯に押し倒して、そこら一杯に投げ出してしまつた。そして
「いいわ。いいつたらいいわよ。」と氣狂ひのやうになつて、薪を手あたり次第に投げ出した。
「どうするんだ。切角束ねたのをそんなにしてしまつて……。」
とむきになる豊を歯痒さうに眺めてゐたが、
「いいわよ。」と睨んだ。
「何がいいわよだ。はじめつから仕ないでもいいことばかりして——。」
豊はさう言ひながら散らばつた薪を又あつめ出した。なかには土に喰ひ込んで投げられたのもあつた。「いつでもあと始末をしなければならないんだ。」と豊は沸々いひながら、やつと半分ばかり揃えた。とお富は敷石のところに蹲んで、れいの上目をして、やつと少し落着いたやうな顔をしてゐた。そして
「きちんと束ねなきや駄目よ。そんなにぞんざいにしちやいけないわ。」
豊のそばへやつてきて、いきなり束ねたやつを解いて、ばつさりと小口を揃へると、繩を敷いてをいてくるくると縛つて
「こんなのにするのよ。男でもないぐにやぐにやに結んだりして。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、また一と束だけそろへた。

「いや上手いもんだよ。何をしてもね。ふんだ。」

豐は憎々しいほど黑ずんだ紅みのある頰と、喋るとはしこい蛙のやうに跳る唇とを見ながら言つた。

「そりや初めつから上手いんですよ。ほら、ぱつさりと、かう揃へてをいて、くるくると結んでだ。おい來た！」と言つて、ひと束のやつを豐の方へ投げつけた。その調子があまりおかしかつたので

「おつと、どつこい。」と豐は調子を合して飛上るやうな手つきで受取ると、微笑つた目で、豐の顏ぢうにねつとりしたあぶらでも敷くやうに艶めかしい光で撫で廻したが、すぐその唇がほつれて

「馬鹿ね。あなたは。」

と言つて、なほ强烈に目のなかを見つめた。

豐はひよいと小衝かれたやうにぎつくりして、わざと落ち着いて何か言はうとしたが、れいの目つきで何時までもじつと眺め入つてゐるので、すぐ言葉が口へ出なかつた。誰かが指さきで口を塞いでゐるやうな氣がしたのである。しかたなしに

「馬鹿でも何でもいいから、これを一つ片づけてしまはうぢやないか。」

と言つて、束ねたのを手に持つたが、お富は狡さうに微笑つて

「椽下に置いてくだされぱいいわ。あとはおばさんがして下さるから。」

さう言つて跼んだなりで動かなかつた。「手傳つてくれないのかい。」と豐は腹立しくなつてつッかかるゃうにいふと

「ほら、こんなになつてしまつた。痛くつて――。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と膝と膝のあいだに入れてゐた手を出してみせた。先刻薪を投げつけたときに傷ついたのであらう。右の白い手のひらと指から、血がにじんでゐたのである。

「痛むかね。」

といふと、また狡さうに微笑つて

「痛いわ。ほんとよ。」

かういふと、手のひらと指の股とをぺろぺろと甜めはじめた。唇と唇のあひだから辷り出した紅いのめのめなものが、傷ぐちに吸ひついたり、離れたりしてゐた。

仕方がないので豊は薪をひとわたり椽下に積みかさねて、ほつとすると、お富はいつの間にか奥庭の方に蹈んで、何か地面を棒切れで啄ついたりしてゐる背後姿が、ことに帯地の白と緑の地がぽんと浮きあがつて、腰部からしたが強烈な張りきつた垂れぎみな閑味で、くつきりと今年二丈ばかりに伸びたポプラの木の下にあつた。ポプラの跳る葉も藍ばんで暮れて見えた。棒切れを動かすごとに白い手がちらちら動いたが、からだはどつしりと重く地べたに抑れたやうに靠れかかつて、そこらがほんのりした明るい何だかもやもやした温かさと優しさとか、そつと猫のやうに這つてあるいてゐるやうであつた。

豊はしづかに歩いて行つて、もう一間ばかり近くなると、はつと思ふ間もなく、向ふから突然に振り向いて、その烈しい鋒のやうな光ある目をむけた。

「驚かさうといふんでせう。ちやんと知つてゐたわ。薪はよく片付けられて――。」

かう言つて微笑んでみせた。はげしく匂ふやうな顔だと思ひながら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「見ないふりをして見てゐたな。棒切れをもつて横目でね。」

豐はじりじりと詰めよりながらさう言つて、殆突唐に、豐のなかに五六頭の山犬が追ひ入れられたやうな、激しく渇いた喉笛を自分でも非常に窮屈なものに感じながら、刻々に迫る夕方のくらみにひと足づつ近づいた。

「ええ。ちやんとね。」

お富はかう言ひながら、豐の目のいろを讀むとちよつと驚いたやうな表情をしたが、やはり踞んでゐた。

「おれにばかり薪を縛らせたな。おれにばかりね。」

豐は言ふことがないので、さう言ひ言ひ白いやうな變な笑ひかたをすると、お富は

「だからどうしたと言ふの。腹を立ててしまつたの。」

とにつこり微笑んだ。その太い頬にうかんだ皺の軟らかいたつぷりしたのが、ちやうど投繩のやうにしなやかに豐のからだにはつと思ふ間もなく卷きついた。微笑めば微笑むほど、その黒ずんだ肉の地が深く豐のからだにしだれかかるのである。

「腹は立たないが……。」と豐はすぐ目の前に立つたとき

「あなたも踞んだらいいわ。その根もとに腰かけるといい。」

と言つたので、豐はポプラの根もとにしやがんだ。土が濕つぽかつた。豐よりせいの高いお富のまるい顎のしたに、くりくりに垂れじはの寄つた太い喉首があつて、その皺ごとに案ぐんだ美しい線が、糸で括つたやうに織く幾すぢも寄つてゐるのを眺めた。こころよい桐の木のやうな正確な圓味をもつたこの喉首は、たえずくるくると廻つてゐるやうで美しかつた。「あそこにかう兩手をかけてぎゆつと一と捻りしてみたら、いつたいどんな氣がするものだらう。」と、豐は

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

限りもないうす青さと白みと、夏蜜柑の中身の肌地のやうな線をひいた喉をながめた。

「もう御飯でせうね。呼びに來はしないか知ら。」

低い聲で、何か叱られたあとのやうな臆々した調子で言つた。「誰も來はしない。」さう言つたとき先刻妹の言つたことを思ひ出した。そして突然に

「富さんは何かい。お乳房にこりこりがあるかい。ひねつて見ると變にこりこりなものが……。」

さう言つて胸のところを見ると、お富は

「どうしてそんなことを言ふの。」と尋ねた。

「おきんがね。先刻なんだかおちちにこりこりができたつて見せてゐたんだ。へんなものだ。」

お富は「さう。」と言ひながら、ふところへ手を入れてさぐつて見た。そこに何だかさまざまなものが一杯に詰つてゐるやうな氣がした。豐らにないもの、その上、くりくりなものがぽつちりと盛りあがつてゐるやうな氣がした。豐は息をつきながら

「あるかね。こりこりが……」とさし覗くやうにした。

「あるわ。けれども誰にでもあるものよ。心配なことはないわ。」

と、まだふところに手を入れてみてゐたが、「ほら、あるでせう。こりこりが……」と豐はさぐるやうに揉むと、おきんより大きいのがあつた。豐は干ぶどうのやうなものを指さきで非常な歯がゆい氣持ちになつて、いらいらとさぐつて見てゐた。

と、ぴつしりとお富は豐の手の甲を叩いた。豐はからだの汗が一時に出たほど驚いてお富を見つめた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「その手つきつたら何です――。」

と言ひながら、又ぴつしりと平手が飛んできた。胸からひいたばかりの手が、宙ぶらりんに吊されたやうになつてゐるのを自分でもおかしく思ひながら豐いた。

「きらひ！」

お富はまたさう叫ぶやうにいふと、白みの殆んどないほどの大きい黒い目で、豐を微笑んだまま見つめた。ポプラの葉擦れがはげしく夕空に起つてゐた。

母と妹とが町へでかけた晩、二階にゐた筈のお富がゐないので、豐はすぐ裏の庭へ出て見た。裏庭と奥庭とのつづきに柿や杏ぐみ等の繁みのしたは、せいの高い莚や穗草がしげつてゐた、暗く戰いで、そこから石垣のしたに犀川が瀬音を鳴らしてゐた。對岸の二階家の灯が水の上に落ちて、ながい尾をひいゐた。

豐はいつもの癖で、できるだけそつと歩いて裏戸から磧へ出ると、石垣に暗く茂り出た榎のかげを透してみた。いつも彼處にゐるのだと思ひながら見ると、やはり今夜も二つの黑い影を見出した。その影は暗いなかでも、もつと暗みを帶びて石垣をせなかにして、ぺつとりと屋守のやうに添んで食附いてみえた。そこは磧になつてゐて雜草がしげつてゐるので、すこしも他からは二人の影は見えなかつたのである。

すらりとしたお富のからだが、へいぜいよりもずつと高くしなやかになつて、灰色の石垣にもたれてゐるのが非常に憂愁た氣を起させるのである。お富よりすこし背丈のひくい男は、うしろ向きになつて石垣に何か無駄書をしてゐるら

しい手つきで、しきりに動かしてゐた。男はまがひもなく林檎屋の丹であるらしかつた。町はずれの大きな果樹園の二男で、ずつと前からお富と關係があつたのである。

林檎屋の丹といへば、子供のときから明笛を吹くことが上手で、このごろでは活動館の樂隊に入つてゐて、細いズボンを穿いてゐた。夏など犀川べりの人氣のないところを丹はよく歩いてゐた。丹のあとには白い浴衣の女がいつも一人喰付いてゐた。

「散歩かね。」

豐はさう言つて丹のあとからくる女をひよいと目にいれると、女はすぐ俯向いてしまつた。女工のやうでも學生のやうにも見えたのである。

「うん。此奴をそこで捲いてしまふと、大橋のところにまだ一人待つてゐるのだ。」

丹はどこか百姓あがりの色黑できりつとした苦味のある顔に、わざとらしい冷笑をうかべながら言つた。

「も一人のも女かい。」

「あたり前さ。ぢや失敬。」

さう言つて歩き出すと、さツきから話してゐた最中も電信柱のかげにかくれた女が、そつと炭酸紙をひつぺがしたやうな影をひいて、丹のあとから跟いて行つた。それが妙に丹を信じきつてゐるやうな素振りなので、女が哀れな氣もした。

そんな日に又別な向河岸を歩いてゐると、さきの女を歸してしまつた丹が、別な女とやはり上流の暗い土手の方から歩いてくるのである。豐などにゆきあふと、女は決つたやうに二三間隔れてしまふか、故意とさきの方へゆくかするの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

である。丹は、さすがに一と晩に二度も出合したのに、輕くどぎまぎしたが例のむんずりした調子で、ちよいと頭を振つた。豐は殆囁くやうに

「あの女は先刻大橋のところに待せて置いた女かい。」

さう言つて、娘らしいたどたどしい姿で、ちよいと小路の板壁のかげに隠れた女を透して見た。

「ちよいと美い女だらう。あんな女にめつたに網にかからないんだ。」

丹はさういふとちよいと後方を振り向いて、わざとらしく嘲笑つて

「いつでも物慾しさうにぶらついてゐるな。でも何んにもならないんだらう。」と言つて

「最うすこし歩くんだ、ずつと下流の方へ行かうと思んだ。」

と丹は豐のそばから離れた。

「いつたい幾人女をこさへたんだ。」と豐は追ひ縋るやうに尋ねると

「なあに直出來るよ。する氣なら……。」と細い腰のところに細い帶をしめたのを、ちよいとゆすぶつて失敬とか言つて、二三間歩き出すと口笛を吹いた。女は塀のところから、すうと優しく引摺られるやうに出てきて、私のそばを俯向いて通つたが、その俯向きながらじろりと見た黒ずんだ大きな眼が、今になると、どうもお富に似てゐるらしく思はれてしかたがなかつた。

それに丹の口笛は、はじめの間はわからなかつたが、お富が豐の家へきてから、ときどき晩方になると磧の方から吹かれたことで、そのたびにお富は妙に落ちつかないことがわかつたのである。一所で話してゐても、それが鳴ると、何を話してゐても絶えず氣をとられてゐた。磧には河鹿がたくさん居たために、よく星あかりや月夜には聽えるやうな澄つた聲

のやうに鳴くのを、お富はききちがつて庭へ出て行くことも、だんだんあとになると判つたのである。もちろん母は知らなかつたがおきんは知つてゐるらしかつた。口笛が鳴るとおきんはれいのおどおどした鮒のやうな目つきをして落ちつかなかつた。ときにはそつと庭へ出てみるやうなこともあつたが、しかしそれにはお富にかくれて覗きに出るらしかつたのである。

「兄さん。誰だか裏の方にゐるわ。あちこち歩いたりして——。」

と偶には言ふことがあつたが、それと氣のつかないときは例のおきんの神經のせいだと思つて「お前はどうもへんだね。晩にさへなるとそんなことを言つて——。」といふと「氣のせいでせうか。」と言つたきり、やはり座敷の隅に小さくなつて座つて　おどおどとお富の顔や髯を見ては默つてゐた。

今かうしてお富と丹とが話してゐるのを見ると、へいぜいのお富とは別人のやうに優順になつて、どこか、その袂のよらふらしてゐるやうに、からだまでがぐんなりと何時よりも柔かくなつてゐるやうな氣がした。何か小さい聲で物を言ひながら、すこし顔を傾げてうつとりとしたやうに聽き込んでゐるのが、むしろ豐には優しすぎるやうに見えたが、なんだか憎々しい引ツ掻きたいやうな苛々しさを、感じた。

ときどき丹の聲が、濁つた太い聲できこえたが、瀬の音が間斷なくさらさらして直ぐ揉み消してしまつた。お富のこゑもきこえない。しかし何かから甘えたやうなお富らしい擽ぐつたいこゑは時々してきた。

それに豐にとつて惱ましかつたのは、さうした二つの影を横から眺めてゐるだけに、手や足や袂がうごくたびに、二つの黑いかげが妙にふくれあがつて一つにならうとしたり、とみると、それはただ石垣にもたれてゐるに過ぎないやうであり、また、さうかと思へばその手がつながり合つてゐるやうな氣もするのであつた。一つの小さい影にも絶えず精

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

細な神經がぎくりと動いて、もんどり打つてひりひりした痛みをかんぢさせてくるのであつた。それが熱くさい呼吸ぎれをするたびに、氣もちが次第に荒んでゆくのである。

「…………わ…………。」

といふお富の甘たれたこゑがすると、ちつくりと蜂に刺されたやうな氣がして、豐は耳をそば立てた。

白い顔と顔とが二枚の半紙をかさねたやうに薄くなつたかとおもふと、すうと剝げて又大きく離れたやうな氣がした。さうかとおもふと二枚の洗濯物のやうにひらひら動いたりした。

そのとき裏門の杉垣のところの枯葉が、がさがさと音がした。が、またあたりは森として瀨の音と、盛りこぼれるほどの星屑が、ぱちぱち撥く焚火のやうに、空いつぱいに廣がつて見えるばかりであつた。「たしかに音がした。裏門のところに……。」と豐は地べたに顔をおしつけるやうにして見詰めると、杉垣のところに一つの黑い影があつて、そのままじつと動かなかつた。そこから石垣のところにゐる二人の姿が見えるのだ。近よつて見ると、その影はまだ豐がうしろから行くことを知らないでゐるらしかつた。

「おきんか。」

と言つて豐はびつくりした。「どうして其處にゐるんだ。町へ行つた筈だが……」といふと

「え。」と言つて眞靑になつて、からだぢうを震はせた。

「何を見てゐたのかね。そこから――。」と言つても默つてゐた。默つてゐるとしつこいほど啞のやうになるのが、おきんのくせだ。

「ほんとに何も見てゐなかつたのかい。嘘を言はない方がいい。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

豐はさう言ひながら、おきんの鼬のやうな目を、それが奇妙に夜になると光るもののやうな氣がして、じつと見入つてゐると

「何も見ては居ません。」

と言つておづおづと恐さうにあとずさりし出した。

「だつて用事がないのに此處ところに居るのは誰が見てもおかしいと思ふぢやないか。」

さう言つても、やはり默つてゐた。

「見たんだらう。きつと、お富のゐる方をね。そこからはつきり見えるからな。」

おきんはどうかすると、子供のときから、ひよつこりと襖のかげから出てきて、何か豐が惡戯でもしてゐるのを發見けたことを思ひ出した。敏捷な暗い蝙蝠のやうに、誰のことでも嗅ぎあてることの巧みなのを不意に思ひ出した。

「いいえ。見はしません。ほんとよ。私はそこにじつとして居ただけなんです。」

と言つて執拗に一點張りをつづけた。しかしその聲は震えて、白すぎる顔ちうがく／＼恐怖に震へてゐるやうな氣がした。そして此間言つた乳房のこりこりになつたことを考へ出して、それがおきんの內部に動く或る不思議なちからをも思ひ合せた。ことにお富のことを絕えず影のやうになつて嗅ぎ廻つてゐることも、氣味惡くかんじた。

「家へ這入つたらいいぜ。いつまでも立つてゐないで――。」

豐はさう言つておきんを追ひ立てると「ええ。」と言ひながら、ぐずぐずしてゐたが、家の方へ鈍い足どりであるいて行つた。「どうして彼奴にしぶとい女なんだらう。」と、ゆつくりと步いてゆく背後を見つめた。

そのとき石垣のしたでは、丹が聲高に何か言つて、磧づたひにお富のそばを離れた。しかしどうしたのか、お富は石垣

の石にしがみついたやうになつて動かなかつた。丹は又ぶつぶつ言つて、磧の歩きにくい石の上を飛び飛びして、對岸の土手へあがると、暫らく立つてゐたが、すぐ水門のところから通りの灯のすいて見える小路へ曲つて行つた。

お富は間もなく石垣から離れると、對岸の灯を見つめてゐたが、そろそろと石段から庭の方へ還入つてきた。のろい足どりで、くつしやりしたやうになつて、すこし下向いて來るのである。

「富さん、丹はかへつたのかい。」

と、豊は蕗畑のなかから、すつぽりとからだを現して、ぬつと首を出してにんがりと微笑ふと、お富はびつくりして飛び上るやうにした。豊は芝居ものの惡黨のやうな暗い氣持ちになつて、ぶつつりと蕗の傘を一枚手でちぎつたのである。

「あ、びつくりした。どうしたの、そんなところに居て。」

さう言つて豊の方を見つめたれいの黒ずんだ目を中心にした大きな顔の肉が、湯氣で蒸したやうにぽたぽたと軟らかくなつて、目も濕つぽくなつてゐた。

「さつきから此處にゐたのさ。丹はどうしたんだ。」

と、豊はばつさりと蕗の傘を分けながら出ると、お富は

「知らないわ。人を脅かしたりなんかして、丹さんつて知らないわ。」

と、そばへ寄りながら、怖らしさうに尻目で豊をながめた。

「だつて今まで彼處にゐたんぢやないか。さつきから見てゐたんだ。」

豊は白々しい薄笑ひをうかべながら言ふと、お富は素氣なく

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「私ずつと磧を散歩してゐたのよ。そんなことを知つてゐるもんですか。厭な方ね。あなたは。」
と、しらを切つて、そろそろ歩き出すのである。それは本統に知らないやうな落ちついた毒婦のやうに、つんと肩をそびやかして行くのであつた。
「おれが見てゐたんだぜ。澄ますなら澄してゐるさ。」
豊はさう言ひ放つてぼんやり背後姿を見つめてゐたが、そのとき、お富はこころもち立止つたが、また考へなほしたやうに歩き出した。支那柿の暗いかげへはいると、すぐうら戸の明りのうちへ消えた。

町の勧工場の通りから右側の暗いとほりで、ある晩のこと、ひよこりと林檎屋の丹らしい姿を見たので、近づくとやはり黒のソフトを冠つた丹が壁にそふて誰かを待つてゐるらしく立つてゐるのであつた。
「丹。何をしてゐるんだ。こんなに晩くまで……。」といふと、丹は、脣のさきで微笑つて
「ある人を待つてゐるのさ。」と、鼻さきで言つた。それがいかにも豊を莫迦扱ひにしてゐるので
「ある人つて勧工場の賢子くらゐだらう。いいかげんに止さないか。」といふと、益々烈しく鼻さきであしらふやうな變な聲で、嘲笑つて
「大きにお世話さ。君こそ早く歸つたらいい。」と言つて、あつち向きになつて、うす暗く歩き出した。なるべく豊と口をきくのも厭なやうな振をして、暗い溝のところへ歩いて行つたり、または蹲んだりしながら、しきりに裏口に氣を配つてゐた。

「丹。君に話があるんだが……。」と豊はきり出すと、丹はすぐさま
「このつぎに聞かう。けふはこちらにすこし用事があるんだ。」と言つて、また反對の方へ歩き出した。豊は頭がふらふらするほど烈しい嫉妬めいた怒りをかんじながら、一體どういふ女が出てくるのだらうと、裏口の四角な電燈の餘映が吐き出されてゐるのを凝乎と見つめてゐた。

そのとき頭の上に時計臺があつたので、きうに鳴り出した。十時であつた。と、大きな三階の建物の角々にともされた裝飾電燈が、いちどきに消されると、窓々の電燈も急に光を失つたのである。ただ、裏口の硝子戸越しの電燈だけが霧に羽蟲にまみれたやうな、ぼんやりした光を漂はしてゐるだけであつた。すると、なかから女らしい二三人づれが、みんな風呂敷包みを抱えて歸つてゆくのであつたが、その一番あとに出てきた小柄なまだ二十に充たないやうな女の束髪が、くつきりと電燈に浮んで見えた。

女は戸ぐちへ出ると、あちこちの暗い溝のあたりを透し見ながら、不意に丹を見つけたらしく、あとさきを振りかへつて見て、丹の方へあるき出した。丹もそのときに女の方へ歩みよつた。と、裏口の重い土戸が鈍いどつしりとした響をあたり立てながら閉められたのである。

丹は女のそばへ寄つて何か囁くと、女はうなづきながら暗い軒にそふてゆつくりと歩き出した。豊はそれを見てゐるうちに女の歩き振りがあきらかに丹を待つたためにのろのろとひまどつてゐるのを見た。そして女がさういふ時に、ゆつくりと思はせぶりな歩きやうをするといふものは、どこか艶めかしく感じられるもので、その白いすらりとした足のさきまで、よろつくほど、男のことを考へこんでゐるやうで不愉快であつた。

丹は豊のほうへやつてきて

「ちよいと急ぐからね。」さう言つて、くるりと背後を見せて、妙に見せびらかすやうに歩き出した。豊はそのとき

「丹。」

と、酢のやうな變なこゑでよびかけた。それほど豊は胸がどきついてゐた。

「何か用事があるのか。」と、かれは振りかへつた。

「いや、覺えてゐろといふんだ。」

さう豊は叫ぶと歩き出した。丹は何かぶつぶつ言つたが、すこし早めに女にちかづくと暗い裏町の方へ二人ならんで歩いて行つた。

かへると、おきんがすぐ飛んできて、れいの圓い目をくりくりさせて

「さつき彼のひとがうしろで口笛を吹いてゐたわ。そりやしつこいほどぴいぴい吹いてゐたのよ。」

と、息をきらしながら言つた。あまり急いで言つたために何處か靑味をおびた呼吸ぎれをしたやうな皮膚をしてゐた。

「あのひとつて誰のことなんだ。わからんな。それだけでは。」

豊は白ばくれて言ふと、おきんは目のなかに一杯むらむらな炎のやうなものを浮べながら

「林檎屋の丹のことよ、」

さう言つて又目をちかちかさせた。豊はそれを見てゐるうちに、おきんが何時の間にか何かを嗅ぎつけるごとに、おきんのなかのものがほんのりと育つてゆくやうな氣がした。いつの間にか喉のところがふつくりと膨れたやうに肉づいたことも、何となく氣味わるくむづむづした氣もちになつて眺められるのであつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ふふん。丹がかい。そしてお富さんはどうしたんだ。」

おきんはすぐに

「お湯へいつていらつしやつたものだから……しまひに丹はあきらめて行つてしまつたらしいのよ。」

と言つてほつとしたやうな顔をした。豐はなるべく落ちつきを見せてゐたが、ふしぎにもやはり輕い安心をかんじた。

「でお富はもう寢てしまつたのかね。」

「ええ。だいぶさきに――お湯からかへつてくると、すぐ庭へ出て行つたわ。そして何か私に問ひたさうだつたのよ。けれどわたし默つててやつたの。」

おきんは快よげに圓い目をほほ笑ました。その白すぎる顔立ちが妙に支那人の子のやうに淋しくひしやげて見えた。

「兄貴が嫌つてゐるのもあたりまへだ。しかし一體どうする氣なんだらう。かうして家に置いてをけば、やはり兄貴は一しよにならなければならなくなるだらう――。」と豐は考へ込んだ。母の言ふのには今まで一しよに育てて里へかへすのも可哀想だが、兄の氣にいらなければ仕樣がないと、一日のばしに延してゐたのである。兄も、これまで兄妹として育つてきて夫婦になぞなれるものかと言つて「どつちにしても歸してしまふ方がいいんだ。それにどうも質がよくない。」などと言つた。

おきんはまじまじと豐をみてゐたが、ひくい聲で

「わたしあの丹つてひととお富さんとおかしいと思ふわ。」と目をほそめながら、その言葉を豐ににじりつけるやうに言つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

豊はしばらく默つてゐたが、おきんをそつと押すやうにして

「そんなことはどうでもいいから、早く寢んだ方がいゝ。」

さう言ふと、おきんは何かまだ言ひ足りないやうにもぢもぢしたが、自分の室へ行つた。

おきんは豊といつもならんで寢てゐたのであるが、その晩も足と足とを結えて寢てゐた。どこで覺えてきたか知らないが、寢くせの惡い彼の女はいつもさうしてやすんでゐたのである。

晩方、豊はふらりと庭へ出ると、お富は石垣の上に踞んで下流の方を眺めてゐた。それが先刻からかなり長くさうしてゐるので、豊は感じるとなく或るものを感じてゐた。

お富は石垣から立ちあがると、いらいらと其處らをあるいてゐたが、しまひには、その顏までへんにゆがみ出して、つきかかるやうに豊に食つてかかつた。

「どうして其處にばかり居るの。さつきからぢう――。」

と言つて豊を見つめた。豊は袋の破れたやうに笑ふと

「何もしてゐないんだ。ただ歩いてゐるだけなんだよ。」といふと、お富はぷりぷりしながらもしきりに下流へ氣をやつたり、柿の葉をやたらに摺つたりしながら、内心の焦々しさに、しまひには顏ぢうを蒼くさせて、喉もとまでしきりに唾を飲みこんだ。さうして

「わたし考へたいことがあるのよ。あなたが歩くんで下駄の音が耳にさわつて、ちつとも考へられないわ。もうすこし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

靜かにして下さいな。」

さう言つて、豐を家へ這入らせるやうな口吻をした。豐はそのはしこく動く唇がぺらぺらに動くごとに、滯ぎわに絡みついた鳳仙花が喰付いたやうな氣がして、おもはずぷつすりと微笑つて

「おれだつてすこし考へごとをしてゐるんだ。お富さんの足音がやはり邪魔になつて仕方がないんだ。」

と言ひかへすと、お富は、毛蟲にでも螫されたやうに、かほぢうを口のそばへ引きつらせて、

「なんて憎らしい！」と齒がみをしながら豐を睨んだ。それは見てゐても本統に憎らしさうに感じられた。

「そつちで憎らしければ、こちらでも憎らしくなるんだ。」

さう豐は呼びかへしたとき、お富は又石垣のそばへ行つて下流をながめた。そのとき彼女はもう呼吸も絶えるやうにせかせかして、指をぴしぴし折つては、ほそいしんなりした骨を鳴らしたりした。

「おねがひだから、ちよつと家へはいつてゐて下さいな、わたし本統に用事があるんですから。」

と、お富はへいぜいから見ると、げつそりした衰へた顫えがちの目で、豐を見つめた。けれども豐は鼻さきであしらつて

「おねがひはこちらの方からもするよ。家は暗くて陰氣だから……」

さう言つて豐は木かげに立ちすくんで、變に昂奮しながら動かなかつた。お富はおどおどしながら立つてゐたが、あきらかに今はそのからだ全體をぶるぶる顫はせてゐた。

そのとき、おきんが二階から、れいの臆病さうな目をしながら

「お富さん――。」と呼んだ。何かの用事でもあるのだらう。さう呼ばれるとお富は、かつと口をあけて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「用事ならあとでいいわ。」とすこし怒つて叫んだ。すると二階からしつこく
「今すぐでなければ駄目な用事なんですわ。ほんとに急ぐのよ。」
と又呼びかけた。
そのとき豊はそつと振りかへると、白い磧の石づたひに歩いてくる丹の姿を見つけた。ちやうど廣々した磧に一羽の大鴉が下りたやうに、石と石とを、とんとんと飛んで、すこしばかりの流れを避けながらやつてくるのであつた。
お富もそのときちらと、その影を見つけた。と、顔ぢうが今にも泣き出すやうに、泣き皺がよつてきた。が、その瞬間二階から又おきんらしい意地悪い聲で
「お富さん……。」
と急き立てるやうな疳聲で呼んだ。お富はそれをきくと、顔ぢうを揉み立てたやうに痙攣らせながら
「なんて憎らしい。」と又同じいことを言つて二た足ばかり地たんだを踏んで、「ああ。」と歯痒い引裂けるやうな聲をあげたかと思ふと、鼻からしたをヒン曲げたが、いきなり家のなかへ馳けこんだ。
しばらくすると、石垣のしたから蕭々とした哀音のある、いかにも丹の吹くらしい口笛が、ポプラの下にゐる豊の方にきこえた。豊は思はず入墨のやうな氣味の惡い、どくどくしい微笑をうかべた。自分でもそれがはつきりと見えるほど、辛辣な、むしろ何處か紫ぐんだ濁つた氣持ちになつてゐたからである。
間もなく足音をぬすんで、石垣の上を目がけて豊は這ふやうに、腰をひくめながら歩いて行つた。げぢげぢ蟲がからだぢうを火のやうに走つてあるいてゐるやうな氣で、いらいらと這ひよつて行つた。暗みをおびた土にちいさな羽虫が一つ、ひりひりしてゐたのを他所目でながめながら、靜かに石垣のしたを覗き込んだ。二間ばかりのしたに、黒ずんだ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

丹の姿が犬のやうに蹲んでゐるのが、ふいと目にはいつたので、直ぐ顔をひつこめた。

口笛はしきりに吹かれてゐた。ぴいいい……と、しづかに強く、焼けたやうな熱い豐の耳の障子にひびいてきた。いつか川岸で會つた女のほんのりした白い震えるやうな顔や、勸工場の女の、どうにでもなるやうな弱々しい受身なすがた、それからまたお富のあさぐろい、それで强烈に張りきつた皮膚や、丹にあつてゐるとどこか身體が柔らかくさへなつてゐたやうな此間の晩のことや、それは、その數分のあいだに、ぼんやりと映つてはすぐに消えて又現はれる映畫のやうに、かはるがはる浮んできた。そのたびに豐の心はばたばたと狼のやうに身動きをしながら、がちがち白い牙を砥ぎすました。

豐はしまひにはのつそりとつッ立つて、石垣のうへから見おろした。丹はやつぱり蹲んで、石か何かを手にもつてゆるゆると口笛をふきながらゐた。二三分がすぎると、丹は何氣なく動いて、およそ豐の方を向いたやうな氣がしたとき、豐は掠れたやうな聲で比較的おちついて呼んだ。

「丹。」

と、かれはそのときもう石垣の上にその顔をむけたが、顔いろはすぐさま青くなつて、殆無表情で凝視したが、その緊張と驚きとは、みるみるうちに落ちついた平常にかへつて行つて、れいの百姓の子息らしい色ぐろい顔を咄嗟の間ににつこりと微笑ませた。どことなく薬でも狹んだやうな變な微笑であつた。

「脅かすなよ。おもしろくもない。」

さう丹は、ぶしつけに言ふと、手にもつてゐた石を腹立たしげに水のある方へ投げつけた。石は、磧の石から石をもんどり打つて、かすれたやうな音を同時に二度ばかりひびかせた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「お富は留守だ。かへれ。」

豊はこれだけを叩きつけるやうにいふと、丹は意外にも落ちついて、ふふんと鼻のさきで冷笑つて

「留守かい。留守ならしかたがない歸へらう。」

と言つたきり、また、積づたひに向河岸の方へ、石と石との上を飛びながら歩いて行つた。それに一度もふりかへりもしないで、ゆつくりと歩いて向河岸へつくと、れいの水門のところから、通りへすぐきえた。

何心なく庭の方をふりかへると、そこへおきんが何時の間にか出てきて、支那人のやうな淋しい顔をして、惡いことをしたときのやうな微笑をもらしながらゐた。そしてすぐ聲をかけた。

「もう丹はかへつて？。」

と言つて一と足ばかり前へでたが、豊はきうに厭な松脂を舐めたやうな氣がした。」

「きみ　惡い女だな。おまへは。」

さう呟やいてくるりと裏庭へまがつた。うしろから、おきんの足音が遠くなるのがきこえた。

家の方へひきかへさうとして行くと、すぐ家のなかからお富がばたばた走つて出てきたが、豊にはひと言もいはないで、いきなり石垣の上へあがつて、あちこち見たが、その硬ばつたやうなからだが一時にがつくりとゆるんだのが、豊の目にはつきりと感じることができた。ぼんやりと何時までも佇つて、そのあげく、くつしやりとしてやや暗くなつた庭を家の方へもどりかけた。豊は手にふれた笹ツ葉をちやりちやりと噛んでは、にたにた嗤ひながら暗いところに佇んでお富の背後姿をながめてゐた。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日曜ごとに歸つてくる兄は、れいの蒼白いいらいらした顔つきで、おきんを見るたびに呶鳴りちらしてゐた。おきんは、おなじい食卓にむかつても、兄の眼のなかを讀みながら、おどおどと食事をしてゐた。習慣的にごはんをつぐために、おきんが盆を出すと、やつぱり苛々しい顔で

「自分でつぐからいいよ。」さう言つて、おきんにはつがせなかつた。そんなとき、おきんは、ぴつちりと差出した手の平をひつぱたかれたやうに凋れて居いた。

「わたしついであげるわ。お出しなさいな關ないわ。」

と、お富はいつもするやうな横勢な聲で言つて、自分でごはんをつぐのである。兄はちよいと微笑つたが、おきんの手前もあるので直ぐむづかしく堅皺を鼻から頬によせて

「どうも濟みません。」

さういふと、また微笑んで、すぐむづかしい顔にかへるのであつた。

おきんは俯向いて[illegible]おわんのなかばかり見詰めては、拾ひ食ひをするやうにおどおどと食べてゐたが、ときどき、おわんのそとへじろりと上目をしてお富と兄とをながし目でみた。白みばかりな目である。

「おきんちやんはいけないわ。白目であたしを見るんですもの。陰險だわ。」

と言つて、ごはんを止めてケンツク食はせるのであるが、兄はそんなとき、すぐ例の衝き飛ばすやうな聲で

「早くごはんを食べてしまはないか。ぐずぐずしてゐやがる。」

汚なぐちで言つて、がらりと箸をおくとよいと二階へあがつてしまふのであつた。お富もすぐさま食事をしてしまふ

と、兄のあとを追つて二階へあがつた。

しちくどい母が、こんどはおきんにむかつて

「お前がはきはきしないからだよ。いつまでもそんなぢや困るぢやないか。兄さんは官員だから……官員樣の奧さまになるときはお前のやうなぐずぐずしてゐてはいけないんだよ。」

と言ひ出すのである。

おきんは默つて、もうしやくり啼きをしながら、よごれ物をあつめては臺所へはこんでゆくのであつた。蒼白い椀や皿を水桶にひたしながら、じくじくに濕つた臺所のながしもとで、水でぬれた手で目をこすりながら、永い間泣くのであつた。

日がくれて豆ランプの暗い手つきで、いつまでもさうして啼いてゐるおきんを見つけると、つい豊も

「早くしておしまひ。でないと兄貴がまたやかましいからね。さあ、早く拭いて、お湯にでも行つといで……。」

といふと、おきんはへいぜいから豊にだけ言ひよいと見えて

「ちよつとしたことにでも小言が出るんですもの……。」と、おいおい泣くのである。豊はその濡れた目をみるのが厭さに

「早くしたらいいぢやないか。また小言がでるから。」

となだめると、やつと「ええ。」と言ひながらも、しやくり泣きをつづけるのであつた。屋根裏の明り窓から星の覗く時分、やつとおきんは臺所からあかい、手をしながら出てきた。

母と兄とが對ひあふと、すぐおきんのことを話した。兄は

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「だから初めから子供など貰つたつて仕様がないと言つたぢやありませんか。何んにもしらない赤ン坊を子息の嫁にしやうなんて育てるものがあるもんですか。」

さう言つて、おきんを兄妹のやうに育てて今さら嫁にしやうなんて、ばかばかしいことだと、役所の埃や空氣のわるいところで痛められた蒼白いかほを、がたがた氣らせながら怒り出すのである。

「ぢやお前の氣にいらないのかい。さうならさうで考へがあるが……。」

母はかう言ひながら、またひとり言のやうにぼんやり障子を見つめて「里へ歸したつていいぢやないかの。本人のお前が氣にいらなければ……。」と、よそごとのやうに、すこし呆氣けて言つた。

「だからその話はずつとさきから話してゐたぢやありませんか。それだのに里からつけ屆けでもあると、つい意張つて話を切り出さないのがいけないんですよ。」

兄はさういふと、ぷりぷりしながら、矢鱈に煙草を強く吸ひこんでは吹いてゐた。

よこに居た豐は、ふいと口をいれた。

「おきんを今さら出すなんて可哀想ぢやないかね。」

と言ふと、兄はすつと豐のかほを斬りつけるやうに嶮しく見つめたが、微笑つて、さらさらした言葉で

「お前なんかの知つてゐることなものか。何か可哀想なものか。見込みのないものを引きとめてをくことこそ可哀想だよ。」

と言つて、鼻を鳴らした。

「だつて女中同様につかつてゐて出すなんて酷いな。僕ならそんなことはできないがな。」

豐はさう言つて立ちあがると、母はすぐに食つてかかつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「女中同樣とは何といふことをお前はいふ。母さんだつて朝暗いうちから家のことをしてゐるぢやないか。」

と、兄の前をつくらふやうに言つたが

「わかるもんか。」と、上から覆ひかぶさるやうに豊は言つた。と兄が

「默つてゐろといふのがわからんのか。知らないことは一つも知らないでゐて……。」

と、言つてばちばちと撥くやうな光を目にふくんだ。

豊はそこから奥座敷へはいらうとすると、屛風のかげに、ふだん着などをぶら下げたり、坐布團を積んだりしてあるところに、むんづりと動いたものがあつたので、二三歩寄つて見ると、濡れた野良犬のやうに踞んだおきんが、まんぢりと圓い目をあけながら聞耳を立ててゐるのであつた。そこは電燈のひかりもとどかなかつたが。その影はこんもりと昆布を盛りあげたやうになつて見えたのである。

豊はそこで又二三歩ちかづくと、そつとおきんに囁いた。

「そんなところで偸みぎきしてゐると小言をいはれるよ。あつちへ行つてゐたらいい。」

おきんは低いこゑで

「ええ。」

と言つたが。れいの目がおどおどと豊に發見けられた恐怖のために震ひあがつてゐた。その上、ふるえ聲で

「ここに居たことを言ひつけないで下さいな。」

と拜むやうな目をした。

「そんな詰らないことなんか言ふもんか。あつちへ行つて居れ。な。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、豊は哀れな氣もちがした。そのとき、ずつと前、おきんが七つのときに、ふとしたことから裏の納屋の隅で……或る夕方、それはどういふはづみであつたか、豊は苛々しながら、熱い呼吸を吐いておきんを炭俵のかどに押しつけてゐたことを思ひ出した。

炭納屋は暑くむされてゐて、豊のかほにも蜘蛛の巣がへばりついて汗にまみれてゐた。「あのとき何をしてゐたかも、どういふことを仕やうといふ目的をも持つてゐなかつたのだ。ただ、おきんが炭を出しにきたとき、私はその納屋の藁の上に居た。忌はしいことを私は考へて、そして……しやうとしてゐたときに……。」おきんは默つてするとほりにただ微笑つてゐたのであつた。

「こんなことを人に言つちやいけないよ。ね。きん。」

さう豊は炭俵のすみから這ひ出してくる藪蚊が、おきんの耳のところにへばりついて、いゝぐみのやうに血ぶくれしてゐるやつが、そとの逆光に美しく透いてみえるのを眺めながら言つたものであつた。

「ええ。」

とおきんは言つたが、これも變なかほをしてゐた。

「ちつとしておいで。耳のところに蚊が一疋とまつてゐるから。」

「さうお。」

「ちつとしてゐるんだよ。」

「ええ。」

と、豊は手のひらにぺつとりと潰された蚊を眺めたが、そこにあつた藁にさらさらとこすりつけた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

豐はかう考へながら、「まるで子供同士がよくやることをおれも眞似をしてゐたばかりだ。だが、おきんがあのことを意味のあることに、いつも考へ込んでゐるやうな氣もしてならないのだ。それはおれの氣のせいかも知れないが、しかし何かがかうおれをかういふ風に考へさせてくるのだ。そして妙におきんを可哀さうな氣をさせてくる。おきんも誰にもいはないことをおれにだけいふ。」と考へながら、豐は裏戸の方へでて行つた。

おそくなつて錢湯にでかけると、すぐお湯屋の暖簾からひとりの男が、しづかな裏通りにひびく跫音に驚きながら、赤茶けた瓦斯燈の光から消えやうとした。ちやうど、通りがかりのもののやうにわざと下駄をひきずりながら、暗い方へ歩いてゆくのが變に氣にかかつた。それは女湯の方からだつたので、豐はべつの暖簾のすき間から、やりすごして置いて覗いてゐた。

ものの二分も經つと、その影はまたふらふらと戻つてきた。そして暗い一方は川岸にさへぎられた方と、また、さきの通りのすこし明るみをもつた方とをふりかへつて、人がこないのを見澄すと、かれは、そこの暖簾を分けやうとするのであつた。それが紛ふかたもない林檎屋の丹であつた。

「丹。よせ。見つともない。」

さう豐が言ふと、丹はずるずると引きずられるやうに、通りへ出たが、默つて豐の前につつ立つた。そして曖昧な微笑をうかべたまま

「何か用事があるのかい。いま呼んだのは君だらう。」

と言つて、故意とらしい懐手をして落着き拂つてゐた。そして通りがかりのものらしく裝つてゐた。

「用事はないが、あそこに何してゐたのだ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

豊はさう言ふと、丹は、冷笑つたかほを最う一度冷笑つてみせて

「何をしやうとおれの勝手だ。やきもきしない方がいいぜ。」

かう言ふと、くるりと背後を見せて、反對の方へあるき出した。しばらくあとを見送つてゐたが、豊はすぐ錢湯の格子戸をあけてなかへ這入ると、女湯の格子戸に片手をかけながら、いまにも湯から出たばかりの、ほんのりと桃色にそめあがつた頰をつやつやと露き出しにしたお富が、ふいと豊と目をあはせたが、いつかの夕方以來ものも言はなかつたので、わざとぷんとして、そとへ出て行つた。

豊は湯につかりながら、いたちのやうな丹が、さつきお富がお湯からあがつたばかりのからだを拭きながらゐるのを隙見してゐたにちがひないと考へると、いやな、暗い妬ましさが煤でも舐めたやうにしてきた。

お湯から出るとすぐ家へかへると、おきんがボロ切れで雑巾を縫ひながら「おかへりなさい。」と睡い聲で言つた。

「お富は……。」

と尋ねると、きよとんとした目で

「お湯へ行つてまだかへらないの。」

豊は時計をふいに目にいれると、一時間ばかり經つてゐた。おきんは豊の目のいろを讀みながら

「遲いわね。どこへか行つてゐるんぢやないかしら。」

と、妙に豊を疑ぐらせるやうな、まるい目をくりくりさせて言つた。「丹のやつ又お富をどこかへ引つ張り廻してゐるな。いつたい丹といふ奴はどこが女の氣にいるんだらう。」と豊は考へ込んだ。「百姓めいた顔つきをしてゐて一個どこがお富の氣にいるんだらう。」と同じことを考へた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「わたし迎へに行つてこやうか知ら。きつと丹がまた來てゐるのよ。」

おきんは自分でさういひながら、ひとりで目をちかちかさせて昂奮してゐた。

「ばか。それよりも寢てしまつた方がいいよ。」

豐はさう言つて自分の室へはいつたが、ふしぎに桃色をした柔かいお富の頬のあたりの肉づきが目にうかんで、すこしも落ちつけなかつた。しまひには表へも出てみたが、星ぞらの烈しい砥のやうな夜寒さが、前の小川の響まで手づたつてぞくぞくしてきた。早寢の近隣の雨戸もしめられて、通るひともぽつりぽつりとしか影がなかつた。

「兄さん。まだお富さんが來ないの。」

と、前二階の窓からおきんが、やはり睡はぐれたやうな鼻にかかつた聲で、ひくいけれど能く透る調子で言つた。なぜか生白い小さい顏のなかに、目ばかりきらきら光つてみえて、いやな氣がした。

「そんなところから聲をかける奴があるか。しつこい奴だ。」

と叱ると、おきんはすぐ顏をすつこめた。が、障子の破れ目から外のほうを見てゐるやうな氣がして、家へはいつた。

卅分ほどしてお富はかへつてきた。湯ざめしたのと、きつと河岸べりを歩いてきたらしい河風に荒された皮膚は、蒼褪めて冷たさうであつた。

「おそいお湯だな。」

豐はさういふと、長火鉢に手をかざしながら、氣味惡く冷笑つた。

「知つたひとにあつたものだから遲くなつたのよ。お、寒い。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、それは本統に悪寒がするやうに肩をすぼめた。

「知つてゐる人なんぞとうまく言ふね。丹だらり。」

と、豊は刺透すやうな目いろをして覗き込んだが、お富は顔いろをすこしも亂さないで、悪落ちつきに落ちついて

「何とでも言つてゐたらいいわ。」

と言つて二階へあがらうとした。と、帯のところに穂草の苛々した蟲みたいな穂が一杯に蒼白く喰ついてゐた。豊はぎつくりと一どきに心臓の音が途絶えるほど吃驚りしたが、すぐ呼ぶやうに言つた。

「帯に蟲草がくツついてゐるよ。さわつてご覧。」

お富は豊のこの言葉をきくか聞かないかの喫嗟の間に、その夜冷えした手で派手なお太鼓にむすんだ帯の上をなでると、二間ばかり隔つてゐる豊の方からもはつきり見えるほど、顔を顰めた。と、その拍子に手ずれがしたので、帯のところに喰付いてゐたのであらう。こまかい泥の乾いたのがさらさらとこぼれて音を立てた。

「ふん。」

さう豊は鼻さきで洋紙のやうな音を立てて冷笑したが、お富はますます赤くなつて慌てて

「どうしてこんなものが喰付いたんだらう。」

と、しらをきつたが、豊の方をわざと見ないでゐた。

「お富さん。とぼけると、あとで困ることができるよ。ね。いいかい。」

さう豊は饑餓の笑ふやうに、乾いた氷嚢のやうな顔の皮膚をにさばさ音させながら、意地悪くお富を見据えた。お富もそのとき、ふいに豊をみた。そして

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あなたは何んて意地悪るなんでせうね。何時も、何時も……。」

と、目を濕らせた。その低い聲はこれまで聞いたこともないほどしみじみしてゐた。豐はまた鼻のさきを鳴らした。どくどくしい味噌のやうな色をした豐の冷笑が、ぐりぐりと頬に永くえぐられてゐたのである。

「なんでおれが意地惡るなものか。ずるい奴にはずるく出るのだ。」

さう豐は手を火にあぶりながら火が、ちりちり手のひらに焦げつくやうにするのを怺へて言つた。

「あなたもあたしにそんなにつらく當らないで、何でも考へてゐることを話してくださるといいのよ。いつも考へてばかりゐてはわからないんですもの。」

お富は、やはり先刻と同じい低いこゑで、いつもにもなく優しく、からだまでにじり寄せるやうに言つて、横目でしづかに豐をながめた。その目はいつになく、とろんとして強い張つたやうなところのない中心のはずれた勞れたいろをしてゐた。何もかも分つた今になつて何をいふのだ。さう思つたものの、その濡手拭をいじりながら言ふ姿は、どこか、ぐんなりと柔らかさうに、話してゐても、豐にさへ重みを吹き込むやうにしてくるのであつた。

「ぢや、お富さんはおれのいふことも……その……。」

豐はのつそりと、猿がからだを起すやうに立ちあがつたが、どうせ、こんな、どうにでも踏みにじられたものだから關ふものかと、のつそりと棒のやうにつッ立つたときに、よごれたお湯のにほひがむかむかと胸をおしつけたのである。

お富はひと足うしろずさりすると、そのさがつた足を階段に一とあし登つて

「何をなさいますの。」

と、正面からぴつしりと、豐はその言葉を浴びながらこんどは此方が怯えた。

「と言ふと、その……。」

言ひ吃ると、お富はにつこりして、とんとんと二タ足ばかり上つて

「このつぎのことよ。」

と、豐はその瞬間あたまを半分斬られたやうな氣がしたが、はつとするとお富はもう階段をのぼりきつてゐた。したから、どこかで見た商店の女靴の木型のやうなのつぺりした足が、うすくらがりにだらりと二本……うしろ向きに垂かゝつてゐた。「やつぱり然うだつたか。あゝ手か。」と、無感覺的につつ立つてゐた。

が、すぐ豐は壁をすかして、こぼれた泥の乾いたのを一つ一つ拾ひはじめた。なかには小豆ほどの大きさもあり、蘚草の穗もまぢつてゐた。「こんなものまで食ツつけやがつて彼の調子でしやしやしてゐるのだ。」と、立ちあがると、留守だと思つた兄が居間から茶碗をもつて、反對の奥の方から出てきた。役所で仕事がしきらなくて、いつも家へまで持つてくるのだ。

「何をしてゐるのだ。それは何だ。手のひらのものは。」

さう夜冴えのした聲で言つたが、れいの何時もひりひりしてゐる表情は、やはり何かといふと衝突しさうにぱちぱち火のやうに撥いてゐた。

「これか、これは泥と蘚草です。」

殆無表情でぼんやりから答へたが、わけなく顏をあかめた。

「どうして此壁ところにそんなものがあるのだ。」兄はさう言つて、豐の手のひらの蘚草をちよいと摘んでみた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

豊は默つてゐながら「言つてやらうか。それとも默つてゐてやらうか。」と考へながらも、つい

「お富さんが帶のところから落したのだ。さらさらと……。」

と言つてしまつた。兄はかほをしかめた。そして

「それをお前がひらつて歩いてゐるのか。あひかはらず馬鹿だな。」

と言ひながらも、兄はその蝨草のことを聞いてから、蒼白いかほが益々變に曲げたやうに見えた。

「おれは馬鹿かもしれない。ふん。」と豊は座をはづさうとした。「兄に對つて小言を返す奴があるか。」とうしろで怒鳴つたが、又鼻であしらつて、反對の階段のとなりの間へ這入つた。そこは豊の寢間になつてゐた。

おきんはぽつかりと目をさましてゐたので、それをたしかめやうとさしつけた顔が、掻きつけられたやうな氣がした。

「おきん。」

と呼ぶと「ええ。」とこたへた。さつきからずつと起きてゐたのかい。」といふと「え。さつきからずつと……。」と答へた。

「ぢあ、お富のかへつたことは知つてゐるんだな。」

と、豊は何も彼も見られたやうな厭な氣がした。

「え。知つてゐるわ。ちやんと。」

から何か考へあぐんだやうに、すこし猾猾になつて言つたので、豊はなほ厭な氣がした。それきり床へはいると、しばらくすると、おきんは豊が怒つてゐるやうに思つてゐるのか「兄さん。」と聲をかけたが、豊はそれには答へないで、じ

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つと動かないでゐた。おきんはもぢもぢしてゐたが、そのうち寢入つてしまつた。が、一時間ばかり經つて夢のやうな睡氣のうちに、ぎしり、ぎつしりと古い階段のところに音がした。ふしぎにその音は上へ上へと登つてゆくやうだつたので、誰かが、階段をのぼつてゆくらしいのが分つたのである。それとも豐は夢でもみてゐるのかしら……と考へこむと、だんだん頭が冴えてきて、いまは明らかに階段をのぼつてゆくものが居るやうである。小用のためにお富があがつてゆくのとすると不思議はない。しかし、めつたにお富は夜中に小用をしに下りたことがない、すると……。二階はもちろんお富だけが寢てゐるのである。

「はてな。これはおかしいぞ。」

と、ふいに或る者を考へあはせると、こんどは、ハツキリと頭が冴えかへつた。と同時にあたまがふらふらするほど嫉妬めいた逆上がおそふた。

「うゝう……。」

と豐はしらずしらず唸つて、ぐんずりと床の上に起きあがつた。そして階段の下まで這ふて行つて、奥の寢間の方へ行つて見ると、母がすやすや寢てゐたが、兄の寢床がからになつて居た。氣のせいかと思ふと、さうではない。

豐はそれきり又寢床へかへらうとすると、また階段の方がぎしりぎつしりと音がした。下りてきたな。さう思つて隱れるところがないかと思ふても、どこも隱れるところがなかつた。

最後の一段を下りやうとするところで、豐はあはてて厠の方へゆかうと、むづ痒い背後を兄の鋭い視覺にいれたかとおもふと、一歩踏出すか出さない前に、さつくりと肩さきを斬られた。と思はず振りかへつた。

「今ごろうろうろして何をして歩いているのだ。うさんな奴だ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、叫びつかれると、豐もおもはず、振りあげるやうな聲音で叫んだ。

「あなたこそ、何の用事があつて二階へ行つたりするのです。」

兄は落ちついて冷笑をうかべたが、ことさら低い聲で

「用心を見に行つたのだ。ぐずぐず言はないで寢たらいい。」とはずすやうに奧の間へ行かうとした。

「ふん。何の用心だか。」さう言つて、豐はまた自分の床へかへつた。氣のせいか、やはり階段のところがぎしりぎつしりと軋るやうで氣が氣でなかつた。更けてしんとしたあたりに、妙にその音が沈んでゐるやうであつた。

或る晩方、おきんがうしろ向きになつて植木棚の鉢をいじくつてゐた。何心なく、氣をつけて見ると、蘭の砂地を指さきで固めてゐるらしかつた。何のためにそんなことをしてゐるのか不判らなかつた。

「なにをしてゐるのかね。」

と、そばへ寄ると、突然だつたのか、おきんは眞青になつて、その指さきを震はせた。臆病さうな目のいろが竦んだきり、あまり驚いたので暫らく動かないでゐたが、低いしめつた聲で

「毛蟲みたいのものがゐたので潰してやつたの。いけない毛蟲よ。葉なんか食べてしまふんです。」

さう、やつと言つたが、それが明瞭した嘘であることが、繼ぎはぎな顫えた聲音のなかに讀むことができた。

「だつて蘭なんか食ふ毛蟲がゐるもんかね。こんなに寒くなつてから。」

と、鉢の砂地を見たが、べつに何もかはりがなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「でも食べるんですて。」さうおきんは又附け加えて、二三歩植木棚をはなれたが、氣懸りなのかもういちど鉢を見て
「わたし、用事を忘れてゐたわ……。」と、ひとり言を云つて、おどおどと豐の顏を偸みみたが、のろい足どりで家の方へはいつて行つた。その足どりが急ぐでもなければ鈍いのでもなく、ただ、氣づまりのために然う歩いてゐるやうに思はれたのである。

蘭や五葉松やサボテンの鉢をひとつづつ持ちあげて見たが、べつに何でもない。一體何をしてゐたのだらう。毛蟲はいまどき居るわけがない……實際、十月終りの晩の冷たい凍えたやうな夜露は、柿の葉を一枚も殘らず赭くそめあげ、澁だの小梅の木を薙ぎ倒してゐたのである。

「何かしてゐたのだ。何かが……」と豐はぼんやり坊主になつたポプラの裸木を眺めながら佇んでゐた。

それから一週間ほどあとに、お富が二階ぢうを捜したり、庭へ出たりして騷いでゐた。同じ家にゐても氣づまりで物を言はなかつたが、しまひには

「どうしたんだ。そんなに騷いで……。」

といふと、お富は

「指輪が見えなくなつたんですの。二三日はめなかつたのですが……」

と、變な目つきで豐を見た。そのとき豐はすぐ此間の晩方みたおきんを思ひ出して、ぎつくりした。

「どこかに置き忘れたんだらう。さがして見てごらん。どこかに有るから。」

豐は落ちついて平氣をよそふて言つたが、胸がどきどきしてきて、それがお富にわかりはしないかと、はらはらして言つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「もうすつかり捜してしまつたんだもの。何處にもないんです。」

お富はさう言ひながら「もう一度二階をさがして見るわ。」と、どかどかと二階へあがつて行つた。

豐はすぐおきんをさがした。おきんは、屛風のかげで夏のものを疊んでゐたが、豐を見ると震えながら顏をあげなかつた。

「お富の指輪がなくなつたさうだ。掃除をしたときにでも見つかりはしなかつたかね。紅い珠のはいつた奴だ。」

さう、豐はいひながら、おきんの顏色を讀もうとしたが、うつむいたまま浴衣をたたんでゐるので分らなかつた。ただ手さきが顫えてゐた。

「いいえ、指輪なんか少しも見つかりませんでしたよ。それにお富さんは何時もちやんとしまつてゐるんだもの……。」

と言ひながら、くるしさうに聲を濁らしてゐた。

「知らなければいいがね。もしものことがあるとね。」

豐はさう言ふとおきんは

「まるで兄さんはわたくしがとつたやうにおつしやるのね。」とすぐ涙ぐんだらしい濕つた聲をした。

「いや、そんなことは言ひはしないよ。へんな風にお前は考へるんだな。」

豐はそのときおきんの指さきが、あの晩、蘭の鉢をいじくつてゐたことと、いま着物をたたんでゐる手つきとが似てゐるところから、ふいと思ひついた。へいぜいからお富の指輪ばかりを羨ましさうに見てゐたおきんの目つきが、やつと顏をあげたときに思ひ出された。

「きつと外ででも落したんぢやないかしら。家のなかならある筈でせう。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おきんは、さういふと、こんどは大膽に豐のかほをみた。豐の疑つてゐたことがすつかり解けたとでも思ひついたらしい安心をした目つきをしてゐた。

「どこかにあるだらうがね。」

豐はかういふと、ふらりと庭の方へ出ようとすると、おきんはぎつくりしたやうに、あとを見送つてゐた。

植木棚の鉢と鉢との間や、鉢の底や、葉ツ葉までしらべたが、どこにもありさうにもなかつた。ふとそのとき豐は無闇心に指さきで蘭の砂地をざくざくと掘じくつて見てゐたが、ひとどころだけ砂地の柔らかくほぐされたところに出會した。ハツとした。指さきで掘じくつて見ると、たかから紅い珠を張つた指輪が、突然にあらはれた。すぐそれを袂の底へ捻ぢこむと、砂地をならして、いちはやく植木棚を離れた。「やつぱりおかしいと思つてゐたが、指輪をああいふところに隱してあるとは思はなかつた。」と、豐はおきんがあの晩方、顏いろを變へたことなどを思ひ出した。

石垣の上にしやがんでゐたが、思ひかへして裏へ廻つてゐると、おきんが出てきたらしい下駄の音がした。ひよいと見ると、蒼くなつた小さい白い顏が植木棚の繁ぐんだ上にすつと据えられてゐた。そして、蘭の鉢を掘つてゐるらしい手つきが見えた。

しばらくしてから豐はまた石垣の上へ出て、おきんの方を向いて歩いた。おきんはすつかり蒼くなつてゐた。

「お前はそこで何をしてゐるのかな。風邪をひくぜ。風がさむいから。」

さう言つて豐はかれに近づいた。

「ええ。」

と、おきんはおどおどと縋りつくやうな目で、一生懸命に豐の目のいろから何かを讀まうと努めてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

豐は蘭の鉢の前で、わざとすこし大きい聲で
「ばかに砂が浮いてゐるね。」
と、おきんを見つめた。それはがちがち錠へながら默つて立つてゐた。
「お前はこれをいじくりはしないだらうね。いじくると枯れやすいから……。」
豐は指さきで砂地をかためながら言つて、しらずしらず微笑んだが、
「いゝえ。いじくりはしないの。」
と、おきんはじつと立つてゐられないほど慌てて色を失つて言つたが、ひとりでに目をしめらせた。そして低い聲で
「兄さん。わたくしが指輪をとつたと思つていらつしやる……。」と突然言ひ出した。
「さあ――。」と豐は微笑んだが、おきんは聲を出して泣き出した。
豐は植木棚からはなれると、家へ這入つて梯子段の一番上の隅に、その指輪をそつと置いた。
お富が下りてきてからも
「おかしいわね。どこを見たつてないんですもの。」
と、豐の顏色をみながら言つた。豐はそばへ寄ると、やはり「おかしなことがあるものだね。机の曳出しにでもないかね。」といふと
「隅から隅をみたけれどないんですの。」
と答へながら其處らを見廻してゐた。豐はそのとき袂のそこに紙包みにしてあつた蘭草の穗と泥とを取り出した。
「それ何あに。」

と顔をつき出したから「此間の晩の藥草なんだよ。」と、げたげたと聲を出して冷笑つたが、お富はみる間にいやな蒼つたかほをしたが、間もなく狎れたやうに顔色を沈ませてしまつて

「あなたはまるで蝮みたいな人ね。いつまでも執念深くつて。」

と、白い歯を出して言つた。

「だつてあの晩、だれかが二階へ上つたぢやないか。音がした。」

と、豊は言つたとき、お富はよろけるほど驚いて、青く緊張つた顔いろをして、

「そんなことはないわ。誰も來はしなかつたのよ。」

と、唇をすこし尖らせた。豊は覆ひかぶさるやうに

「でもその人を見たのだ。」

と、げらげら嗤つた。お富はいつの間にか例のおちついた調子で

「で、どうしたといふの。」

と歯ぎりしながら言つた。瞼のふちが氣のせいかひりひりして見えた。

「どうといふことはないが……その、誰かが二階へあがつたとすると、あの晩は……。」

と吃りながら澤庵を噛るやうに、がりがりと豊は言つたが、お富はいきなり

「まむしよ。あなたは。」

さう言つて紙包みを引ツたくらうとした。それを渡すまいとしたとき、藥草と泥がさらさら疊の上へちらばつた。むかでの這ふやうな乾いた厭な音がした。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「まむしだから、どうだと云ふのだ。まむしだから……。」
豐はざらざら逼ひ出した。長くずるずると疊目を逆立てながら青くさい熱いへんな呼吸に喉をつまらせながら――。
そのときお富は、ちよいと豐の目を見ると震ひあがつたやうに
「誰か來てください――。」と思はず叫んだがいきなり
「ばか。何をいふ。」
と豐はその口をふさいだ。「びつくりするぢやないか。大きな聲を出して。」と豐は咎めるやうにいふと
「ちよいと言つて見たのよ。」と、すぐ梯子段をあがりかけた。れいの河豚の腹のやうなふくら脛がちらりと見えた。
と、背後に何かの視線をかんじたやうな氣がして、振りかへると、おきんが奥の間の襖のところに立つて、注意深く豐の方をながめてゐた。何氣なかつたが烏渡の間ハツとしたが
「先刻からそこに立つてゐたのかい。」
さう尋ねると、目をきよとつかせたが、すぐに
「いえ。今來たばかりなの。」
と答へたが、豐は影のやうに憑きまとふ此支那人のやうな寂しいかほを、やや憎惡にちかい感情でながめた。
「またおれがお富に何かを告げぐちでもしたと思つて疑つてゐるんだねお前は――。」
と、どこか臆病な家畜のやうな目を見据えたが、
「いゝえ。そんなことは考えてゐませんわ。」
と打消したものの、奥深く光るやうに何かしきりに考へてゐるらしかつた。豐はそのとき低いこゑで、殆、何かに憑

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かれてゐるやうな浮々した氣で「おきん、ちよつとここへ來い。」と囁いた。「ええ。」とこたへたおきんは、しづかに寄つてきた。氣味惡さうに靑白い豐の顏をまじまじと見つめてゐたが、「どんな御用なの。」と、これも低い聲で言つて、越後獅子の舞子のやうにそつとそばへやつてきた。

「あの指輪はな……。」

さう言つたとき、おきんはさつと顏いろを變えて、呼吸を呑みこんで、きうに吐く氣色もなかつた。

「指輪は……梯子段のいちばん上の隅に置いてをいたよ。」

と、低い聲でいつたとき、おきんは、見る間に涙ぐんで、そして安心したやうに泣き出した。「誰も知らないことだからね。これからあとも、あゝいふことは仕ない方がいいよ。兄貴が勸めさきへ歸つたあとだつたからよかつたものの。居るとするとな……。」豐はさう言ひ言ひ、おきんのしやくり泣きを聞きながら、暗い梯子段の第一段をゆびさした。そこは勿論暗くてわからなかつたが、暗みにしづんだ血のやうな珠が、おきんにも、豐の目にも描かれた。

梯子段の上には、額端にした姿見鏡がかけられてあつて、にぶい金色の額と、水底のやうな鏡とに豐はおきんとならんで映つてゐるのを見出した。」

「なあ。分つたらうな。」

と豐はまた囁くと、おきんは鼻をつまらせて、じくじくな聲で

「わたし、ほんとに惡うございました。ほんとに。」と、一そう烈しく泣き出した。豐はその濡れた顏をみてゐると、なぜか、このおきんに、ずつと子供のときに濟まないことをしたやうな氣がしてきてしかたがなかつた。おきんを憎みながら妙にかばうやうにしてゐるのは、うすぐらい子供のときの、いやな、靑くさい記憶があるからだ。「なにかしら、か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

う氣の毒な、言ふにいはれぬことがあるからだ。」と、豐はじくじくな顔を再度と見ないやうにした。が、おきんはそつと目をあげて梯子段の高を見つめてゐたが、れいの鏡にうつつた自分の顔をみいだすと、機械的に髮に手をやつて、はねた髮の毛をなでつけたのである。そして豐と二人ならんで映つてゐるのを嬉しく思つたのか、おかしかつたのか、子供らしく微笑んだ。豐はその微笑みが傳染りでもするやうに、鏡からからだを外してをいて

「あちらへ行つたらいい。」と言つた。

「え。」と、おきんは、のろのろと奥の間へ行つた。そこから母が何か小言をいふらしい聲がしてきた。豐はしばらく鏡をながめこんでゐたが、なんだか物悲しげな氣がした。胡桃のやうな自分のかほを見つめながらである。

鶏頭が黒ずんで頭を下げはじめると、しぐれが霰まじりになつた。けれども丹は執念深くやつてきては、石垣のところから口笛を吹いた。大きな番傘をさした丹が、ちやうど菌のやうな形で石垣の下にへばりついてゐた。そのたびにおきんは流しもとで、その番傘にさあさあ滴る雨の音をききながら、耳をつッ立てた。そしてすぐ豐のところに知らせにきた。

「また來たわ。勝手にゐても雨の音でわかるのよ。」

と、妙にさういふことになると、耳さといおきんは、すぐ目をいきらして言つた。

「お富は——。」と尋ねると

「二階にゐるのよ。でも二階まできこえはしないわ。屋根の雨で……。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おきんのあとに跟いて勝手へ出ると、石垣のしたあたりから、雨の音が變に烈しく叩かれてゐるらしいのが聞えた。屋根をたたく音や、川の瀬で、丹の吹く口笛がしめつぽくなつて、ひいい……と蟲の音のやうにきこえた。ふり出すと晴れ間のないしぐれの氷雨は庭につもつた落葉を腐らしてゐた。

お富も決つたやうに日くれになると落ちつかなかつた。そはそはと二階の窓をあけたり、厠へでかけたり、用事もないのに勝手もとでおきんと話したりしてゐるのである。それに丹のくるやうな日は、お富にも何かしら解るところがあるらしく、よく庭へ出て行つたりするのであつた。ちよつと間、さつと霽れあがると、石垣の上まで走つて行つて、すぐ引つかへしてきたりした。

そのうち、ふしぎにばつたりと丹がこなくなつたのか、れいの口笛も番傘の雨の音もきこえなくなつて了つた。おきんは

「このごろ些つとも來ないわ。どうしたんでせう。」

と言つて、却つて不審さうに、自分からよく石垣へ出てみた。お富もせかせかと落ちつかないで、日に幾度となく川原の方をながめにでたが、一週間は過ぎ十日あまりも丹は姿を見せなかつた。

お富はその間ぢうぼんやりと、二階の手すりにもたれて、ばかのやうになつて佇つてゐた。したへ下りて食事をするときでも、おきんなどには柔しく言ふやうになつたが、何を食べてもうまいとか拙いとか言ふことがなく、ただむしやむしや食べると、二階で毛布をかむつて睡てばかり居た。

お富の室は、いつでも體温で蒸されてゐるやうな、ボロ切れのやうな重くるしい空氣が一杯つまつてゐて、香油や白粉や、毛布のほこりなどで蒸されてゐるやうになつてゐた。いつでも紅い房のある女枕が一つきり、室の隅にあるかと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おもふと、机の下へおしこんでおいたりして、いつもすぐに睡れそそうに毛布がむしやくしやな毛皮のやうに投げ出されてあつた。

ふしぎなことには、丹が来なくなつてからおきんは何時も二階へあがつて、お富の室にゐたことであつた。「おきんちやんの洗つたんなら、うつるわ。でもあんなに顔いろが不良いんだもの。」と皆の前で、ときとすると、自分でわざわざ勝手へ行つて、碗や皿類を指揮らしく洗ひなほしてくれることがあつた。「きつとここがわるいのよ。」などと、いやがるおきんの肺のあたりを指さすこともあつたが、このごろは最うケロリと忘れてしまつて、二人は二階でひそひそ一日話をして、用事があつても下りてこないことがあつた。

「おきん。何処へゆく。」

さう毅は梯子段のしたで言ふことがあつた。おきんはこそこそと毅の脇腹を潜つて、そして

「お二階へ行くのよ。行つたつていいでせう。」と、これまでになく素気なく梯子段をあがつて行かうとするのである。

「何の用事があるのだ。毎日のやうに。」

毅はすこし怒りをふくんでいふと

「行つたつていいのよ。いま閑暇なんだから。」と言ひすてて、毅などがどう考へてもいいやうな振りをして上つてゆくのであつた。一方、おきんとしたしくなると、毅とは滅多に口をきかなくなつたお富は、階下でぶらぶらしてゐることがなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

或る晩のことで、おきんはながしもとで何か食器類を洗つてゐるやうであつたが、ふらりと勝手近くの廊下を行くと、へんに靜まりきつて、水の音も食器のカチカチいふ音もしなかつた。たしかに勝手にゐる筈だと思つても、しんとして音がなかつた。冬近くなつてから勝手のかまど近く庭から忍び込んだこほろぎが、冷えた土間のすみや、薪を積んだ下敷の方に啼いてゐるばかりですこしも音がしなかつた。

豎はふいに勝手へ、わりあひに靜かな忍び足で近づくと、土間のところにあつた踏臺に腰かけたおきんが、暗い豆ランプのあかりを手近く寄せ、膝の上に小さい日本綴の繪本のやうなものを一心に見つめこんで居た。うしろは眞暗な戸棚になつて居り、前には洗つて皿ねられた生白い食器が碗缽にみな俯向きに伏せられてあつた。おきんはうつむいてゐるために、その顔が短かくちぢんで見えたが、踏臺の端をつかまへた例の白すぎる手が、その指にちからが込められてあることが分つた。「何の繪本だらう。あれがさういふものを持つてゐる筈がないのだ。」と、豎はすこし背延びするやうにして見ると、すぐわけなく吃驚してしまつた。

「おきん。なにをしてゐるのだ、そんな暗いところに。」

と、いきなり聲をかけたとき、はつと驚いたおきんは慌てて繪本をばつさりと土間の上に取り落したが、すぐ拾ひあげると、懷中へ捩ぢこんだ。そして、慌てて靑くなつた顔をとり繕ふためにおどおどと目を一杯に瞠はせたが、こんどは左の手で口のあたりをぺつとりと拭いた。ふいたあとも口のあたりは濡れてゐたのである。

「ふところに入れたのは何だ。ちよいと見せろ。」

さう二三歩近づくと、極度の恐れのために無感覺的に、ぞんさいに

「何んでもないものよ。ほんとよ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と言つたが、その蒼白いかほがこんどは紅くそまつた。

毅はだんだん顔をさしつけるやうにして、やや低いこゑでおきんの胸もとをぢつくりと一とゑぐり抉つけた。「おれはそれが何んだといふことは知つてゐ　んだ。いいか。それでも隠して見せないか。」と……

「ほんとよ。ほんとよ。」

と、おきんは物も碌にいへないほど、震ひあがつておろおろしてゐた。

「何がほんとか。出さないか。」

さう言つて毅がふところに、襟前をはしたところのほんのりと温まつたところに手をかけやうとしたとき、おきんのやうにおきんは跡様からからだを反らせて、二三歩あとへ退がつて張物板をかさねたところに立ち竦んでがたがた震えた。そして

「ほんとよ。ほんとよ。」と同じことを言つて、胸のあたりを両手でおさへて逃げ構へを執拗につづけやうとして、足の向きをすこしづつ動かしながら、飛びかかつたらすぐ北隅から茶の間へ出る土間の戸をあけやうとしてゐるらしかつた。

「見せろつたら……。」

毅はいきりおきんに飛びつかうとしたが、からだの小さいおきんはすり抜けて、茶の間から二階へ逃げて行つてしまつた。毅はそのあとを追つて、お富の室へ飛び込んだとき、もうお富は、その綴本を机の曳出しに入れて、わざと背中を机にあてながら、素早くおきんと何か囁き合つてゐるところであつた。

「おきん。したへ下りろ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さう言ふと、小さくなつて顫えたおきんは豐を見つめてゐたが、すごすごと廊下へおりて行つた。

「どうしたの。そんなに怒つて——。」

しらを切つたお富が、さういひながら稍々あはてたらしい顏いろで、豐の方をむいた。

「いまおきんが何か持つて來ただらう。あれはお富さんのかね。」

さういふと、お富はちらとも顏いろを動かさないで

「いゝえ。なにも持つていらつしやりはしなかつたわ。何か持つてくる筈でしたの。」と呆氣けて言つた。

「うまくあなたは嘘をつくね。その抽出しに這入つてゐるものは何だ。さういふものを妹に見せて貰ひたくないんだ。」

と豐はじろりと、お富の視線をぶちコワすやうに睨み据えた。そのときお富はわけなく圖星をさされたので赤くなつて、たぢたぢと、その視線をどぎまぎさせたが、豐はその隙間にねらひをつづけた。

「あんな子供にあんなものを見せるやつがあるものか。」

と、なほ、しつこく凝視をつづけると、もうすつかり赤くなつてしまつた。そして默りこんで、うつむいて了つた。

豐はこんどは全く調子を變えて

「この間丹に會つたよ。丹に。」

と言ふと、お富は沈んだ顏いろをして

「さう。丹に。」とぼんやり答へたが、べつに何ともいはなかつた。豐はたたみかけて

「丹がね。お富は君にくれて遣ると、さう言つて冷笑つてゐたよ。まるで品物か何かのやうにね。」

と言つて、けたけた嗤つた。お富はがつくりと首をあげたが「あのひとは酷い人よ。けれど悪氣のない人よ。」と言

つたが、弱々しくすぐ目を畳の上におとした。

「あいつに關り合ふと、みんなあとで振りかへられもしないんだ。」と言ひながら、豐は階下へおりて行つた。おきんは豐の姿をみると、猫の尻のやうにちよろちよろと、茶の間から勝手へ、勝手から奥の間へと隱れるやうにして居た。

お富は日一日寢てばかりゐた。たまに階下へおりると、青いむくれあがつた皮膚をしてゐたが、すぐ二階へあがつて、れいの毛布にくるまつてばかり居た。おきんも、やはり暇さへあれば二階へあがつてひそひそと話しながら、永い間下りてこなかつた。

或る日、突然お富の部屋へはいると、いままで毛布にくるまつて居た二人は、慌てて飛び起きて、かほを眞赤にそめた。毛布のほこりが冬の日のぼんやりと射した部屋一杯に、微塵になつてきら〳〵光つてゐた。おきんは起きあがると、もぢもぢしてゐたが、きまり惡さうに後退さりしながら、部屋を出て行つた。

「何をしてゐたのだ。何んてひどい埃だらう。」

と言つて窓をあけた。

お富は豐の顏を覗くやうにしてゐたが、につと微笑してみせて、その赤い顏いろを消すやうに努力してゐるらしかつた。

「こちらへいらつしやい。日があたつて温かいから。」

と、やつとこれだけ言つて、はだけた膝がしらを合したが、ばつの合はない表情で、やはり顏をそめてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「へんな匂ひがするね。」

豊はさう言ひながら、日向くさい毛織物の匂ひと、女らのしつこい體軀から泌みでるヘットのやうなあぶらぐんだ匂ひと、どこか肥料のやうな臭氣とを嗅ぎながら、まじまじとお富を見つめた。凝視められると、視線を强くするお富は、へいぜいにも似ずに益々かほを赤くした。

「けふはばかに顔をあかくするね。さつきから……。」

と、意地惡く視線をたぐり返すやうに刺し徹すと、

「温かいからでせう。」と言つて、どうにも自分でも始末のつかないやうな顔色を氣にしてゐた。

「おきんにね、詰らないことを敎へてくれない方がいいよ。あいつは早熟な方なんだから。」

さう言ふと、お富はだんだん顔いろをもとに戻して

「何にも敎へはしないわ。だつて敎へることなんかないわ。」

と、きちんと座りなほしたが、弓なりに膨らんだ膝が皿々しく膝を隱して來た。

「無ければいいがね。毛布のほこりで大へんだつたぢやないか。」

さう豊は言つて冷笑ひをうかべた。一つには、話をしてゐるうちに、ふしぎにお富は疲れたやうな衰弱した努力をだんだんに回復してゆくやうに思はれたのと、さつきからの、ぼんやりしたところが次第にハッキリしてゆくのを感じることができたからである。それはその皮膚や目の色にも、あきらかに時間が經つごとに消耗されたものが、泉のやうに肉體のうちにだんだん充ちてゆくからでもあつた。

「なんでも言つていらつしゃい。わたしの知つてゐることぢゃないんだから。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、お富は、つるりと二本の足を投げ出して、疲れをなほすやうに伸したが、その足が非常に長いもののやうに見えた。

「知らない振りをするさ。」

と、豐はそこに落ちてくる日かげに背なかをあたためてゐたが、お富は

「わたし、ちよいと休みますから。」と言つて、長いからだを横にすると、うへから毛布をかむつて、薄目をしながら眠たふりをした。

豐は部屋を出てゆかうとすると、薄目をあけて、すこし微笑つてみせた。その奇麗な、白い毛布でくるくる巻かれた芋蟲のやうなからだが、顔だけ出されてゐるので、黒い束髮がわけても目に立つた。何かから、南京袋に入れられた[illegible]な外國ゆきの娼婦のやうな氣がした。

「階下へゆくの。」

と、薄目をしたまま言つた。

「うん。階下へゆくのだ。何か用事があるのかい。」

豐はつツ立ちながら、何心なくさう言つたが、偶然にお富がさう言つたものでないか、故意に言つたのか、それとも豐が階下へゆく挨拶がはりに言つたものであるかが、ハツキリ考へられなかつた

「いいえ。」と、これだけ言つて、また微笑つて、それが冷笑のやうにも受とれるほど素早かつた。

「ないね。用事が……。」

障子の日がうすれかかつてゐた。

「ない、ある。」

と、お富はあいまいなことを言つて、くすくすと笑ひ出した。毛布に口をあててゐるらしいので、なんだか含み聲になつてきこえた。

ほんとにないか。」

豐はこきの無い聲で言つて、じりじりしたからだに虱の湧くやうな痒さをかんじた。

「ない。」

と、お富は斷定的に、むしろ厭さうに言つて、くるりと寢がへりを打つた。豐はひと足だけ部屋のなかへ這入らうとしたときに梯子段がぎつしりと軋んだので、ふりかへると、おきんの卵のやうな生白い顔が、こちら向きにぢつと据ゑられてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



聲とことば

山本鼎

彼れは、まづ畫室の窓を一齊に明けはなち、夏のほとぼりを生溫く籠めて、ペンキと壁の匂ひを濃く醸して居た室内へ、雪もよひの冷たい空氣を迎へ入れた。

それから外套を椅子の上へ脱ぎすてゝ、焚き木を集めに外へ出た。家のまはりで、榧木の伐りはしと思はるゝ二尺ばかりの丸太を拾つて、それを棍棒のやうに振りながら林のなかへはいつていつた。林は脊のそろつた落葉松の若い植林で、駄馬の通れる路や、草刈りのつけた徑が掌の線のやうについて居る。とうに裸木となつて、細い枝ばかりを提し重ねて居る鼠色の幽深い天井の下を、彼れは落木をたづねてあちこち歩きながら、ふと遠くの枝に小鳥の動いたのを見ると、高く口笛を吹いた。すると、懸巣が二羽飛び立つて草叢へかくれた。

林には一本の焚き木もなかつたので、彼れは踵をかへして溫泉場の方へおりていつた。處がうまい工合に、浴場の家根をすぐ目の下にする崖の端で、火種と湯をさげて登つて來る小僧さんに出つ會した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「よしきた、それは僕がもらつた、君は下から焚き木を少し擔いで來てくれないか、マッチはもつて居る」

彼れはかう頼んで、鐵びんに雜十を受取つて延室へ戻ると、長椅子に腰をおろして朝日を一本ゆつくりとふかした。

焚き木は下の男が運んで來た。彼れは其五六本を煖爐（シユミネ）の前に持ち込んで手際よく燃しつけた。始めて煙を通した煙道は、すさまじい唸をたてゝ樺薪の焔を吸ひあげた。煙突を見上げて庭に立つて居た下男が、

「旦那、うまく吸ひあげるね——ほう、どんどと黄ねえ煙を吐き出して居やす」

と叫んだ。彼れもスリッパのまゝで庭へおりて煙を眺めた。

「樺の煙は薬のやうな色だね——併しなんといふ惡い茶の色だ—」

「樺は旦那、燃えばやくつて駄目ですぜ、町から石炭を負（しよ）つて來ずわい」

「石炭よか薪がいゝね」

「樺や唐松の薪なら風呂場からいくらでも擔いで來やすが、第一室が溫（ぬく）まらねえ」

「溫（ぬく）まらなくつてもいゝさ、ちろ〳〵燈のたつストーブの前でゆつくり本を讀んだり考へたりしようといふんでね——それが久しぶりの娯みといふわけさ」

「今度は繪は描（か）かないかね」

「描くかも知れない、だが今夜あたり雪が來さうだ」

「はあ來やす、今日のやうに風もねえ、しぐれっ日で、淺間がまるでよく見える日はきつと雪でごわす」

「鐵砲打は大悦びだ」

「さうどこぢやねえ、野郎共溫泉へ來て今日から待つて居やすわ、今年は雉がたんと殖ねて居るからね、これゝだなん

か、俺が此處へ來たら——ついその土堤の草叢ですわ、二羽も雉が舞ひ出したには、たまげちまつたね」
「温泉には、今お客が何人來て居るね」
「鐵砲打が時たま宿るぐれいなもんで、これから五月頃まで客はごわせん」
「女衆は寂しからう」
「女衆ね？、女衆は庄公の神さんが來て居るだけで、あの廣い温泉場に家の人といへば、凡郎とお神さんと赤兒と俺だけです」
「さつき小僧さんが居たぜ」
「小僧ね？、あゝ、あれは風呂に入りに來た驛の小供ですわ」
「ふむさうか、——庄公のお神さんといふのは、もと馬車屋をして居たあの庄さんかい」
「さうです、神さんこれでね」
下男はおどけた顏をしながら兩手で膨れた腹を描いて見せた。
「此夏も庄さんを見なかつたが、今何をしてるね」
「温泉には春から居ねえですぜ、これから六里も山奥の、群馬の炭燒小屋に働いて居やすわ、——めつたに此處までも下りて來ねえ」
「お神さんは兒を産みに下つたのか」
「てんで山へゆかねえですわ。炭燒小屋はいやだ、汽車の笛も聽えねえやうな寂しい處には住み度くねえ、お前は一人でゆくがいゝ。私はおつ母と二人で街に居る。かういつて亭主に從はねえだが——どうやら神さんの情夫が離緣話を持

ち出したらしいので、庄公も其のうちに下つて來やせう。——器量のいゝ神さんを行こつちやねえハッハッハッ」

「そいつは庄さん氣の毒だな、街で暮せばいゝ事に、炭燒して金を溜めやうと考へたんだね」

「さうどこちやねえ、炭燒の生活に其の他に何の娯みがあるかね」

「炭燒——」

煙突の煙が細くなつたのに氣がついた彼れは、そこで立話をきりあげ、頭の太いのを抱えられるだけ抱えて室へ戻つた。

○

「やつぱり石炭をよこしてもらはうかね、榾はほんにすぐと燠になる」

彼れはこう下男に云つたのであるが、椽側に腰かけて居たのは下男でなくて山番の爺さんであつた。

「や、あんただつたか」

「はい、よく御出かけでごわした。お一人で御座りますかな」

「一人です、五六日閑靜に暮さうといふのでね」

「さやうでござりますか、結構でごわす」

「もう、どの別莊も空屋でせうな」

「さやうでございます、九月ともなると、殆どお引揚げになりますな、それに本年はどたたもお見えにならない別荘がだいぶでわして、——なんしよ、一般に不景氣と見えて溫泉の方も客が乏しうごわした」

「湯はまだ溜り當てませんか」

「あすこに見えます古い櫓の下手にも一とつ櫓の頭が見えますな、あの櫓で今やつて居りますが、とても百尺位では、今の湯とかわりねえやうです。技師は、三百尺下には必ず熱い湯の脈があると申しますが、三百尺掘り下げるにはあなた、一萬兩の規模だと云ひますからなあ、たやすい事でごわせん」

「櫓の見えるあの谷底に、あばら屋のやうな浴場がありますね、あの湯も温いですか」

「はい、あれも沸し湯でして、つまり、こちらの温泉はあれから樋で引いて居りますので」

「あ、さうですか、然しあの懸れな温泉は古いと見えて、參謀本部の地圖にちやんとのつて居ますね—

「さやうでごわすかな、あれも吾妻の方へ鐵道がひけてから廢れたやうになりましたが、昔から草津の入湯客が荒い湯で爛れた皮膚を和めに立寄つた、仕上げの湯でごわしてな」

「なる程、——や、向ふの原でぶつ放した」

「多分裂板の衆ですわ——鬼をとるなんつて、騒いで居るのです。凍がちとゆるんで、霜柱が處々あねえに溶けたりして居やすから、今夜は雪でごわせう、——ま、御免なすつて」

山番の爺さんが立去ると、彼れは行李を開いて、持つて來た物をあちこちに配置した。煖爐の側の三角棚へは、綠色のレッテルでくるんだスリーカッスの罐や、コニャックや、リキユールグラスや、コンコンブルの罐詰なんかを置き列べて、長椅子を近くへ曳ひていつた。煖爐の上の花瓶に、莖の長い夏草が活つたまゝで枯れて居るのを、水ごと庭へ捨てゝ林で採つて來た黑い粒をさげた野葡萄の蔓に挿し代へた。その均衡のやうに、ニッケルで緣を取つた旅行用の鏡を傍に立てたりした。

彼れは、ふと思ひついて、茶の間へ來て見た、爐が、持つて來たまゝ忘れて居た[illegible]十の火はちやんと火鉢に埋られ、

鐵びんは其上で濃い湯氣を吹いて居た。おまけに茶ぶ臺の上に、疊んだまゝの新聞と、菓子鉢を添えた茶盆が置いてあつた。下男と立話をして居た時、庄公の神さんが來て居たのを彼れは少しも知らなかつたのである。

マシマロをつまんで茶を飲みながら、彼れはしばらく北處で考へ込んで居た。「俺れの妻君も、たしかに滿足はして居ない。お母さんもお父さんもやはり何となく危なく感じて居るやうだ、さういふ俺からして、時々安心にはぐれるじやないか、三年前に日本へ歸つた時、俺は一體どんな計劃をたてたか、――巴里は懶け者をもひとりでに肥すが、日本といふ處は、勉强して居てもいつとなく瘦せてゆく氣味の惡い處だ。だから、早く畫室を建てゝ北裡へちつと閉ぢ籠れ、せめて身のまわり數間の世界に濃い藝術的雰圍氣を醸して見ろ、製作はすべての幸福を授けてくれる。――こゝで俺れは杖を立てゝ見た。すると杖は結婚の方へ倒れたので、豫て心に選んであつたE子と至極平和な家庭生活に移つたのだ。そうさ、あの一年は夏も冬も畫を描いた。E子も繪の具箱を買つて貰つて、俺れが林檎を描けば林檎、山を描けば山を、側で一しよに寫生したものだ、處が今年なぞと來てはどうだ、俺れは繪を描く代りに手紙を書いたやうなものだ、寫生旅行の代りに講演旅行をやつたわけだ。きつかけは覺えて居ないが、或晩俺れが、

「お前は、僕が醉興でみむみに用を殖したり、貧乏したり居るとでも思つて居るんだらう、僕の氣象では、すつ込んで欠伸しながら畫を描いて居る事が出來ないんだ、美術敎育の事だつて、產業美術の事だつて、すべて藝術家の仕事として やつて居るんだ。つまり僕の思想なり信念なりが試みられる重要な領域なんだよ。尤もさうした、世の中を相手の事業が僕に適して居るかどうかは解らない、併し、今日の處まで仕事が引き出されて來たのに、決して無理はなかつたのだ。――僕は、自分の貧乏な事や、無學な事や、精力の弱い事なぞを考へると、仕事が重すぎると思ふし、偶に、深逍でそして安靜な、旅行もふらない製作生活が戀しくてたまらなくなつて、思想にそゝのかされた事を後悔する事もあるよ。

だが、初めた事が或線にまで達しない前に挫けた日には、僕はたゞのオッチョコチョイだ、――道楽者の建築だ」

彼の女に對つて獨言のやうにこう喋つた時、彼の女は、

「わたしは、決して不平なぞ有つては居りません、あなたが、一生懸命にやつて居らつしやる事は、どれも面白い良い事で、やがて國のためにも人のためにもなる事だし、それがみんな順潮に進んで居るのをわたしは悦んで居るんです。だけど、ちつとも畫をお描きにならないでんすもの。畫室の事だつて、まるで忘れておしまいなすつた。――わたしの性分は何んだかこぢんまりした靜かな生活を好くんですの」

と、悲しさうに云つた。E子は要するに俺れを純粹の畫家として成功さしたいのだ。「どうだい忙しいだらう、近來すつかり社會政策家になつたね」とか、「畫を描かずに一體何で喰つて居るんだい」とか、「あの人は汽車のなかで走つて居る人だ、とあなたを評して居た人がありますよ」なんかといふ言葉を彼女には無論面白くは聽けないのだ。いつだつたか、Sが、さやうな妻・家内に就てこんなことを云つた事がある。「僕のマダムなぞは、僕が油畫を描かずに日本畫を描いて居るのをすらうれしく思つては居ないからね」と。――なんと併し可愛いゝ心だ。

庄さんは今日も山奥で炭を燒いて居るだらう。それだのにお神さんは街で馬車屋をしてもらひ度いのだ」などと。

彼れは、畫室へ歸るとコニヤックの栓をぬき、グラスになみ／＼と注いだのを机の上にもつていつた。机は窓に面し置かれてあるので、彼れは眼の前に展けた暮色の景色を眺めながら筆を揮つた。それから妻君へこんな手紙を書き出した。

「今午後の三時だ。

鉛色の空に鋼鐵色の淺間山、その前景は唐松の代赭だ。

幾間の梢に、一と刷毛、空の色が刷き込まれて居る、雪をおろして居るのです。

寒い寂しい景色だが、夏よりもはるかに美しい、木々が裸になつて、ほのかな奥深いトオーンを作つて居る。つまり景色の奥に景色が見えるんだ。

草津街道を辿る人とか、林をぬけて谷へおりてゆく犬とか、だんだん奥の枝へ渡つてゆく小鳥などが、影絵のやうに眼にはいります。

こんなに寒くなつても、残つて居る大工があると見えて、谷向ふの凹に、焚火の煙が揚つて居る。

昨年、小筳さんがあんなにお金をかけて引いた水道が、まるで涸れて、水槽が二つ共伏せてあつたのは意外だ。

着くと一番にストーブを焚いたらう、と思つて居るだらう、——まさに其通り、實に氣味のいゝ程吸上のいゝストーブだ。たゞ樺薪が火屑を跳ね出すので困つた、リノニユームに早速大きな雀斑をつけられちまつた。

ストーブの火光に脚を照して静思に耽るのは、實に六年ぶりだ。巴里へ着いて初めて借りた室には煖爐があつた、丁度季も今頃さ。外から歸つて、外套のまゝで身を焙りながら、ポッケツトから燒栗を出して喰ひ喰ひ本を讀んだり考へたりしたものだ。

今度は、此シユミネの前で、一とつゆつくりと生活の秩序を考へませう、——さつき、ふと鏡に映る自分の顔を見ていつの間にかひどく老けたのに驚いた。

四十がいつか脚元へ來た………。

○

やがて天井のつりランプに行燈のやうな間抜けな電燈がともつた。彼れはすべての片付けたなり、爐に薪を添へて、

膝を組むで長椅子(ソフア)に凭りかゝつたまゝ、寂寞を味ふかのやうに長い間じつと耳を澄して居た。すると人の脚音が近づいて、硝子戸に潤むだ火影が映つた。

むろん客來であつた。彼れは茶の間の戸を繰つて、非處から客を畫室へ導いた。客は二人(よたり)で、先に立つた客が提燈(ちやうちん)の火を吹き消してそれを床の隅(すみ)に置くと、薦められた椅子に近づいて、袂から名刺を出して挨拶した。

非人は、下(しも)の溫泉に宿(とま)つて居る小林區の林務官であつたが、伴はれて影のやうにはいつて來た青年は、たゞ頭をさげただけであつたから何者とも解らなかつた。けれどもそれが藝術家である事を彼れは直覺した。

彼れは、爐に向けて椅子を列べ、非處に客をいさなつた。それから自分も火に向いて、長椅子(ソフア)に腰をおろした。

「溫泉にはもう長らく御滯在でしたか」

と、彼れは話かけた。

「えゝ、もう二年になります」

と、林務官が答へた。

「二年——そいつはだいぶですな、東京からですか？」

「何、此郡(ぐん)です、併し家へ歸るのは年に二度位なもので、年中山住ひです」

「山で、どういふ御用をなさる——」

「人夫を督勵して木を伐り出すのです」

「すると毎日山へお出かけですか」

「さうです、毎日小澤(にごり)の方まで二里ばかりはいります。今日も夕方かへりまして、宿のお神さんから、あなた方は村の[illegible]

をおたづねになつたといふので、御別舘に出た次第です」

「それは恐れ入りました。實は、樺の皮と樺材とを少しばかり欲しいのでして——

「お神さんから一寸承りましたが、何か工藝美術品に、御用ひになるといふ——

「はあ、くり物、箱、人形なんかを作らうといふのです」

「樺は、やつと炭か焚木になる位のもので、實は樺の有利な用途に就て吾々は常に考へて居るのでして」

「小瀬に樺は澤山御座いますか」

「今やつて居る區域に百石位はありませう」

「樺の他に、みずくさ、朴、なんかもありませうか——

「あります、朴も百石位はあります、みづくさは少いが山榛があります」

「ひとつ山へ拜見に出ますかな」

「是非おでかけ下さい、ずいぶん美しい森林ですよ、向ふ山のはをトロリが通るでせう、あれに乘つて私は毎日通ひますが、人夫達は山の小屋に寢泊りして居ます」

「山の小屋にね——大勢ですか」

「今は十五人ばかりです」

「小瀬には熊が居るさうじやありませんか」

「居ます、——昨年は一匹大熊をとりました」

「鐵砲で？」

「鐵砲でやつたのですが、人夫が一人大負傷をしましてね」

「どうしたんです」

「小さな森の外を、路がめぐつて居る處がありますが、北島のやうになつた森へ熊がはいつたのを見た者があつたので、森を取り卷いて挾擊したのですな、處が一人兵卒上りの頗る剛膽な男が居て、その男が一發やると熊が倒れて動かなかつたものですから、まいつたものと思つて近づいたんですな、すると熊が躍りかゝつたのです、驚いて逃げたが、背中の肉をひどく掻きとられました――」

「雪が降つて來た」

と、此時青年が突然話の腰を折つた。三人は、寢室の圓い硝子窓にくぎられて居る外の深い闇を見た。

「おゝ盛んに降つて居る」

と彼れが云つた。

「美しい景色になる」

と、獨言のやうに云ひながら青年は彼れを見た。

「え、すてきでせう、――クールエーのモティフ、――」

と彼れも獨言のやうに云つて青年を見た。

「お描きになりますか？」

と青年がきいた。

「トワルも繪の具も持つて來ました」

と彼れが答へた、答へながら立上つて、後側から太い薪を両手に提げて來て、ストーブのポッケット一つぱいた燃の上に載せた、それから、グラスとコニヤクを取り出して各々に注ぎ、

「馬鹿に冷えて來ましたな、なる程權薪では室が温まらない、——失禮して僕は外套を着さしていたゞきます」と云ひながら、外套を着込んだ。

「あなたのお國の方では此處のやうな雪景色は見られませんな」

と、林務官が青年に云つた。

「信州は實にいゝですなあ」

と、青年は、林務官に答へたといふよりは、獨言のやうな調子で、むしろ彼れに話しかけたらしかつた。彼れもそれと感じて、

「あなたは、此處は初めてですか？」

と、話をむけた。

「えゝ、——二三日前に來ました」

「繪ですか？」

「繪です、然し——」

と、なに事か云ひよどむで沈默した。

「先刻林區の川で東京へ一寸出た序に、帝展を覗いてまゐりましたが、近頃油繪のやうな日本畫が馬鹿に多くなりましたなあ。——畫格といふものがだん〳〵亡びて來る」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、林務官が持前の屈託のなささうな聲で云つた。

「國粹といふやつがむづかしいでしてね、例へば風俗で云つて見ても、一體いつ時代の服裝が所謂國粹なのか、烏帽子に直垂か、ちよん髷絆か、但しは、ざんぎりだん袋か？、ときかれたら、誰れだつて一寸答へに苦しむでせう。――つまり國粹はさやうな形式の變遷なぞを超越した味の上に認識せらるべきものでせうよ」

と、彼れがそれに應へた。すると、青年は林務官が何か云はうとするのを遮るやうに、

「あなたは、繪の具といふものをどう御考へですか」

と彼れに訊いた。

「寫生家にとつては繪の具は却つてだん／＼不便になつて來ました」

「と申しますと」

「つまり、表現慾がだん／＼複雜になつて、油繪の具でも追つかない、といふ嘆聲を發する一方には、繪の具の質（キヤリテイ）に知らず／＼支配されて居る事に氣がつくからです」

「あなたにとつては、繪の具が要するに或認識を表現する爲の仲介者だからですね」

「なあ、さう云へば云へませうね」。

「セザンヌが暗示したものはなんでせう」

「むづかしい――君は何とお考へですか」

「僕は、さつきあなたがお仰つた味の獨立といふ事だらうと思ひます。後期印象派以前の藝術には表現上の二つの[illegible]が樂に結びついて居ました、處がセザンヌがその分裂を暗示しました、――そしてマチスや、ピカツソーが新しい一方の

稜線へ向つて、今、勇敢な歩を運むで居る、と、こう考へるのですがどうでせう。

色に對する人類の純粹な智性――さういふものがわりに閑却されて居るのは實に不思議に思ひます。それこそ最も個性的のもので神秘じやありませんか。――マチスは色を繪の具ばかりでなく、紙からも布からも、革からも、葉鐵からも採擇して居るときゝましたが、ほんとですか」

「ほんとです、まつたく、マチスもピカッソーもたしかに色に對する格別な敏感と構成力を有つて居ますね。

つい先日、巴里から歸つた友人の話では、マチスの最近のタブローは壁綴のやうなものだと云ひます。そして、彼れが特にアングルを賞揚して居るといふのを一寸意外に思ひました。然し、それはアングルの精粹――フォルム、線、ツーシユ、色などの瀬戸物のやうな冷めたい感覺が、マチスの智慧になつて居るのだと理解しました。毛唐人に感服する點は、目にはいる、いや聽覺からでも觸覺からでも、ですが、一切の物象から構成的要素を摑む事ですよ」

「繪の具のあらゆる諧音を純粹に生かす、――つまり取對象に關する認識を表現するのに役立てるのでなくして、繪の具そのもの丶神秘から表現を指命される事に、あなたは御不贊成でせうか、――つまり味其物を潔癖に生長させる事をです」

「不贊成な筈はありません、併し、すべての自然物には――吾々の認識の世界には、生物的價値と美的價値とが、現にすゞしく又崇嚴に渾一して示されて居ます。さういふ所謂自然美をモティフにして製作に耽つて居る人々を、ねぼけた藝術家とは云へないでせう。それ等の事は藝術家の優劣を意味するものでなくて、輕く云へば好きすきです」

靑年は蒼く細い指を開いて、粗い髪の毛を梳きあげながら、うつむいて微笑して居たが、頸をあげるとコニャックを一と口に飲むで又言ひ出した。

「僕は、昨夜ふと、それに就て默と言葉との關係に思ひ到つたのです。吾々は、從來、言葉をのみ識別して默の價値を

閑却して居たやうに思ひます。處が僕の思ひますのに、多くの場合、力を生じるのは言葉でなくて實は聲だ、例へば同じ言葉を三人が云つたとすると、それ〴〵異つた力が示されるのは知れきつた事で、それを、多くの人はぼんやりと性格の力だとか言葉の力だとか言つて居る、然しそれは實に聲の力なんだ。言ひかへれば、聲を以て表現された個性なんだと、こんな風に考へました。

例へば、今此室に三人こうして火にあたつて居ますね、床とか、窓とか、椅子とか、書棚とか、本とか、酒とか、雪とかいふものがあります。併しそれ等の物件と其配置が今夜の感じの正當なモティフであると考へるよりは、天井の高い此室の四隅から背中へ迫つて來る冷たい空氣、物體のポーズ、其線、其色、それからストーブの焰のゆらめきに伴つて、淡紅い火照りと其陰とが空中に動くのや、野の梢を駈けて居る川水のさゞめきでせうか、あの幽かに耳にくる流れの聲、なんかといふものゝ一切の味の混合、——言葉に對する聲のやうなものを、より深い純粹な藝術的モティフと思ひたいのです。——で議論を云はして戴くと、——藝術には内容だの外容だのといふものはない、線、色、ツーシュ、其構成とブリユール、それが純粹な要素だ。」と、こう云ひ度いのです」

彼れは、青年が自身の言葉に激されてだん〴〵にいらだつて來る心を、じつと抑へるために唇を嚙むで壓し默つたのを見た。

林務官の顏には、ちやうどさつき、熊の話の時に青年がわざと示したやうな退屈な表情がむろんわざとでなく眠氣のなかにぼけ込まうとして居るのを見た。——終——（九、十一、二二）

一月一日發行

中央公論

定價一圓五十錢
郵稅四錢

大正十年

新年號豫告

(論文)

吉野作造
永井潜
阿部次郎
杉森孝次郎
三宅雪嶺
姉崎正治
大山郁夫
堀江歸一
河津暹
永井柳太郎

(創作)

徳田秋聲
里見弴
芥川龍之介
菊池寛
谷崎潤一郎
正宗白鳥
久米正雄
長谷川如是閑
室生犀星
宇野浩二

(說苑)

木村莊八
吉村冬彦
大泉黒石
寺田精一
佐々木指月
村松梢風
生方敏郎
藤澤衞彦
高須梅溪
田中貢太郎

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價 金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、萬年社、電通社、信賴社
三誠社、東亞通信社

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金　口座は東京三十四番なり

一郵券代用　は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず

一代金引替　小包の取扱は一切謝絕す

一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄　　金六錢
一金五圓迄　　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　　金八錢

一中央公論及婦人公論　代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正九年十一月三十日印刷納本
大正九年十二月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話（小石川一四四一）（小石川三四二〇）
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11,90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十二年一月廿九日第三種郵便物認可
大正九年十一月三十日印刷納本

